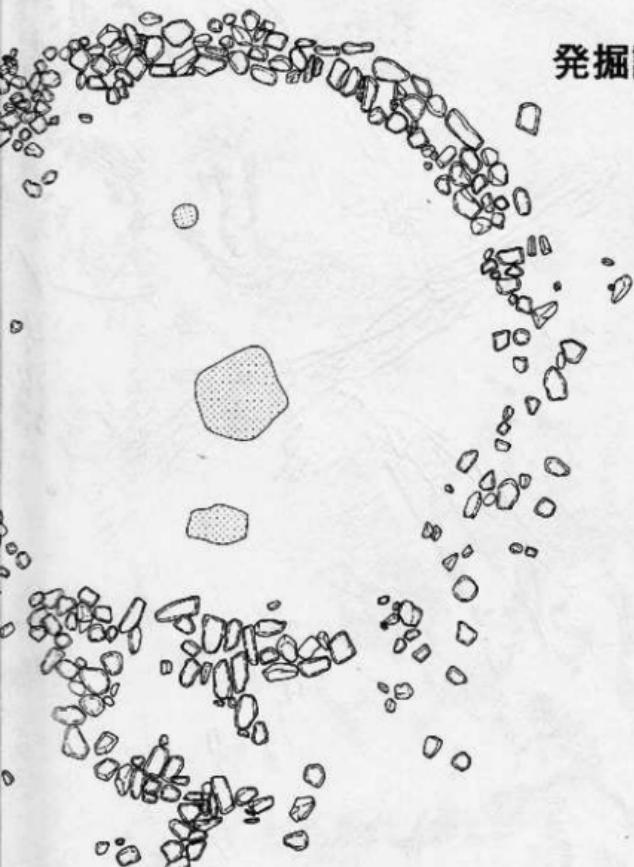


特別史跡
大湯環状列石

発掘調査報告書(10)



1994-3

秋田県鹿角市教育委員会

序

特別史跡大湯環状列石は我国を代表する縄文時代の遺跡であり、市民が誇れる文化遺産であります。

この貴重な文化遺産を保存し、正しく後世に継承していくため、昭和59年より発掘調査を継続してまいりましたが、周辺遺跡の特別史跡への追加指定、追加指定地の公有化事業の開始、環境整備基本構想の策定等、史跡整備事業を進めるための前提条件が整いつつあり、発掘調査も平成4年度からは史跡整備のためのより具体的な資料の収集を目的とした調査に移行しております。

本年度は、整備の急がれます万座環状列石の北西側隣接地の遺構の分布状況を明らかにするため、2箇所に発掘区を設定し、調査を進めてまいりました。

調査の結果、環状配石造構、方形配石造構、配石列、ラスコ状土壘等、貴重なたくさんの遺構が検出され、多量の遺物を得ることができました。また、環状配石造構、建物跡、ラスコ状土壘等の分布の規則性をも明らかにすることができました。

本書は、これらの調査結果をまとめたものであります。学術研究の資料として、また他地域の史跡整備の基礎資料としても活用いただければ幸いに存じます。

終わりに、この調査に際し、ご指導ご協力いただきました文化庁並びに秋田県教育委員会、関係各位に心から感謝申し上げるとともに、今後の調査、環境整備事業につきましても変わらぬご協力を賜りたくよろしくお願い申し上げます。

平成6年3月

鹿角市教育委員会

教育長 浅利 忠

例　　言

1. 本報告書は、平成5年度に国・県の補助を得て実施した特別史跡大湯環状列石第10次発掘調査の報告書である。なお、同調査は史跡の環境整備計画策定のための基礎資料収集を目的に実施されたものである。
2. 本調査の概要については機会あるごとに発表してきたが、本報告書を正式なものとする。
3. 本報告書の執筆は、調査員・調査補助員が分担し、文責は各々の文末に記した。
4. 資料の鑑定並びに同定等は、下記のとおり依頼した。

赤色顔料、黒色樹脂塊他の同定…岩手県立博物館 専門調査員	赤沼英男
石器類石質鑑定……………秋田県立十和田高等学校 教諭	鎌田健一
炭化材の同定……………鹿角市立花輪第一中学校 教諭	成田典彦
5. 土層、土器などの色調の記載には「新版・標準土色帖」(日本色彩研究所)を使用した。
6. 遺物の実測・採折・トレース等の一連の整理作業は、調査員、調査補助員が行った。
7. 本報告書に収載した図版のスケールについては、各々に示した。なお、写真図版については任意の縮尺とした。
8. 本報告書の文中において、用語の上たるものは統一するよう努めたが、数度に渡り使用しているものは簡略している場合もある。
9. 図版で下記のような記号やスクリーン・トーンを使用した。

SI …… 穹穴住居跡	SB …… 建物跡	SX(S) …… 配石遺構
SX(O) …… 石開炉	SX(U) …… 埋設土器遺構	SX(F) …… 焼土遺構
SK(T) …… Tピット	SK(F) …… フラスコ状土壙	SK …… 土壙
Pit …… 柱穴状ピット		

 …… 遺構確認面以下の土層  …… 柱痕、焼土

10. 発掘調査・報告書作成にあたっては、下記の方々から御指導・御助言をいただきました。記して感謝の意を表します。(敬称略、順不同)
安原啓示(岡村道雄)、加藤允彦(文化庁記念物課)、藤本英夫(北海道文化財研究所)
牛川喜幸(奈良国立文化財研究所)、中野益男(帯広畜産大学)、村越潔(弘前大学)
佐原眞、阿部義平(国立歴史民俗博物館)、小林達雄(國學院大学)
三辻利一(奈良大学)、富樫泰時(秋田県埋蔵文化財センター)
遠藤正夫(青森市教育委員会)、成田滋彦(青森県埋蔵文化財調査センター)
佐藤樹(秋田県文化財保護管理指導員)

本文目次

序

例言

本文目次

図版・PL・表目次

第Ⅰ章 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と立地 1

2. 遺跡の層序 2

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査要項 5

2. 調査の方法 6

3. 調査の経過 7

第Ⅲ章 D₃区の検出遺構と出土遺物

(縄文時代)

1. 建物跡と柱穴状ビット 9

2. 配石遺構

(1) 環状配石遺構 23

(2) 方形配石遺構 24

(3) 配石遺構 25

3. 石圓炉 25

4. 焼土状遺構 28

5. 埋設土器遺構 30

6. 土壌

(1) Tビット 32

(2) フラスコ状土壌 32

(3) 土壌 40

7. 遺構外出土遺物

(1) 土器 57

(2) 石器 84

(3) 土製品 100

(4) 石製品 104

第Ⅳ章 D₃区の検出遺構と出土遺物

(平安時代)

1. 壁穴柱居跡 115

2. 土壌 116

第Ⅴ章 D₄区の検出遺構と出土遺物

1. 建物跡と柱穴状ビット 124

2. 配石遺構

(1) 環状配石遺構 129

(2) 方形配石遺構 134

(3) 配石列 136

(4) 配石遺構 137

3. 石圓炉 139

4. 焼土状遺構 139

5. 土壌

(1) Tビット 141

(2) フラスコ状土壌 141

(3) 土壌 144

6. 遺構外出土遺物

(1) 土器 151

(2) 石器 155

(3) 土製品 161

(4) 石製品 164

第VI章 自然科学的調査

大湯環状列石第10次発掘調査出土

出土遺物の自然科学的調査 165

第VII章 調査のまとめ

図版・写真・表目次

図 版 目 次

第1図 遺跡の位置	1	第32図 D ₃ 区Tピット出土遺物(3)	34
第2図 調査区と周辺の地形	3	第33図 第306~319号	
第3図 調査区基本層序図	4	プラスコ状土壤実測図	35
第4図 遺構配置図	8	第34図 第318~367号	
第5図 柱穴状ピット配置図	11	プラスコ状土壤実測図	37
第6図 D ₃ 区建物跡実測図(1)	12	第35図 第374~395号	
第7図 D ₃ 区建物跡実測図(2)	13	プラスコ状土壤実測図	39
第8図 第1~13号柱穴状ピット断面図	14	第36図 D ₃ 区プラスコ状土壤出土遺物	
第9図 第15~38号柱穴状ピット断面図	15	出土遺物(1)	40
第10図 第50~120号柱穴状ピット断面図	16	第37図 D ₃ 区プラスコ状土壤出土遺物	
第11図 D ₃ 区柱穴状ピット出土遺物(1)	19	出土遺物(1)	41
第12図 D ₃ 区柱穴状ピット出土遺物(2)	19	第38図 D ₃ 区プラスコ状土壤出土遺物(3)	42
第13図 D ₃ 区柱穴状ピット出土遺物(3)	20	第39図 D ₃ 区プラスコ状土壤出土遺物(4)	43
第14図 D ₃ 区柱穴状ピット出土遺物(4)	21	第40図 D ₃ 区プラスコ状土壤出土遺物(5)	44
第15図 D ₃ 区柱穴状ピット出土遺物(5)	22	第41図 D ₃ 区プラスコ状土壤出土遺物(6)	45
第16図 D ₃ 区柱穴状ピット出土遺物(6)	22	第42図 D ₃ 区プラスコ状土壤出土遺物(7)	46
第17図 第301号環状配石遺構実測図	23	第43図 D ₃ 区プラスコ状土壤出土遺物(8)	47
第18図 第302号方形配石遺構実測図	24	第44図 第308~317号土壤実測図	48
第19図 第303号配石遺構実測図	25	第45図 第320~341号土壤実測図	49
第20図 第304号配石遺構実測図	25	第46図 第344~366号土壤実測図	52
第21図 D ₃ 区配石遺構出土遺物(1)	25	第47図 第368~399号土壤実測図	55
第22図 D ₃ 区配石遺構出土遺物(2)	26	第48図 D ₃ 区土壤出土遺物(1)	56
第23図 第301~304号石圓炉実測図	27	第49図 D ₃ 区土壤出土遺物(2)	57
第24図 D ₃ 区石圓炉出土遺物(1)	27	第50図 D ₃ 区土壤出土遺物(3)	58
第25図 D ₃ 区石圓炉出土遺物(2)	27	第51図 D ₃ 区土壤出土遺物(4)	59
第26図 第302~321号焼土状遺構実測図	29	第52図 D ₃ 区土壤出土遺物(5)	60
第27図 第301、302号埋設土器遺構実測図	30	第53図 D ₃ 区土壤出土遺物(6)	61
第28図 D ₃ 区埋設土器	31	第54図 D ₃ 区土壤出土遺物(7)	61
第29図 第376号Tピット実測図	32	第55図 D ₃ 区土壤出土遺物(8)	62
第30図 D ₃ 区Tピット出土遺物(1)	33	第56図 D ₃ 区土壤出土遺物(9)	63
第31図 D ₃ 区Tピット出土遺物(2)	33	第57図 D ₃ 区土壤出土遺物(10)	64

第58図 D ₃ 区土壌出土遺物(1)	65	第91図 D ₃ 区遺構外出土土製品実測図(3)	104
第59図 各グリッドの土器破片出土量	66	第92図 D ₃ 区遺構外出土土製品実測図(4)	105
第60図 各グリッドの完形・復元 土器固体数	66	第93図 D ₃ 区遺構外出土土製品拓影図(1)	106
第61図 D ₃ 区遺構外出土土器実測図(1)	70	第94図 D ₃ 区遺構外出土土製品拓影図(2)	107
第62図 D ₃ 区遺構外出土土器実測図(2)	71	第95図 D ₃ 区遺構外出土石製品実測図(1)	109
第63図 D ₃ 区遺構外出土土器実測図(3)	72	第96図 D ₃ 区遺構外出土石製品実測図(2)	110
第64図 D ₃ 区遺構外出土土器実測図(4)	73	第97図 D ₃ 区遺構外出土石製品実測図(3)	111
第65図 D ₃ 区遺構外出土土器実測図(5)	74	第98図 D ₃ 区遺構外出土石製品実測図(4)	112
第66図 D ₃ 区遺構外出土土器実測図(6)	75	第99図 D ₃ 区遺構外出土石製品実測図(5)	113
第67図 D ₃ 区遺構外出土土器実測図(7)	76	第100図 第302号竪穴住居跡実測図	115
第68図 D ₃ 区遺構外出土土器実測図(8)	77	第101図 第303号竪穴住居跡実測図	117
第69図 D ₃ 区遺構外出土土器拓影図(1)	78	第102図 第303号竪穴住居跡出土遺作(1)	118
第70図 D ₃ 区遺構外出土土器拓影図(2)	79	第103図 第303号竪穴住居跡出土遺作(2)	119
第71図 D ₃ 区遺構外出土土器拓影図(3)	80	第104図 第304~388号土壤実測図	121
第72図 D ₃ 区遺構外出土土器拓影図(4)	81	第105図 土壤出土遺物	122
第73図 D ₃ 区遺構外出土土器拓影図(5)	82	第106図 第201~216号柱穴状ビット 断面図	124
第74図 D ₃ 区遺構外出土土器拓影図(6)	83	第107図 第217~221号柱穴状ビット 断面図	125
第75図 石器出土分布密度図	84	第108図 D ₄ 区柱穴状ビット出土遺物(1)	127
第76図 D ₃ 区遺構外出土石器実測図(1)	87	第109図 D ₄ 区柱穴状ビット出土遺物(2)	128
第77図 D ₃ 区遺構外出土石器実測図(2)	88	第110図 第401号環状配石遺構実測図	130
第78図 D ₃ 区遺構外出土石器実測図(3)	89	第111図 第402号環状配石遺構実測図	131
第79図 D ₃ 区遺構外出土石器実測図(4)	90	第112図 第403号環状配石遺構実測図	132
第80図 D ₃ 区遺構外出土石器実測図(5)	91	第113図 第407号環状配石遺構実測図	133
第81図 D ₃ 区遺構外出土石器実測図(6)	92	第114図 第406号方形配石遺構実測図	134
第82図 D ₃ 区遺構外出土石器実測図(7)	93	第115図 第404号配石列、405号配石遺構 実測図	135
第83図 D ₃ 区遺構外出土石器実測図(8)	94	第116図 第409、410号配石列実測図	136
第84図 D ₃ 区遺構外出土石器実測図(9)	95	第117図 第408号配石遺構、401号石圓炉 402号焼土状遺構実測図	137
第85図 D ₃ 区遺構外出土石器実測図(10)	96	第118図 第411号配石遺構実測図	138
第86図 D ₃ 区遺構外出土石器実測図(11)	97	第119図 D ₄ 区配石遺構出土遺物(1)	139
第87図 D ₃ 区遺構外出土石器実測図(12)	98	第120図 D ₄ 区配石遺構出土遺物(2)	140
第88図 D ₃ 区遺構外出土石器実測図(13)	99		
第89図 D ₃ 区遺構外出土土製品実測図(1)	102		
第90図 D ₃ 区遺構外出土土製品実測図(2)	103		

第121図 第401号焼土状遺構実測図	140	第136図 D ₄ 区遺構外出土石器実測図(1)	157
第122図 第431、433号Tピット実測図	141	第137図 D ₄ 区遺構外出土石器実測図(2)	158
第123図 第404A~432号ラスコ状土壙 実測図	142	第138図 D ₄ 区遺構外出土石器実測図(3)	159
第124図 D ₄ 区ラスコ状土壙出土遺物(1)	143	第139図 D ₄ 区遺構外出土石器実測図(4)	166
第125図 D ₄ 区ラスコ状土壙出土遺物(2)	143	第140図 D ₄ 区遺構外出土石器実測図(5)	161
第126図 第401~410号土壙実測図	145	第141図 D ₄ 区遺構外出土土製品実測図	162
第127図 第411~430号土壙実測図	147	第142図 D ₄ 区遺構外出土土製品拓影図	163
第128図 D ₄ 区土壙出土遺物(1)	148	第143図 D ₄ 区遺構外出土石製品実測図	164
第129図 D ₄ 区土壙出土遺物(2)	148	第144図 赤色顔料の粉末X線回析図	166
第130図 D ₄ 区土壙出土遺物(3)	149	第145図 黒色樹脂塊の 赤外線吸収スペクトル	167
第131図 D ₄ 区土壙出土遺物(4)	150	第146図 黒色樹脂塊の 赤外線吸収スペクトル	167
第132図 D ₄ 区土壙出土遺物(5)	150	第147図 土器片付着暗赤褐色樹脂塊の 赤外線吸収スペクトル	168
第133図 D ₄ 区遺構外出土土器実測図	151		
第134図 D ₄ 区遺構外出土土器拓影図(1)	153		
第135図 D ₄ 区遺構外出土土器拓影図(2)	154		

写 真 目 次

PL 1 D ₃ 区中央部、南東部	173	PL 4 D ₃ 区遺物出土状況、竪穴住居跡	176
PL 2 D ₃ 区環状・方形配石遺構 石圓炉、埋設土器	174	PL 5 D ₄ 区中央部、南東部	177
PL 3 D ₃ 区ラスコ状土壙、土壤	175	PL 6 D ₄ 区全景、遺物出土状況	178
		PL 7 D ₄ 区環状・方形配石遺構	179

表 目 次

第1表 D ₃ 区柱穴状ピット一覧表	17	第3表 第307号建物跡柱穴状ピット一覧表	19
第2表 建物跡一覧表	18	第4表 D ₄ 区柱穴状ピット一覧表	126

第Ⅰ章 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と立地

特別史跡大湯環状列石は、秋田県鹿角市十和田大湯字野中堂、字万座、字一本木後口に所在する。同遺跡の載る台地は、大湯川と豊真木沢川の侵食によって形成された南西方向に延びる舌状台地で、その長さは5.6km、幅は0.5～1.0kmで、標高は150～190mである。

遺跡は、この通称「風張台地」のほぼ中央、一本木、寺坂両集落の中間に位置し、JR花輪線十和田南駅の北東3.5km、東北縦貫自動車道十和田I・Cの北東3.6kmの地点にあたる。

本年度調査区の一つであるD₃区は、万座環状列石の北側隣接地で、昭和62年調査のD₁区と63年調査D₂区の間である。また、D₄区は同列石の北側隣接地で、平成4年調査地D₅区とD₁区の間にあたる。両調査区とも、現地表面はほぼ平坦で、標高は180～181mである。なお、両区とも平成4年度に公有化されているが、それ以前はD₃区は普通畠として、D₄区は桐・栗畠として利用されていたところである。



第1図 遺跡の位置

2. 遺跡の層序

本年度の調査区がD₁区、D₂区及びD₅区の隣接地であるため、基本層序については、これらの調査地の分層、細分基準と同一のものとした。

第Ⅰ層は大湯浮石層までの堆積層で、Ⅰa層は耕作土である。また、Ⅰo層は昭和17、26～27年の万座環状列石発掘時の発掘排土である。

第Ⅱ層の大湯浮石層は、D₄区ではほぼ全域で観察されるのに対し、D₅区中央部では耕作により擾乱され、確認できないところも多い。同層は粒子の粗細、色調、浮石の含有量から3層に細分されるが、Ⅱa層はにぶい黄褐色のシルト質の火山灰層、Ⅱb層は粒径1～20mmの明黄褐色浮石層、Ⅱc層は黒色土中に浮石粒を多量混入している層である。本層上面において平安時代の堅穴住居跡、土壙が確認されている。

第Ⅲ層は大湯浮石層下から地山直上の暗褐色土までの層で、色調、粗密度、混入物の含有量等から5層(Ⅲa～Ⅲd層)に細分される。Ⅲa層は黒色土でほとんど混入物を含まず、他層に比べて非常に堅くしまっている。Ⅲb層も黒色土で混入物をほとんど含まないが、粗密度からⅢa層とは識別される。Ⅲc層はチョコレート色に近い暗褐色土で、D₅区南部とD₄区ほぼ全域で観察される。Ⅲd、Ⅲd'層は黒褐色土で、下位火山灰を少量混入している。

Ⅲ層は縄文時代の遺物包含層で、Ⅲb～Ⅲd層上位からの出土が多い。概ね後期中葉の遺物はⅢa～Ⅲc層、後期前葉はⅢb層下位～Ⅲd層上位、前期の遺物はⅢd層下位より出土している。なお、配石造構等はⅡ～Ⅲa層で石頭を現わし、Ⅲd層上面でその全容が確認されている。また、焼土造構はⅢc層上面とⅢd層上面で、建物跡、柱穴ピット、土壙等はⅢd層上面～Ⅳ層上面で確認されている。

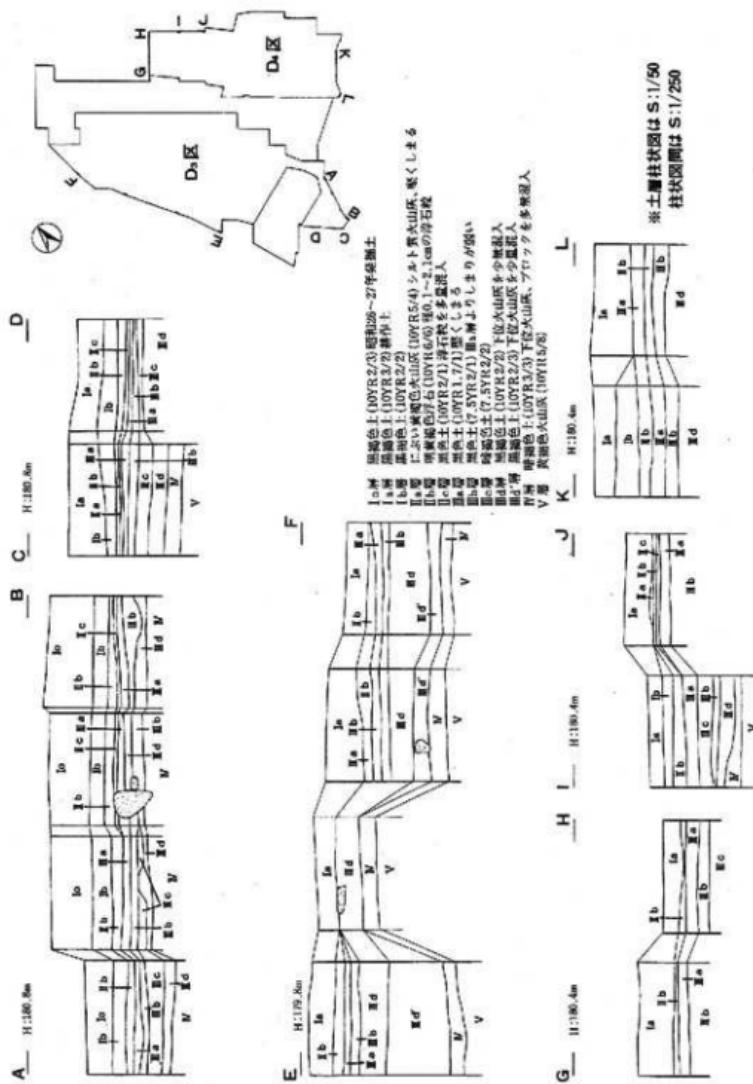
第Ⅳ層は地山(下位火山灰)直上の層で、暗褐色土である。若干粘性があり、しまりのある層である。

第Ⅴ層は申ヶ野火山灰と考えられる黄褐色の火山灰である。本報告書では本層をⅤ層以外に下位火山灰あるいは地山と表現している。D₅区、D₄区とも現地表面ではほとんど平坦であるが、地山面は起伏に富んでいる。なお、Tピット、フラスコ状土壙等の掘込みの深い造構は、本層下の灰白色火山灰層(鳥越火山灰層)をも掘り込んでいる。

(秋元信夫)

第2図 錦糸町と墨田の地圖





第3図 調査区基本層序図

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査要項

1. 遺跡名 特別史跡 大湯環状列石
2. 調査目的 D₁区、D₂区の調査により確認されている建物跡、フ拉斯コ状土壙等の分布範囲、万座環状列石との位置関係及び新旧関係の確認を目的に発掘調査し、史跡整備計画策定のための基礎資料とする。
3. 調査地 D₃区……鹿角市十和田大湯字万座24、25
D₄区……鹿角市十和田大湯字万座24、26
4. 発掘面積 3,180m² (D₃区…1,960m²、D₄区…1,220m²)
5. 調査期間
調査準備 平成5年4月12日～平成5年4月17日
発掘調査 平成5年4月19日～平成5年9月10日
整理・報告書作成 平成5年11月16日～平成6年3月31日
6. 調査主体者 鹿角市教育委員会
7. 調査担当者 鹿角市教育委員会 生涯学習課
(主任 秋元信夫 主事 藤井安正)
8. 調査参加者
調査指導員 熊谷太郎 (秋田県教育庁文化課 学芸主事)
調査員 錦田健一 (秋田県立十和田高等学校 教諭)
成田貴彦 (鹿角市立花輪第一中学校 教諭)
三ヶ田俊明 (鹿角市立中瀬小学校 教諭)
調査補助員 花澤義人、柳沢和仁、石川将親
柴田絵里、黒沢圭子、大森寿子
作業員 大里チヤ、金沢栄子、金沢ユリ、木村イヨ、木村千鶴江、黒沢珠子
千葉ヨリ、兎沢サツ子、苗代沢ノブ、松宮カチ、宮沢キヨ
宮沢トミエ、宮沢カヨ、柳沢アエ、柳沢勝江、柳沢ヤス、柳沢恵美子
9. 生涯学習課
課長 川又節三 (文化史跡整備室長兼務)
課長補佐 小笠原昇
村木伸夫

主 任 秋元信夫（庶務・調査担当）
兎澤精子（庶務担当）
主 事 藤井安正（調査担当）
臨時職員 古川孝政（庶務）

10. 協力機関・協力者

文化庁記念物課、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、岩手県立博物館

2. 調査の方法

本年度の調査の主目的は、万座環状列石北西側隣接地の遺構・遺物の分布状況を確認することであった。これまでにD₁区、D₂区及びD₃区の調査が行われているため、この度はそれぞれの調査区の間を調査することとし、D₁区・D₂区間にD₃区、D₁区・D₃区間にD₄区とした。

グリッドは第1次調査以来のN-49°-Wを基準とする5m単位のグリッドとし、万座環状列石内基準杭から延長した。杭番号はアルファベット（北西～南東方向）と算用数字（北東～南西方向）で付し、西隅の杭を以てグリッドを呼称した。

作業の効率化を図るために、試掘調査結果に基づき、配石遺構の分布する部分やD₃区南東部の万座環状列石隣接地以外のI層はバックホーにより除去した。なお、II層以下については手掘りによる分層発掘とし、できるだけ上層での遺構確認に努めた。また、遺跡・遺構の保存のため、上部遺構が確認された層で掘り下げを中断した。このため、調査層面は、II～V層と均一ではない。

遺構の番号については、D₃区は301番から、D₄区は401番から種類別、発見順に付した。ただし、土壤及び配石関係については遺構確認時の識別が困難であるため、それぞれ一連の番号で順次付した。また、柱穴状ピットについては、数が多いことが予想されたため、D₃区は1番から、D₄区は201番からとした。

遺構の分布状況の確認に主力を置き、遺構の精査は遺構の種別及び規模が確認される処までとした。遺構等の実測については簡易造り方測量を用い、埋設土器遺構は1/10、その他については1/20の縮尺で図化した。

遺構外の出土遺物については、完形あるいは復元可能土器等に関しては出土レベル、出土状況を図化、その他については各グリッド、各層ごとに一括して取り上げた。なお、遺構内の出土遺物については出土地点を記録するように努めた。

写真撮影には2台のカメラを使用し、調査各段階の状況を白黒、リバーサルフィルムに収めた。

4. 調査の経過

特別史跡大湯環状列石の第10次発掘調査は4月12日から開始し、全調査を終了したのは9月10日であった。以下、調査日誌に基づいて調査経過の概要を述べる。

4月19日、作業員への作業説明の後、バックホー導入に伴うD₃区の試掘調査に着手した。北東部と南部についてはD₁区及びD₂区の資料があるため、試掘トレントは西端部にのみ設定した。5月15日には同試掘調査を終了、D₃区の南東部、万座環状列石隣接地の粗掘に移行した。

5月24日から開始したバックホーによるD₃区の表土除去は同月28日に終了した。このため、29日より同区北西部のⅡ層以下の手掘り及び遺構確認に着手した。なお、北西部からはⅡ～Ⅲa層において平安時代の整穴住居跡、土壙が次々に確認され、順次これらの遺構の精査を行った。6月からは北西部の調査と併行し、南東部の調査を開始した。この部分からは予想どおり建物跡の柱穴等が多數検出され、調査面積の割には時間を使い、終了したのは6月29日であった。

7月9日には、地元の十和田高等学校の体験学習の場として調査区の一部を開放、一年生43名の発掘体験の指導を行った。

7月中旬には粗掘、遺構確認の作業がD₃区中央部に及び、同月20日からはD₄区の調査にも着手した。

D₃区の調査がほぼ終了した7月21日、報道関係者を対象とした現地説明会を開催、22日にはD₃区の全景写真を撮影した。また、23日からは調査の完全に終了したD₃区北西部～中央部のバックホーによる埋め戻しを、さらに27日からはD₄区の表土除去を行った。

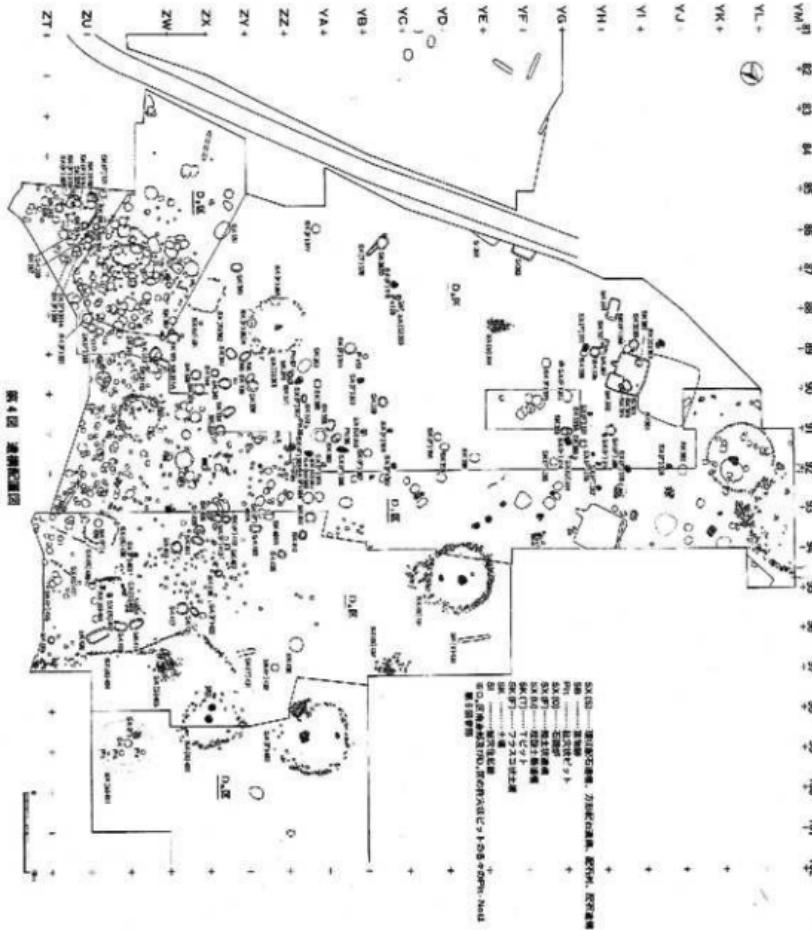
8月からはD₄区の調査に全力を投入、Ⅲc～Ⅲd層上面で確認される環状配石遺構、配石列等の精査に追われる。8月19日からは土壙、柱穴状ピット等の精査に移行するが、予想以上に遺構が多く、調査終了予定日である31日までには完了できず、調査員、調査補助員で9月10日まで調査を継続することとした。

9月8日には遺構精査、記録を終了、9日には全景写真を撮影した。また、10日までに基本層序図を完成、遺構保存のための一部埋め戻しを行い、本年度の発掘調査を終了した。

なお、一般を対象とした現地説明会は9月28日に実施した。また、9月16～17日には文化庁記念物課安原啓示主任調査官、秋田県教育庁文化課熊谷太郎学芸主事の現場指導をいただいている。

(秋元信夫)

图 10



第Ⅲ章 D₃区の縄文時代の検出遺構と出土遺物

D₃区において、新たに確認された縄文時代の遺構は、建物跡2棟、柱穴状ピット120個、環状配石遺構1基、方形配石遺構1基、その他の配石遺構2基、石囲炉4基、焼土遺構17基、埋設土器遺構2基、Tピット1基、フ拉斯コ状土壙19基、土壙40基である。また、これまでの調査によってその一部が確認されていた遺構で今回の調査対象となった遺構は建物跡5棟、焼土遺構1基、土壙4基である。

1. 建物跡と柱穴状ピット（第5～16図）

D₃区からは120個の柱穴状ピットが検出されたが、そのほとんどは南東端、すなわち万座環状列石の近傍からである。これらのピットはⅢd～Ⅳ層において確認され、その規模は径10～110cm、深さは20～155cmである。柱痕の確認されたピットも多く、その規則的な配列から、これらのピットのほとんどは掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。発掘調査区域内だけでも10棟以上の建物跡の存在が予想されるが、ここでは柱配列を明確にし得た7棟の建物跡について略述する。ZT-85グリッドより建物跡の柱穴がたくさん確認されていながら、その柱配列を明確にし得なかつたのは、ZT-86グリッド枕周辺が昭和21年以前の発掘により下位火山灰が1m以上も掘り下げられており、この周辺の柱穴状ピットの確認ができなかつたことに因る。

第301号建物跡（第6図、8図、10図、16図）

D₃区南東端のZV～ZU-87～88グリッドに位置する。本遺構は第5次調査でそのほとんどを確認、第223号建物跡として報告している遺構である。302、303、305号建物跡、322、274号フ拉斯コ状土壙、275、276号土壙と重複、本遺構は303、305号建物跡より新しく、302号建物跡、322号フ拉斯コ状土壙より古い。ピット(503)、(524)、(664)、(517)、5、65を柱穴とする6本柱の建物で、長辺4.1m、短辺3.5m、張り出し部軸長4.3mを測り、長軸方向はN-16°-Eである。柱穴の掘り方径は80～110cm、深さは92～136cm、柱痕径は32～38cmを測る。

本遺構ピット5、65からは、縄文土器破片25点、土器片利用土製品1点の出土があった。

第302号建物跡（第6図、8図）

D₃区南東端のZV～ZU-87～88グリッドに位置する。本遺構も第5次調査でそのほとんどを確認、第224号建物跡として報告している遺構である。301、303、305号建物跡、322、274号フ拉斯コ状土壙、275、276号土壙と重複、本遺構は301、303、305号建物跡より新しく、322号フ拉斯コ状土壙より古い。ピット(504)、(665)、(509)、(516)、4に322号フ拉斯コ状土壙構築により消失したと考えられる1個のピットを加えた6本柱の建物で、長辺3.5m、短辺2.9m、張り出し部軸長3.4mを測り、長軸方向はN-14°-Eである。柱穴の掘り方径は81～111cm、深さは86～104cm、ピット4で確認された柱痕径は37cmを測る。

本遺構ピット4からは縄文土器破片14点の出土があった。

第303号建物跡（第6図）

D₃区南東端のZV～ZU-87～88グリッドに位置する。第301、302号建物跡同様、本遺構も第5次調査でそのほとんどを確認、第225号建物跡として報告している遺構である。301、302、305号建物跡、322、274号フ拉斯コ状土壙、275、276号土壙と重複、本遺構は305号建物跡より新しく、301、302号建物跡、322号フ拉斯コ状土壙より古い。ピット(512)、(525)、(507)、(529)と301号建物跡構築により消失したと考えられる2個のピットを柱穴とする6本柱の建物で、長辺3.5m、短辺3.4m、張り出し部軸長4.2mを測り、長軸方向はN-12°-Eである。柱穴の掘り方径は58～64cm、深さは78～109cm、柱痕径は25～28cmを測る。

第304号建物跡（第6図、9図）

D₃区南東端のZV～ZU-86～87グリッドに位置する。本遺構も第5次調査でそのほとんどを確認、第226号建物跡として報告している遺構である。305、221A号建物跡、306、270号フ拉斯コ状土壙と重複、本遺構は305号建物跡、306号フ拉斯コ状土壙より新しい。ピット(514)、(579)、(502)、(528)、18と第306号フ拉斯コ状土壙と重複すると考えられる1個のピットを柱穴とする6本柱の建物で、長辺3.7m、短辺3.2m、張り出し部軸長3.5mを測り、長軸方向はN-10°-Eである。柱穴の掘り方径は64～76cm、深さは111～149cm、柱痕径は24～31cmを測る。

第305号建物跡（第6図、8図、16図）

D₃区南東端のZV～ZU-86～87グリッドに位置する。本遺構は第5次調査でその北半を確認、第227号建物跡として報告している遺構である。301～304、228号建物跡、306、311A、270、274号フ拉斯コ状土壙と重複、本遺構は306、311A、274号フ拉斯コ状土壙より新しく、301～304号建物跡より古い。ピット(543)、(508)、(538)、7、45、1を柱穴とする6本柱の建物で、長辺5.3m、短辺3.4m、張り出し部軸長5.5mを測り、長軸方向はN-7°-Eである。柱穴の掘り方径は84～98cm、深さは89～172cm、柱痕径は25～34cmを測る。

本遺構ピット7、45から縄文土器破片11点、土器片利用土製品1点の出土があった。

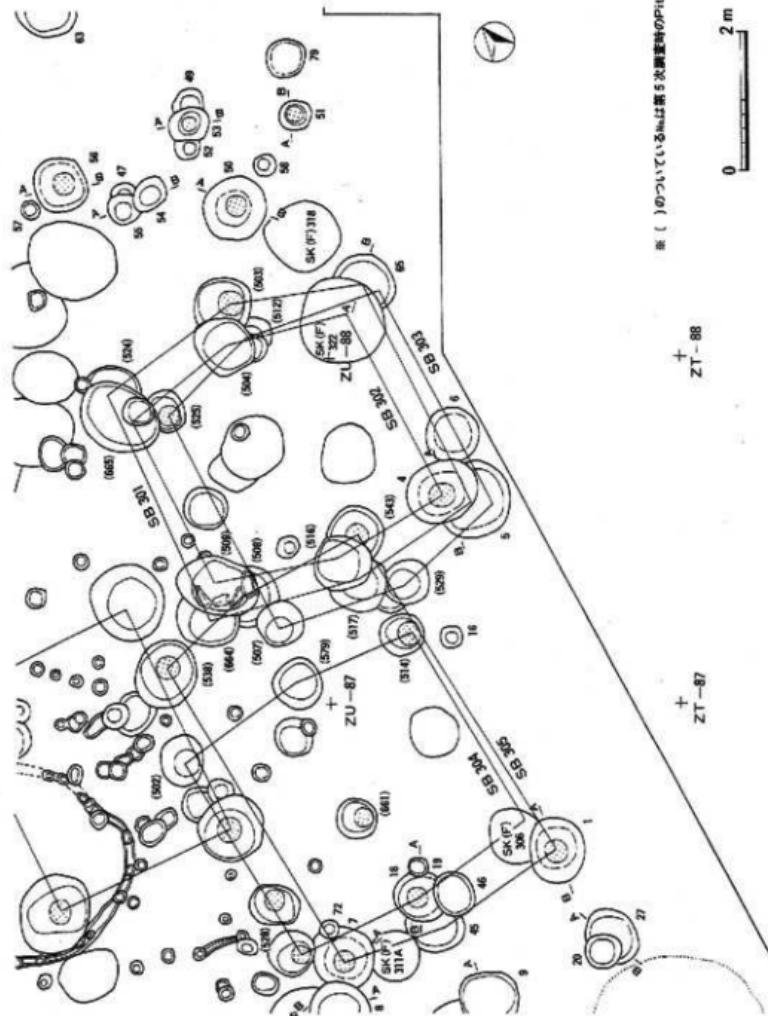
第306号建物跡（第7図、8図、15図、16図）

D₃区南東端のZV～ZU-85～86グリッドに位置する。Ⅲd層上面で確認されている。307号建物跡、308、309、313、320号土壙と重複、本遺構は308、309号土壙より新しい。ピット8、61、13、10を柱穴とする4本柱の建物で、長辺3.4m、短辺2.8mを測り、長軸方向はN-9°-Eである。柱穴の掘り方径は90～118cm、深さは108～155cm、柱痕径は25～27cmを測る。

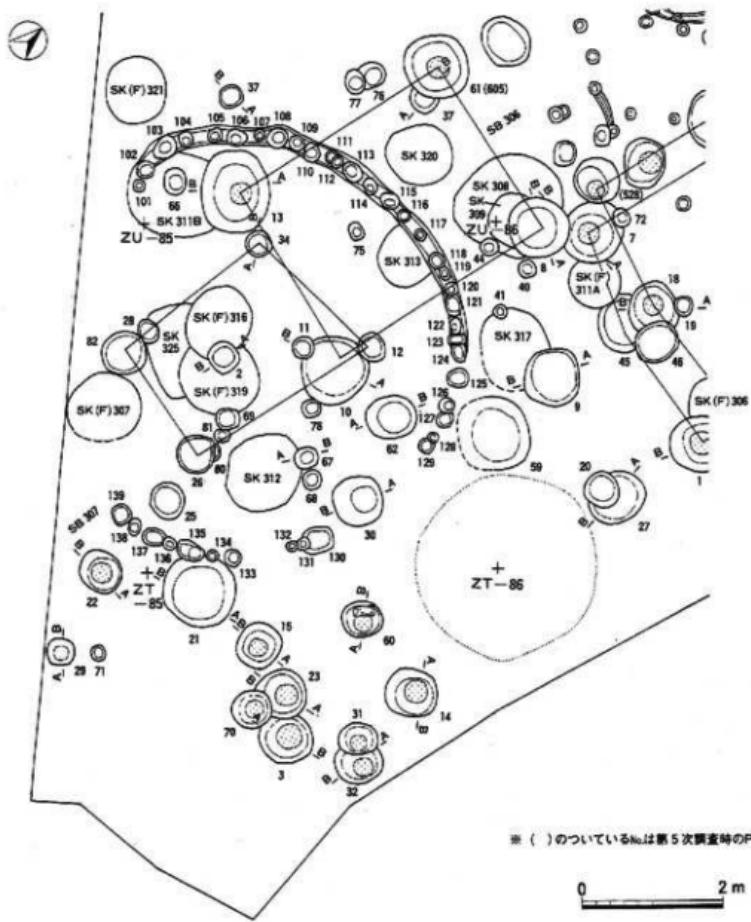
本遺構ピット10、13から縄文土器破片23点、搔器1点、土器片利用土製品1点の出土があつた。



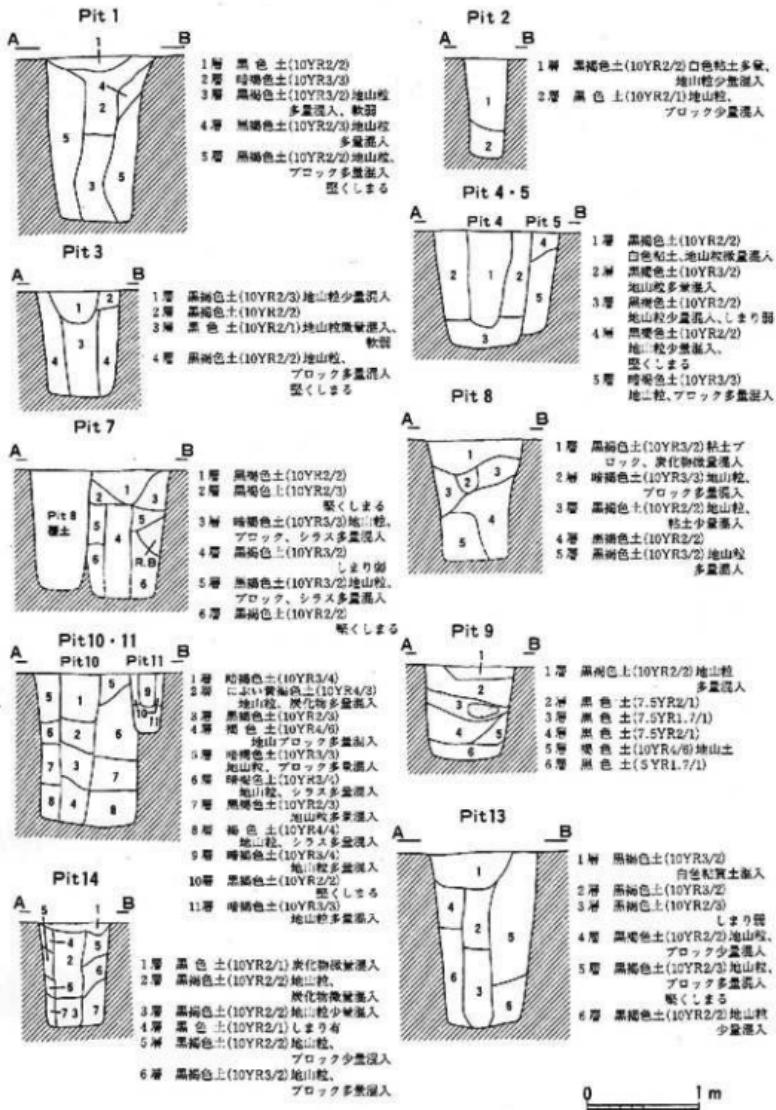
圖 5 圖 2 的子圖



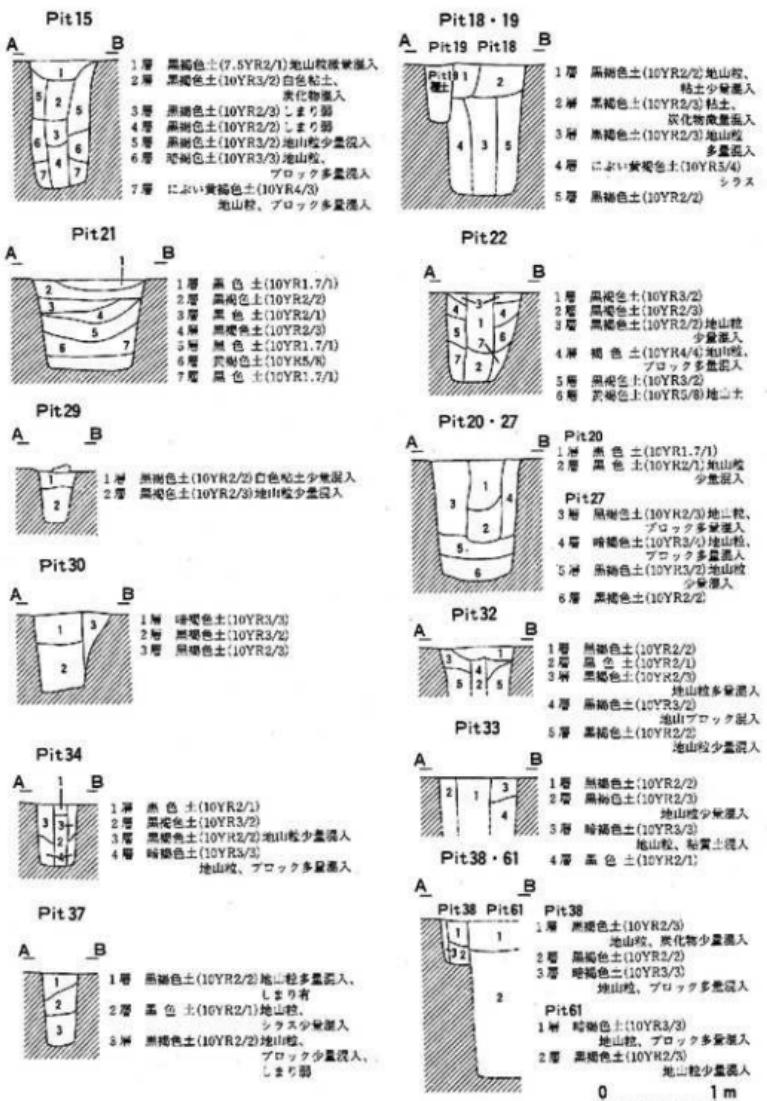
第6図 D₃区建物跡実測図(1)



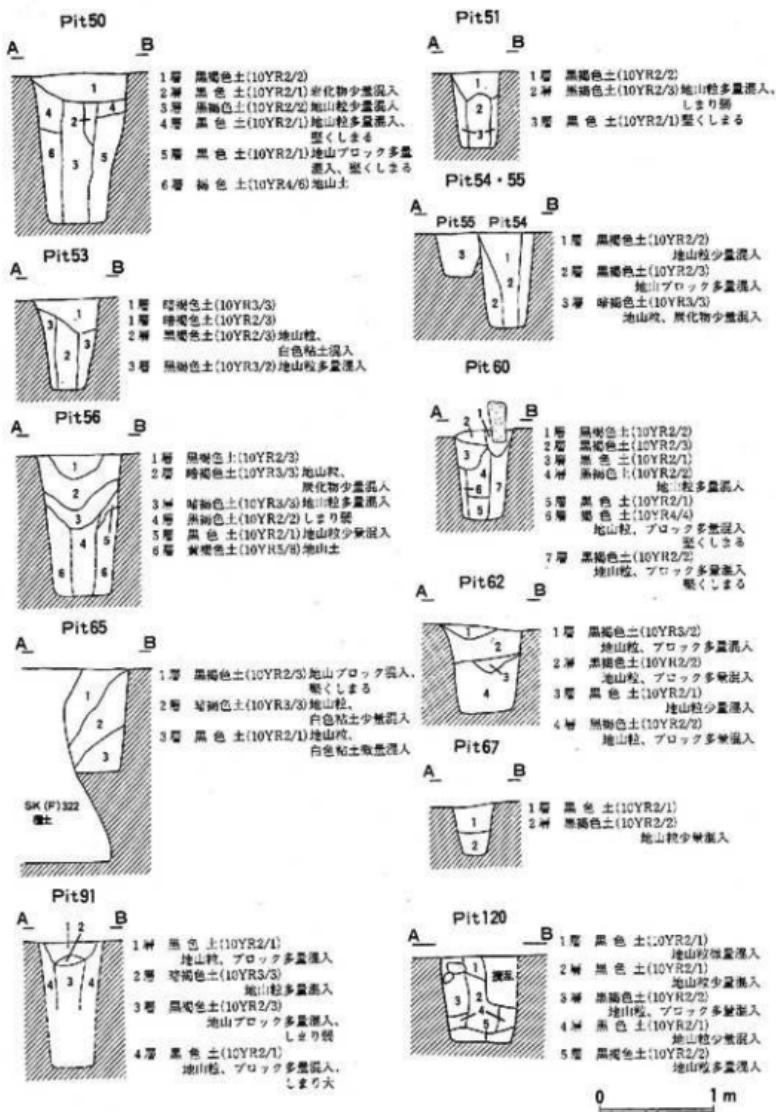
第7図 D₃区建物跡実測図(2)



第8図 第1～13号柱穴状ピット断面図



第9図 第15～38号柱穴状ピット断面図



第10図 第50~120号柱穴状ピット断面図

第1表 D_a 区柱穴状ピット一覧表

(新旧関係は旧→新で表わす。記号のないものは新旧不明)

ピット No.	グリッド	長径×短径×深さ (mm)	重 堆 関 係	Z _a :	グリッド	長径×短径×深さ (mm)	重 堆 関 係
1	ZU-86	95×78×18.0	SK(F)306→Pa1	32	ZV-88	38×35×18.6	Pa15
2	ZU-85	41×40×18.0	SK(F)316→SK(F)319→SK325→Pa2	33	ZV-88	55×50×18.6	Pa16; Pa152
3	ZT-85	76×72×19.2	Pa3→Pa33→Pa70	34	ZV-88	53×42×18.4	Pa167→Pa155→Pa154
4	ZU-87	106×88×10.0	Pa5→Pa4; Pa6→Pa4	35	ZV-88	50×40×11.0	Pa167→Pa155→Pa154
5	ZU-87	(110)×(105)×82.0	Pa5→Pa4	36	ZV-88	(89)×(74)×24.4	
6	ZU-87	76×78	Pa5→Pa4	37	ZV-88	38×27×14.4	
7	ZV-ZU-85	95×85×114.0	SK(F)311→Pa7→Pa8; Pa72	38	ZV-88	30×29×33.8	
8	ZV-ZU-85	95×88×108.0	Pa7→Pa8; SK 305→SK306→Pa8	39	ZU-85~86	30×35×10.0	
9	ZU-86	83×78×18.7	SK317→Pa9	40	ZT-85	38×35×18.8	
10	ZU-85	99×94×137.5	Pa10→Pa11	41	ZV-85	90×99×140.0	Pa136→Pa151
11	ZL-85	32×30×53.0	Pa10→Pa11	42	ZU-85	74×61×50.9	
12	ZU-85	41×38×70.6	Pa10	43	ZV-88~89	103×98×128.2	
13	ZV-ZU-85	118×86×155.0	SK311→Pa13	45	ZU-85	90×180×14.5	Pa165→SK(F)322
14	ZT-85	76×65×115.5		46	ZV-85	38×32×15.9	SK311
15	ZT-85	65×61×113.0		47	ZU-85	34×30×115.4	SK312→Pa157
16	ZU-87	32×30×41.4		48	ZU-85	28×25×18.3	
17	ZU-85	(76)×36×(116.0)	Pa145→Pa18→Pa19	49	ZU-85	33×32×55.3	SK(F)319
18	ZU-85	28×36×57.0	Pa18→Pa19	50	ZT-85	56×56×124.3	Pa153→Pa155→Pa70
19	ZU-85	30×48×71.5	Pa27→Pa30	51	ZT-85	20×22×34.6	
20	ZU-85	ZU-ZT-85	104×100×107.0	52	ZV-ZU-85	28×28×25.9	Pa17
21	ZU-ZT-84	63×55×99.1		53	ZU-85	26×15×28.9	
22	ZU-85	53×36×87.3		54	ZV-85	40×36×58.8	Pa176→Pa177
23	ZL-85	57×56×41.8	Pa160→Pa161	55	ZV-85	36×34×59.3	Pa176→Pa177
24	ZU-85	78×70×106.0	Pa127→Pa120	56	ZU-85	28×22×71.3	
25	ZU-S4-85	60×62×82.0	Pa182; SK325	57	ZV-88	56×54×49.2	
26	ZT-84	38×36×76.7		58	ZU-85	(36)×(34)×12.3	Pa165→Pa166
27	ZU-85	73×56×79.9		59	ZU-85	22×18×32.5	
28	ZT-85	58×45×(118.2)	Pa32→Pa31	60	ZU-S4-85	30×30×54.5	Pa126
29	ZT-85	60×62×(75.0)	Pa32→Pa31	61	ZW-88	64×64	
30	ZT-85	71×70×(107.1)	Pa33→Pa33→Pa36	62	ZX-88	46×46	
31	ZU-85	36×36×54.3		63	ZY-85	30×34	Pa165→Pa166
32	ZV-85	34×32×64.0		64	ZY-85	30×30	Pa165→Pa166
33	ZV-85	42×40×55.0	Pa38→Pa51	65	YA-85	40×30	SK325→Pa157
34	ZU-86	22×22×36.8		66	YA-90	43×43×54.0	
35	ZU-86	18×15×19.7	SK317→Pa41	67	YA-91	66×50×40	
36	ZU-85	18×12×36.3	SK308	68	YC-YB-89	35×28	SK322
37	ZU-86	85×70×126.0	Pa45→Pa18; Pa45→Pa46	69	YC-YB-89	58×34×110	
38	ZU-86	63×54×(88.0)	Pa45→Pa45; Pa18→Pa46	70			
39	ZV-88	(36)×(36)×55.0	Pa47→Pa52→Pa54	71			
40	ZW-88	71×70×71.0	SK313→Pa48	72			
41	ZV-88	46×46×67.4	Pa43	73			
42	ZV-88	96×90×121.4	SK318	74			
43	ZV-88	44×42×70.0		75			

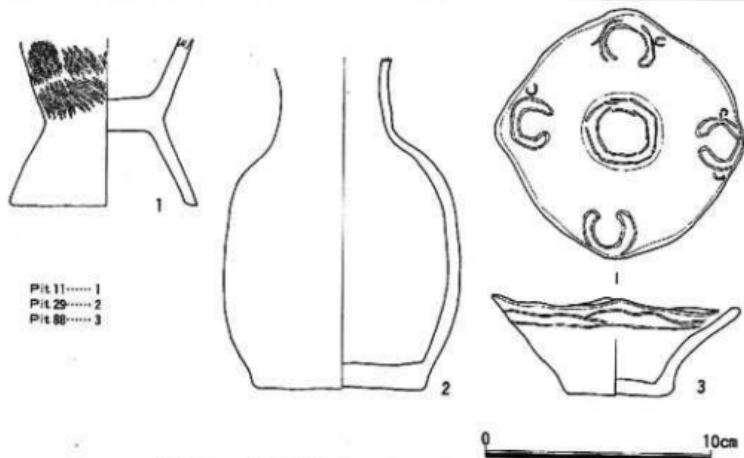
第2表 建物跡一覧表

*張り出し部をもつプランのうち、張り出し部軸長が長辺より長いものは
張り出し部軸方向を長辺方向とした。
■新旧関係は旧→新で表す。記号のないものは新旧不明。
■()のついているNo.は、第5次調査時の建物番、柱穴のNo.である。

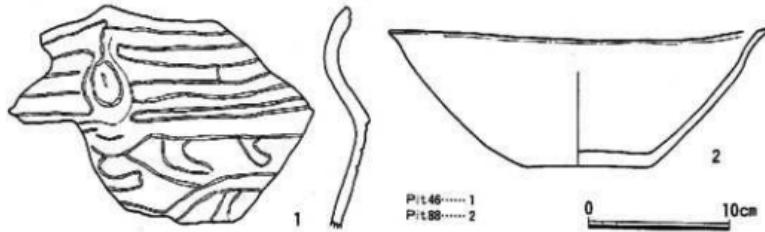
建物番号	形態	柱穴数	種式		表辯差(ε)	辯正角度(°)	張り出し部軸長(α)	長辺方向	新旧関係
			番号	横幅、奥さ(cm) 柱間(m)					
SB301 (SB223)	Ⅱ型	5	(Pit.305)	90×80×128.0 22×32					SB305→SB301→SB302
			(Pit.326)	86×83×116.0 28×30	4.1(Pit.664-Pit.45)	3.5(Pit.664-Pit.534)	4.3(Pit.517-Pit.503)	N-15°-E	SB305→SB301
			(Pit.664)	9.1×88×133.6	4.6(Pit.518-Pit.45)	3.5(Pit.5-Pit.45)			SB301→SK(F)322
			(Pit.517)	6.1×81×135.4 32×32					(SK(F)274)
			Pit.5	110×98×104.0					(SK275.276)
			Pit.65	90×84×94.3					
SB302 (SB224)	Ⅲ型	6	(Pit.504)	66×78×85.6					SB300→SB301→SB302
			(Pit.665)	119×94×88.6	3.5(Pit.509-Pit.4)	2.6(Pit.509-Pit.665)	3.4(Pit.5-Pit.204)	N-14°-E	SB305→SB302
			(Pit.305)	116×84×95.6	(3.4)(Pit.665-)		2.9(Pit.4-)		SB302→SK(F)322
			(Pit.319)	81×80×94.0					(SK(F)274)
			Pit.4	106×98×104.0 37×36					(SK275.276)
SB303 (SB225)	Ⅲ型	6	(Pit.510)	50×54×84.9					SB305→SB301→SB302
			(Pit.525)	61×65×78.0 28×27	(3.5)(Pit.507-)	3.4(Pit.507-Pit.525)	4.2(Pit.325-Pit.512)	N-12°-E	SB305→SB303
			(Pit.507)	60×62×88.8 25×25	(3.5)(Pit.525-)				SB303→SK(F)322
			(Pit.529)	60×59×108.7					(SK(F)274)
SB304 (SB226)	Ⅲ型	6	(Pit.514)	60×59×111.1 31×39					SB305→SB304
			(Pit.575)	70×65×118.5	(3.7)(Pit.528-)	3.2(Pit.528-Pit.502)	3.5(Pit.318-Pit.575)	N-10°-E	SK(F)305→SB304
			(Pit.529)	60×58×118.6	3.7(Pit.528-Pit.514)	(3.1)(-Pit.514-)			(SB221A.222)
			(Pit.328)	65×64×120.0 25×34					(SK(F)274)
			Pit.18	70×68×116.0 24×34					
SB305 (SB227)	Ⅲ型	6	(Pit.543)	50×75×141.0 30×33					SB305→SB301→SB302
			(Pit.508)	90×86×142.0 31×33	4.9(Pit.7-Pit.538)	3.4(Pit.7-Pit.1)	5.5(Pit.45-Pit.508)	N-7°-E	SB305→SB303 SB305→SB304
			(Pit.538)	98×98×172.0 31×33	5.3(Pit.1-Pit.543)	3.3(Pit.538-Pit.543)			SK(F)306→SB306
			Pit.7	95×85×144.0 25×25					SK(F)311A→SB306
			Pit.45	85×70×98.5 27×36					(SK(F)274)→SB305 (SB228. SK(F)274)
SB306	Ⅰ型	4	Pit.8	91×88×106.0					SK306→SK308→SB306
			Pit.61	90×90×120.0 27×36	3.3(Pit.13-Pit.61)	2.8(Pit.13-Pit.10)		N-9°-E	SB307
			Pit.13	118×96×135.0 25×34	3.6(Pit.10-Pit.68)	2.7(Pit.6-Pit.8)			SK313.220
			Pit.16	99×94×137.9					

第3表 第307号建物跡柱穴状ピット一覧表

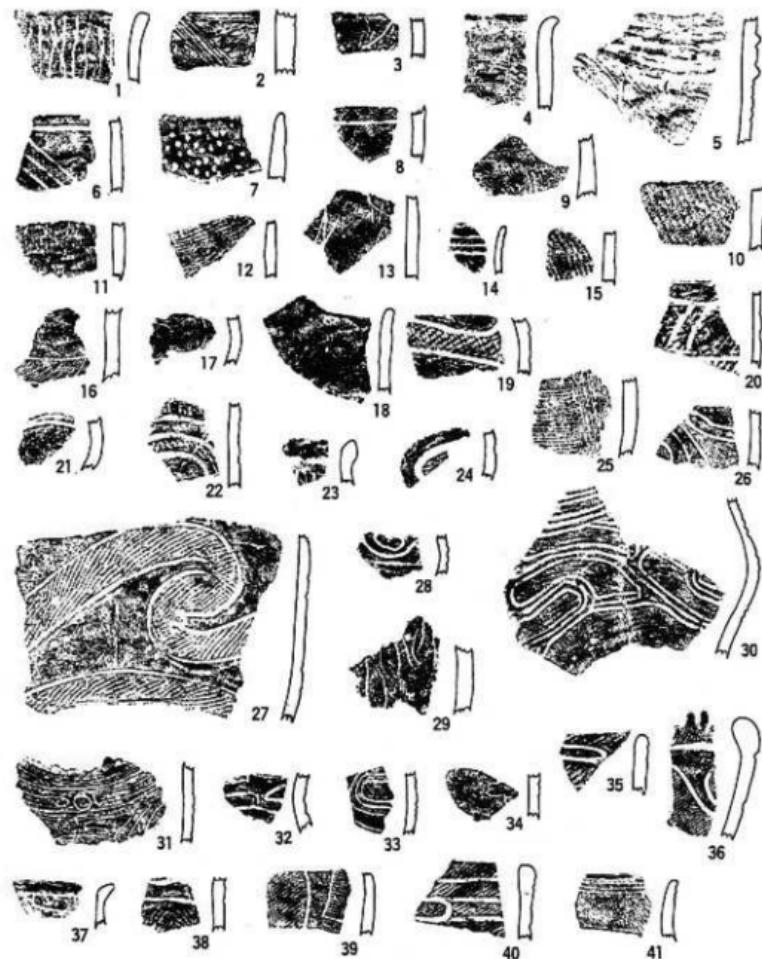
Pit No.	長径×短径×深さ (cm)	柱直径 (cm)									
12	41×36×70.6		107	12×12×31.1		118	24×19×54.0		129	16×15×37.5	
26	57×56×41.8		108	28×26×44.1		119	19×12×44.4		130	42×38×47.9	
82	30×30×54.5		109	20×19×26.7		120	18×17×44.3		131	16×15×40.0	
34	36×36×54.3		110	26×24×36.9		121	32×22×29.6		132	16×12×37.1	
			111	19×14×25.4		122	20×14×54.2		133	24×24×48.1	
101	16×14×44.1		112	18×13×35.1		123	26×16×42.7		134	14×12×39.0	
102	26×22×56.7		113	32×24×50.2		124	20×19×49.4		135	40×22×46.6	
103	36×29×44.6		114	24×18×48.0		125	31×26×45.2		136	20×14×47.5	
104	22×19×57.5		115	28×21×37.1		126	23×20×76.2		137	35×24×46.0	
105	20×18×38.8		116	17×16×36.6		127	24×22×44.2		138	22×18×49.6	
106	28×22×38.6		117	14×12×35.8		128	10×8×32.2		139	28×26×36.1	



第11図 D₃区柱穴状ピット出土遺物(1)



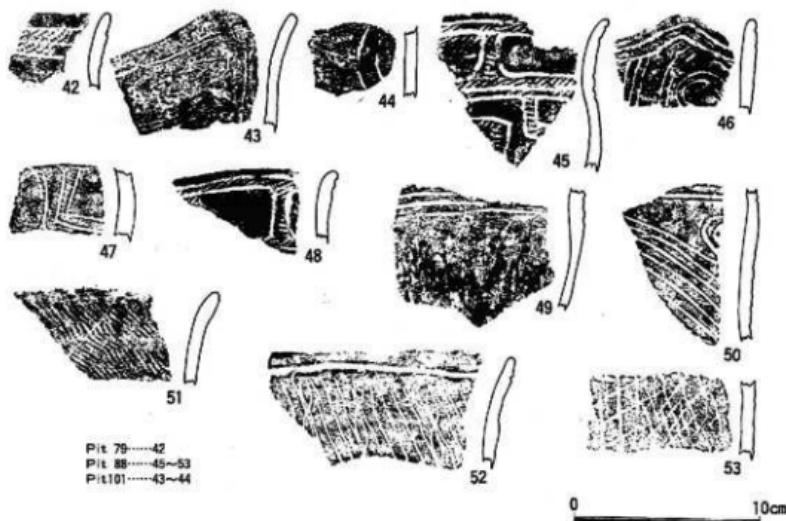
第12図 D₃区柱穴状ピット出土遺物(2)



Pit 3.....1	Pit10.....10~11	Pit33.....20	Pit51.....28~29	Pit63.....36~38
Pit 4.....2~4	Pit13.....12~13	Pit34.....21	Pit53.....30~31	Pit65.....39~41
Pit 5.....5~6	Pit20.....14~15	Pit45.....22~23	Pit54.....32~33	
Pit 7.....9	Pit22.....16~18	Pit48.....24	Pit58.....34	
Pit 9.....7~8	Pit30.....19	Pit50.....25~27	Pit62.....35	

0 10cm

第13図 D₃区柱穴状ピット出土遺物(3)



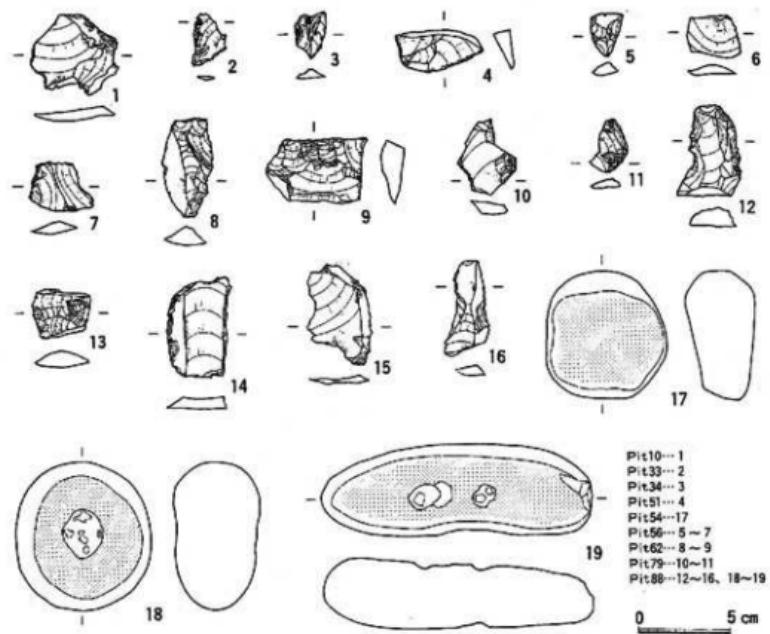
第14図 D₅区柱穴状ピット出土遺物(4)

第307号建物跡（第7図）

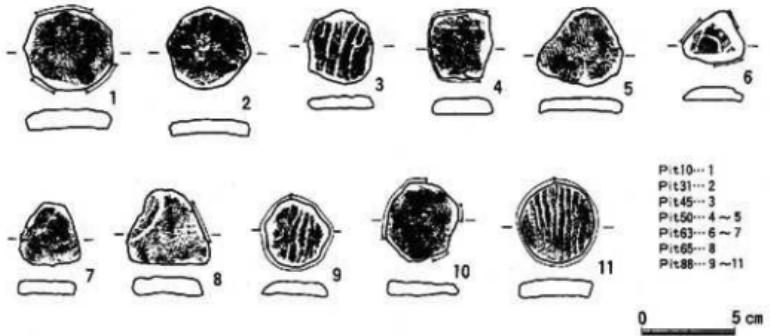
D₅区南東端のZV～ZU～84～85グリッドに位置する。306号建物跡、307、316、319号フランクスコ状土壙、311B、312、313、315、325号土壙と重複、本遺構は311B、313号土壙より新しい。

本遺構は、環状に壁柱穴と周溝を有する摺立柱建物跡で、その規模（径）は6.2mを測る。主柱穴は、ピット12、34、82、26の4個で、長辺2.9m、短辺2.1mの長方形の配置となる。主柱穴掘り方の径は30～57cm、深さは42～77cmを測る。壁柱穴は、出入口部と考えられる東部の一部を除き、ほぼ一巡する。西端及び南端で途切れるが、擾乱により消失、確認できなかったことに因る。検出された壁柱穴39個の径は12～42cm、深さは25～58cmである。これらの壁柱穴に周溝が伴うが、擾乱のため北西～北部以外からは確認できなかった。

本遺構ピットからは縄文土器破片12点の出土があった。



第15図 D₃区柱穴状ピット出土遺物(5)



第16図 D₃区柱穴状ピット出土遺物(6)

2. 配石遺構

(1) 環状配石遺構

第301号環状配石遺構（第17図、21図、22図1～5）

D₂区中央部から若干南東寄りのYA～ZZ-87～89グリッドに位置し、Ⅲd層上面を構築面とする。第363A、364号フ拉斯コ状土壙と重複し、本遺構がいずれよりも新しい。

環帶部は径7.4m、東側に2.4×1.6mの張り出し部を有する。配石に使用されている石は20～68cm大の大きさで、その石質は石英閃緑玢岩、石英安山岩、安山岩、凝灰岩などである。石英閃緑玢岩が約8割を占め、石英安山岩がこれに次ぐ。

環帶部のほぼ中央より112×76cmの広がりの焼土が確認されている。

本遺構周辺から縄文土器破片57点、石鎌1点、搔器2点、土器片利用土製品2点の出土があった。



第17図 第301号環状配石遺構実測図

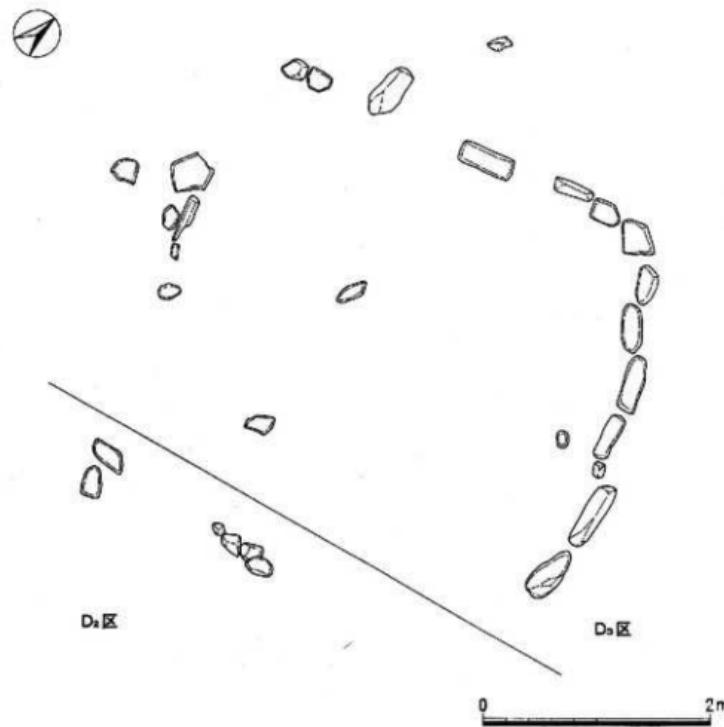
(2) 方形配石遺構

第302号方形配石遺構（第18図、22図6～12）

D₃区南東部のZY～ZX-87グリッドに位置し、Ⅲd層上面を構築面とする。第5次調査でその一部が検出されているが、その時点では方形配石遺構と確認できていない。

14～62cmの細長の石を4.4×4.3mの正方形に配置したもので、使用されている石は1点の石英安山岩以外は全て石英閃緑玢岩である。なお、配石内より第301号環状配石遺構のような焼土は確認されていない。

本遺構周辺から石錐1点、搔器7点、剝片3点の出土があった。



第18図 第302号方形配石遺構実測図

(3) 配石造構

第303号配石造構（第19図）

D₃区中央部のYC-87グリッドに位置し、Ⅲd層上面を構築面とする。

10~50cmの石13個が1.6×1.2mの範囲で確認されたが、攪乱により本來の配石形態は不明である。配石には石英閃綠玢岩、石英安山岩、緑色凝灰岩などが利用されている。

第304号配石造構（第20図）

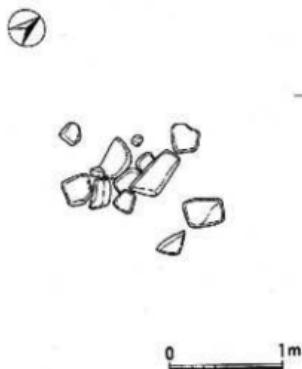
D₃区中央部から若干北西寄りのYF~YE-88グリッドに位置し、Ⅲd層上面を構築面とする。

4~20cm大の石が3.1×1.5mの範囲に密集しているもので、集石造構あるいは礫群と呼ぶべきものであろう。石英安山岩、流紋岩、火山凝灰岩など様々な石が利用されている。

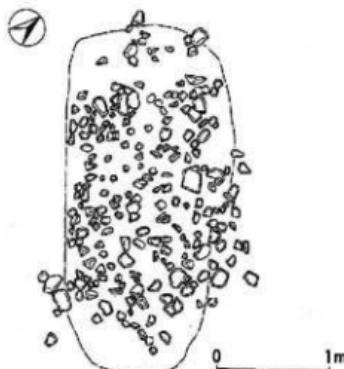
3. 石圓炉

第301号石圓炉（第23図）

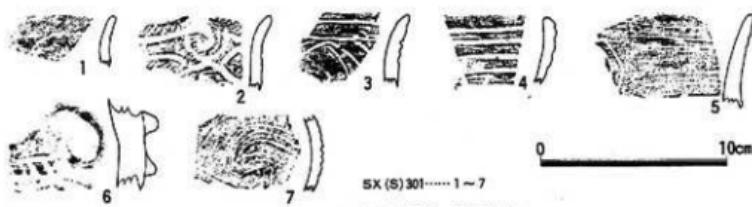
D₃区北西部のYJ-88グリッド・Ⅲd層上面で確認した。南側の炉石を消失しているが、30



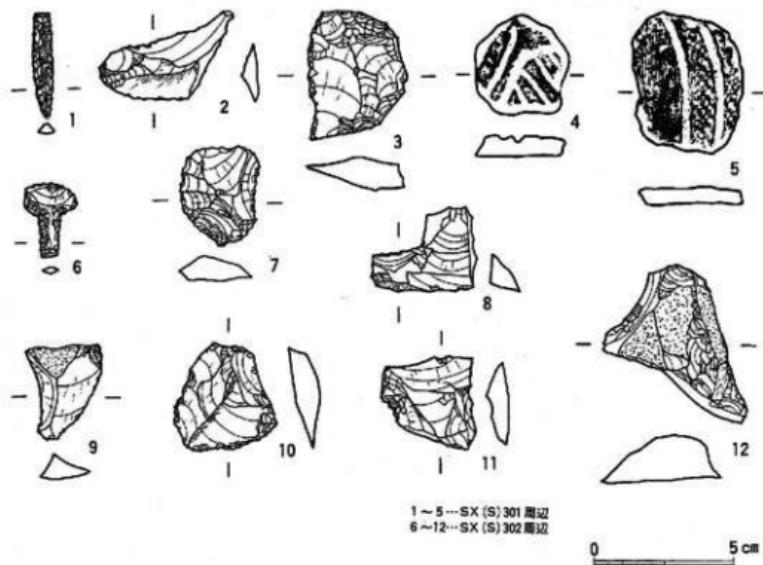
第19図 第303号配石造構実測図



第20図 第304号配石造構実測図



第21図 D₃区配石造構出土遺物(1)



第22図 D₃区配石造構物土遺物(2)

~50cm大の石を110×74cmの楕円形に配置した石圓炉と考えられる。炉内より70×50cmの範囲で焼土が確認された。

第302号石圓炉（第23図、24図、25図）

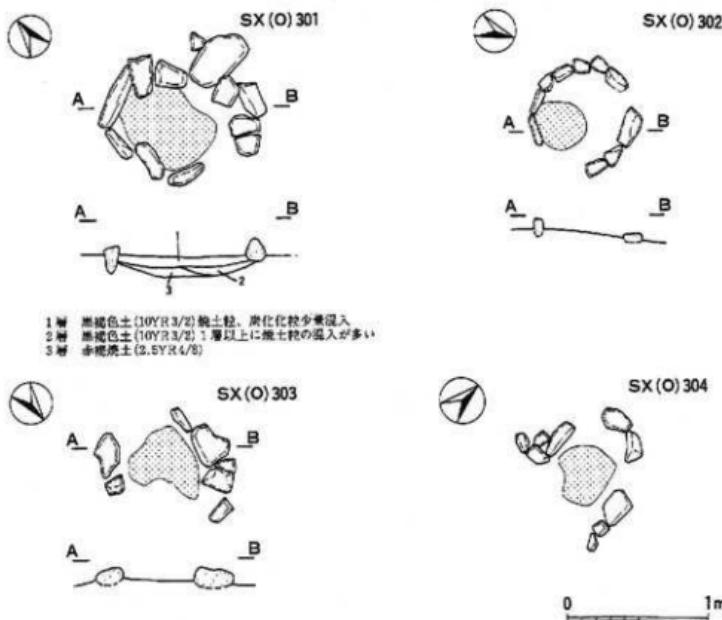
D₃区北東部のYB-90~91グリッド・IIId層上面で確認した。一部炉石を欠いているが、本来12~30cm大の石を径80cmの円形に配置した石圓炉と考えられる。炉内南東寄りから40×35cmの範囲で焼土が確認された。また、縄文土器破片2点、搔器4点の出土があった。

第303号石圓炉（第23図）

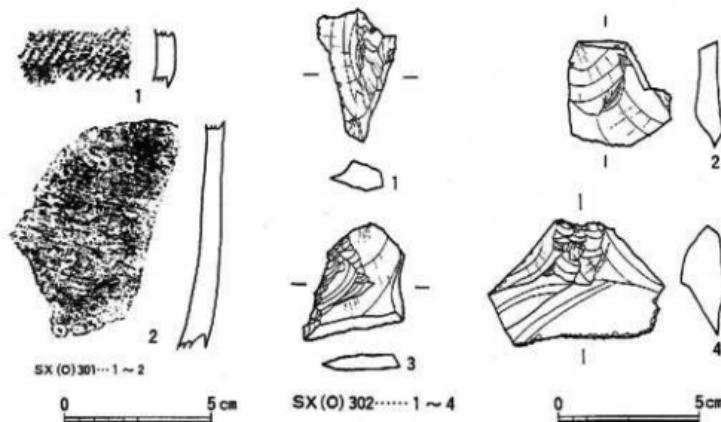
D₃区北東端のYA-91グリッド・IIId層上面で確認した。遺存状態が悪く15~30cm大の石7個が残存しているだけであるが、100×90cm規模の石圓炉と考えられる。炉内中央から56×48cmの範囲で焼土が確認された。

第304号石圓炉（第23図）

D₃区西北部のYH-91グリッド・IIId層上面で確認した。南側が若干破壊されているが、100×80cm規模の楕円形の石圓炉と考えられる。炉内より42×38cmの範囲で焼土が確認された。



第23図 第301～304号石圓炉実測図



第24図 D₃区石圓炉出土遺物(1)

第25図 D₃区石圓炉出土遺物(2)

4. 焼土造構

第302号焼土造構（第26図）

D₃区中央部南東寄りのYA-89グリッド・Ⅲd層上位で確認した。焼土範囲は112×84cmである。

第303号焼土造構（第26図）

D₃区北東部のYA-91グリッド・Ⅲd層上位で確認した。焼土範囲は78×74cmである。

第304号焼土造構（第26図）

D₃区北東端のYA-91グリッド・Ⅲd層上位で確認した。焼土範囲は49×42cmである。

第305号焼土造構（第26図）

D₃区北東端のYA-91グリッド・Ⅲd層上位で確認した。焼土範囲は51×48cmである。

第306号焼土造構（第26図）

D₃区北東部のYB-91グリッド・Ⅲd層上位で確認した。焼土範囲は156×76cmである。

第307号焼土造構（第26図）

D₃区北東端のYC-91グリッド・Ⅲd層上位で確認した。焼土範囲は63×62cmである。

第308号焼土造構（第26図）

D₃区北東部のYC-90～91グリッド・Ⅲd層上位で確認した。焼土範囲は62×59cmである。

第309号焼土造構（第26図）

D₃区中央部のYB-89グリッド・Ⅲd層上位で確認した。焼土範囲は82×66cmである。

第310号焼土造構（第26図）

D₃区中央部のYC-87グリッド・Ⅲd層上位で確認した。焼土範囲は80×72cmである。

第311号焼土造構（第26図）

D₃区北西部のYH-88～89グリッド・Ⅲd層上位で確認した。第385号土壌と重複、本造構が新しい。焼土範囲は92×60cmである。

第313号焼土造構（第26図）

D₃区北西部のYG-89グリッド・Ⅲd層上位で確認した。焼土範囲は78～60cmである。

第314号焼土造構（第26図）

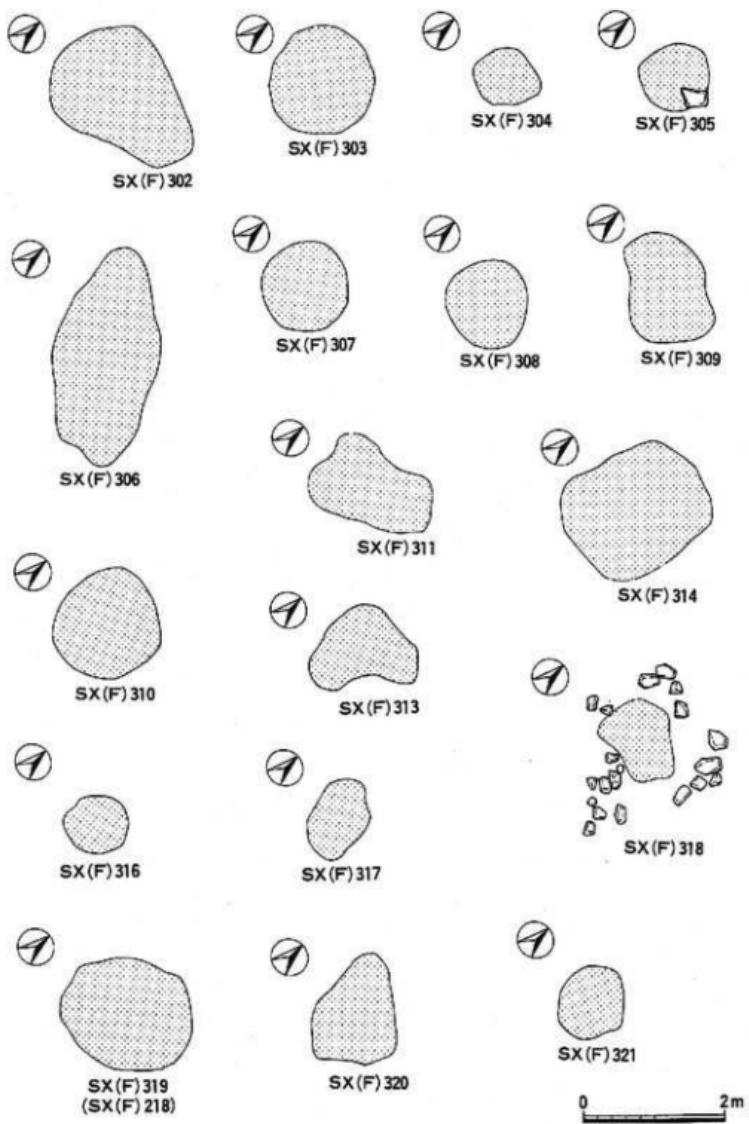
D₃区北西部のYH-91グリッド・Ⅲd層上位で確認した。焼土範囲は100×84cmである。

第316号焼土造構（第26図）

D₃区北西部のYH-91グリッド・Ⅲd層上位で確認した。焼土範囲は46×42cmである。

第317号焼土造構（第26図）

D₃区北西部のYH-91グリッド・Ⅲd層上位で確認した。焼土範囲は60×40cmである。



第26図 第302~321号焼土状造構実測図

第318号焼土遺構（第26図）

D₃区北西部のYI～YH-91グリッド・Ⅲd層上位で確認した。焼土範囲は60×45cmである。本遺構周囲より6～18cm大の礫20個が確認されている。

第319号焼土遺構（第26図）

D₃区北西部のYI-91～92グリッドに位置する。本遺構は第4次調査でその一部を確認、第218号焼土遺構として報告している。焼土範囲は94×79cmである。

第320号焼土遺構（第26図）

D₃区北西部のYJ-91グリッド・Ⅲd層上位で確認した。焼土範囲は80×62cmである。

第321号焼土遺構（第26図）

D₃区北西部のYH-90グリッド・Ⅲd層上位で確認した。焼土範囲は54×49cmである。

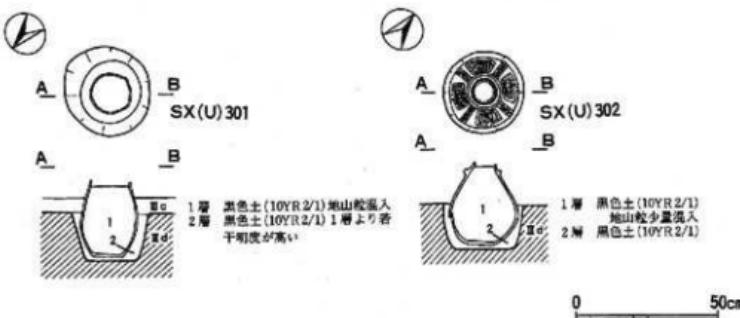
5. 埋設土器遺構

第301号埋設土器遺構（第27図、28図1）

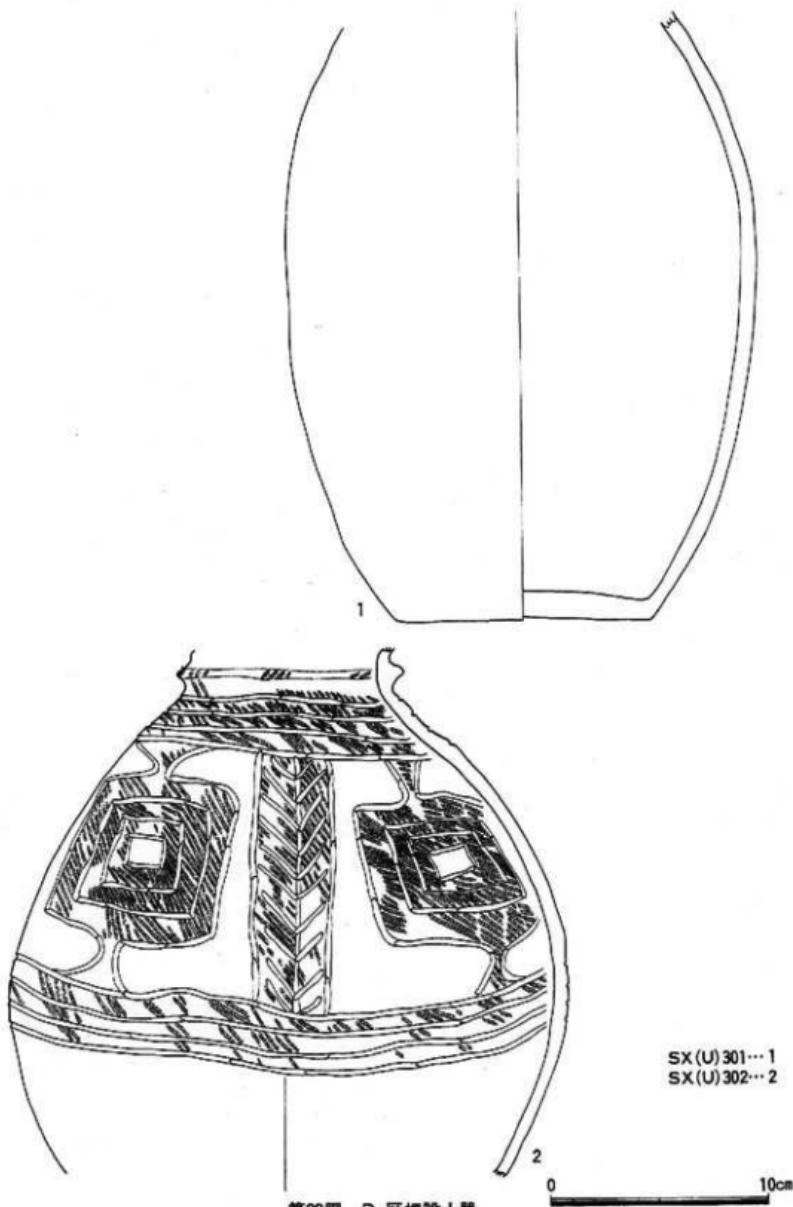
D₃区南東部のZX-88グリッド・Ⅲd層上面で確認した。土器は径33×30cm、深さ17cmの掘り方に正立てで埋設されていた。無文の深鉢形土器で、口縁部を欠いている。底径は11.4cm、色調は明褐灰色である。

第302号埋設土器遺構（第27図、28図2）

D₃区北東部のYA-91グリッド・Ⅲd層上面で確認した。土器は径29×28cm、深さ15cmの掘り方に正立てで埋設されていた。壺形土器で、胴部上半に磨消繩文が施文されている。最大胴径は25.3cm、色調はにぶい黄橙色である。



第27図 第301、302号埋設土器遺構実測図



第26図 D₃区埋設土器

6. 土 壤

(1) Tピット

第376号Tピット

(第29図～32図、42図30～33)

D₃区南西部のYC-86グリッドに位置する。Ⅲd層上位での確認である。第363B号土壌と重複、本造構が古い。

規模は333×77cm、深さ105cmを測る。また、長軸方向はN-85°-Eである。

ピット内より、縄文時代後期の壺底部、台付土器台部、深鉢底部各一個体他、縄文土器破片199点、搔器7点、磨石、敲石、耳飾り、土器片利用土製品、円形石製品、三角形石製品、輕石製石製品各1点の出土があった。

(2) フラスコ状土壌

第306号フラスコ状土壌 (第33図、37図9、38図1～5、42図1～6、48図8)

D₃区南東端のZU-86グリッド・IV層で確認した。ピット1と重複、本造構が古い。口縁部は80×77cm、底部は150×144cm、深さは140cmを測る。堆積土は2ブロック以上に区分され、人為堆積である。底面中央に径28cm、深さ13cmのピットを有する。

土壤内より、縄文時代後期の壺1個体他、縄文土器破片41点、搔器7点、石皿1点の出土があった。

第307号フラスコ状土壌 (第33図)

D₃区南東端のZU-84グリッド・V層で確認した。周辺の擾乱のため、底部付近を残し、ほとんど消失している。底径は150×120cm、深さは100cm以上と推測される。堆積土は4ブロック以上に区分され、人為堆積である。

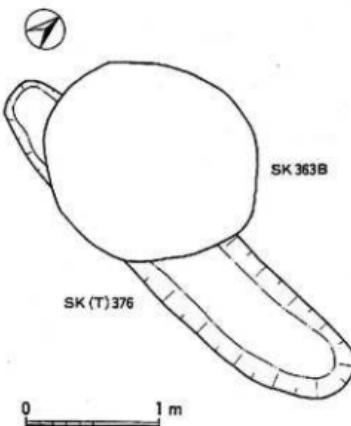
第311A号フラスコ状土壌 (第33図、38図6～11、42図7～9)

D₃区南東端のZU-86グリッド・IV層で確認した。ピット7、45と重複、本造構はピット7より古い。口縁部は72×70cm、底部は112×106cm、深さは96cmを測る。堆積土は8ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。

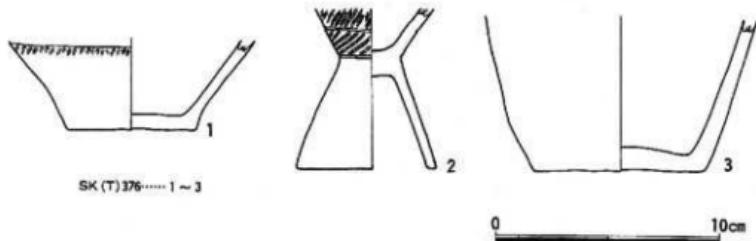
土壤内より縄文土器破片30点の出土があった。

第316号フラスコ状土壌 (第33図、38図12～21)

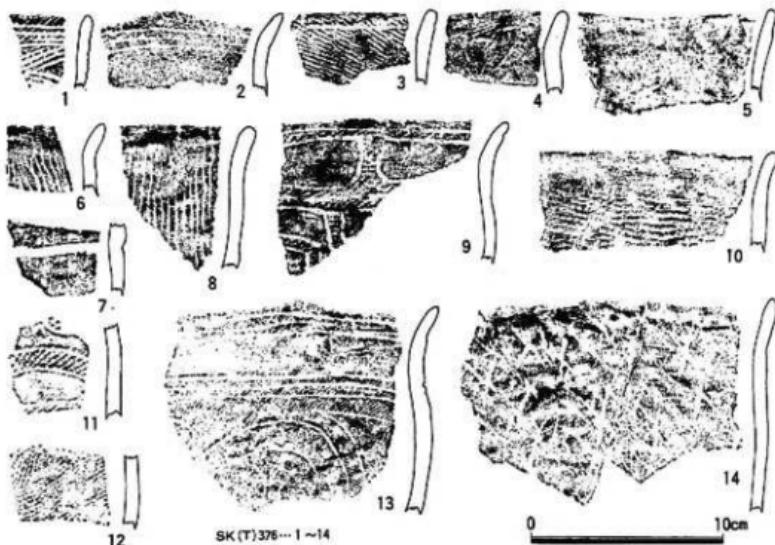
D₃区南東端のZU-85グリッド・IV層で確認した。第319号フラスコ状土壌、325号土壌、ビ



第29図 第376号Tピット実測図



第30図 D₃区Tピット出土遺物(1)



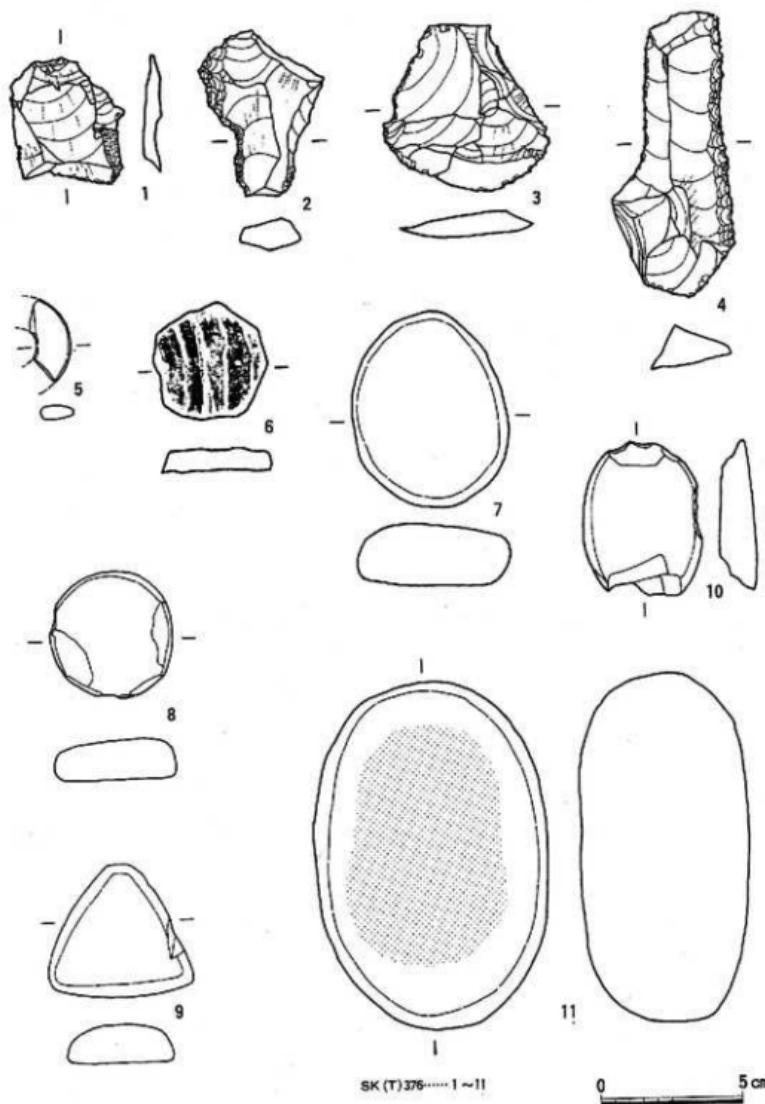
第31図 D₃区Tピット出土遺物(2)

ピット2と重複、本遺構はいずれの遺構よりも古い。口縁部は90×85cm、底径は154×148cm、深さは167cmを測る。堆積土は6ブロック以上に区分され、人為堆積と考えられる。

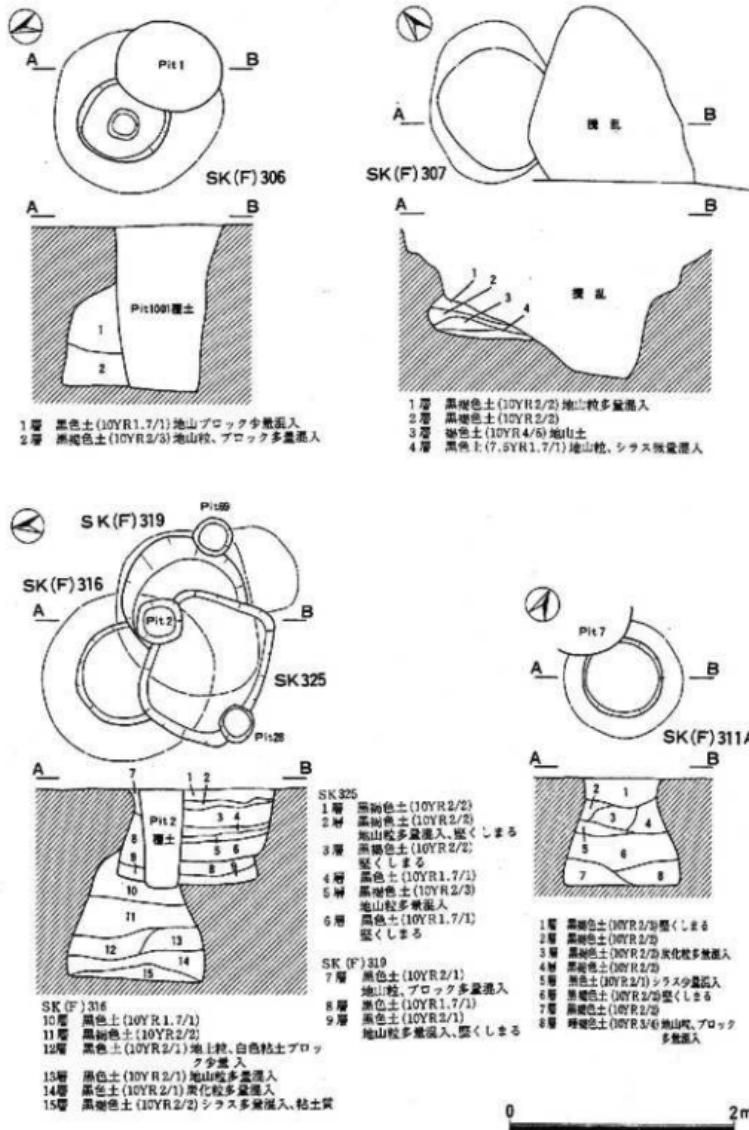
土壤内より縄文土器破片76点の出土があった。

第318号フラスコ状土壙 (第34図、36図1、38図22~26、42図10)

D₃区南東端のZV～ZU-88グリッド・Ⅲd層中位で確認した。口縁部は109×108cm、底部は144×138cmを測る。底面は二段構造で、西側の高い面までの深さは168cm、低い面までの深さは196cmである。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。



第32図 D₃区Tピット出土遺物(3)



第33図 第306～319号 フラスコ状土壤実測図

土壤内より、縄文時代後期の深鉢1個体他、縄文土器破片45点、搔器1点の出土があった。

第319号 フラスコ状土壤 (第33図、37図1~3、38図27~31、42図11)

D₃区南東端のZU-85グリッド・IV層で確認した。第316号 フラスコ状土壤、第325号土壤、ピット2、69と重複、本遺構は316号 フラスコ状土壤より新しく、325号土壤、ピット2、69より古い。口径は110cm、底部は150×120cm、深さは85cmを測る。堆積土は3ブロック以上に区分され、人為堆積である。

土壤内より、縄文時代後期の深鉢あるいは壺の底部2個体、壺口縁部1個体他、縄文土器破片31点、搔器1点の出土があった。

第321号 フラスコ状土壤 (第34図、36図2、37図4~6、39図32~50、41図1~12、

42図12~19、43図1~4、9)

D₃区南東端のZV-84~85グリッド・IV層で確認した。口縁部は106×98cm、底部は175×160cmを測る。底面は二段構造で、南東側の高い面までの深さは187cm、低い面までの深さは200cmである。堆積土は10ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。

土壤内より、縄文時代後期の深鉢1個体、壺3個体他、縄文土器破片616点、搔器8点、剥片2点、凹石、敲石、磨石各1点、土器片利用土製品12点、軽石製石製品1点の出土があった。

第322号 フラスコ状土壤 (第34図、37図7、39図51~58、41図13、14、42図20、21、43図5、10)

D₃区南東端のZV~ZU-87~88グリッド・IIId層中位で確認した。ピット65、第322号 フラスコ状土壤と重複、本遺構はピット65より新しく、322号 フラスコ状土壤より古い。口縁部は120×108cm、底部は196×192cm、深さは174cmを測る。堆積土は9層に区分され、自然堆積と考えられる。

土壤内より、縄文時代後期の深鉢底部1個体他、縄文土器破片58点、搔器3点、磨製石斧2点、土器片利用土製品2点、軽石製石製品1点の出土があった。

第356号 フラスコ状土壤 (第34図、39図59~72、42図22~24)

D₃区北東部のYD-91グリッド・IIId層上位で確認した。口縁部は98×97cmの円形である。遺構の種類が判明した80cmまでしか掘り下げていないため、深さ等は不明。

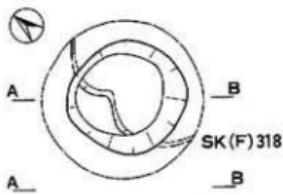
土壤内より縄文土器破片134点、搔器3点、剥片1点の出土があった。

第363A号 フラスコ状土壤 (第34図)

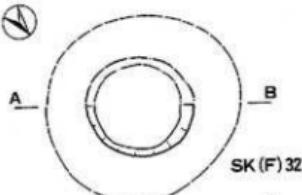
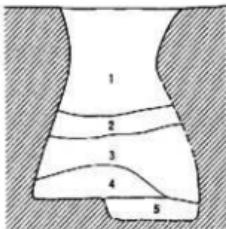
D₃区中央部南東寄りのZZ-88グリッド・IIId層上面で確認した。第301号環状配石遺構と重複、本遺構が古い。口縁部は113×100cmの円形である。環状配石遺構保護のため、本遺構の掘り下げはしておらず深さ等は不明。

第364号 フラスコ状土壤 (第34図)

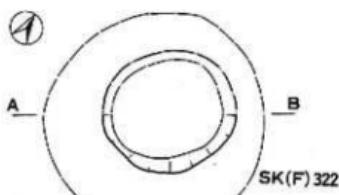
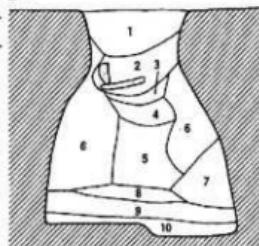
D₃区中央部南東寄りのZZ-87グリッド・IIId層上位で確認した。第301号環状配石遺構と重



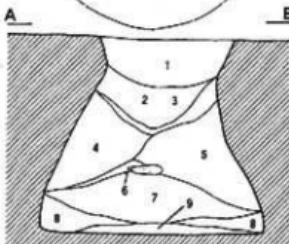
- 1層 黒色土(10YR1.7/1)
地山粒、シラス少量混入
2層 黒色土(10YR2/1)
地山粒、シラス多量混入
3層 黒色土(10YR1.7/1)
4層 黒色土(10YR1.7/1)
シラス少量混入
5層 黒色土(10YR1.7/1)
地山粒少量混入



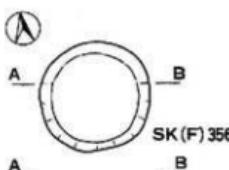
- 1層 黒褐色土(10YR2/2)
黒褐色土(10YR2/2)
炭化粒微量混入
2層 黑色土(7.5YH1.7/1)
3層 黑褐色土(10YR2/2)
褐色粘土多量混入
4層 黑褐色土(10YR3/2)
綠、夷化粒少量混入
5層 黑色土(10YR2/1)
6層 黑褐色土(10YR2/3)
7層 黑褐色土(10YR2/3)
8層 黑色土(10YR2/1)
シラス多量混入
9層 黑褐色土(10YR2/3)
炭化粒、シラス多量混入
10層 灰白色土(10YR8/2)
シラス



SK(F) 322



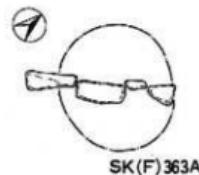
- 1層 黑褐色土(10YR2/2)
2層 黑褐色土(10YR2/3) 地山、ブロック少量混入
3層 黑褐色土(10YR2/2) 粘土、夷化粒混入
4層 黑褐色土(10YR3/1) 炭化物混入
5層 黑褐色土(10YR3/2) 地山粒混入
6層 炭化物
7層 黑褐色土(10YR3/1) 地山粒、ブロック多量混入
8層 黄褐色土(10YR6/8) 地山土、鐵筋骨土
9層 黑褐色土(10YR3/1) 地山粒、ブロック多量混入



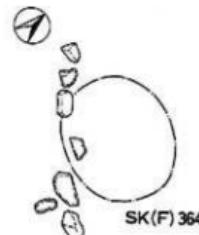
SK(F) 356



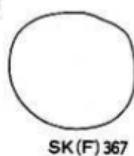
- 1層 黑色土(10YR2/1)
2層 黑色土(10YR2/1)
地山粒、ブロック少量混入
3層 黑色土(10YR2/1)
地山粒、ブロック少量混入
4層 黑色土(10YR2/1)
地山粒微量混入



SK(F) 363A



SK(F) 364



SK(F) 367

0 2m

第34図 第318~367号 フラスコ状土壤実測図

複、本遺構が古い。口縁部は $112 \times 97\text{cm}$ の円形である。現状配石遺構保護のため、本遺構の掘り下げもしておらず深さ等は不明。

第367号フ拉斯コ状土壙（第34図）

D₃区北東部のYC～YB-91グリッド・Ⅲd層で確認した。口縁部は $118 \times 103\text{cm}$ の円形である。プラン確認のみで掘り下げていないため、深さ等、詳細は不明。

第374号フ拉斯コ状土壙（第35図）

D₃区北東部のYA-90～91グリッド・Ⅲd層上位で確認した。口縁部は $132 \times 132\text{cm}$ 、底部は $212 \times 200\text{cm}$ 、深さは 194cm を測る。堆積土は2ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。

第375号フ拉斯コ状土壙（第35図、37図8、40図73～89、42図25～29、34、43図6）

D₃区中央部のYB-88～89グリッド・Ⅲd層上位で確認した。口縁部は $142 \times 137\text{cm}$ の円形である。プラン確認を主とし、50cm程しか掘り下げていないため、深さ等、詳細は不明。

土壙上位より、縄文時代後期の台付土器台部1個体他、縄文土器破片195点、撫器6点、剣片1点、石錐1点の出土があった。

第377号フ拉斯コ状土壙（第35図）

D₃区中央部南西寄りのYA-85～86グリッド・Ⅲd層上位で確認した。口縁部は $112 \times 109\text{cm}$ の円形である。プラン確認のみで掘り下げていないため、深さ等、詳細は不明。

第379号フ拉斯コ状土壙（第35図）

D₃区北西部のYG-89グリッド・Ⅲd層上位で確認した。口縁部は $117 \times 107\text{cm}$ の円形である。プラン確認のみで掘り下げていないため、深さ等、詳細は不明。

第389号フ拉斯コ状土壙（第35図、40図90～92、41図15、43図7）

D₃区北西部のYI-90～91グリッド・Ⅲd層上位で確認した。口縁部は $113 \times 104\text{cm}$ の楕円形、底部は $132 \times 113\text{cm}$ 、深さは 74cm である。底面北北西部には $70 \times 46\text{cm}$ 、深さ 14cm のピットを有する。堆積土は2ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。

土壙内より縄文土器破片16点、敲石、土器片利用土製品各1点の出土があった。

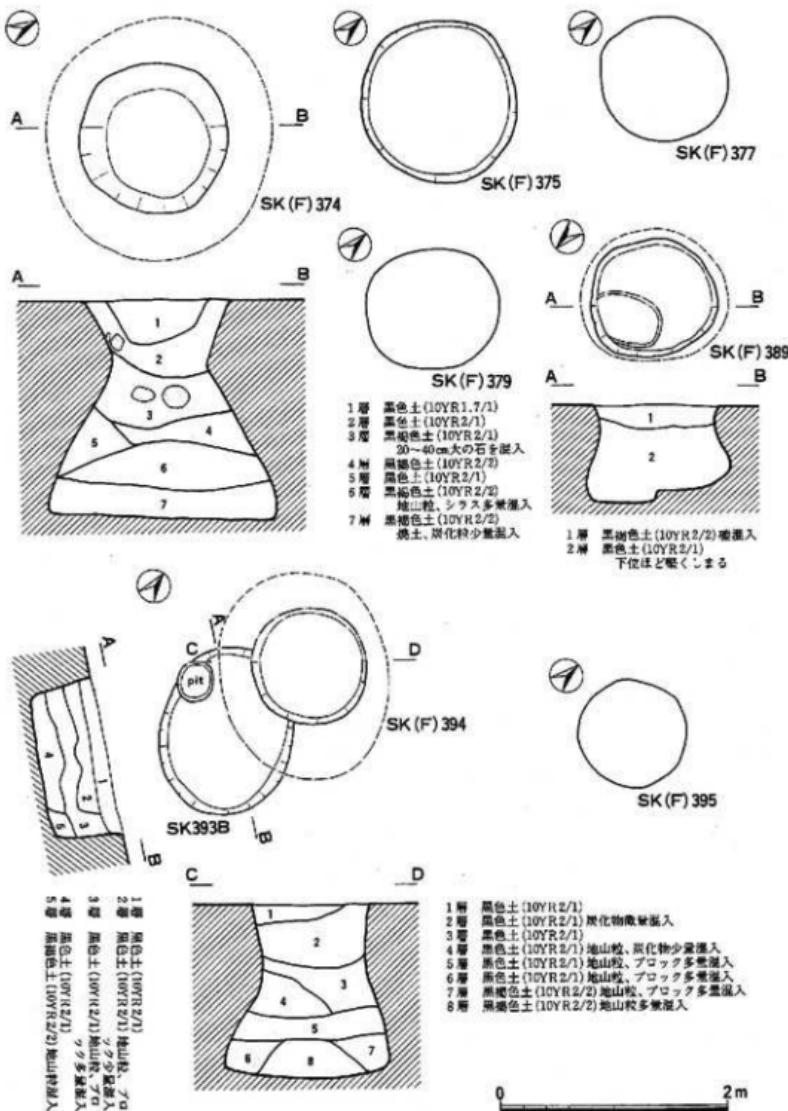
第394号フ拉斯コ状土壙（第35図、40図93）

D₃区北西部のYI-88～89グリッド・Ⅲd層上位で確認した。口縁部は $104 \times 101\text{cm}$ の円形、底部は $186 \times 150\text{cm}$ の楕円形、深さは 155cm を測る。堆積土は8ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。

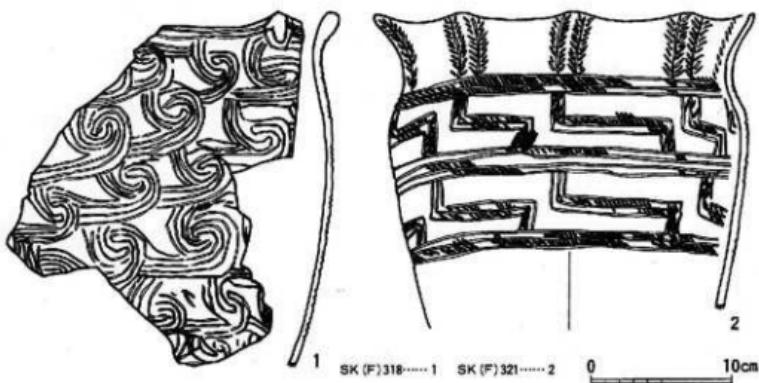
土壙内より縄文土器破片13点の出土があった。

第395号フ拉斯コ状土壙（第35図）

D₃区北西部のYG-91グリッド・Ⅲd層上位で確認した。口縁部は $97 \times 96\text{cm}$ の円形である。プラン確認のみで掘り下げていないため、深さ等、詳細は不明。



第35図 第374~395号 フラスコ状土壌実測図



第36図 D₃区 フラスコ状土壙出土遺物(1)

(3) 土壙

第308号土壙 (第44図、50図1~2、56図1)

D₃区南東端のZV～ZU-85～86グリッド・IV層で確認した。第309号土壙、ピット8、44と重複、本遺構がいずれの遺構よりも古い。平面形は155×147cmの不正円形、深さは29cmである。堆積土は2ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。

土壙内より縄文土器破片8点、磨石(凹石)1点の出土があった。

第309号土壙 (第44図)

D₃区南東端のZV～ZU-85～86グリッド・IV層で確認した。第308号土壙、ピット8と重複、本遺構は308号土壙より新しく、ピット8より古い。平面形は84×74cmの楕円形、深さは32cmである。堆積土は黒褐色土の單一層で、人為堆積と考えられる。

第310号土壙 (第44図、50図3～6、58図1)

D₃区南東部のZW-88グリッド・IIId層中位で確認した。平面形は143×124cmの楕円形で、長軸方向はN-83°-W、深さは50cmである。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。土壙内より縄文土器破片11点、土器片利用土製品1点の出土があった。

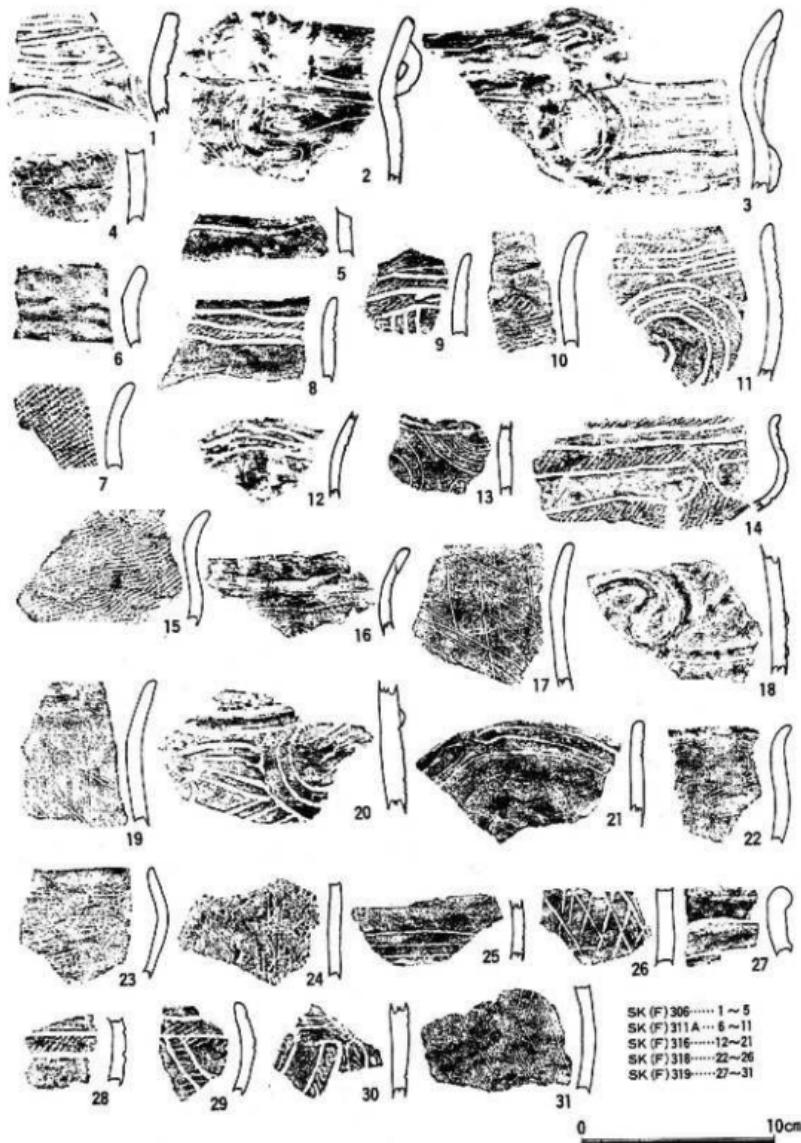
第311B号土壙 (第44図、50図7～8)

D₃区南東端のZV～ZU-84～85グリッド・IV層で確認した。第307号建物跡、ピット13と重複、本遺構はいずれの遺構よりも古い。平面形は140×120cmの楕円形で、長軸方向はN-57°-E、深さは31cmである。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。

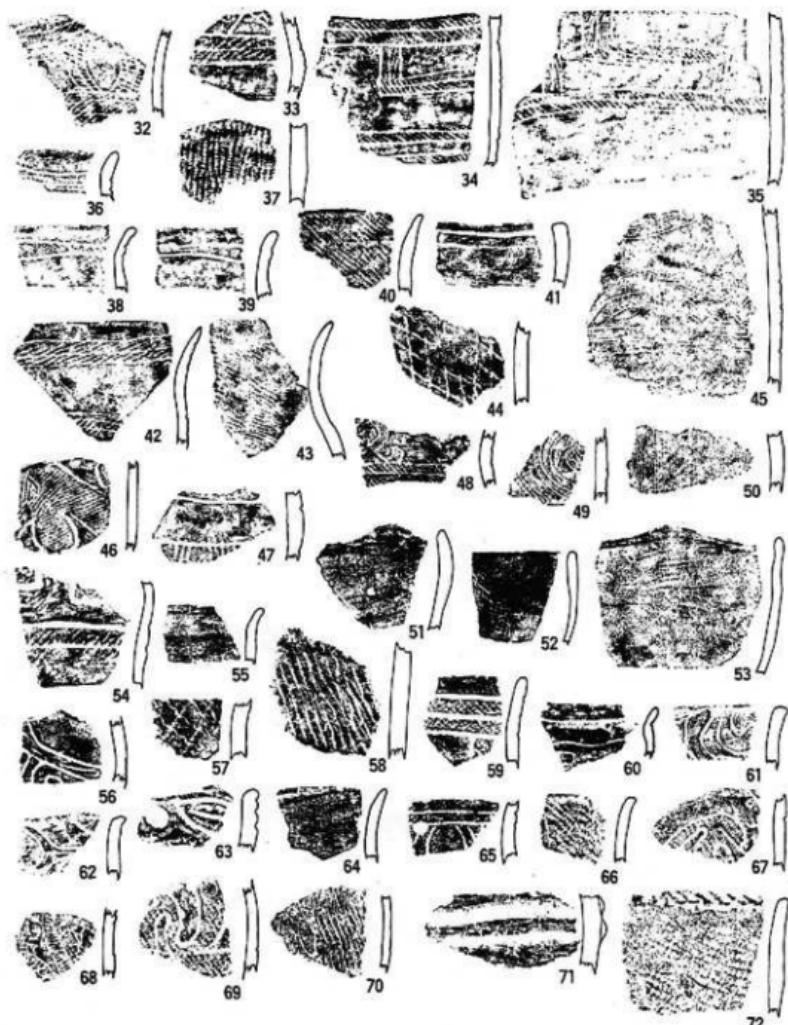
土壙内より縄文土器破片4点、剝片1点の出土があった。



第37図 D₂区 フラスコ状土壙出土遺物(2)



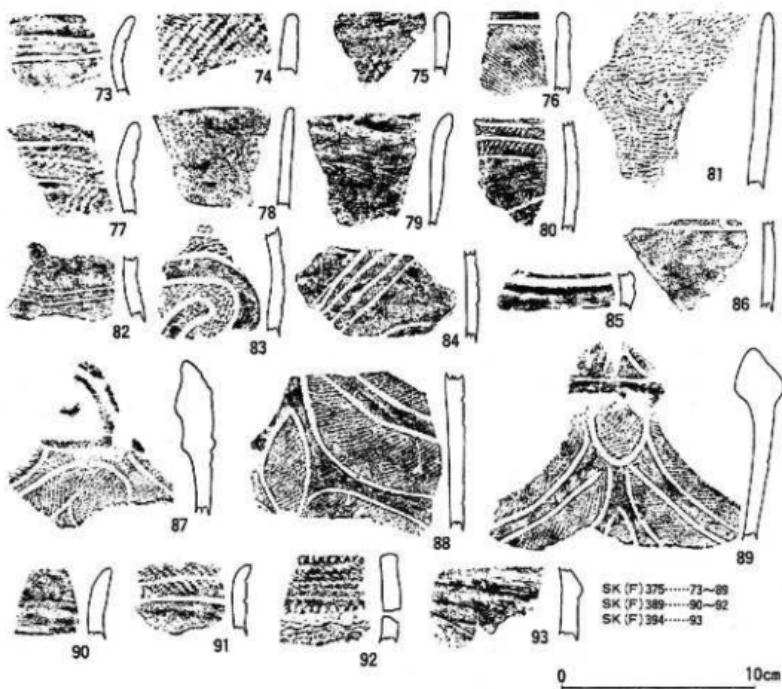
第38図 D₃区 フラスコ状土管出土遺物(3)



SK (F) 321……32~60
 SK (F) 322……51~58
 SK (F) 356……59~72

0 10cm

第39図 D₃区 フラスコ状土壙出土遺物(4)



第40図 D₃区 フラスコ状土壙出土遺物(5)

第312号土壙 (第44図、50図9~12、54図1)

D₃区南東端のZU-85グリッド・IV層で確認した。ピット67と重複、本遺構が古い。平面形は118×110cmの楕円形、長軸方向はN-15°-W、深さは37cmである。堆積土は2ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。

土壙内より縄文土器破片22点、石鐵1点の出土があった。

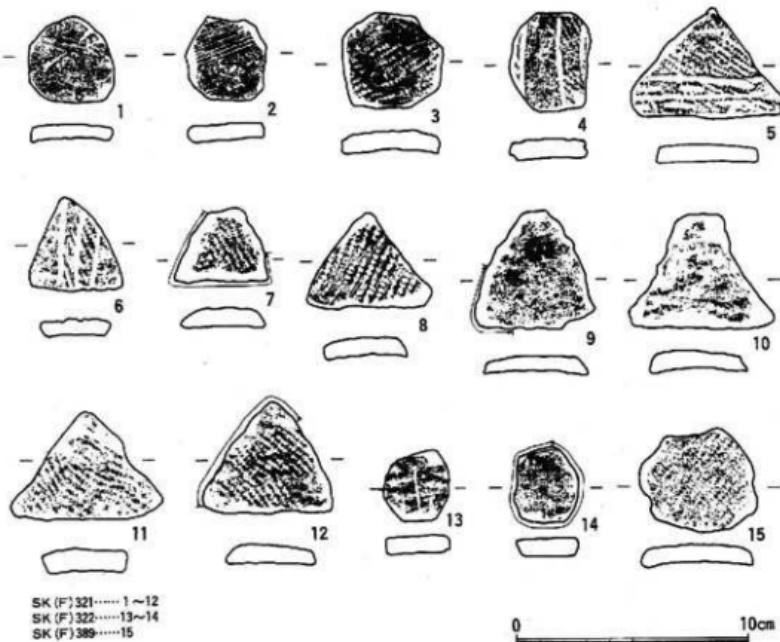
第313号土壙 (第44図、50図13~22)

D₃区南東部のZW-88~89グリッド・IIId層中位で確認した。ピット48と重複、本遺構が古い。平面形は160×114cmの楕円形、長軸方向はN-80°-E、深さは51cmである。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。

土壙内より縄文土器破片88点の出土があった。

第314A号土壙 (第44図、48図1、50図23~33)

D₃区南東部のZX~ZW-89グリッドに位置する。本遺構は第4次調査でその一部を確認、



第41図 D₃区 フラスコ状土壙出土遺物(6)

第236号土壙として報告している。第314B号土壙と重複、本造構が新しい。平面形は182×146cm、長軸方向はN-23°-W、深さは29cmである。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。

土壙内より、縄文時代後期の小型鉢1個体他、縄文土器破片81点の出土があった。

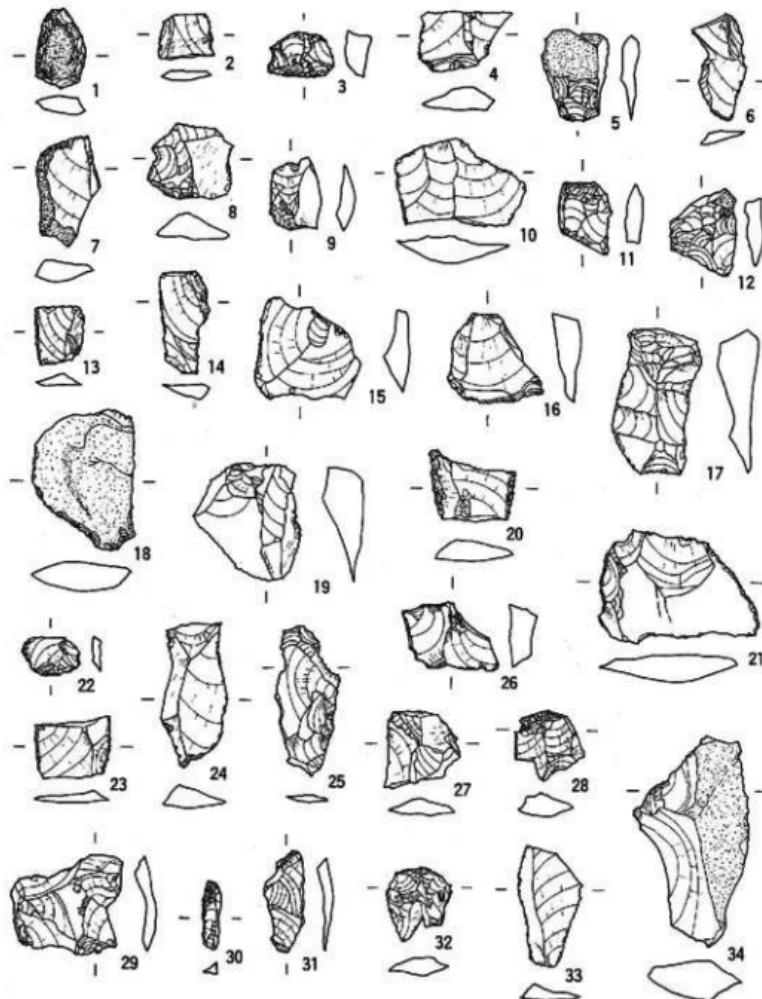
第314B号土壙（第44図）

D₃区南東部のZW-89グリッドに位置する。本造構も第4次調査でその一部を確認、第239号土壙として報告している。第314A号土壙と重複、本造構が古い。平面形は180×172cmの橢円形で、長軸方向はN-82°-E、深さは58cmである。

第315号土壙（第44図、50図34~35、54図2）

D₃区南東端のZU-85グリッド・IV層で確認した。第307号建物跡と重複、本造構が古い。平面形は92×82cmの不正円形、深さは37cmを測る。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

土壙内より縄文土器破片2点、攝器1点の出土があった。



SK (F) 306.....1~6

SK (F) 311 A....7~9

SK (F) 318.....10

SK (F) 319.....11

SK (F) 321.....12~19

SK (F) 322.....20~21

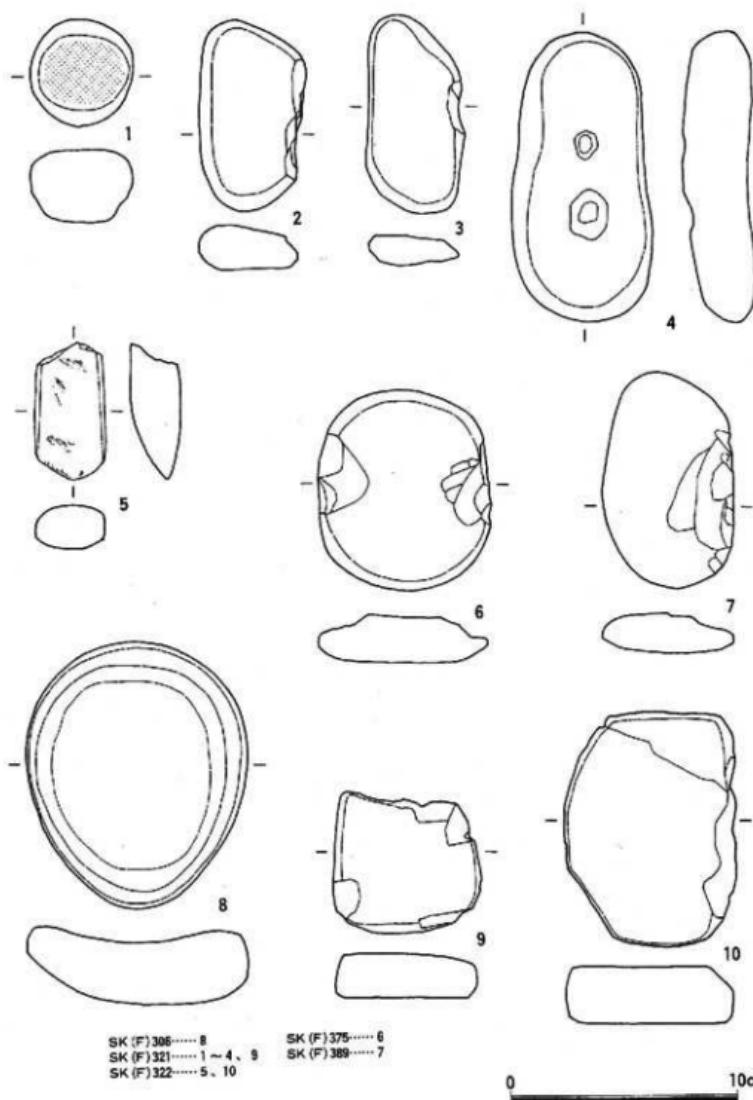
SK (F) 356.....22~24

SK (F) 375.....25~29, 34

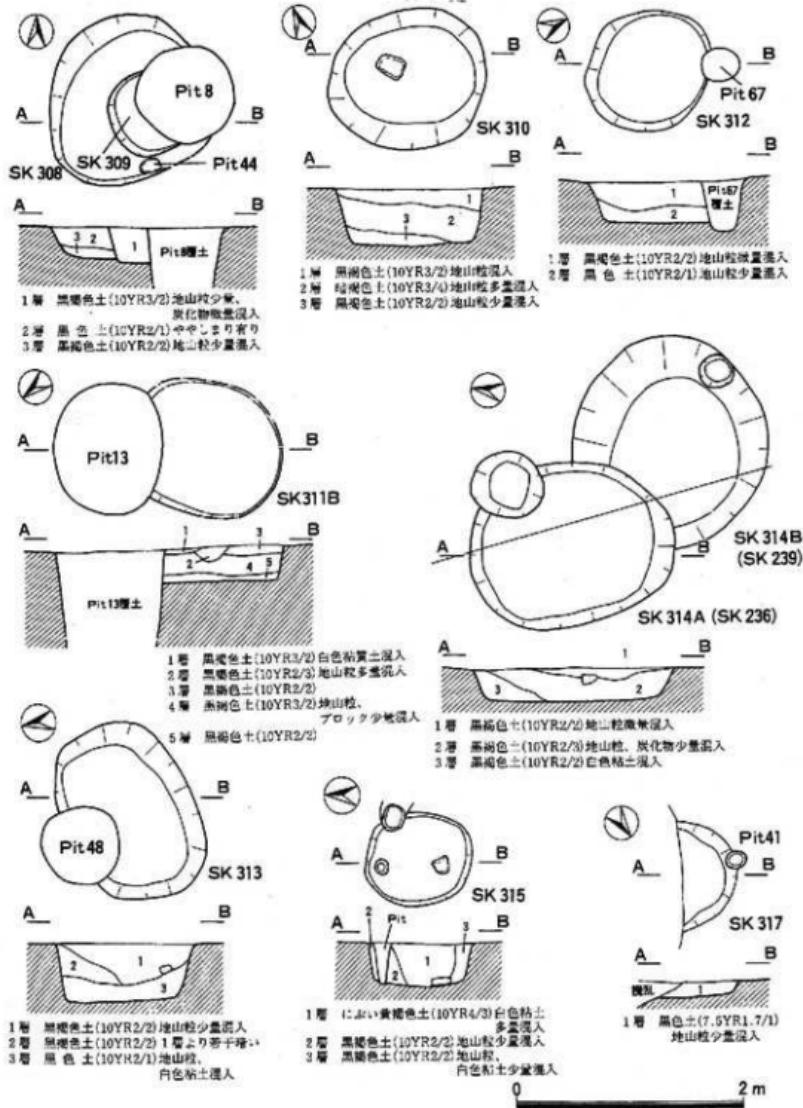
SK (F) 376.....30~33



第42図 D₃区 フラスコ状土壙出土遺物(7)



第43図 D₃区 フラスコ状土壙出土遺物(8)



第44図 第308~317号土壤実測図

第317号土壌（第44図、50図36～38、54図3）

D₃区南東端のZU-85～86グリッド・IV層で確認した。ピット9、41と重複、本遺構がいずれよりも古い。擾乱により、南東側を消失している。短軸は96cm、深さは14cmを測る。堆積土は黒色土の單一層で、人為堆積と考えられる。

土壌内より縄文土器破片9点、搔器1点の出土があった。

第320号土壌（第45図、51図63～66、54図4、56図2、6）

D₃区南東端のZV-85グリッド・IV層で確認した。平面形は93×86cmの円形、深さは42cmである。壁は若干袋状に外湾している。堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文土器破片16点、搔器1点、磨石2点の出土があった。

第323号土壌（第45図、51図67～75、54図5～9）

D₃区南東部のZX～ZW-88グリッド・IIId層中位で確認した。第351号土壌と重複、本遺構が新しい。平面形は158×124cm、長軸方向はN-60°-W、深さは38cmである。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文土器破片112点、搔器5点の出土があった。

第325号土壌（第45図、51図76～81）

D₃区南西端のZU-85グリッド・IV層で確認した。第316、319号フラスコ状土壌、ピット2、28と重複、本遺構は316、319号フラスコ状土壌より新しく、ピット2、28より古い。平面形は131×104cmの隅丸長方形で、長軸方向はN-63°-W、深さは64cmである。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文土器破片19点の出土があった。

第328号土壌（第45図）

D₃区南東部のZX-89グリッド・IIId層中位で確認した。平面形は147×128cmの楕円形で、長軸方向はN-25°-W、深さは46cmである。堆積土は3層に区分され、自然堆積と考えられる。

土壌内より縄文土器破片8点の出土があった。

第329号土壌（第45図、53図171～175、54図10）

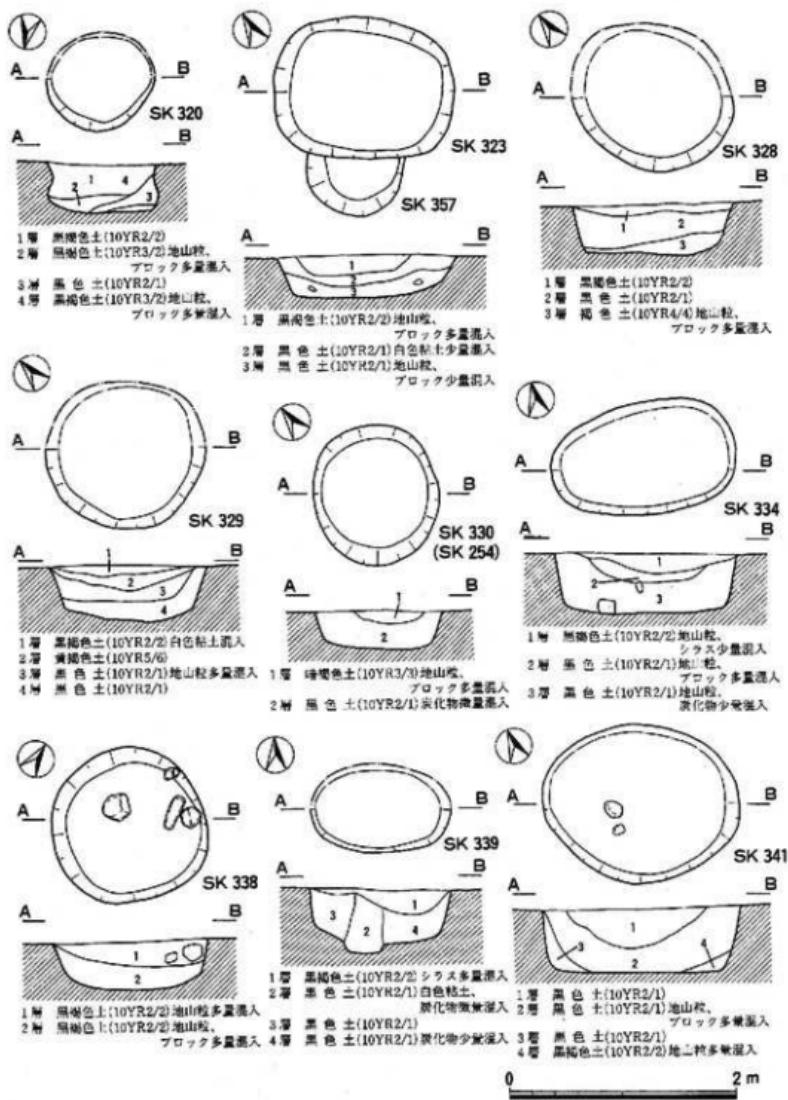
D₃区南東部のZX-89～90グリッド・IIId層中位で確認した。平面形は142×132cmの円形、深さは49cmである。堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文土器破片42点、搔器1点の出土があった。

第303号土壌（第45図、50図39～44、54図11～13、58図2、8）

D₃区南東部のZY-90～91グリッド・IIId層中位で確認した。平面形は125×108cmの円形、深さは35cmである。堆積土は2ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文土器破片23点、搔器3点、土器片利用土製品、有孔輕石製石製品各1点の出



第45図 第320~341号土壤実測図

土があった。

第334号土壙 (第45図、50図45~54、54図14~16、56図3~5)

D₃区南東部のZY-90グリッド・Ⅲd層中位で確認した。平面形は165×100cmの楕円形で、長軸方向はN-90°-E、深さは52cmである。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。土壙内より縄文土器破片91点、搔器、凹石（敲石）、敲石、石皿各1点の出土があった。

第338号土壙 (第45図、50図55~60)

D₃区中央部南東寄りのZZ-ZY-89グリッド・Ⅲd層中位で確認した。第339号土壙と重複、本遺構が新しい。平面形は135×135cmの円形、深さは43cmである。堆積土は2ブロックに区分され、人為堆積である。

土壙内より縄文土器破片168点の出土があった。

第339号土壙 (第45図、51図61~62、54図17)

D₃区中央部南東寄りのZZ-ZY-89グリッド・Ⅲd層中位で確認した。第338号土壙と重複、本遺構が古い。平面形は124×80cmの楕円形で、長軸方向はN-90°-E、深さは46cmである。堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

土壙内より縄文土器破片26点、搔器2点の出土があった。

第341号土壙 (第45図、51図82~89、54図18、55図19~20)

D₃区南東部のZY-89グリッド・Ⅲd層中位で確認した。平面形は173×142cmの楕円形で、長軸方向はN-69°-W、深さは45cmである。堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。

土壙内より縄文土器破片165点、石匙1点、搔器2点の出土があった。

第344号土壙 (第46図、51図90~92、55図21~22、56図7~8)

D₃区南東部のZY-89グリッド・Ⅲd層中位で確認した。平面形は107×102cmの円形、深さは58cmである。堆積土は黒色土の單一層で、人為堆積と考えられる。

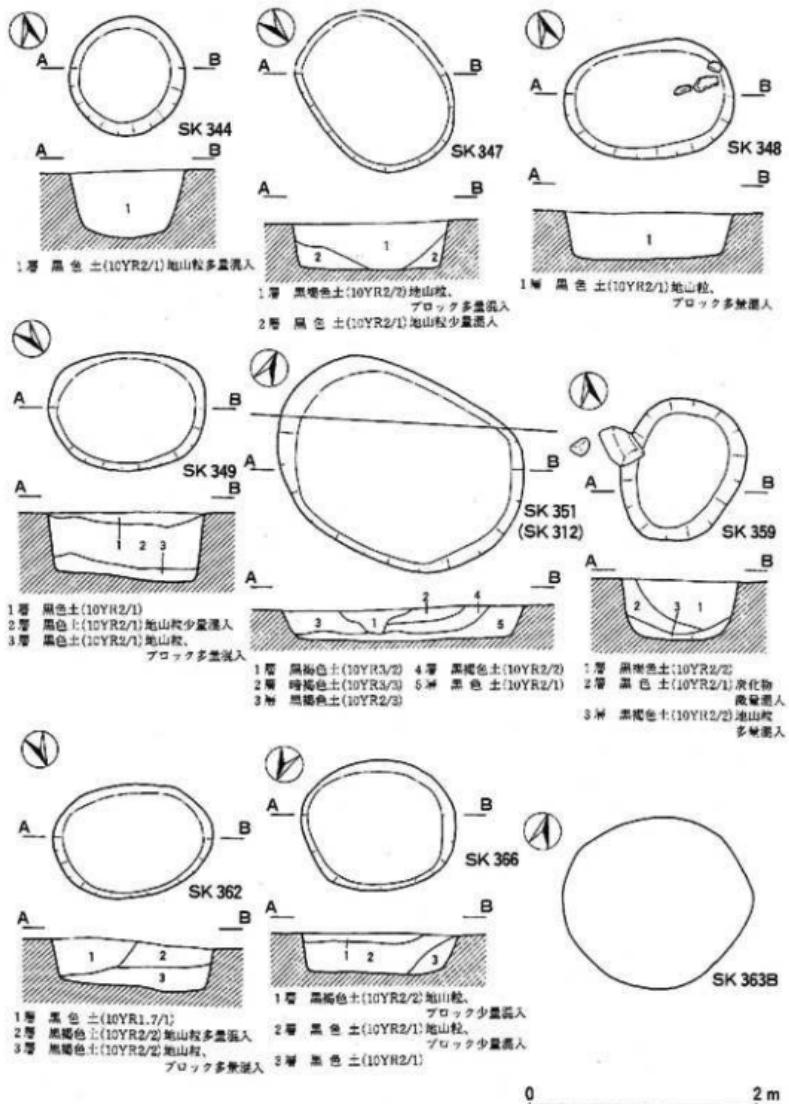
土壙内より縄文土器破片42点、搔器2点、剥片、敲石、磨石（敲石）各1点の出土があった。

第347号土壙 (第46図、51図93~102、56図9)

D₃区南東部のZY-88~89グリッド・Ⅲd層中位で確認した。平面形は151×119cmの楕円形で、主軸方向はN-S、深さは42cmである。堆積土は2ブロックに区分され、人為堆積である。土壙内より縄文土器破片68点、磨石1点の出土があった。

第348号土壙 (第46図、52図103~116、55図23、57図1~3、6、58図3~4、7)

D₃区南東部のZZ-ZY-89グリッド・Ⅲd層中位で確認した。平面形は148×104cmの楕円形で、主軸方向はN-70°-W、深さは42cmである。堆積土は黒色土の單一層で、人為堆積と考えられる。



第46図 第344～366号土壤実測図

土壤内より縄文土器破片146点、凹石、土器片利用土製品各2点、搔器、敲石、磨石(凹石)、磨石、石皿軽石製石製品各1点の出土があった。

第349号土壙 (第46図、52図117~120)

D₃区南東部のZY-86グリッド・Ⅲd層中位で確認した。平面形は139×106cmの楕円形で、長軸方向はN-50°-W、深さは63cmである。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。

土壤内より縄文土器破片10点の出土があった。

第351号土壙 (第46図)

D₃区南東部のZY-85~86グリッドに位置する。本遺構は第5次調査でその一部を確認、第312号土壙として報告している。平面形は227×167cmの楕円形で、長軸方向はN-82°-W、深さは27cmである。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。

第357号土壙 (第46図、52図121~126、55図24~25)

D₃区南東部のZX-88グリッド・Ⅲd層中位で確認した。第323号土壙と重複、本遺構が古い。北東側は323号土壙構築により、消失している。短軸は87cm、深さは27cmである。

土壤内より縄文土器破片36点、搔器3点、剝片1点の出土があった。

第359号土壙 (第46図、48図2、49図、52図127~135、55図26~31、57図4、48図5、92図56)

D₃区中央部のYC-90グリッド・Ⅲd層中位で確認した。平面形は129×105cmの楕円形で、長軸方向はN-25°-E、深さは53cmである。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。

土壤内より、縄文時代後期の深鉢、鉢各1個体他、縄文土器破片119点、搔器4点、石鐵、剝片、石核、磨石(凹石)、土器片利用土製品、有孔石製品各1点の出土があった。

第362号土壙 (第46図、52図136~139、55図32~33)

D₃区北東部のYB-91グリッド・Ⅲd層中位で確認した。平面形は146×100cmの楕円形で、長軸方向はN-79°-W、深さは40cmである。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

土壤内より縄文土器破片26点、石鐵2点の出土があった。

第363B号土壙 (第46図)

D₃区中央部南西寄りのYC-86グリッド・Ⅲd層上位で確認した。第376号Tピットと重複、本遺構が新しい。平面形は167×150cmの円形である。プラン確認のみで掘り下げていないため、深さ等、詳細不明。

第366号土壙 (第46図、52図140~145、55図34~37)

D₃区中央部北東寄りのYB~YA-90グリッド・Ⅲd層中位で確認した。平面形は135×116cmの楕円形で、長軸方向はN-57°-E、深さは36cmである。堆積土は3ブロックに区分され、

人為堆積と考えられる。

土壌内より縄文土器破片214点、搔器4点の出土があった。

第368号土壌（第47図）

D₃区中央部のYA-89グリッド・Ⅲd層中位で確認した。平面形は194×130cmの橢円形で、長軸方向はN-80°-Eである。プラン確認のみで掘り下げていないため、深さ等、詳細は不明。

第369号土壌（第47図、48図3、52図146～148、55図38、58図6）

D₃区中央部のYA-89グリッド・Ⅲd層中位で確認した。平面形は97×89cmの円形、深さは48cmである。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。

土壌内より、縄文時代後期の深鉢1個他、縄文土器破片11点、土器片利用土製品1点の出土土があった。

第370号土壌（第47図、52図149～154）

D₃区中央部のYA-89グリッド・Ⅲd層中位で確認した平面形は75×73cmの円形、深さは35cmである。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文土器破片50点の出土があった。

第371号土壌（第47図、53図155～160、55図39、57図5）

D₃区中央部のYA-89グリッド・Ⅲd層中位で確認した。平面形は80×60cmの橢円形で、長軸方向はN-15°-E、深さは25cmである。堆積土は2ブロックに区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文土器破片38点、搔器、磨製石斧各1点の出土があった。

第372号土壌（第47図、53図161～164）

D₃区中央部のYA-90グリッド・Ⅲd層中位で確認した。平面形は85×55cmで、長軸方向はN-47°-W、深さは28cmである。堆積土は2ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。

土壌内より縄文土器破片31点の出土があった。

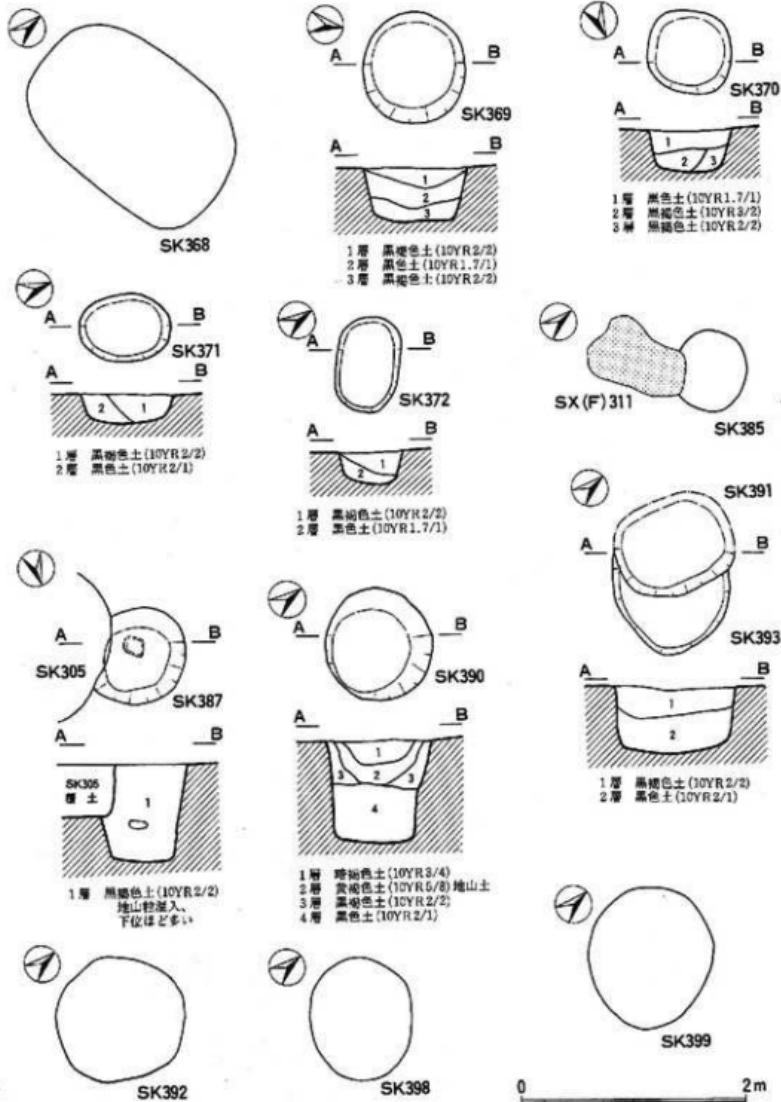
第385号土壌（第47図）

D₃区北西部のYH-89グリッド・Ⅲd層上位で確認した。第311号焼土遺構と重複、本遺構が古い。平面形は73×65cmの円形である。プラン確認のみで掘り下げていないため、深さ等、詳細は不明。

第387号土壌（第47図、58図9）

D₃区北西部のYI～YH-88～89グリッド・Ⅲd層上位で確認した。第305号土壌と重複、本遺構が古い。平面形は90×88cmの円形、深さは86cmである。堆積土は黒褐色土の単一層で、人為堆積と考えられる。

土壌内より軽石製石製品1点の出土があった。



第47図 第368~399号土壤実測図

第390号土壤 (第47図、53図165~167)

D₃区北西部のYH~91グリッド・III d層上位で確認した。平面形は100×95cmの円形、深さは92cmである。堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

土壤内より縄文土器破片15点の出土があった。

第391号土壤 (第47図、53図168~170)

D₃区北西部のYH~YG~90~91グリッド・III d層上位で確認した。第393A号土壤と重複、本遺構が新しい。平面形は104×86cmの橢円形で、長軸方向はN~15°~E、深さは57cmである。堆積土は2ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。

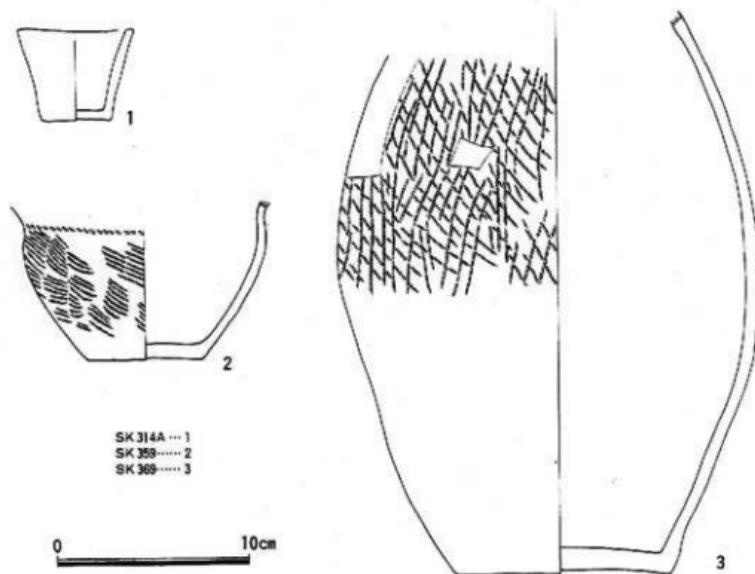
土壤内より縄文土器破片17点の出土があった。

第392号土壤 (第47図)

D₃区北西端のYK~YJ~91~92グリッド・III d層上位で確認した。平面形は115×110cmの円形である。プラン確認のみで掘り下げていないため、深さ等、詳細は不明。

第393 A号土壤 (第47図)

D₃区北西部のYH~YG~90~91グリッド・III d層上位で確認した。第391号土壤と重複、本



第48図 D₃区土壤出土遺物(1)

遺構が古い。391号土壤構築により、北西部を消失している。短軸は102cm、深さは17cmである。

第393B号土壤（第47図）

D₃区北西部のYI-88~89グリッド・IIId層上位で確認した。第394号フラスコ状土壤と重複、本遺構が古い。平面形は150×117cmの楕円形で、長軸方向はN-20°-E、深さは59cmである。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。

第398号土壤（第47図）

D₃区北東部のYE-YD-91グリッド・IIId層上位で確認した。平面形は108×90cmの円形である。プラン確認のみで掘り下げていないため、深さ等、詳細は不明。

第399号土壤（第47図）

D₃区北東部のYE-91グリッド・IIId層上位で確認した。平面形は124×112cmの円形である。本遺構もプラン確認のみで掘り下げていないため、深さ等、詳細は不明。

（秋元信夫）

7. 遺構外出土遺物

（1） 土器（第69図～74図）

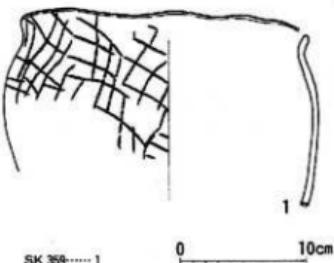
D₃区遺構外からは、56個体の復元、図化土器と段ボール箱89箱の土器破片が出土した。

これらの土器は、縄文時代前期、後期に位置づけられるもので、全体の8割以上は後期初頭から前葉のものが占めている。土器の平面分布をみると前期のものは調査区北西側（台地縁辺部）に、後期の復元・図化土器、土器破片は遺物廃棄域の一部と考えられる万座環状列石中央より西側48mの円外から第4次調査確認の第201号跡物跡南側において多くが出土している。一方、垂直分布（出土層序）を観察すると、後期中葉の土器は第IIIa～IIIc層、後期初頭～前葉のものはIIIb層下位～IIIc層上位、前期のものはIIIc層下位より出土している。

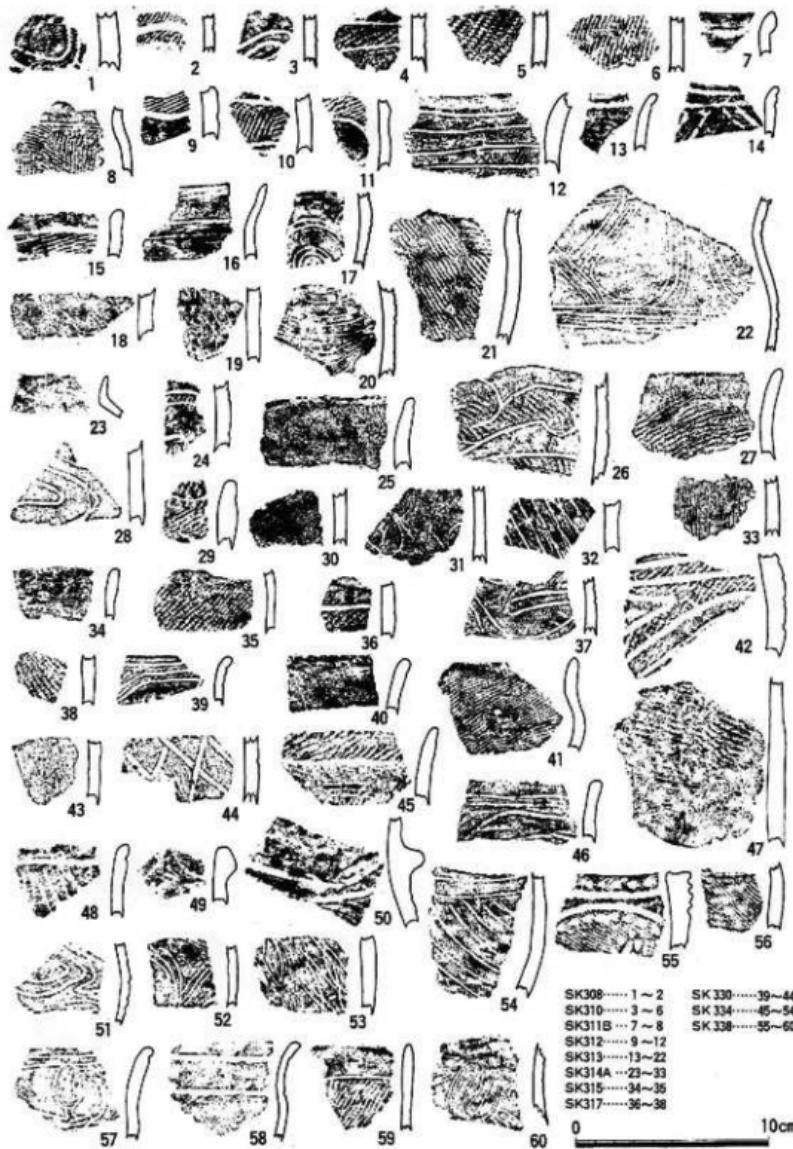
土器の分類については、時期ごとに群別し、文様、施文技法等により分類した。以下、その概要を述べる。

第I群 前期の土器（69図1～12）

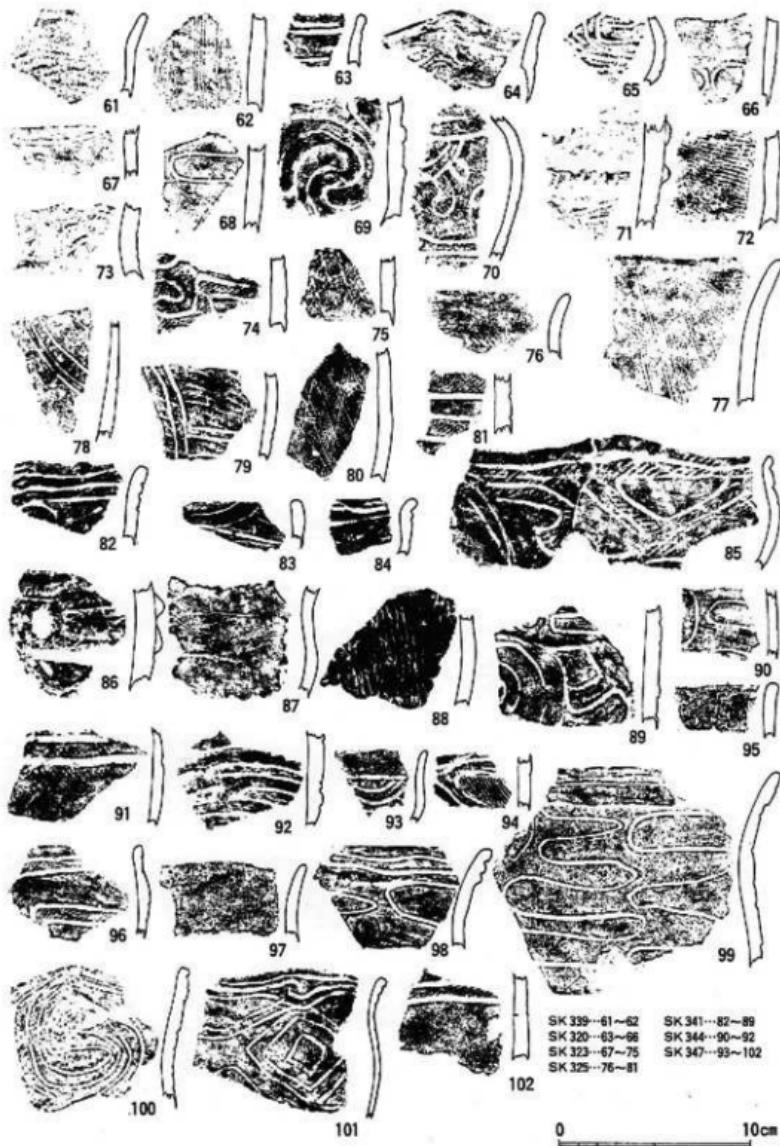
口唇部に撚糸、絡条体圧痕による平行文をもつものを一括した。口縁部文様帶の幅は2.5cm～5.5cmで、3～7段の撚糸あるいは絡条体圧痕文が施文される。口縁部に隆起帯をもつものもみられ、その帶上には竹管文、刺突文を有する。この竹管文、刺突文は口縁部と胴部文様帶の区画にも使用される。



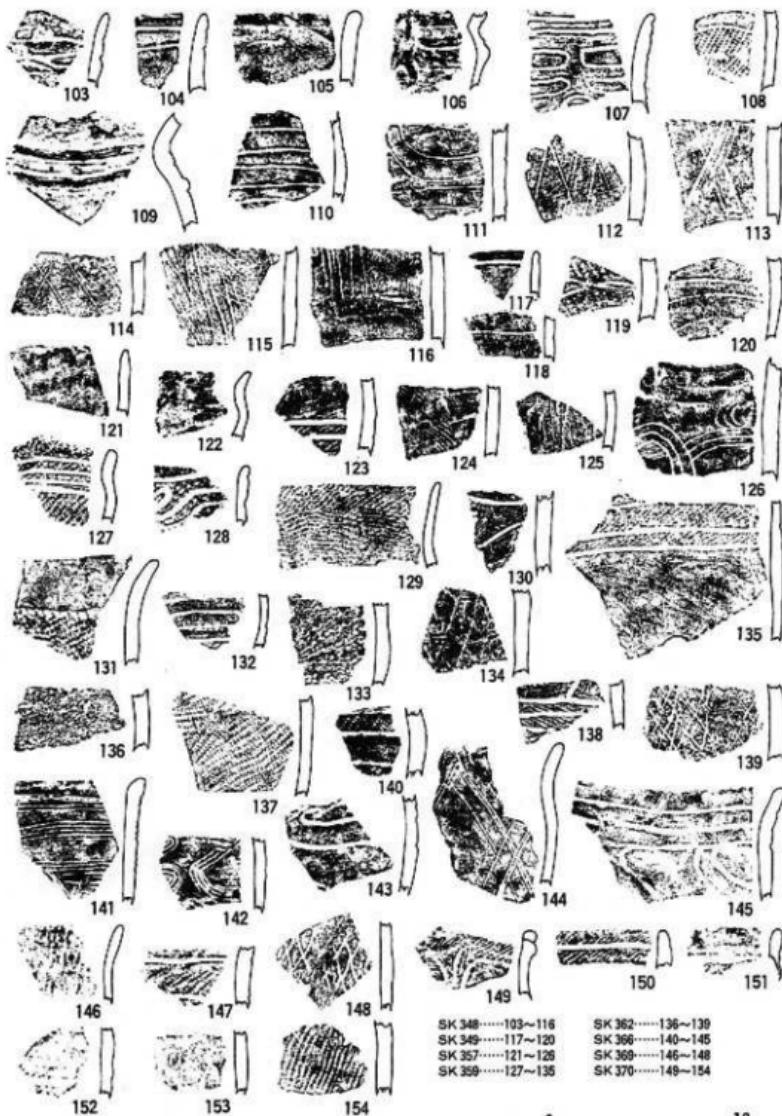
第49図 D₃区土壤出土遺物(2)



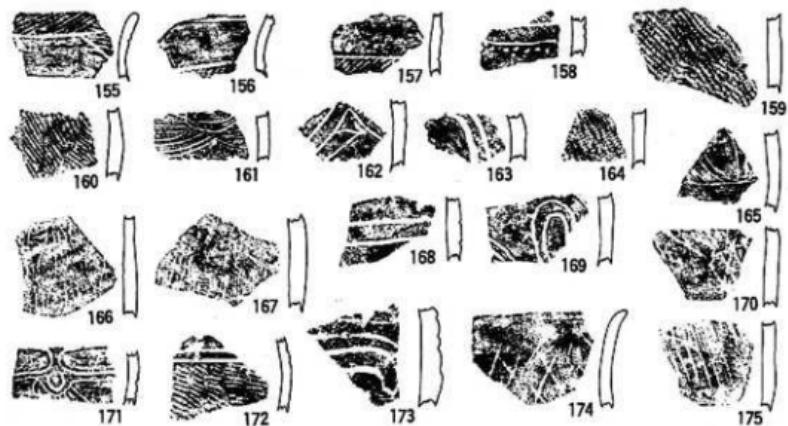
第50図 D₃区土壤出土遺物(3)



第51図 D₃区土壌出土遺物(4)



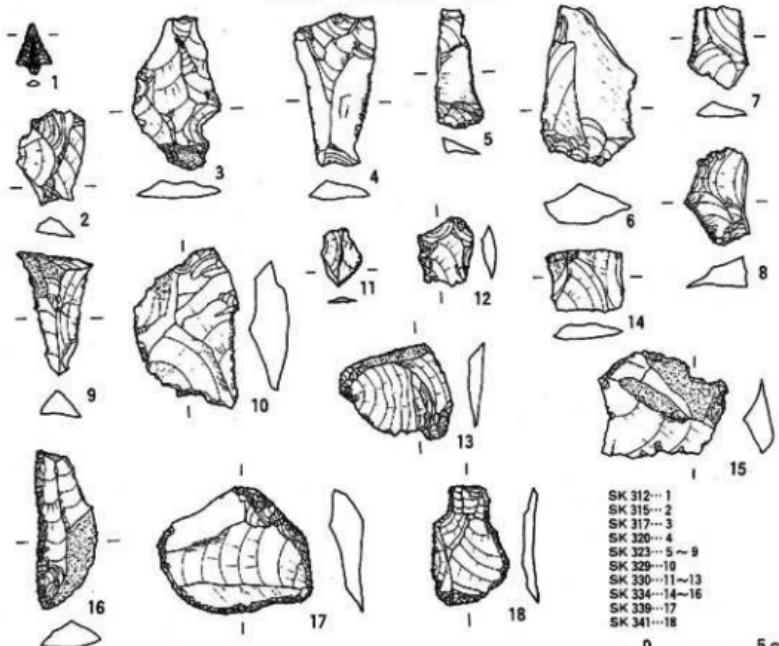
第52図 D₃区土壤出土遺物(5)



SK 371……155~160 SK 390……165~167
SK 372……161~164 SK 391……168~170
SK 329……171~175

0 10cm

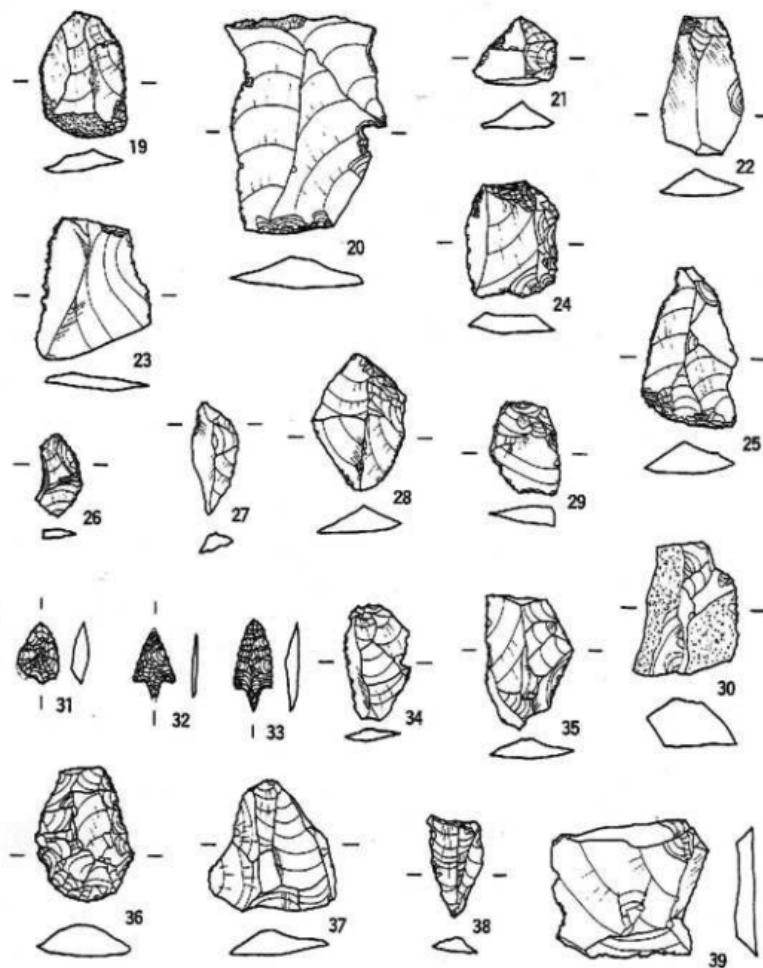
第53図 D₃区土壤出土遺物(6)



SK 312……1
SK 315……2
SK 317……3
SK 320……4
SK 323……5~9
SK 329……10
SK 330……11~13
SK 334……14~16
SK 339……17
SK 341……18

0 5cm

第54図 D₃区土壤出土遺物(7)



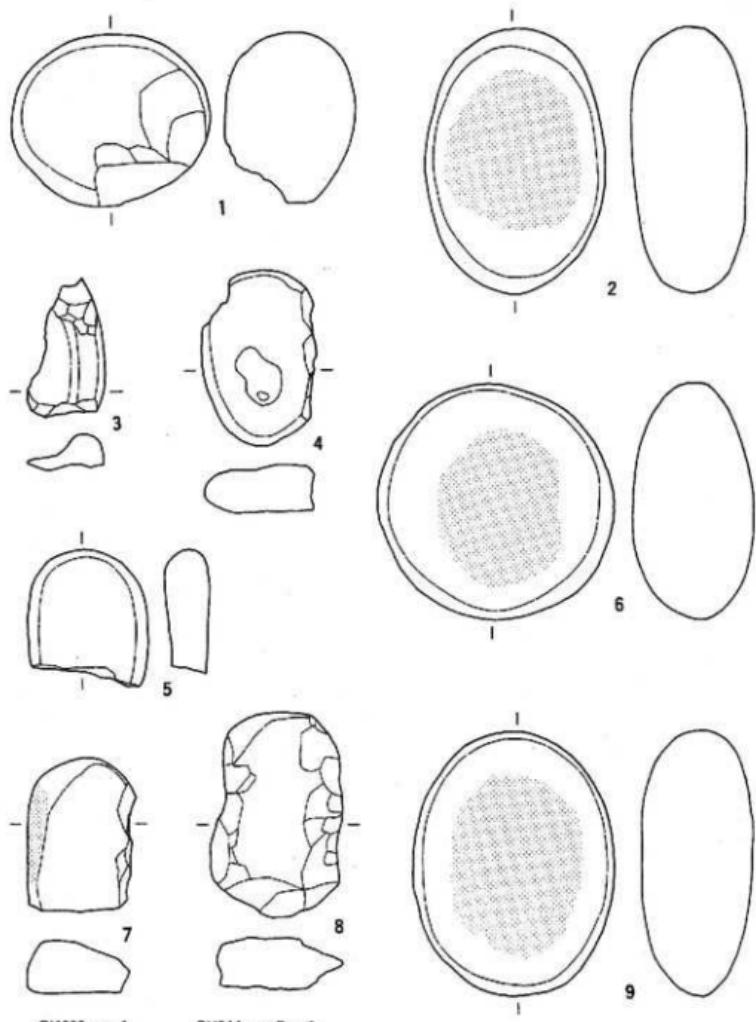
SK341.....19~20
SK344.....21~22
SK348.....23

SK357.....24~25
SK359.....26~31
SK362.....32~33

SK366.....34~37
SK369.....38
SK371.....39

0 5 cm

第55図 D₃区土壤出土遺物(8)

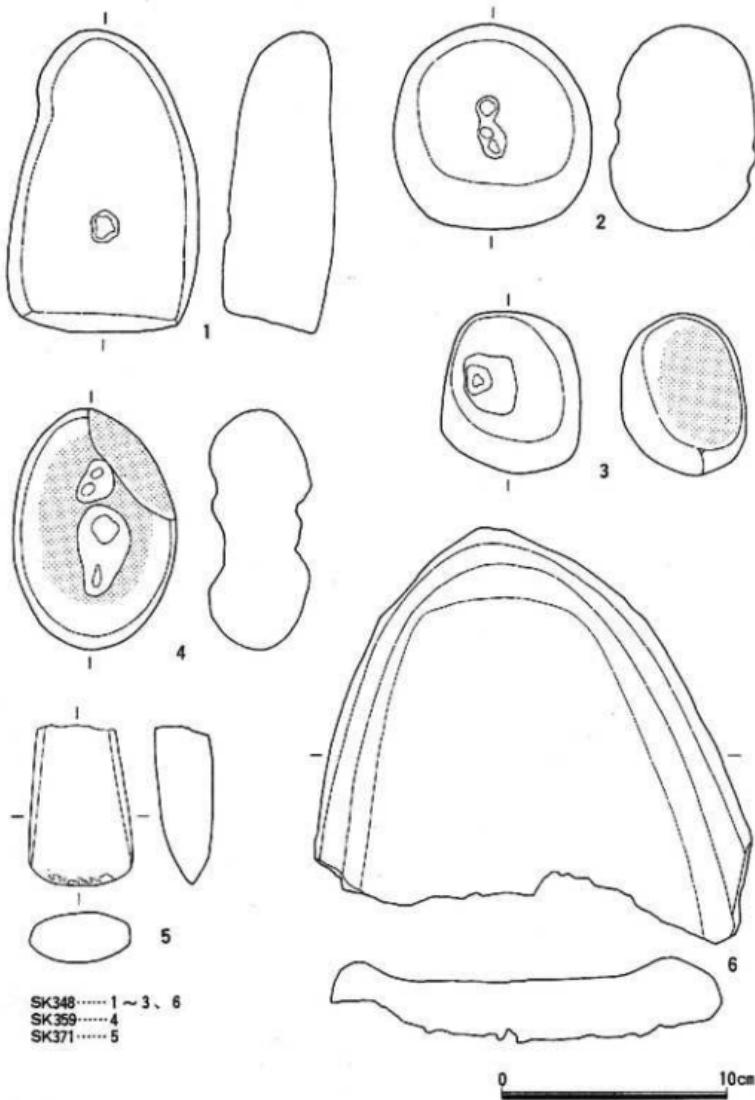


SK308.....1
SK320.....2、6
SK334.....3～5

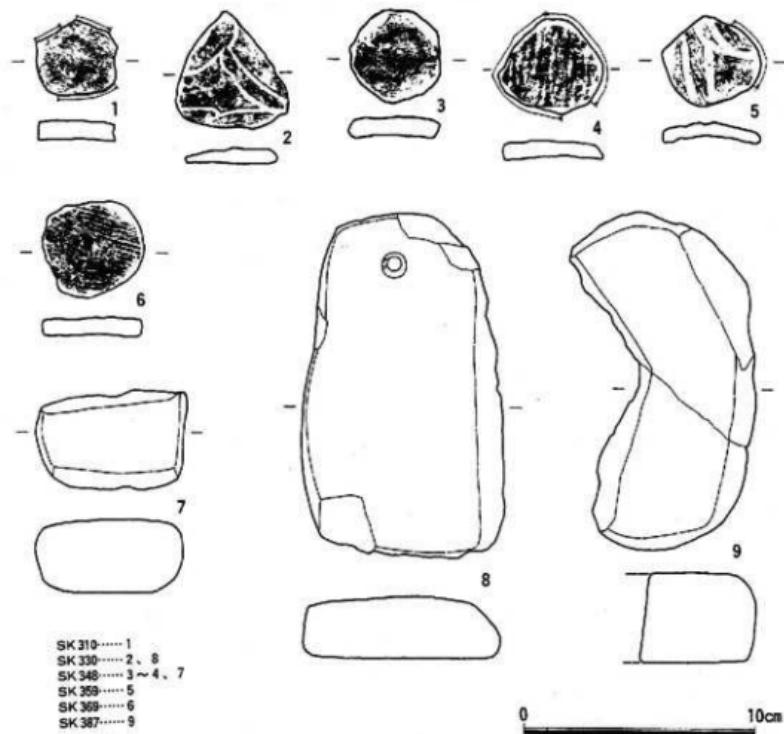
SK344.....7～8
SK347.....9

0 10cm

第56図 D3区土壤出土遺物(9)



第57図 D3区土壤出土遺物(10)



第58図 D₃区土墳出土遺物(II)

口縁部は平線、波状を呈する。波状口縁の頂部から懸垂文(10)が施文するものもある。また口唇部には撚糸文を施文するものが多く見受けられる。胴部には木目状撚糸文、羽状繩文、単節・複節斜繩文等が施文される。

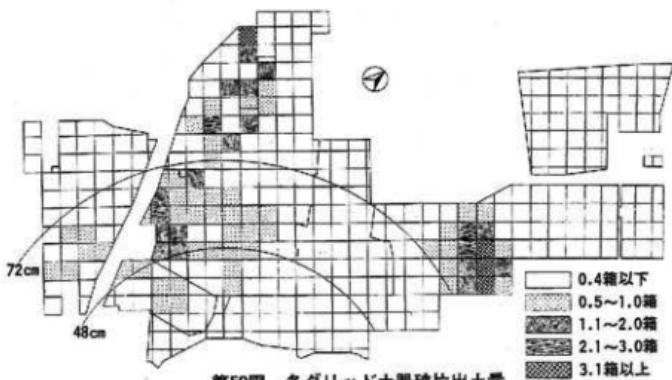
胎土に小量の纖維を含むが、焼成は良好なものが多く、色調はにぶい黄褐色、黒褐色、橙色を呈する。

本群土器は円筒下層d式に比定される。

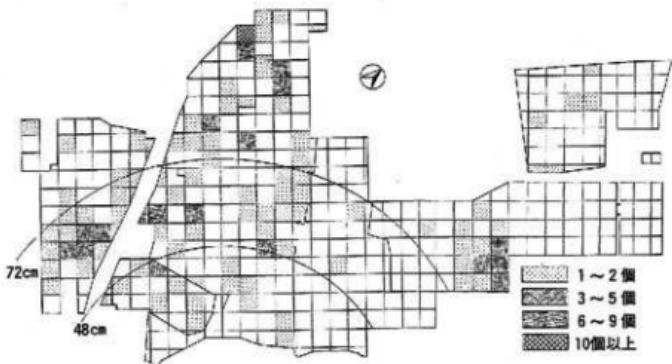
第Ⅱ群 後期初頭～前葉の土器 (第61図～63図、69図13～71図39)

1類 隆線文、隆沈文の土器 (第69図13～15)

隆線文、隆沈文により文様が描きだされるものを一括した。深鉢形土器が主体を占める。13



第59図 各グリッド土器破片出土量



第60図 各グリッドの完形・復元土器個体数

は花弁状文、14は山形口縁から垂下する隆線を連結するように口縁、胴部上半部に3条の隆線が施される。いずれの隆線上にも斜縄文が施文されている。15は隆沈文により方形文が施文されている。

焼成は良好なものが多く、色調は、にぼい黄橙色、褐灰色を呈する。

2類 地文上に沈線文が施文される土器（第70図27、28）

地文上に沈線を施文したものの一括した。深鉢が主体を占める。27は胴部上半に文様帶を有し、主文様として入組状曲線文(27)が施文されるもの、28は沈線に添って棒状工具による押圧文が連続して施文されている。地文としてLR縦文が多用される。焼成は比較的良好なもののが

多く、色調は浅黄橙色、暗赤褐色を呈する。

3類 沈線文の土器 (第61図1~6、69図16~70図26)

本類には無文研磨された器面上に1~数条の沈線により文様が描きだされるものを一括した。又、隆線文等により文様帯を区画するものも本類に入れた。

本類には深鉢、鉢、壺がある。これらの文様体は胴部下半にまで及ぶものが多い。文様体は1~数条の沈線により1~数段区画される。主文様となる「S」字文、弧線文、円文等が等間隔に施文されるもの(1、4~6)、曲線文や波状文等が施文されるもの(3)、直線文により格子目文方形文等が施文されるもの(24、26)がある。このほか1条の沈線を無方向に展開するもの(2)がある。また、主文様を弧線文で連結するものや花弁状文を付加するものもある。焼成は良好なものが多い。色調は灰褐色、橙色、によい黄褐色、によい橙色、浅黄橙色を呈する。5には赤色顔料が塗布されている。

4類 帯縄文の土器 (第61図7~63図19、71図29~39)

幅の狭い帶縄文の土器を一括した。本類には深鉢、鉢、壺、台付土器があるが前3者が主体を占める。これらの文様帯は深鉢、壺では胴部中程、台付土器では台部まで及ぶ。

深鉢は、主文様として階段状文(7、11、29、33)、入組状凸線文(32)、円形文(31)が施文される。これらの主文様の他に花弁状文や連結文を付加するものもみられる。沈線間に単節の斜縄文が充填される。38、39は斜縄文に替わって沈線内を角度で充填している。焼成は良好なものが多く、色調はによい黄褐色、によい橙色を呈する。

壺は比較的小型のものが多い。口縁部に橋状把手を持つもの(18)もみられる。胴部上半に文様帯を持つが、16、18のように下半まで延びるものもある。主文様として階段状文(13、14)、曲線文(16)、波状文(18)、入組状曲線文(34)、直線文(15)が施文され、沈線間に単節の斜縄文が充填される。焼成は良好なものが多いが、焼きがあまくボロボロと表面が剥がれ落ちるものもある。色調はによい黄褐色、によい橙色、暗赤褐色、灰黄褐色、灰黄色、橙色、明赤褐色、灰白色を呈する。

台付土器は17、19のようなタイプが存在する。19は浅く、外反し、一つの山形突起を有する且で大きな台が装着され、高坏と呼ばれるものに類似している。上部、下部の文様帯には帶縄文による曲線文が施文され、沈線間にR L縄文が充填されている。焼成は良好で、色調はによい黄褐色を呈する。土器外面と底部内面には赤色顔料が塗布されている。

本群土器1~2類は東北地方北部の前十腰内I式または養沢式、3~4類は十腰内I式に比定されるものである。

第Ⅲ群 後期中葉～後葉の土器（第64図、65図、71図40～74図74）

1類 幅の広い帯縄文の土器（第64図20～22、71図40～42、73図59、60）

幅の広い帯縄文が施文されたものを一括した。第2群4類上器とは帯縄文の幅で明瞭に区別できる。深鉢、壺が主体となる。主文様として人組状曲線文(22、40～42、59)、直線的、曲線的な帯縄文(20、21、60)が施文される。沈線間には単節の斜縄文が充填されるがLR縄文が多用される。深鉢に施文される縄文は前段階のような条の大きなものが多い。焼成は良好で、色調は浅黄橙色、にぶい黄橙色、褐色、暗赤褐色を呈する。

2類 磨消縄文により幾何学文等が施文されるもの（第65図26、27、71図43～72図45）

曲線的な沈線で描きだした幾何学的な磨消縄文が展開するものを一括した。深鉢、壺が主体となる。

深鉢は、胴部よりわずかに外反して口縁部が立ち上がるものの(27、44)、キャリバー状に口縁部が大きく内湾するものがみられる(43)。いずれも波状口縁部を呈し、小さな山形突起や装飾的な突起を持つ。文様帶は口縁部、胴部に区画され、幾何学的な文様が施文されている。沈線間には条の細かな斜縄文が充填されるがLR縄文が多用される。

壺は1点が復元された。平口縁を呈し、口縁部は胴部より直線的に外斜して立ち上がる。胴部に文様帶を持ち、一条の沈線により幾何学的文様が施文されている。

本類土器は、焼成が良好で、色調はにぶい赤褐色、赤褐色、にぶい橙色を呈する。

3類 磨消縄文に刺突文が伴うもの（第65図28、29、72図46～50）

本群2類に類似した磨消縄文が施文されるもので、沈線内側に沿って間隔を密にした刺突文が施文されたものを一括した。主文様として「S」字状文(28)、幾何学文等が施文されている。刺突は竹管、棒状工具によるもので円形、三日月形を呈する。

台付深鉢が主体となる。器形は「アサガオ」状を呈し、大きな波状口縁となり、頂部に立体的な装飾突起を持つ(20、21)。沈線間には条の細かなRL・LR縄文が充填される。焼成は良好なものが多く、色調はにぶい黄橙色、褐色、赤褐色を呈する。

67、68のように本群1～3類の文様を持ちながら沈線間に縄文の充填の施されないものもある。焼成は両者とも良好で、色調は前者が黒褐色、後者がにぶい黄褐色を呈する。

4類 平行沈線文が施文されるもの（第64図23～24、72図51～73図58）

文様帶に数条の沈線文を有するものを一括した。深鉢、鉢、壺がみられるが前2者が主体を占める。これらの平行沈線は5～8条施文され、「S」字状沈線文(24)、弧状沈線文(23)やこれらの組合せによる文様で沈線間を連結するものもある。

深鉢は、胴部より「アサガオ」状に大きく口縁部が外反し、大波状あるいは山形となるもの(53)、立体的な装飾突起をもつもの(54、56～58)がある。口唇部は肥大化し、内曲しているよ

うに見える。沈線間には条の細かな斜繩文が充填施文されるが、LR繩文が多用される。文様帶の上下を無文化するものがほとんどである。

鉢は平口縁で、内湾気味に立ち上がる。胴部上半に平行沈線による文様体を持ち、沈線間に条の細かな斜繩文が施文される。深鉢と同様に最下位の沈線下を無文化する。壺(52)は破片のみでその全容については把握しきれないが、同様の文様が施文される。

本類土器の焼成は良好で、色調は黒褐色、灰黄褐色、暗赤褐色を呈する。

5類 沈線文系の土器 (第64図25、73図61~63、64、65)

5類a 第4類と同様に平行沈線文を主文様とするものであるが、斜行沈線が数条組み合って交互に方向を変えて鋸歯状の文様を構成するもの(25、61)や沈線を境に矢羽状に文様が施文されるもの(63)、斜行沈線のみが施文されるもの(62)があり、若干趣を異にしている深鉢、鉢、壺がみられるが鉢が主体となる。鉢では文様帶下が無文化されている。焼成は良好なものが多く、色調は暗赤褐色、によい黄褐色、褐灰色を呈する。

5類b 64、65のように隆帯上、沈線間に刻み目を施文するものを一括した。焼成は良好で色調は黒褐色を呈する。

6類 その他の廢消繩文 (第73図69、70、74図73、74)

弧状沈線、連続弧状沈線によって文様が施文されるものを一括した。深鉢が主体を占める。文様帶は口縁部、胴部に区画される。69は連続弧状沈線文を横位に半単位ずらした文様、70は向かい合う弧状沈線、73は連続弧状沈線が縦位に展開し蛇行懸垂的な文様が施文される。沈線間には条の細かな斜繩文が充填されるが、LR繩文が多用される。焼成は良好で、色調は純い褐色、によい赤褐色、灰黄褐色を呈する。

本群土器1~5類は東北地方北部の十腰内II~III式、6類土器は十腰内II~III式の範囲で捉えることの出来るものである。4類土器は東北南部の宮戸II式・宝ヶ峰式、関東地方の加曾利B1式に、5類aは加曾利B2式の特徴を持っている。

第IV群 後期初頭~後葉の土器 (第66~68図、74図75~91)

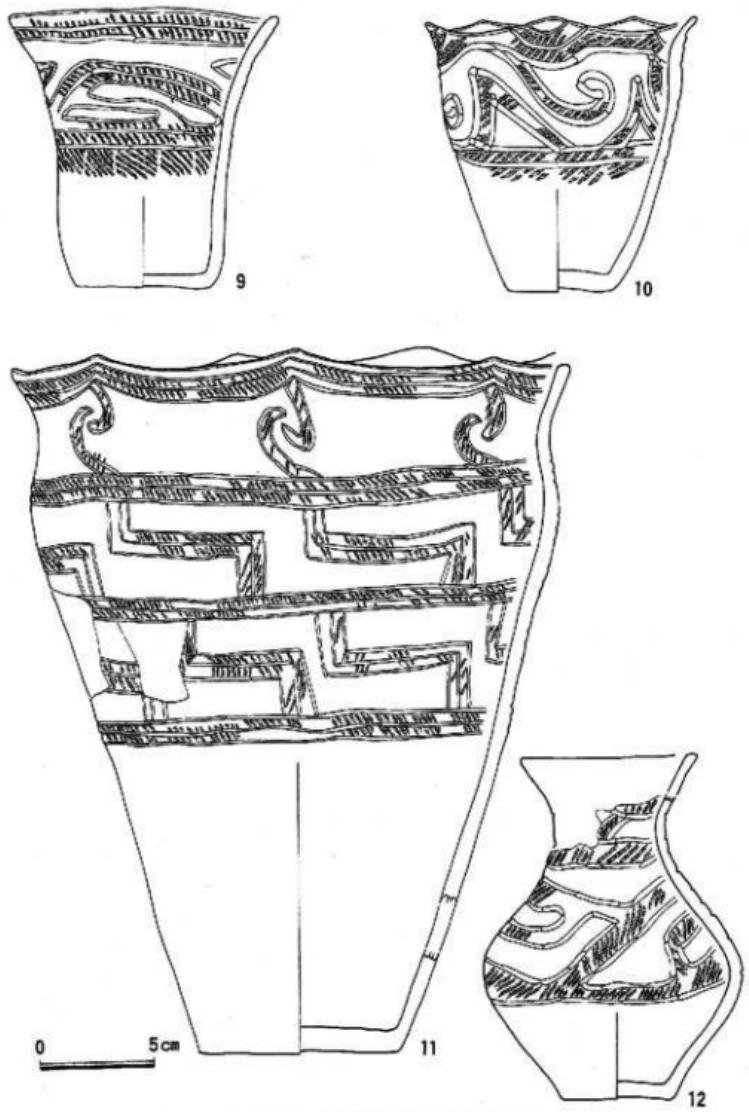
本群には無文、繩文、撚糸文、条痕文の土器及びミニチュア土器を一括した。時期別の細分は難しいが、器形等から明確に時期の判断できるものについては記した。数量的には非常に多く出土している。

1類 無文の土器 (第66図30~38、74図75、76)

深鉢、鉢、浅鉢、壺の他、ミニチュア土器がみられ、鉢、壺がその主体を占める。鉢は平口縁、または、ゆるやかな波状口縁を呈し、底部から内湾気味に立ち上がるるもの(36、37)、直線的に立ち上がるもの(33、34)とがみられる。なお、數例であるが、橋状把手を持つものもある。37は第3群3類の28と器形が類似している。焼成は良好で、色調は橙色、によい黄褐色を呈す



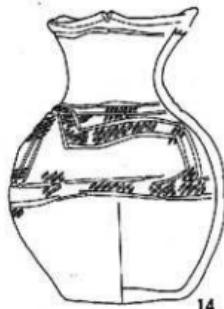
第61図 Da区遺構外出土土器実測図(1)



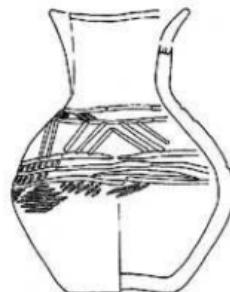
第62図 D3区遺構外出土土器実測図(2)



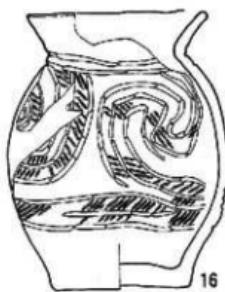
13



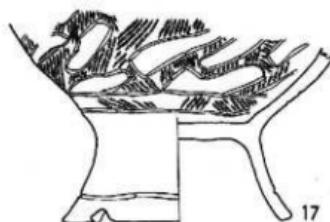
14



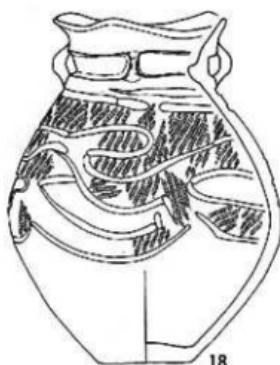
15



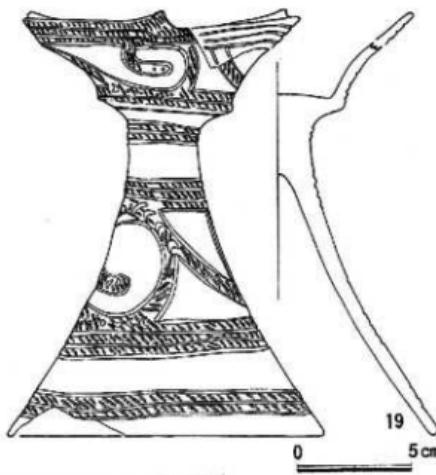
16



17

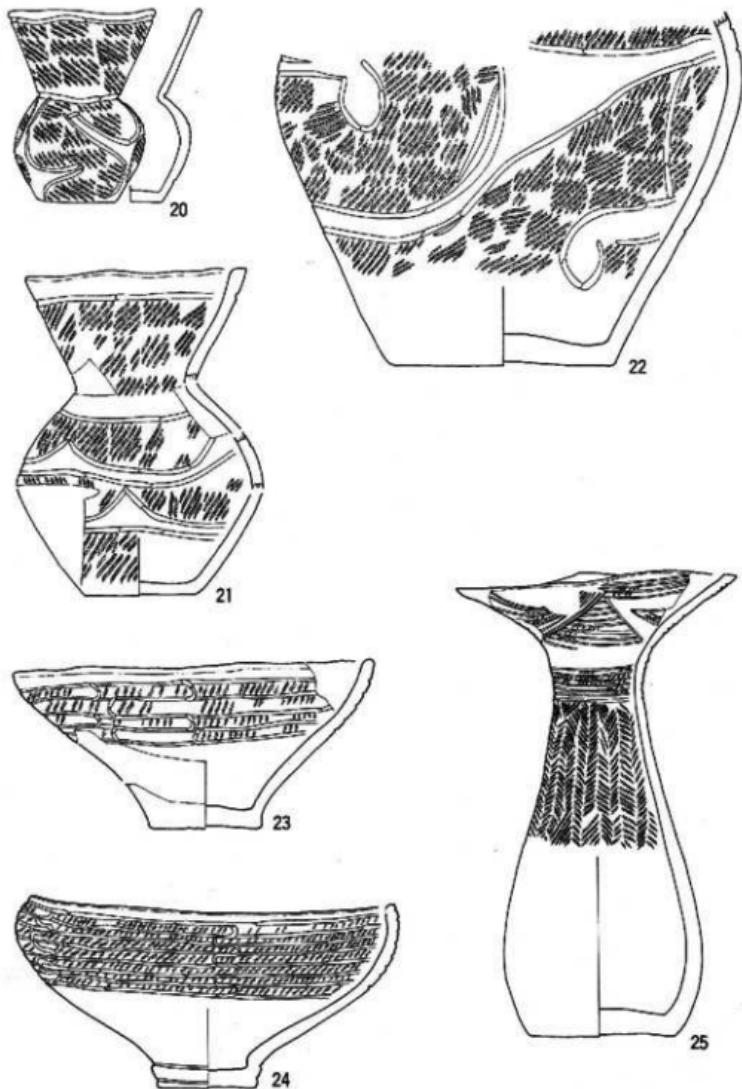


18



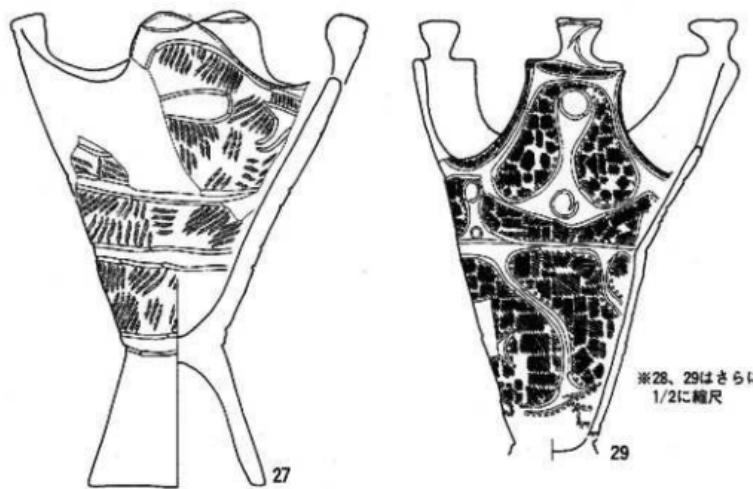
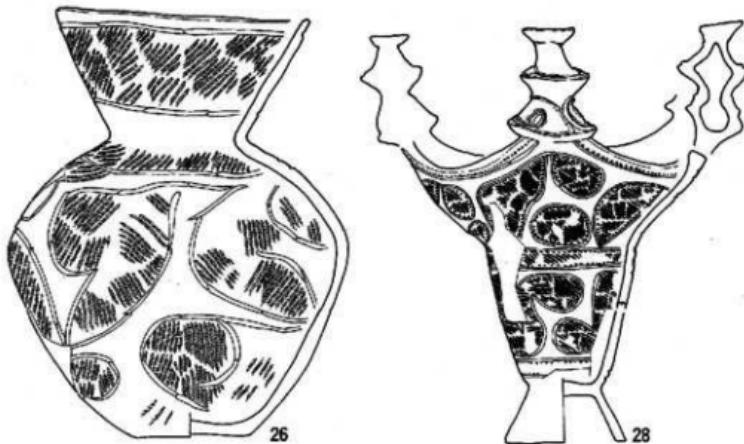
0 5 cm

第63図 D₉区遺構外出土土器実測図(3)



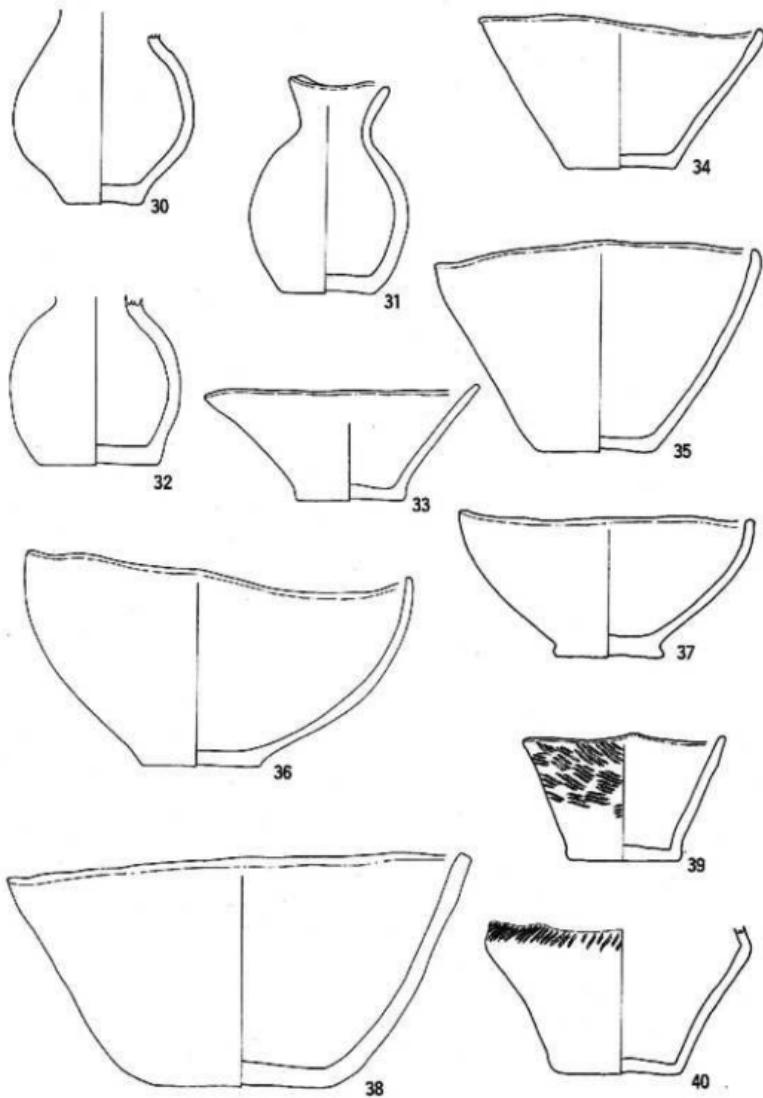
第64図 D₂区造構外出土土器実測図(4)

0 5cm



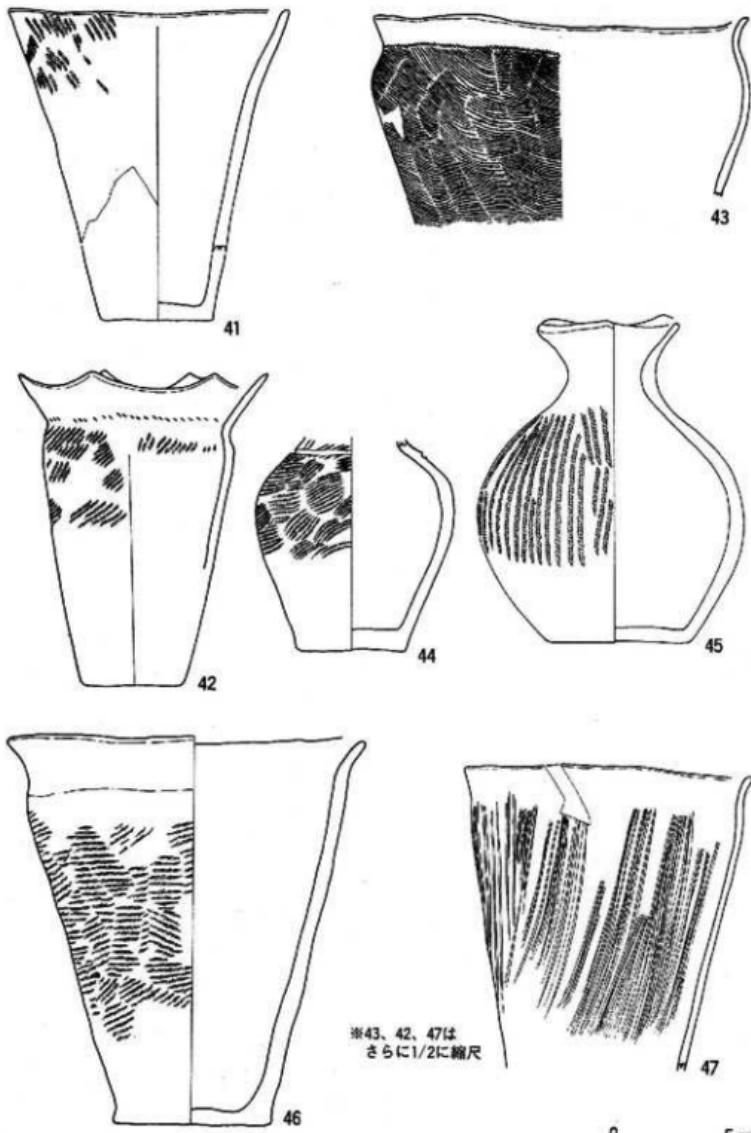
第65図 D₄区遺構外出土土器実測図(5)

0 5cm

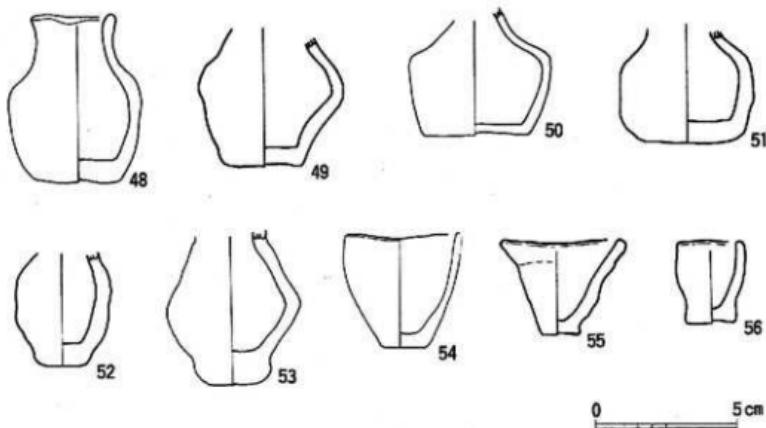


第66図 Dō区造構外出土土器実測図(6)

0 5 cm



第67図 D3区遺構外出土土器実測図(7)



第68図 D-8区遺構外出土土器実測図(8)

る。壺は平口縁を呈し、胴部より大きく外反して立ち上がる。第301号埋設土器のように大型のものもみられるが、小型のものが多い。焼成は良好で、色調は橙色、にぼい黄褐色を呈する。ミニチュア土器のほとんどが無文である。壺、深鉢が主体となる。焼成は良好で、色調は橙にぼい黄褐色を呈する。

2類 繩文の土器 (第66図39~40、67図41~44、46、74図77~85)

無節、単節繩文の施された土器を一括した。深鉢、鉢、壺が主体となる。

深鉢は、平口縁(46)、山形口縁(42)の他、波状を呈するものがある。口縁部上段から繩文を施文するものの(41)、口頸部に無節・単節の繩文圧痕や沈線を施し境界文とするもの(42、43)等がみられる。41は第3群土器に伴うものと考えられる。焼成は良で、色調は橙色、にぼい黄褐色、暗赤褐色を呈する。

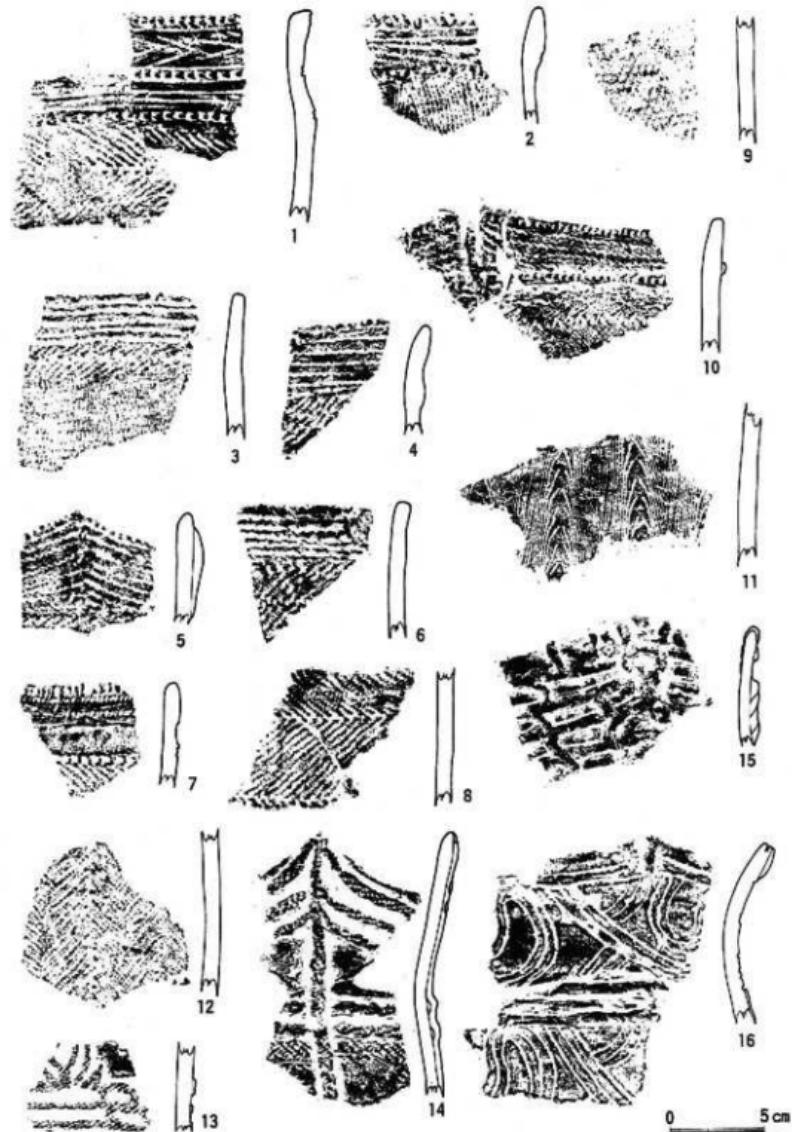
壺は2点が復元された(44)。胴部上半に最大径をもつ。頸部に1条の沈線を巡らしているR繩文が施文され、焼成は良、色調は橙色、にぼい黄褐色等を呈する。

鉢は1点が復元された(39)。波状口縁を呈し、L R繩文が施行される。焼成は良好、色調はにぼい黄褐色を呈する。

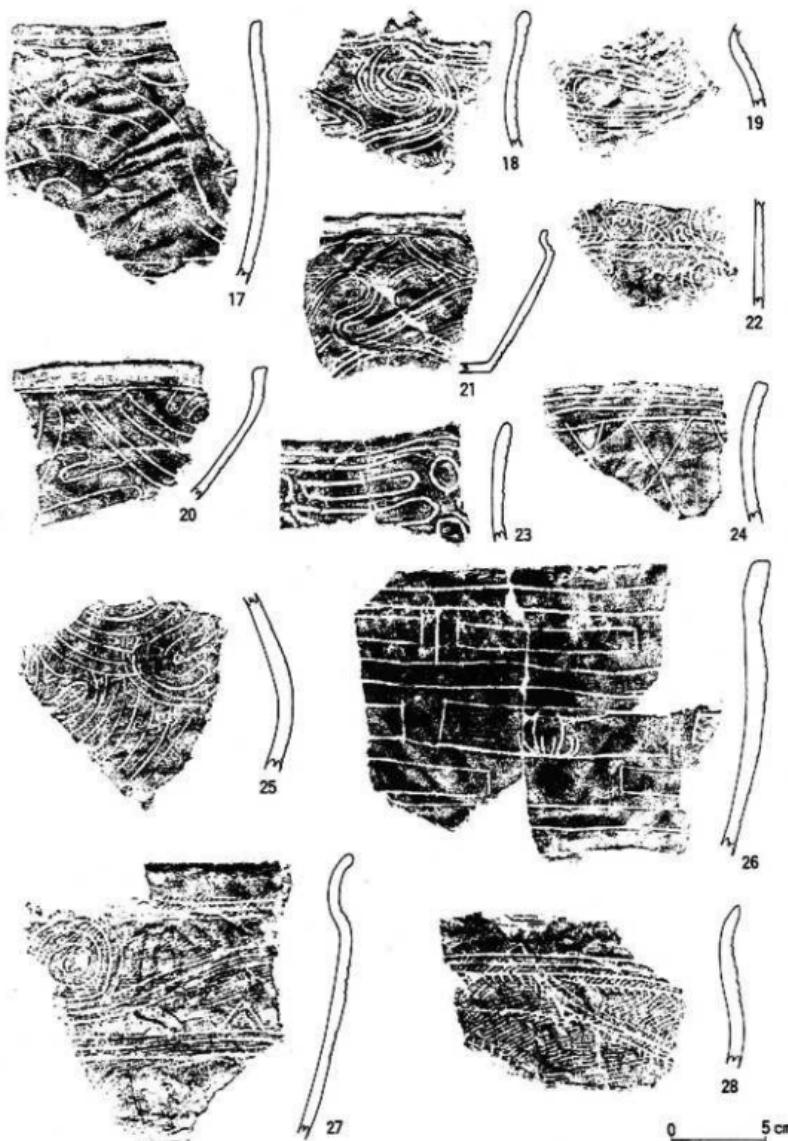
3類 摐糸文の土器 (第67図45、74図86~89)

本類には、撚糸文、網目状撚糸文、連鎖状撚糸文が施文されたものを一括した。深鉢、壺が主体となる。

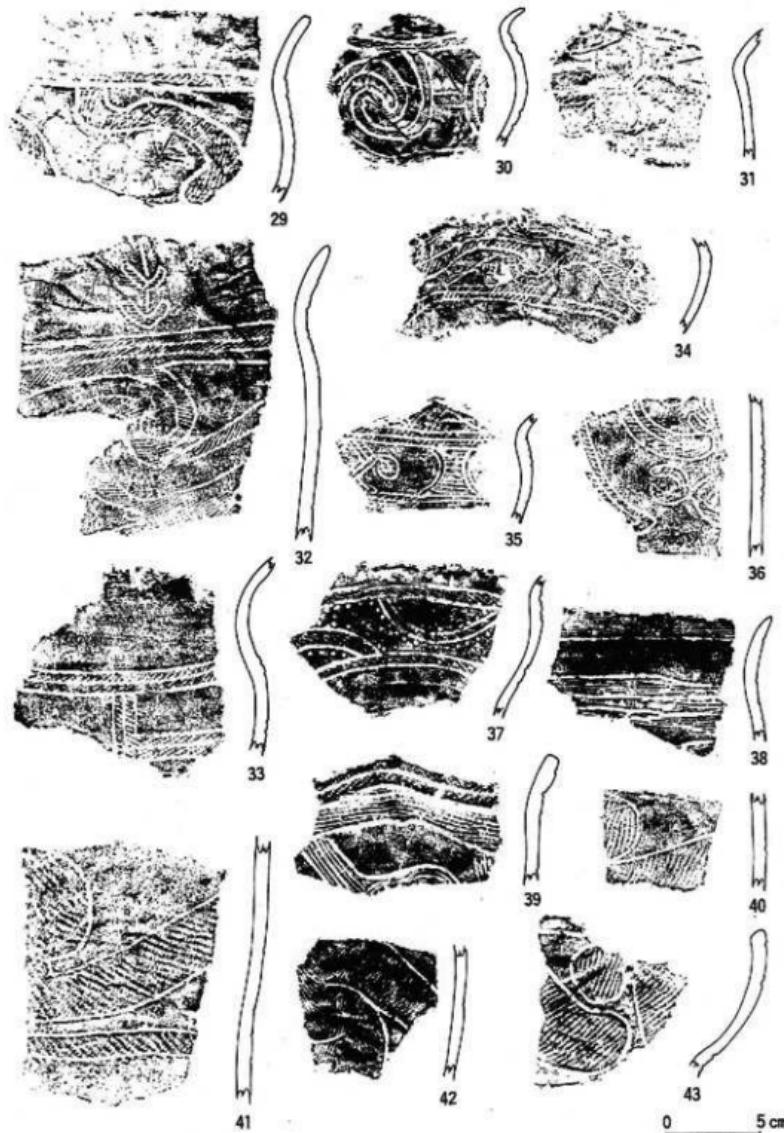
深鉢は、大型のものがその大半を占める。平口縁を呈し、胴部より緩やかに外反するものが多い。文様としては網目状撚糸文が多く用いられるが、小型のものについては単軸絡条帶の圓



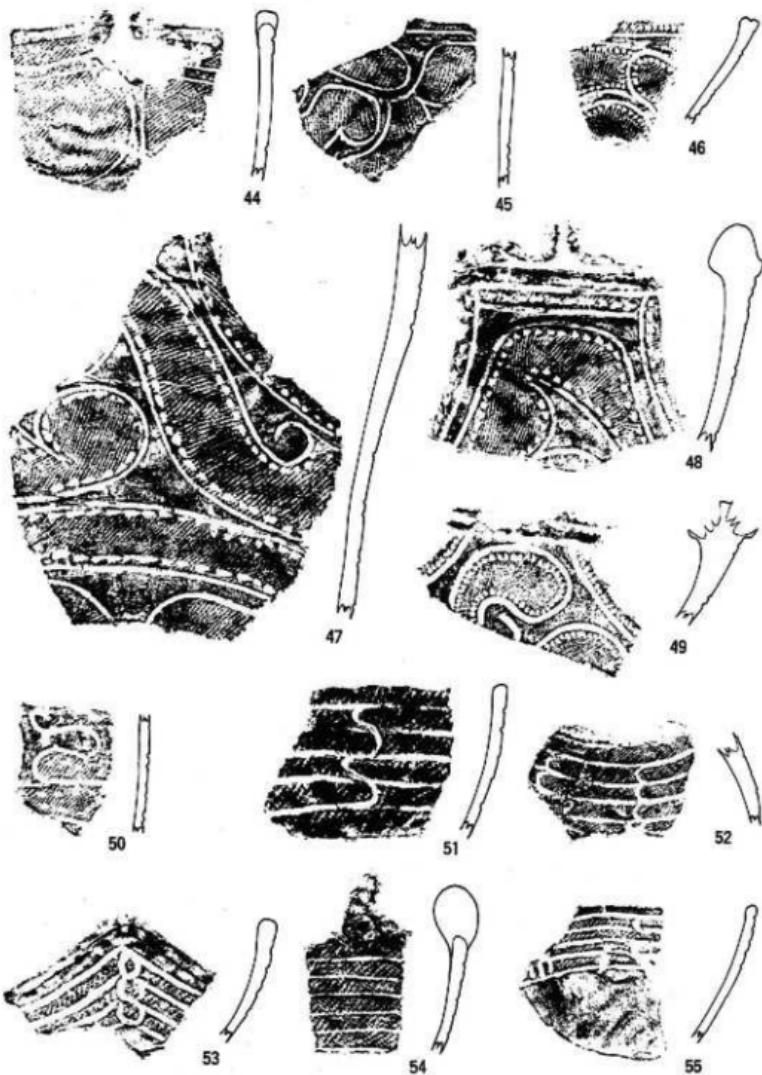
第69図 D₃区遺構外出土土器拓影図(1)



第70図 D₃区遺構外出土土器拓影図(2)

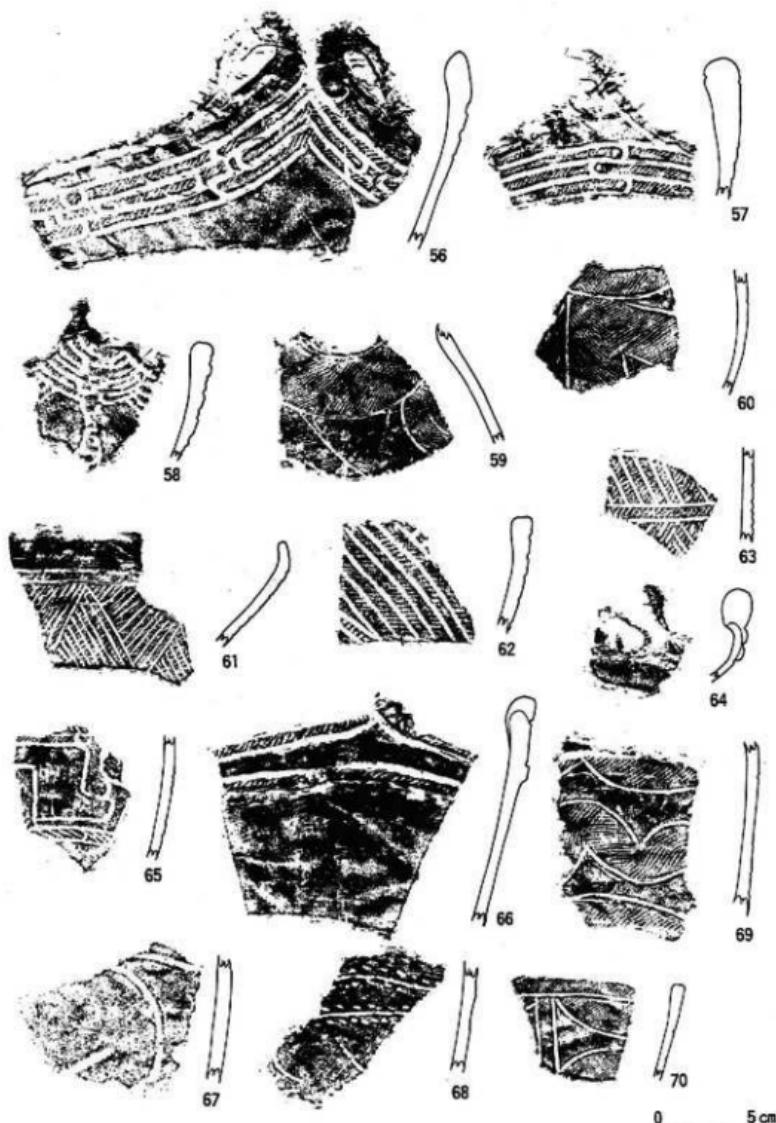


第71図 D₃区造構外出土土器拓影図(3)



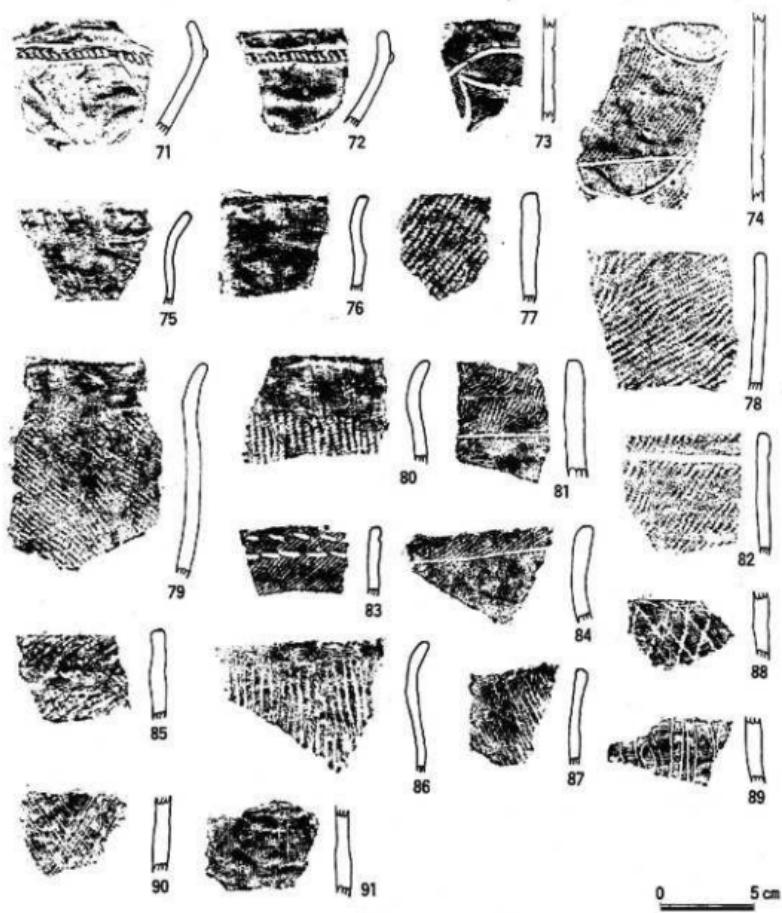
第72図 D₃区遺構外出土土器拓影図(4)

0 5 cm



第73図 D₃区遺構外出土土器拓影図(5)

0 5 cm



第74図 D₃区遺構外出土土器拓影図(6)

転文が施文されるものが多い。又、大型のものについては口縁部に沈線による境界文を施すものもある。焼成は良好なものが多く、明赤褐色、褐色、橙色、にぼい黄褐色を呈する。

壺では完形土器1点(45)が出土している。ゆるやかな波状口縁を呈し、第1種の捺糸文が縱位方向に施文される。焼成は良で、色調はにぼい黄褐色を呈する。

4類 条痕文の土器 (第67図47、74図90、91)

本類は平口縁の深鉢(47)が主体となる。条痕は器面に対し、縱位、無方向に施文されるものが多く、口縁部を無文化するものもある。焼成は良好で、色調は黒褐色、暗赤褐色を呈する。

(藤井安正)

(2) 石器

D₃区造構外より出土した石器は多種多様で、その数は剝片石器1,448点、礫石器196点の総計1,644点である。調査区ほぼ全域から出土したが、特に中央部南西寄りから北西部にかけて多く分布していた。大半は遺物包含層Ⅲa層～Ⅲd層からの出土である。石器の分類については、形態別に類別・細分した。なお、石器出土分布密度図は第75図の通りである。

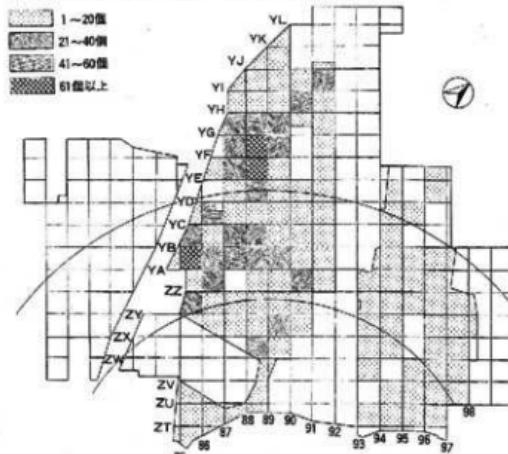
石器 (第76図、77図)

調査区ほぼ全域から出土し、特にYB-87・88、YG-88グリッド付近に多い。形態から2群6類に分類した。石材は硬質頁岩が多く、珪質頁岩、赤色頁岩と続く。

1群…有茎石鎌で、基部形態から以下のように細別した。

- a…平基有茎石鎌で54点出土した。剥離調整はていねいになされているが、自然面を残している場合もある。欠損品は基部を破損しているものが多く、基部にアスファルトの付着がみられるものも数点ある。(1~20)
- b…凹基有茎石鎌で41点出土した。基部に抉れをもつもので、a類に比べ細長く、剥離調整はていねいである。基部にアスファルトの付着がみられるものがあり、欠損品は先端部を破損しているものが多い。(21~28)
- c…凸基有茎石鎌で13点出土した。基部は、a類、b類に比べ突出し、アスファルトの付着がみられるものもある。ていねいな剥離調整がなされ、欠損品は基部を欠いているものが多い。(29~37)

2群…無茎石鎌で、基部形態から以下のように細別した。



第75図 石器出土分布密度図

- a … 四基石鎚で8点出土した。基部の抉れは浅いものと深いものあり、剥離調整はていねいである。(38~44、48)
- b … 円基石鎚で19点出土した。I群に比べやや粗い調整によって作り出され、橢円形状を呈している。(49~57)
- c … 尖基石鎚で18点出土した。器面に一次剥離を残す部分があるものの、剥離調整はていねいで、柳葉形を呈している。器部中央部は膨らみをもち、断面形は凸レンズ状もしくは菱形である。(58~68)

石鎚 (第78図)

調査区北西部、南東部にまばらに出土した。形態は、3群に分類した。石材は硬質頁岩、珪質頁岩、赤色頁岩と続く。

- 1群…つまみ部と錐部の境が明確なもので、14点出土した。つまみ部と錐部はていねいな剥離調整によって精巧に作り出されている、錐部先端には摩耗痕や途中で折れているものが多くみられる。(69~79)
- 2群…つまみ部と錐部の境が明確でないもので、6点出土した。V字状を呈し、つまみ部に比べ錐部にていねいな加工調整がなされ、刃部先端には著しい摩耗痕が観察されるものもみられる。(80~84)
- 3群…不定形な剥片の一部を加工調整して錐部が作り出されているもので、7点出土した。錐部はI・II群に比べ太めで、先端部には摩耗痕が観察される。(85~91)

石匙 (第79図、80図)

調査区中央部から北西部にかけて分布し、特にYG-88グリッド付近に多い。形態から2群5類に分類した。石材は硬質頁岩、珪質頁岩、黒色頁岩、泥質頁岩である。

- 1群…横型石匙である。
 - a … 主要刃部が一側縁に作り出されるもので、7点出土した。(92~94)
 - b … 主要刃部が二側縁に作り出されるもので、4点出土した。(95~97)
 - c … 主要刃部が三側縁に作り出されるもので、4点出土した。(98~101)
- 2群…縱型石匙である。
 - a … 主要刃部が一側縁に作り出されるもので、22点出土した。(102~107)
 - b … 主要刃部が二側縁に作り出されるもので、17点出土した。(108~117)
 - c … 主要刃部が三側縁に作り出されるもので、6点出土した。(118~123)

石箇 (第81図)

調査区中央部南西寄りから北西部にかけて分布していた。形態別から3群に分類した。石材は硬質頁岩、珪質頁岩である。

1群…基部に対し刃部の幅が広くなるもので、頭部は尖り三角形状を呈している。5点出土した。器面にはほとんどが一次剥離を残す。(124~126)

2群…I群に比べ頭部は尖っておらず、台形状を呈する。3点出土した。器面には一次剥離を残すものと、ていねいな剥離調整がなされているものがある。(127、130、131)

3群…長楕円形状を呈しているもので、3点出土した。(128、129)

櫛器

調査区ほぼ全域に分布し、特にYG-88、YB-85グリッド付近から多く出土した。打面上にして主要刃部の作り出される位置から、6群に分類した。石材は硬質頁岩が最も多く、珪質頁岩、泥質頁岩、黒色頁岩、赤色頁岩と続く。

1群…主要刃部が左、右いずれか一側縁に作り出されるもの。334点出土した。

2群…主要刃部が先端部に作り出されるもの。99点出土した。

3群…主要刃部が両縁・二側縁に作り出されるもの。420点出土した。

4群…主要刃部が三側縁に作り出されるもの。158点出土した。

5群…主要刃部が周縁全域に作り出されるもの。73点出土した。

6群…刃部の一部分、全域に抉りがあるもの。113点出土した。

磨製石斧 (第82図)

調査区中央部付近に多く分布し、22点出土した。欠損品が大半を占め、基部半分から破損しているものがほとんどである。刃部には使用痕が観察され、特に145は磨滅が著しい。小型のもので、器面にも使用痕がおよんでいることから、ノミ的な用途として使われたものと考えられる。石材は石英閃綠玢岩、綠色片岩、火山礫凝灰岩、砂質凝灰岩である。

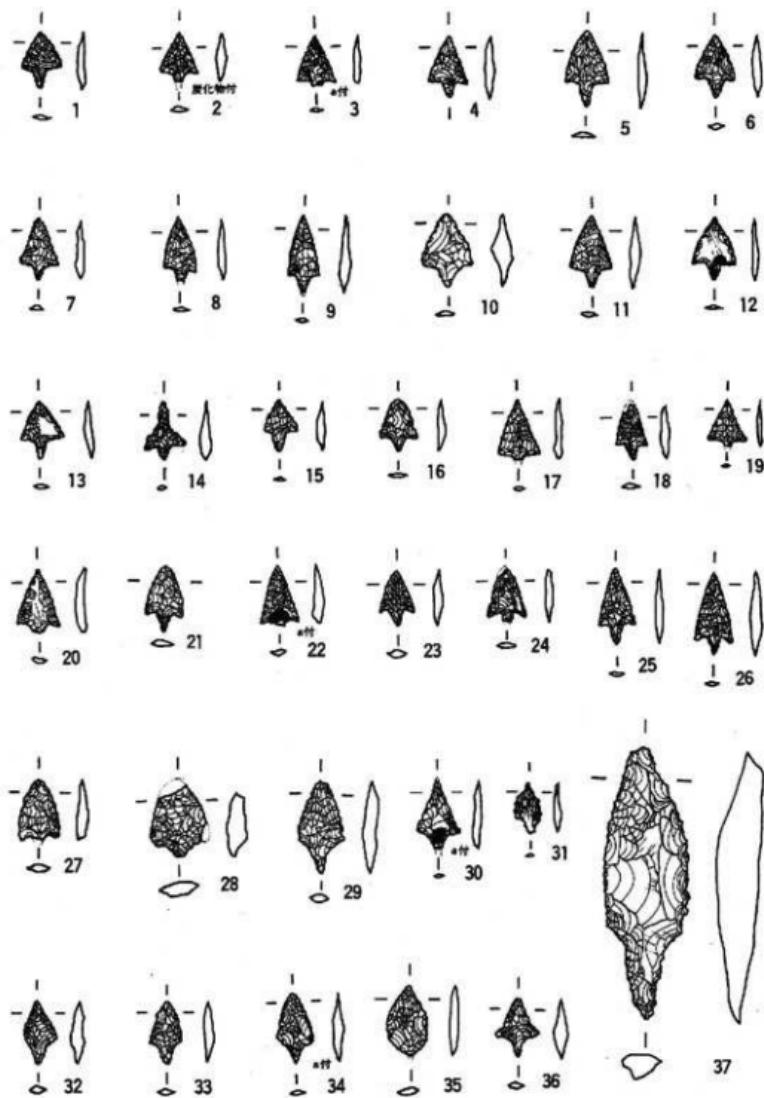
142、143は乳棒状石斧で石材は花崗閃綠岩である。

石錘 (第83図144~154)

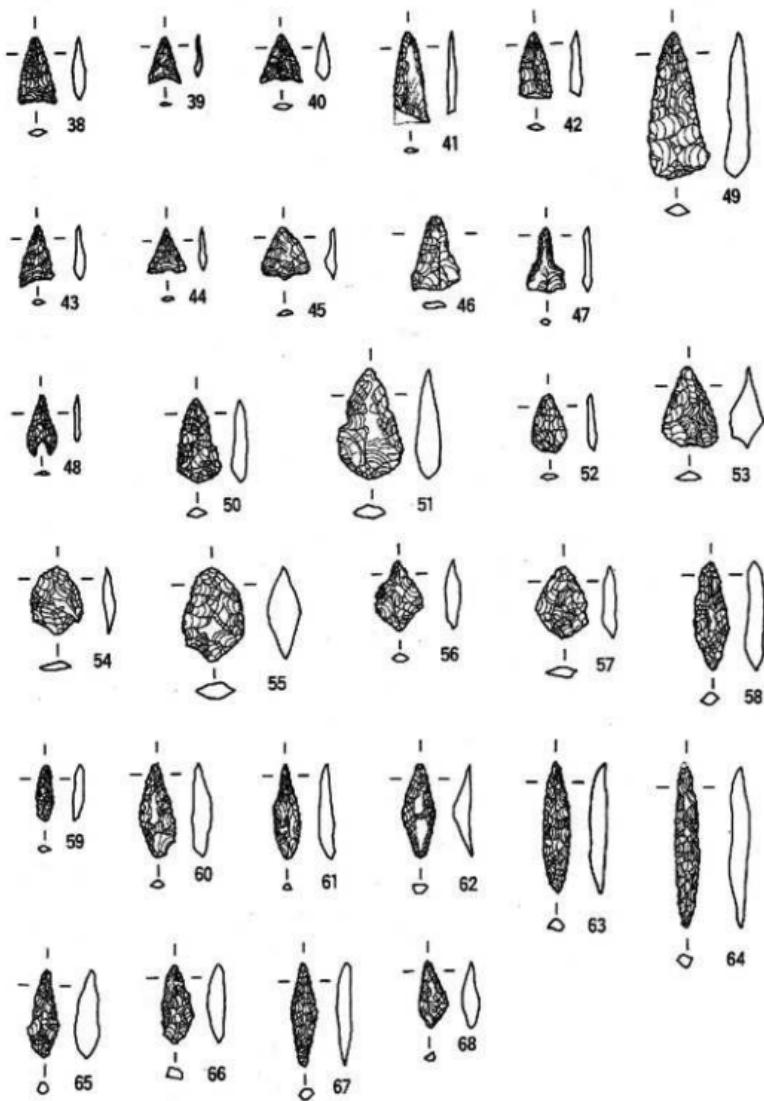
調査区ほぼ全域から、28点の出土があった。扁平な川原石の両側縁を打ち欠いているもので、中には自然の凹みを利用し、一方だけに打ち欠きを施すもの(145)もみられる。法量的には、長さ5~10cmとばらつきがある。石材は凝灰質泥岩、泥岩、砂質凝灰岩、石英閃綠玢岩である。151のみ軽石で浮子として利用したものと考えられる。

蔽石 (第83図144~154、第84図158~169)

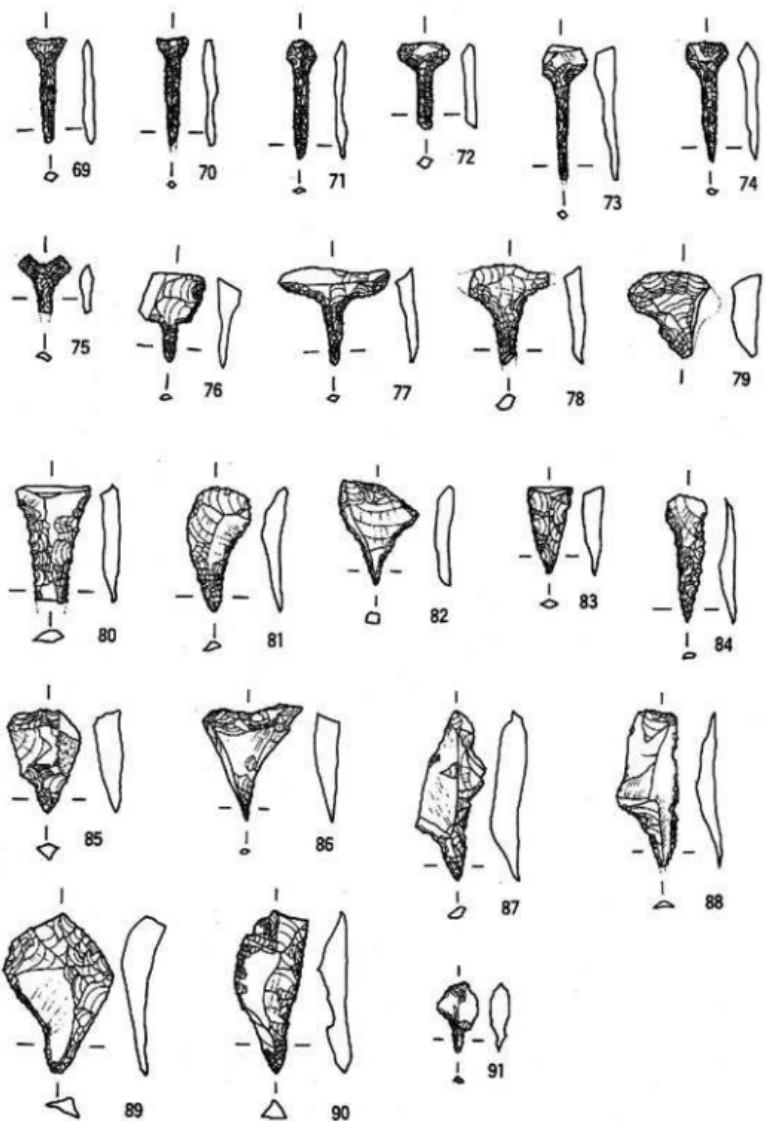
調査区ほぼ全域にまばらに分布し、特に中央部から北西部寄りに多く出土した。扁平な川原石の一側縁が打ち欠かれているものが32点と多く、円礫を使用しているのが3点、角礫のものが1点と多種多様で、法量的にも長さ4~14cmとばらつきがみられる。石材は砂質凝灰岩が多く、泥質凝灰岩、泥岩、綠色凝灰岩、玄武岩、輕質凝灰岩、石英閃綠玢岩である。



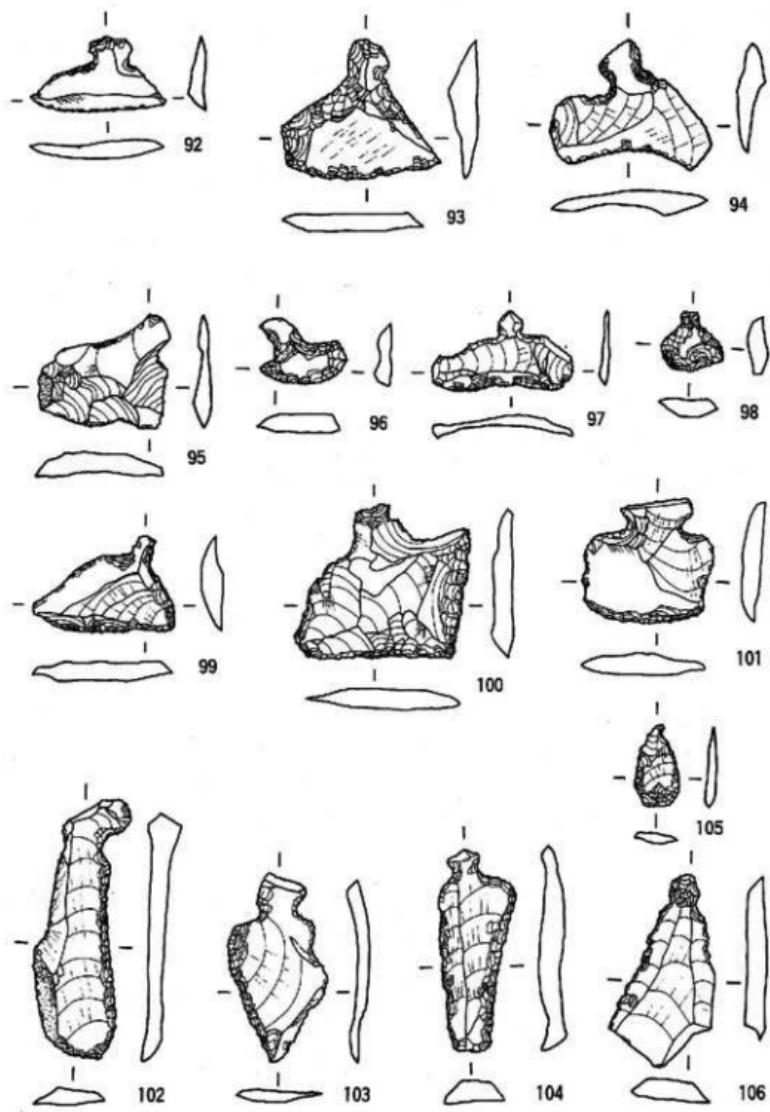
第76図 D3区造構外出土石器実測図(1)



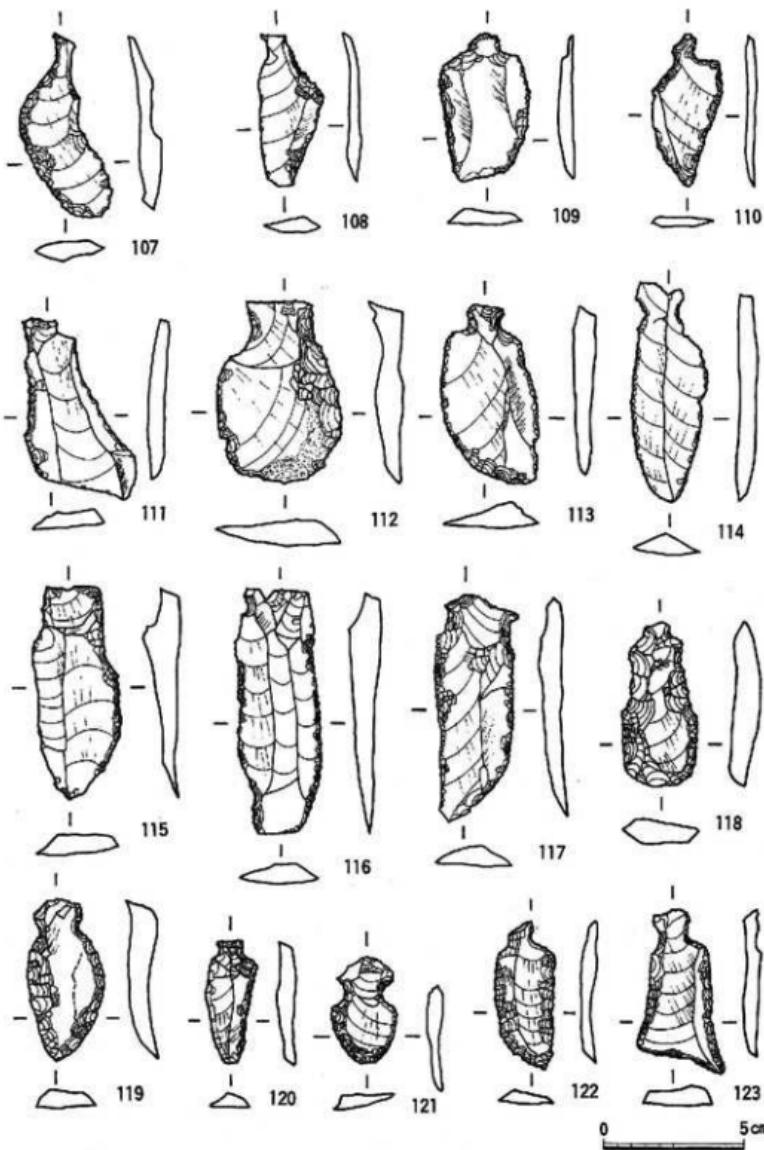
第77図 D₃区遺構外出土石器実測図(2)



第78図 造構外出土石器実測図(3)



第79図 遺構外出土石器実測図(4)



第80図 遺構外出土石器実測図(5)

凹石（第85図170～176、第86図177～182）

調査区ほぼ全域にまばらに分布し、特に中央部から多く出土した。円礫（34点）、扁平な川原石（8点）、縦長状の礫（12点）の一部に多数の凹みをもつものである。使用後、敲石に転用されたものもみられる。石材は石英閃緑玢岩、閃緑岩、緑色凝灰岩である。

磨石（第87図183～191）

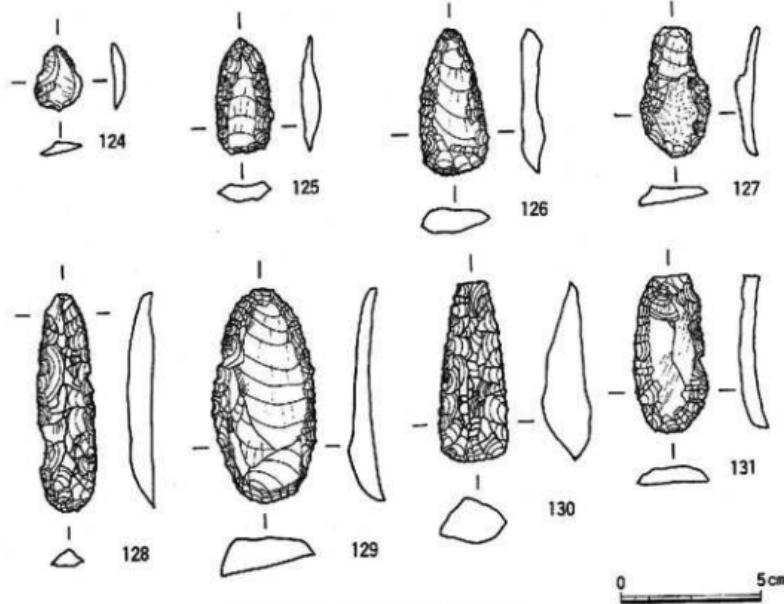
調査区ほぼ全域にまばらに分布し、34点の出土があった。円礫の一部分に磨痕が観察されるものである。法量は4.5～12cmとばらつきがみられる。使用後、凹石として利用されているものもある。石材は石英閃緑玢岩、泥質凝灰岩、泥岩、緑色凝灰岩、閃緑岩、凝灰岩、石英安山岩である。

石皿（第88図）

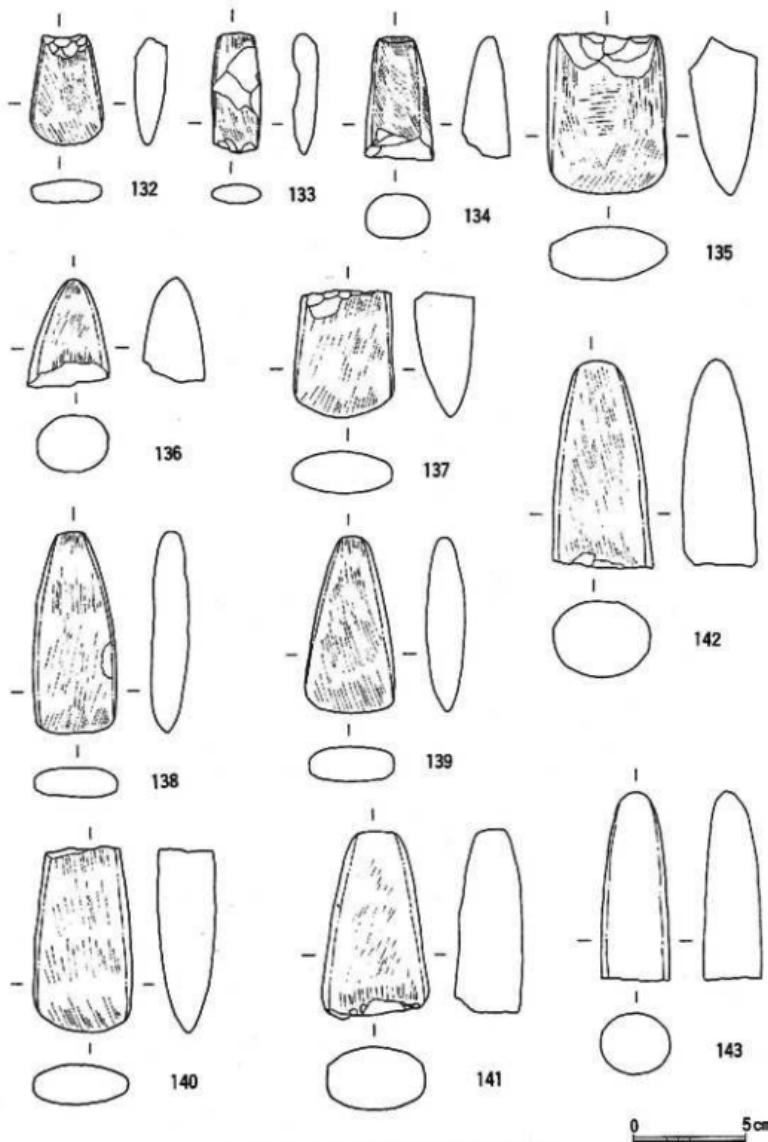
調査区北西部に多く、22点出土した。全て破損品である。石材は軽石が多く、軽石質石英安山岩、泥質凝灰岩、軽石質凝灰岩、凝灰岩、流紋岩質凝灰岩、泥質凝灰岩である。

192は石皿から転用された砥石で、石材は泥質凝灰岩である。

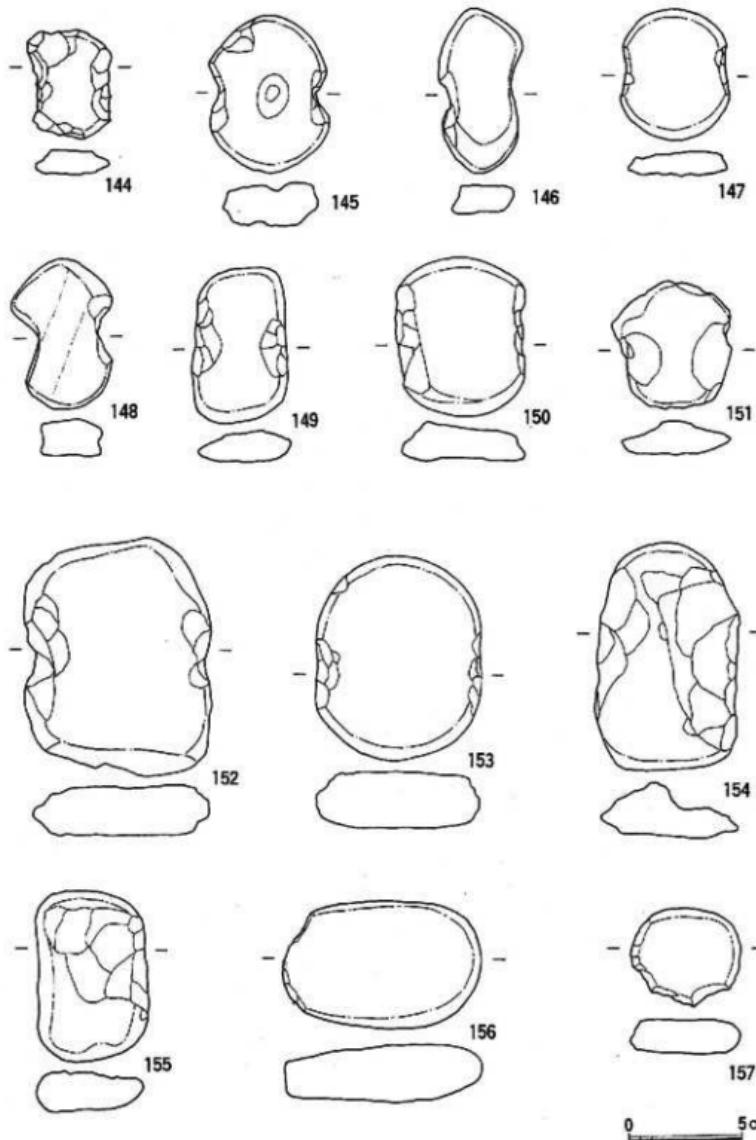
（花海義人）



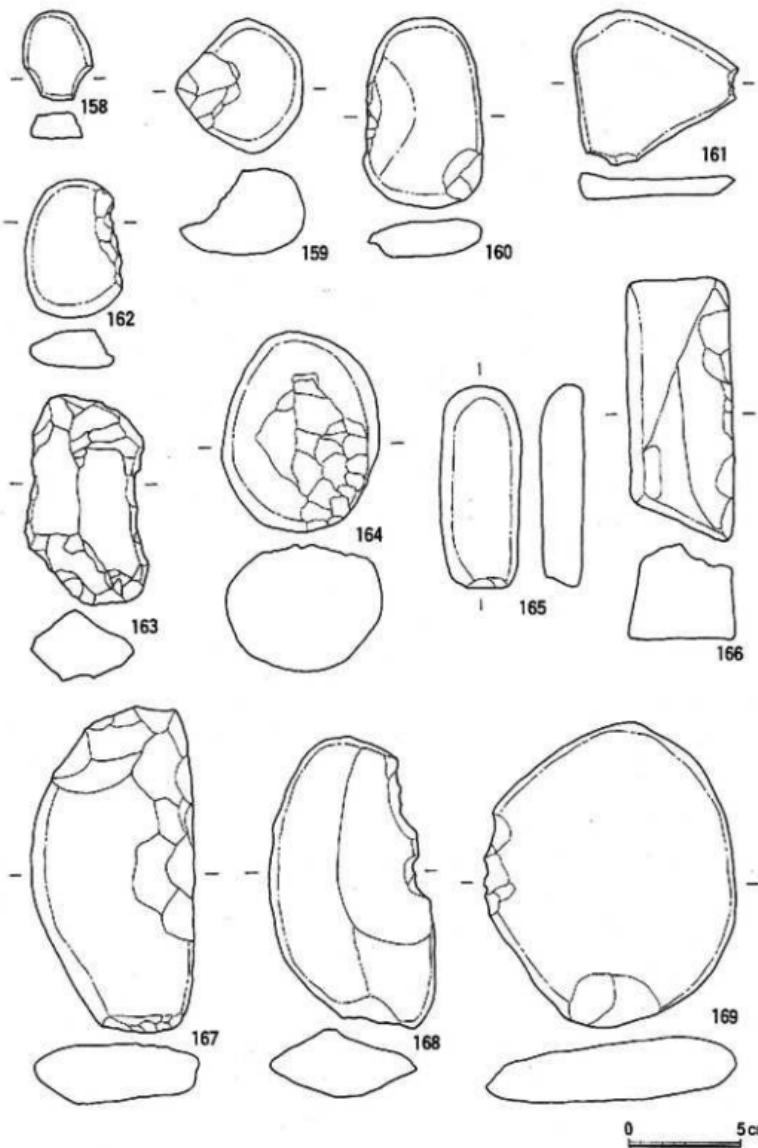
第81図 遺構外出土石器実測図(6)



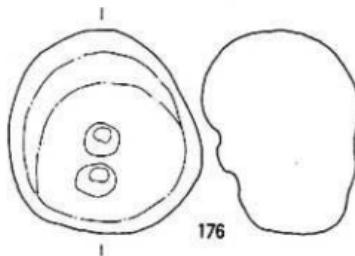
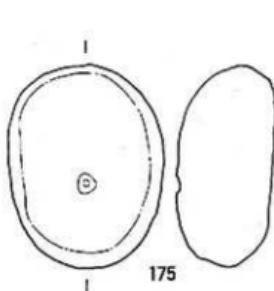
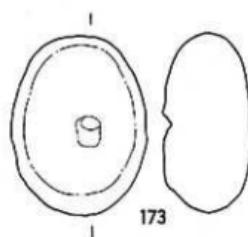
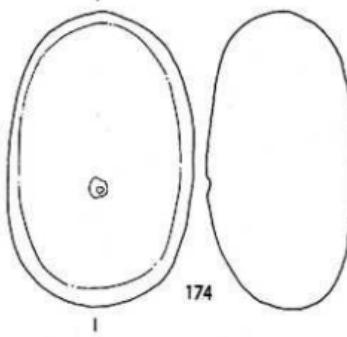
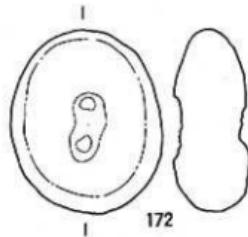
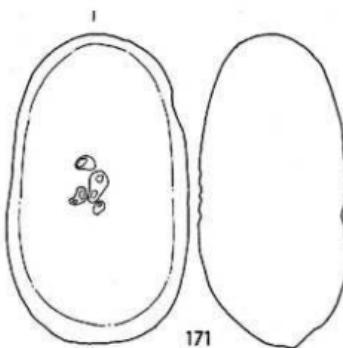
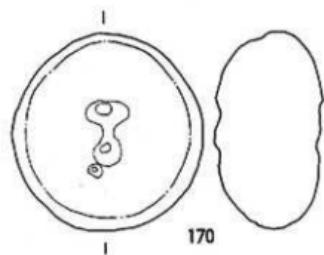
第82図 D₂区造構外出土石器実測図(7)



第83図 Da区遺構外出土石器実測図(8)

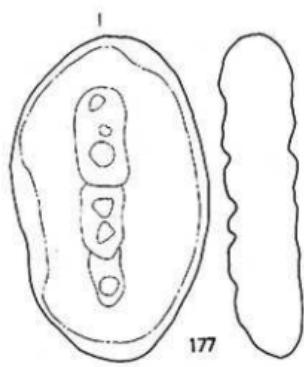


第84図 D₃区遺構出土石器実測図(9)

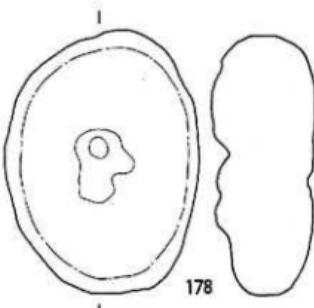


0 5cm

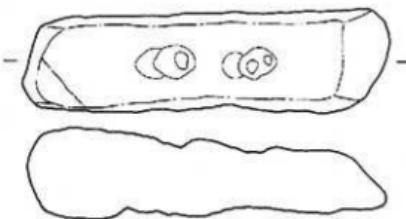
第85図 D₃区遺構外出土石器実測図(10)



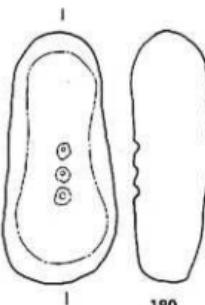
177



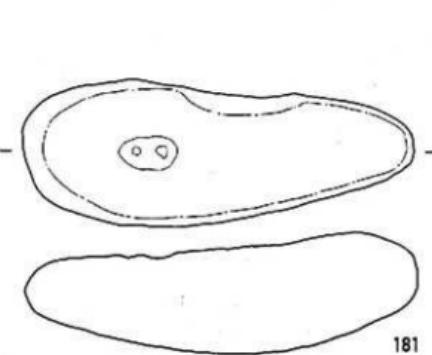
178



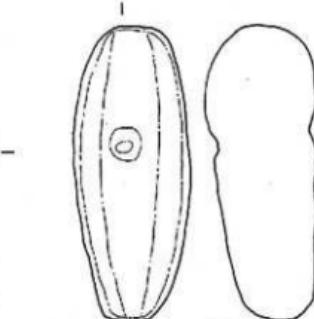
179



180



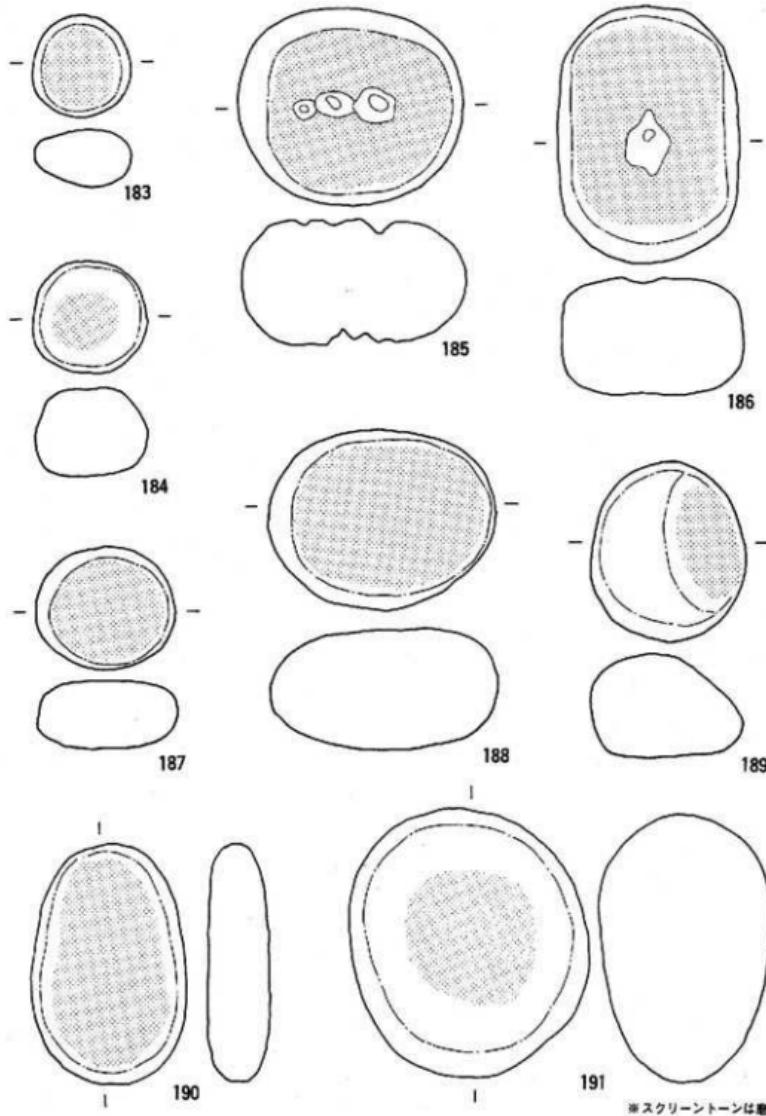
181



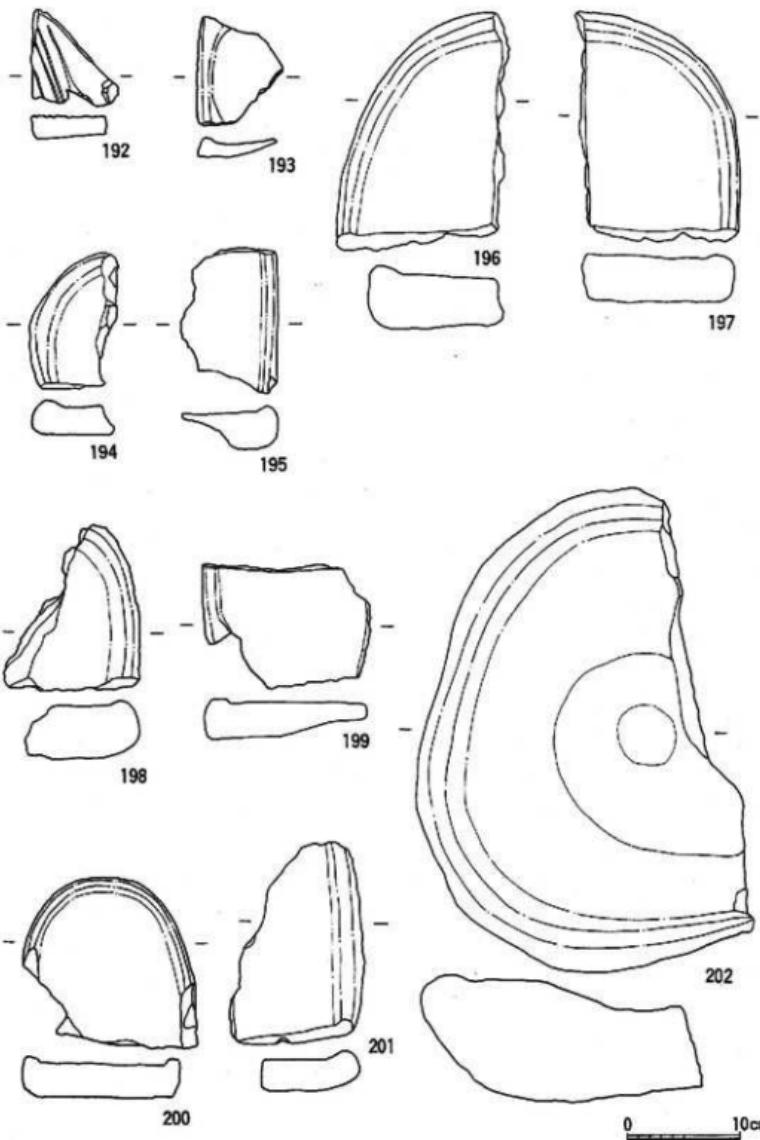
182

0 5cm

第86図 D_a区造構外出土石器実測図(1)



第87図 D2区遺構外出土石器実測図(2)



第88図 D₃区遺構外出土石器実測図(13)

(3) 土製品

D₃区遺構外から出土した土製品は、土偶20点、鐸形土製品25点、スタンプ状土製品3点、葺状土製品8点、耳飾3点、有孔土製品9点、円形土製品2点、三角形土製品1点、土器片利用土製品167点、その他の土製品6点の計243点である。

土偶（第89図1～17）

1、2は土偶の頭部。1は丸い顔に眉、目、鼻、口が作り出されている。また、頬と額に刻みが加えられている。入れ墨等を表現したものであろうか。2は逆三角状の顔で、大きな鼻と口が作り出されているが目の表現がない。耳に相当する部分に貫通孔を有する。1はZZ-85グリッド・Ⅲd層から、2はYA-86グリッド・Ⅲa～Ⅲb層からの出土である。

3～5は土偶体部上半で、3～5には乳房が作り出されている。乳房間の他に3、4の首から肩には刺突文が加えられている。3はYC-87グリッド・Ⅲa～Ⅲb層、4はYB-85グリッド・Ⅲc～Ⅲd層上位、5はYF-87グリッド・Ⅲa層の出土である。

6～8は土偶体部で、8には脚は作り出されていない。6、7には沈線文と刺突文が、8には沈線文が施されている。6はZZ-86グリッド・Ⅲc層、7は同グリッド・Ⅲa～Ⅲb層、8はYA-85グリッド・Ⅲd層上位から出土している。

9～10は土偶の腕、11～16は土偶の脚である。これらは、D₃区西部のYA～YH-85～86グリッドのⅢa～Ⅲd層上位から出土している。

17はYG-87グリッド・Ⅲa～Ⅲb層出土の土偶で、頭部及び脚部を欠いている。また、乳房も剥がれ落ちたものと考えられる。首から肩には刺突文が、腰部には沈線による平行線文と山形状文が施されている。

鐸形土製品（第90図18～36）

開口部断面が円形のものと橢円形のもの（31～32、36）がある。貫通孔は鉛部の短軸方向のものと長軸方向（36）に穿孔されるものとがある。また、貫通孔が無いもの（22、30、32～33）もみられる。

無文のものが多いが、沈線文のもの（30～31）、刺突文のもの（32）、燃紐圧痕文のもの（36）、沈線と刺突により文様が構成されるもの（33～35）がある。

なお、これらの鐸形土製品は、D₃区ほぼ中央のⅢa～Ⅲd層から多く出土している。

スタンプ状土製品（第90図37、91図38～39）

スタンプ状土製品は本遺跡では初めての遺物で、3点が出土した。沈線により、37には曲線文、38～39には直線文が施されている。37はYB-86グリッド・Ⅲc層、38はZZ-88グリッド・Ⅲb層、39はZZ-87グリッド・Ⅲc層の出土である。

葺状土製品（第91図40～44）

昔を模したと考えられる土製品で、かきの部分が丸いもの(44)や平坦なもの(43)、中央がもりあがったもの(42)等がみられる。柄の部分も真っ直ぐなものに曲がっているもの(41)もある。D₃区中央部~北西部のⅢa~Ⅲd層上位より出土している。

耳飾(第92図46~48)

46~48は耳栓。46の凹部中央には貫通孔を有する。大きさは、46、47が径1.6cm、48が径2.3cmである。46はYI-90グリッド・Ⅲa層、47はYA-89グリッド・Ⅲc~Ⅲd層上位、48はYA-91グリッド・Ⅲa~Ⅲb層からの出土である。

有孔土製品(第92図49~55、57~58)

孔を有する土製品を一括した。49~51は管状、54は長方形で、長軸方向に貫通孔を有する。55、57~58は円形で、孔は平行に穿孔されている。これらの土製品は無文のものが多いが、刺突文が施されているものもある。YG-87~88グリッド・Ⅲa~Ⅲc層からの出土が多い。

円形土製品(第92図59~60)

59は径4.1cm、厚さ1.2cm、表裏両面に沈線と刺突により文様が施されている。60は径3.8cm、厚さ0.7cm、無文の土製品である。ZY-86グリッド・Ⅲc層の出土である。

三角形土製品(第92図61)

三角形で内彎した土製品で、表面には沈線文が施されている。YH-91グリッド・Ⅲa~Ⅲb層の出土である。

土器片利用土製品(第93~94図)

縄文土器の破片を打ち欠き、研磨により、円形、三角形、方形に成形したものである。D₃区からは167点の土器片利用土製品が出土したが、その内訳は円形139点、三角形17点、方形11点で、円形のものが圧倒的に多い。

打ち欠きだけのもの、一部に研磨を施しているものに、全周を丁寧に研磨しているもの(8、28、33)等がみられる。

大きさは4cm前後のものが多い。本土製品は発掘区ほぼ全域から出土している。

その他の土製品(第91図45、92図62~66)

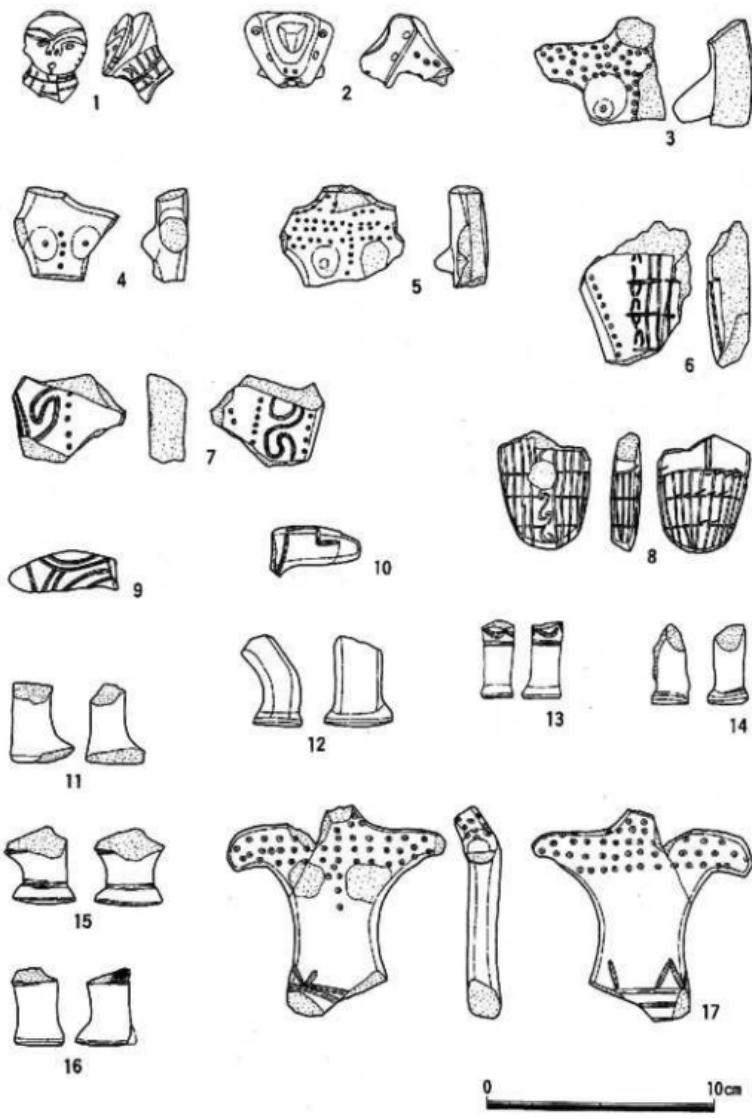
45は芽状土製品に類似するが、柄の部分が二股となっており、区別される。YB-90グリッド・Ⅲa~Ⅲc層の出土である。

62はやや不規則な形状の土製品であるが、表面に細かい沈線で渦巻状文等が施文されている。YC-90グリッド・Ⅲa~Ⅲb層から出土している。

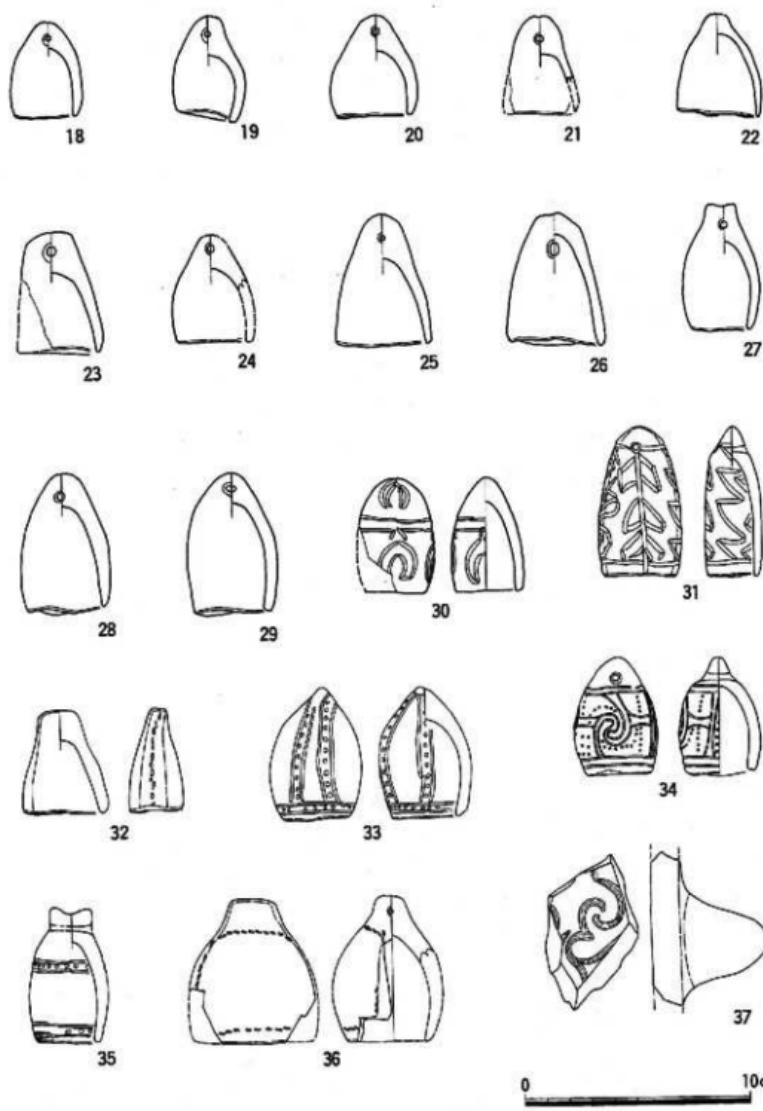
63は3本足の鉗状の土製品で、YA-86グリッド・Ⅲa~Ⅲb層より出土したものである。

64はYC-87グリッド・Ⅲa~Ⅲb層出土の土製品で、高さ4.0cm。

65は厚さ0.6cmの板状の土製品で、土偶の可能性もある。YH-90グリッド・Ⅲd層上面の出



第89図 Dō区造構外出土土製品実測図(1)



第90図 D3区遺構外出土土製品実測図(2)

士である。

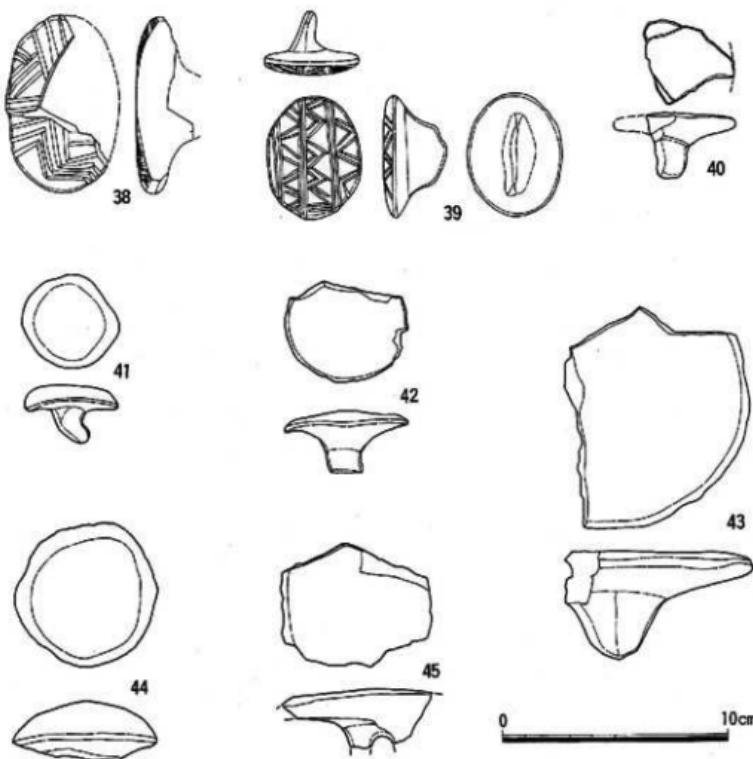
66はZY-90グリッド・Ⅲc層から出土した土製品である。

(4) 石製品

D₃区遺構外から出土した石製品は、石刀8点、石冠2点、石棒1点、円形石製品10点、三角形石製品2点、方形石製品2点、有孔石製品3点、凹部を有する石製品2点、棒状土製品2点、軽石製石製品21点、その他の石製品2点の計55点である。

石刀（第95図1～7）

6、7は内返り形の石刀で、刃部先端を欠いている。現存長は6が16.8cm、7が16.1cm、石材はいずれも粘板岩である。6はYD-90グリッド・Ⅲd層上面、7はZZ-89グリッド・Ⅲd

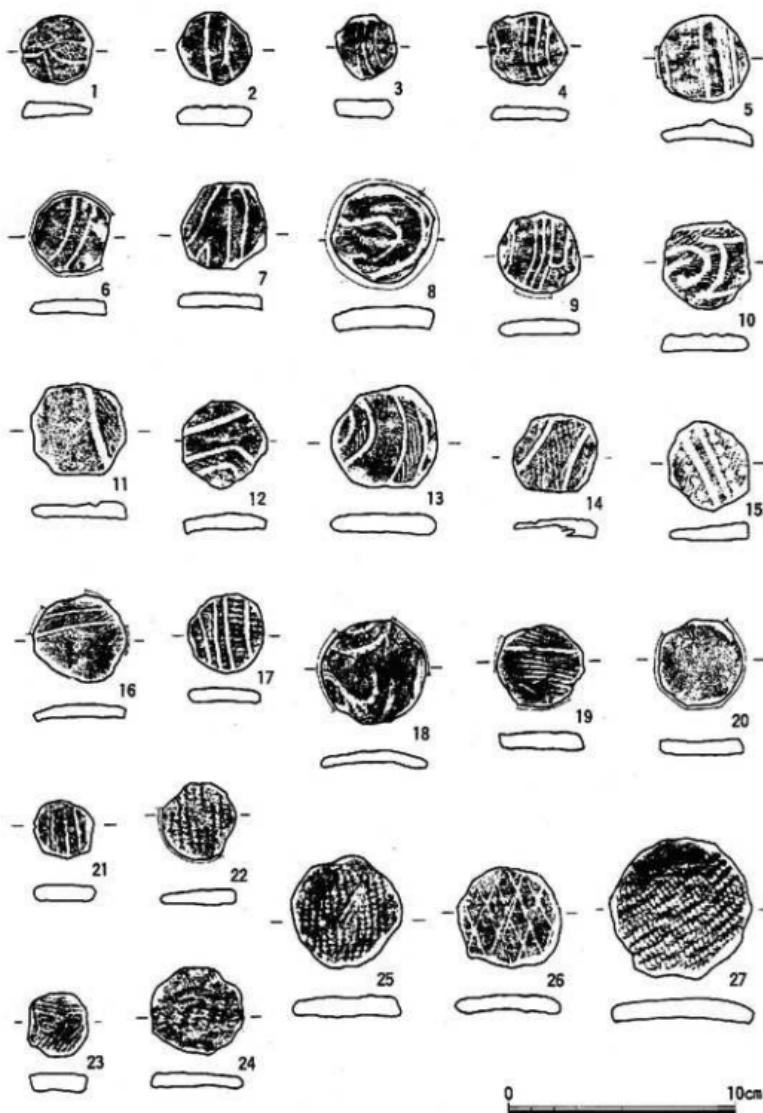


第91図 D₃区遺構外出土土製品実測図(3)



0 5 cm

第92図 D_a区遺構外出土土製品実測図(4)



第93図 D₃区遺構外出土土製品拓影図(1)

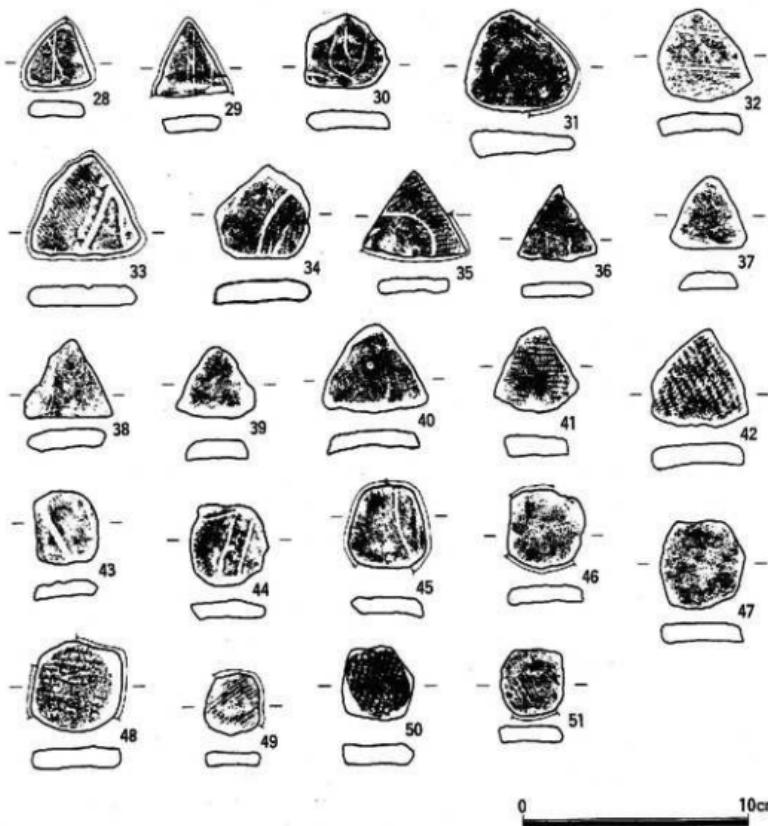
層上面からの出土である。

1～5も石刀の一部分で、4の石材が石墨閃岩である以外は全て粘板岩である。

ZZ～YH-89～90グリッド・Ⅲa～Ⅲd層上位からの出土である。

石冠（第95図8～9）

全面を研磨によって整形している。横断面は三角形状。石材はいずれも凝灰岩である。8はZU-85グリッド、9はYE-87グリッド・Ⅲa～Ⅲc層より出土している。



第94図 D₃区遺構外出土土製品拓影図(2)

石棒（第99図53）

53は石棒で、現存長は19.9cm。石材は軽石質凝灰岩。YA-85グリッド・Ⅲd層上面からの出土である。

円形石製品（第96図10～17、19）

打ち欠き、研磨により、円形・板状に成形された石製品で、径4.0～5.0cm、厚さ0.7～2.4cm程の大きさである。16、19のように側面の成形が打ち欠きだけのものもみられる。泥質凝灰岩が多用されている。ZU～YH-86～90グリッド・Ⅲa～Ⅲd層上位からの出土である。

三角形石製品（第96図18、26）

打ち欠き、研磨により、三角形・板状に成形された石製品で、18は底辺の長さが3.4cm、厚さが0.8cm、26は底辺の長さが11.4cm、厚さが2.7cmである。18の側面は打ち欠きのみで、研磨されていない。18の石材は泥質凝灰岩、26は軽石質安山岩である。18はZX-89グリッド・Ⅲc層、26はYJ-91グリッド・Ⅲd層上位から出土している。

方形石製品（第96図20～21）

打ち欠き、研磨により、正方形・板状に成形された石製品で、一辺の長さが3.3～3.6cm、厚さ0.8～1.6cmの大きさである。石材は20が泥岩、21が泥質凝灰岩。いずれもYB-85グリッド・Ⅲb～Ⅲc層の出土である。

有孔石製品（第96図22～23、27）

いずれも欠損品であるが、22、23は板状で、円形か橢円形と考えられる。ほぼ中央に径0.7～0.8cmの孔を有する。石材は22が泥岩、23が軽石（石英安山岩）である。22はYH-87グリッド・Ⅲa～Ⅲb層、23はYG-89グリッド・Ⅲb層より出土している。

27の現存長は13.3cm、横断面形は橢円形である。ほぼ中央、表面に垂直に0.4cmの孔が穿たれている。石材は花崗斑岩、YB-89グリッド・Ⅲc層下位からの出土である。

凹部を有する石製品（第96図24～25）

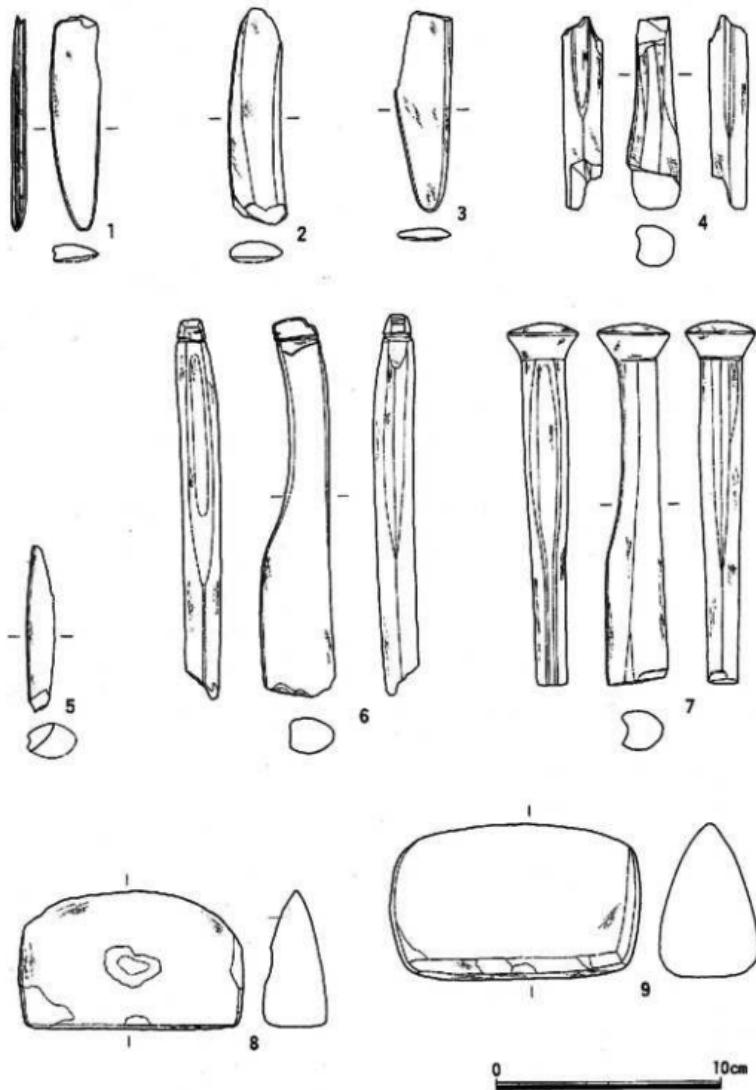
凹部を有する球状の石製品で、径4.3～5.7cmの大きさ。石材はいずれも軽石（石英安山岩）である。24はYD-88グリッド・Ⅲa層、25はZZ-90グリッド・Ⅲc層より出土している。

棒状石製品（第99図49～50）

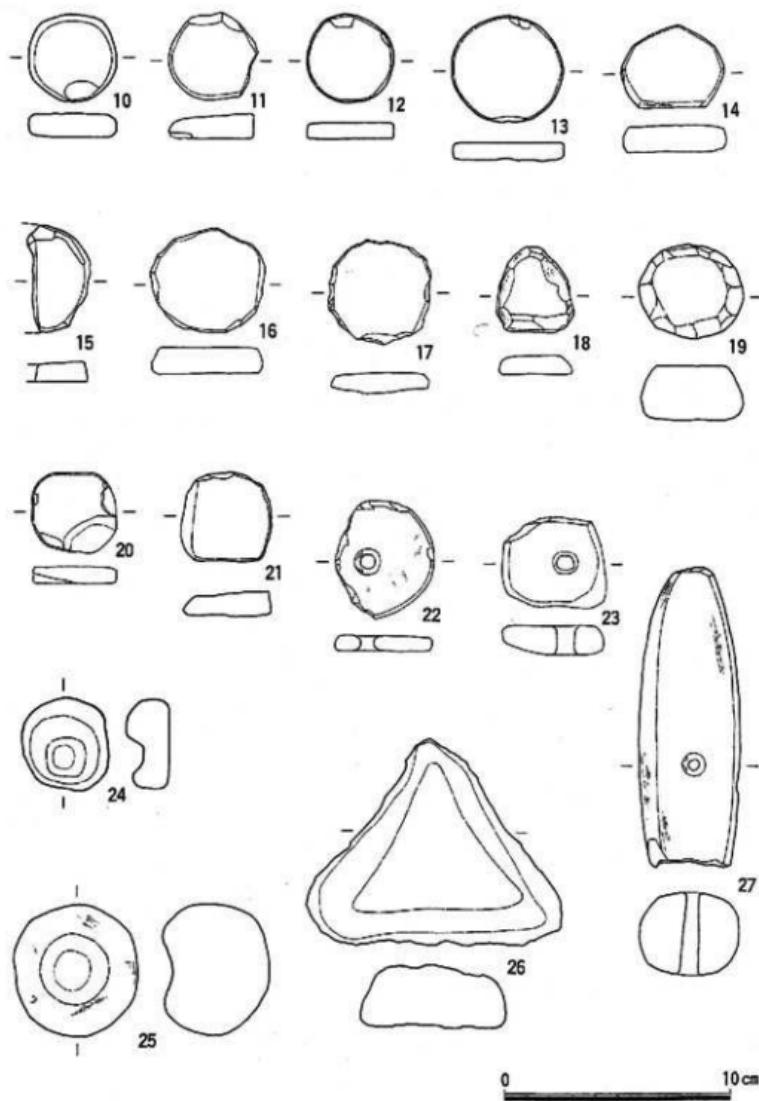
シルト質の軽石（凝灰岩質泥岩）を棒状に成形したもので、長さは49が10.9cm、50が13.5cmである。49はZY-89グリッド・Ⅲd層、50はZZ-90グリッド・Ⅲc層より出土している。

軽石製石製品（第97図28～99図48）

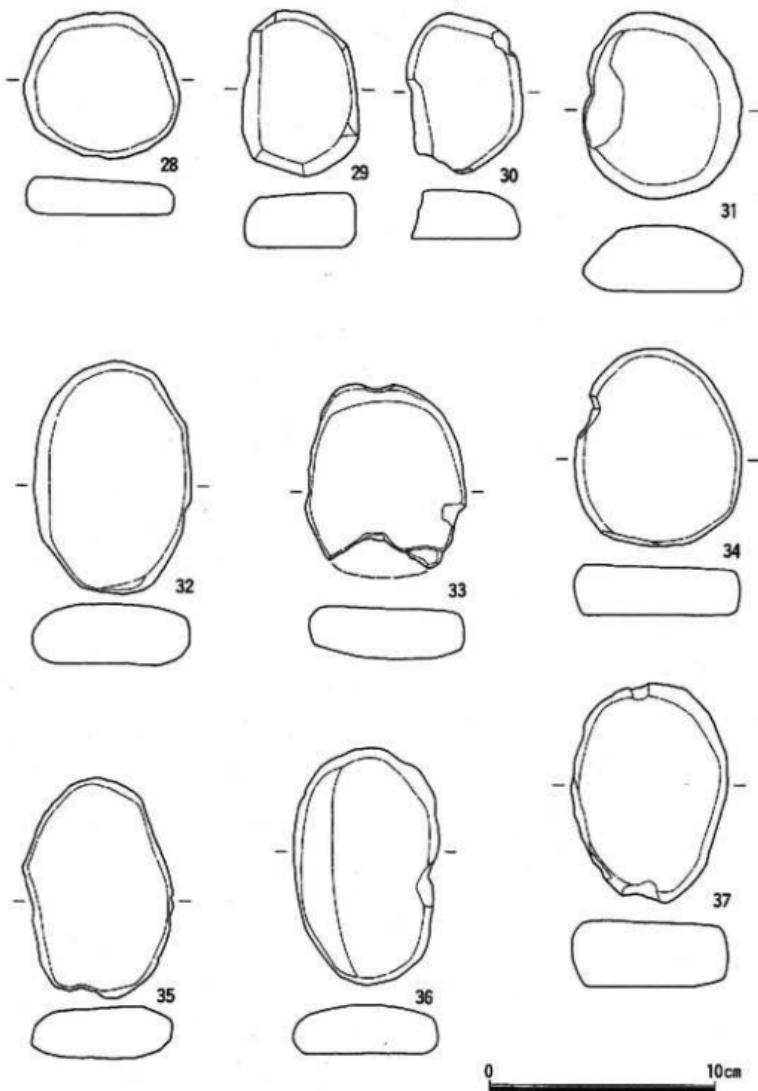
多孔質の軽石（石英安山岩）を円形、橢円形、長方形、三角形等に成形したものである。長軸6.3～14.0cm、厚さ1.5～5.7cmの大きさである。YA～YI-85～91グリッド・Ⅲa～Ⅲd層から出土している。



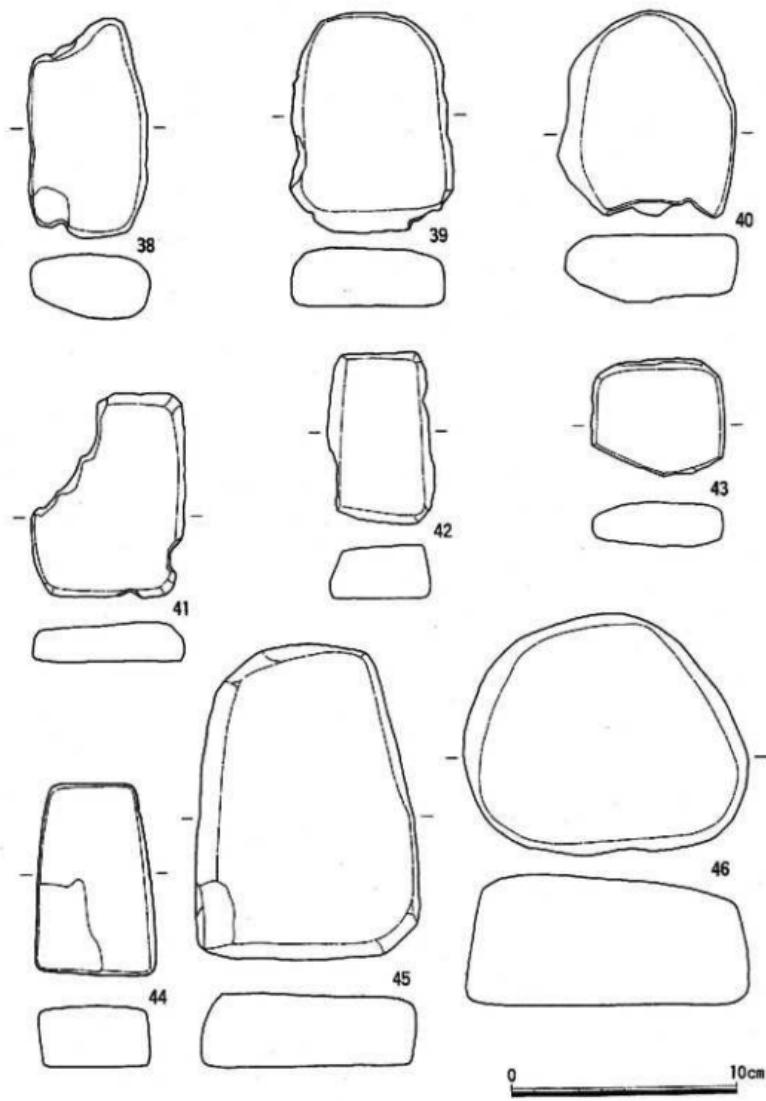
第95図 D₀区遺構外出土石製品実測図(1)



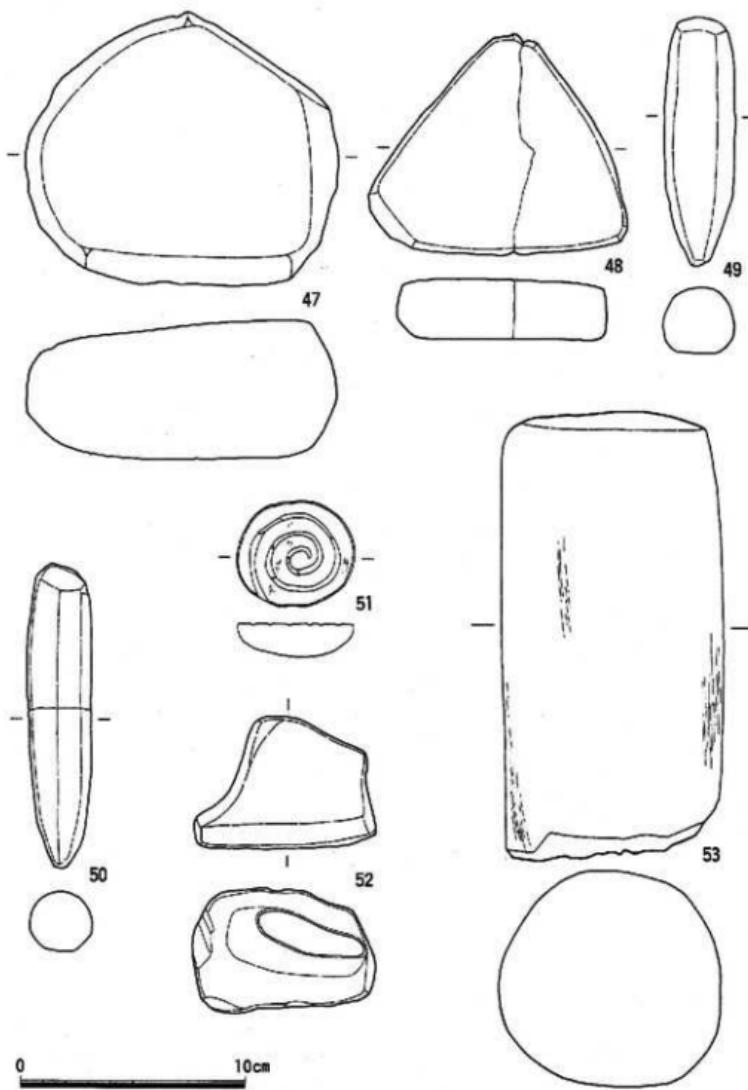
第96図 Da区遺構外出土石製品実測図(2)



第97図 D₃区造構外出土石製品実測図(3)



第98図 D2区遺構外出土石製品実測図(4)



第99図 D_o区遺構外出土石製品実測図(5)

その他の石製品（第99図51～52）

51は半球状の石製品で、平坦に成形された表面に沈線により渦巻文が描かれている。径5.1cm、厚さは1.5cm、石材は泥岩である。

52は土偶の足のような形状の石製品である。石材は泥岩、ZZ—90グリッド・Ⅲc層からの出土である。

(秋元信夫)

第Ⅳ章 D₃区の検出遺構と出土遺物(平安時代)

1. 穫穴住居跡

調査区南西端より北西部のⅡ層(大湯浮石層)上面～Ⅲa層上面において4棟を確認した。

第301号竪穴住居跡(第4図)

調査区南西端YD-85、YE-86、YF-86グリッド、Ⅲa層上面において浮石粒を含む黒褐色の落ち込みを確認した。住居の大部分は調査区外に延びているが、確認されるプランから一边4.2m以上の方形を基調すると考えられる。北東部壁は北西方向を向く。

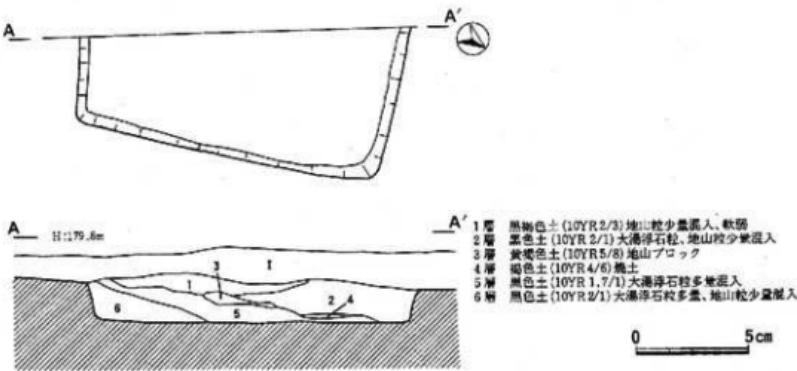
本住居上面より土師器4点、縄文土器片3点が出土した。

本住居の構築時期は確認面での浮石混入状況、出土遺物より大湯浮石降下(平安時代後半)以後と考えられる。

第302号竪穴住居跡(第100図)

調査区南西端YG-86グリッド、Ⅱ層上面で確認した。住居の大部分は調査区外に延びているが、平面形は方形を基調すると考えられる。北東部壁は長さ2.7mを測り、床面よりほぼ垂直に立ち上がる。北東部壁は北西方向を向く。確認面から床面までの深さは40cmで、堆積土は5ブロックの人为堆積である。床面は地山を掘込み、平坦でしまり、柱穴は検出されなかった。

住居内より石錐1点、縄文土器片等、縄文時代の遺物しか出土しなかったが、本遺構の構築時期は堆積土の浮石混入状況、確認面から大湯浮石降下(平安時代後半)以後と考えられる。



第100図 第302号竪穴住居跡実測図

第303号竪穴住居跡（第101、102、103図）

調査区北西部YI-89・90、YJ-89グリッド、Ⅲa層上面で確認した。SI 304、SK 382、SK 384、SK 388と重複し、新旧関係は（旧）SI 304→SI 303→SK 388→SK 382→SK 384（新）となる。規模は、長軸5m、短軸4mで東西方向にやや長い方形を呈する。主軸方向はN-33°-Wである。北東部壁から北西部壁にかけての周壁には幅16cmの壁溝が巡らされ、北西部壁で幅10cmと狭くなり、途中で消失する。壁溝の床面からの深さは8~4cm前後である。壁はⅢd~Ⅳ層上位までを掘込み、高さ30~40cmで床面よりほぼ垂直に立ち上がるが、北西部壁はやや外傾して立ち上がる。

地山を掘り込む床面には貼床が施されており、こまかに起伏がみられ堅くしまっていた。

また、床面上所々に少量であるが焼土と炭化植物（スキ）が認められたことから、焼失家屋と考えられる。

柱穴は北東寄りに径36cmの円形のものが1点のみ検出された。

堆積土は5層で、自然堆積である。

カマドは南東壁の西寄りに設置され、袖部は川原石を芯材とし、煙道部は粘土の貼り付けによって構築されたものと考えられる。長さは80cmを測り、外傾しながら屋外へと立ち上がる。カマド内より土師器14点が出土した。

本住居内より壺1点、土師器19点、鉄製品1点、縄文土器片232点、土器片利用土製品2点、磨石1点、石皿1点、石器18点、石剣1点が出土している。

構築時期は、堆積土、出土遺物から大湯浮石降下（平安時代後半）以後と考えられる。

第304号竪穴住居跡（第4図）

調査区北西部から北西端のYI-89・90、YJ-89・90、YK-89グリッド、Ⅲa層上面で大湯浮石の混入した黒褐色の方形プランを確認した。SI 303と重複し、これに切られている。

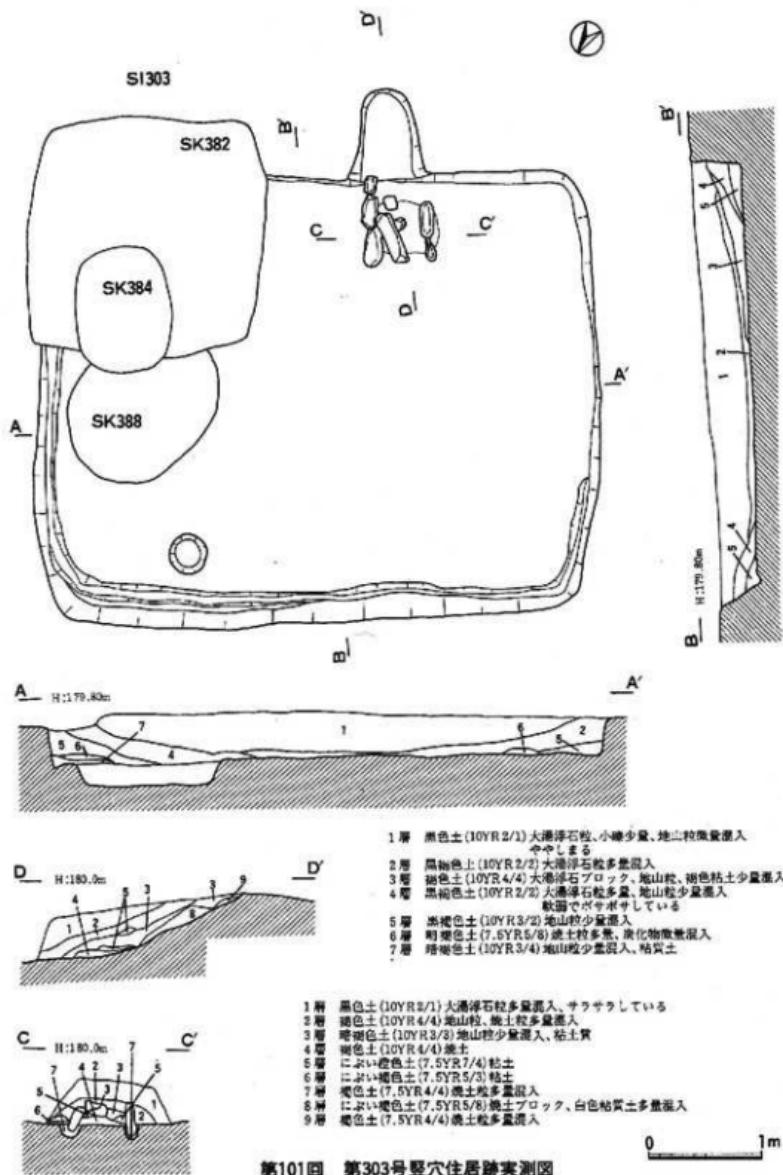
本住居の北西部壁の一部分は、第4次発掘調査時にその一部分が調査されており、本調査ではそのプランのみにとどめた。

確認されたプランから想定される規模は、長軸7.6m、短軸6.8mで東西方向にやや長い方形を呈すると思われる。第4次調査時では、北西部壁沿いに幅5~8cm、深さ4~16cmを測る壁溝、柱穴1個が確認されており、床面には貼床がみられた。

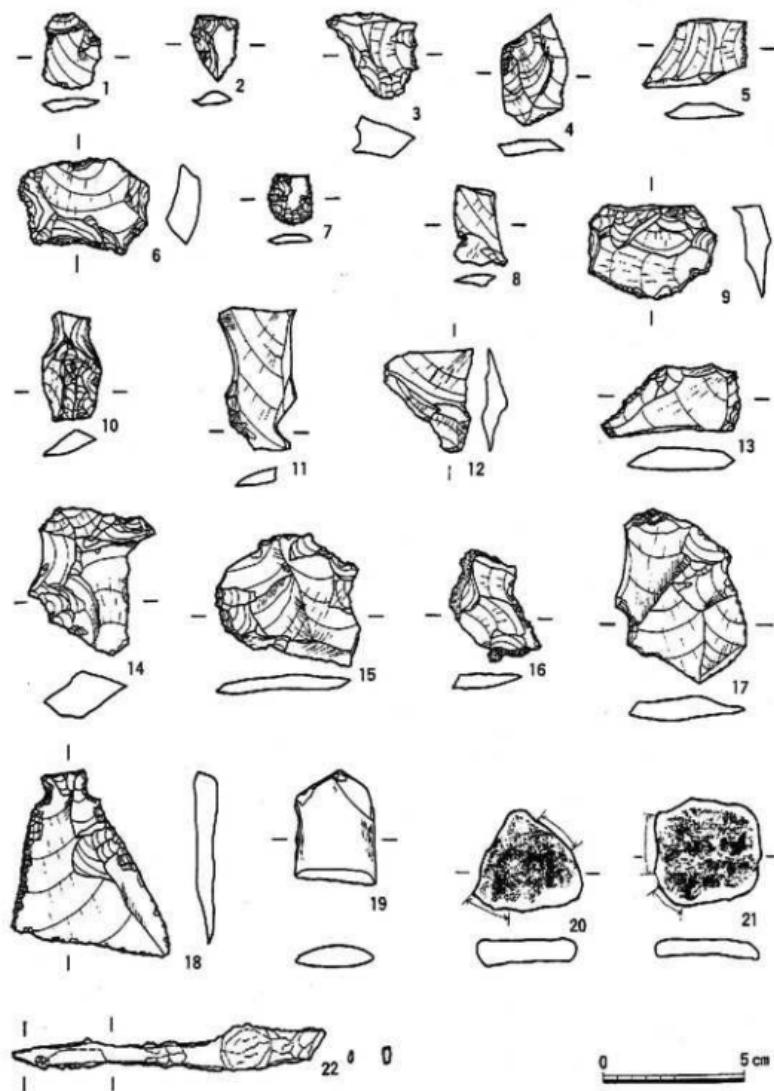
構築時期は堆積土より大湯浮石降下以降（平安時代後半）と考えられる。

2. 土壌

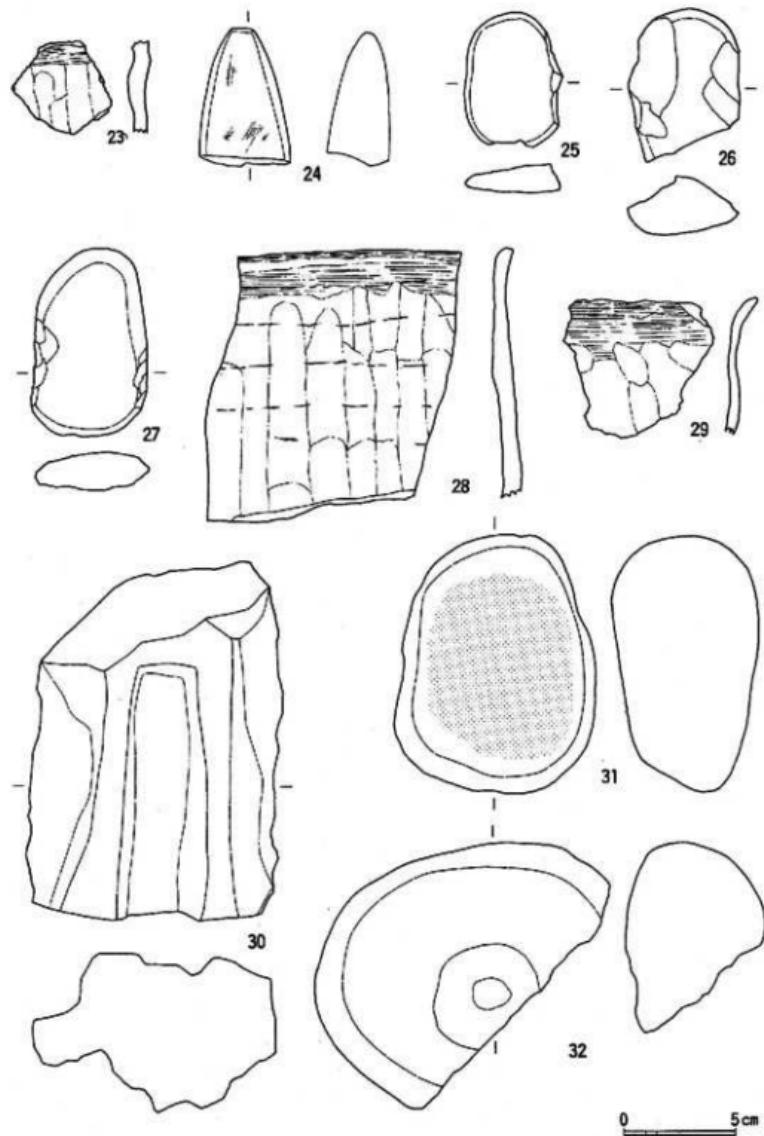
調査区北西部で7基の土壌を検出した。



第101図 第303号竪穴住居跡実測図



第102図 第303号竪穴住居跡出土遺物(1)



第103図 第303号竪穴住居跡出土遺物(2)

第304号土壙 (第104、105図1~2)

調査区北西部 YI-87・88グリッド、Ⅲa層上面で大湯浮石粒の混入する黒褐色の落ち込みを確認した。規模は、長軸2.7m、短軸1.6mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは40cmを測り、底面にはゆるやかな起伏がみられる。壁は底面より外反して立ち上がる。

堆積土は1ブロックで、人為堆積である。

遺構内より縄文土器片78点、磨製石斧1点、土師器1点、須恵器1点が出土した。

構築時期は堆積土、出土遺物から大湯浮石降下以降（平安時代後半）と考えられる。

第305号土壙 (第104、105図3~5)

調査区北西部 YH-88・89グリッド、Ⅲa層上面で大湯浮石粒の混入する黒褐色の落ち込みを確認した。規模は、径1.35m前後の円形を呈し、確認面からの深さは46cmを測る。底面はゆるやかな起伏がみられ、壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がる。

堆積土は5ブロックで、人為堆積である。

遺構内より縄文土器片37点、土師器3点が出土した。

出土遺物、堆積土から構築時期は、大湯浮石降下以降（平安時代後半）と考えられる。

第381号土壙 (第104図)

調査区北西部 YH-88、YI-88グリッド、Ⅲa層上面で確認した。規模は長軸0.86m、短軸0.78mの隅丸方形を呈している。確認面からの深さは20cmを測り、底面はゆるやかな鍋底状で壁はそのまま外反して立ち上がる。

堆積土は1ブロックで、人為堆積である。

遺構内より縄文土器片9点しか出土しなかったが、構築時期は堆積土混入物から大湯浮石降下以降（平安時代後半）と考えられる。

第382号土壙 (第104、105図6~14)

調査区北西部 YI-89・90グリッド、SI303床面上で確認した。SI303、SK384、388と重複し、新旧関係はSI303において述べた。規模は一辺が1.86mの方形を呈する。壁高は1.02mで、底面よりやや内反して立ち上がる。底面は、地山を掘込み、平坦で堅くしまる。

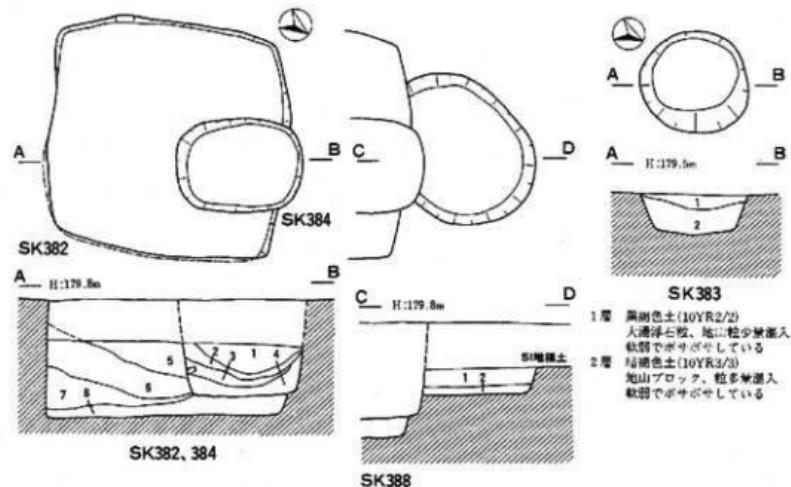
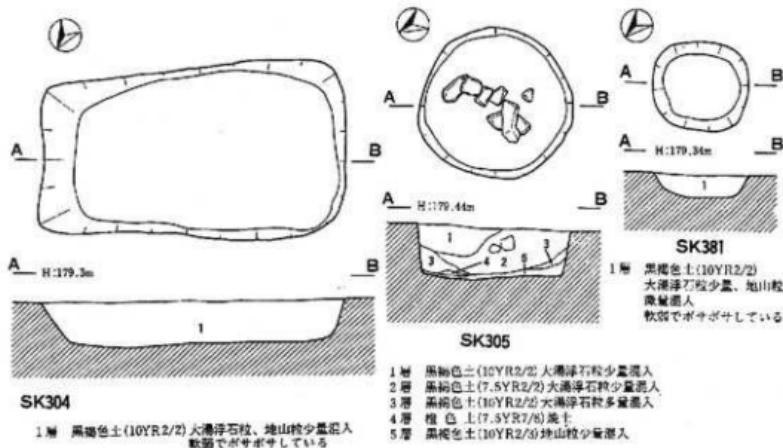
堆積土は5ブロックで、人為堆積である。

遺構内より土師器30点、縄文土器片127点、ミニチュア土器（縄文）1点、土器片利用土製品3点、石器2点が出土した。

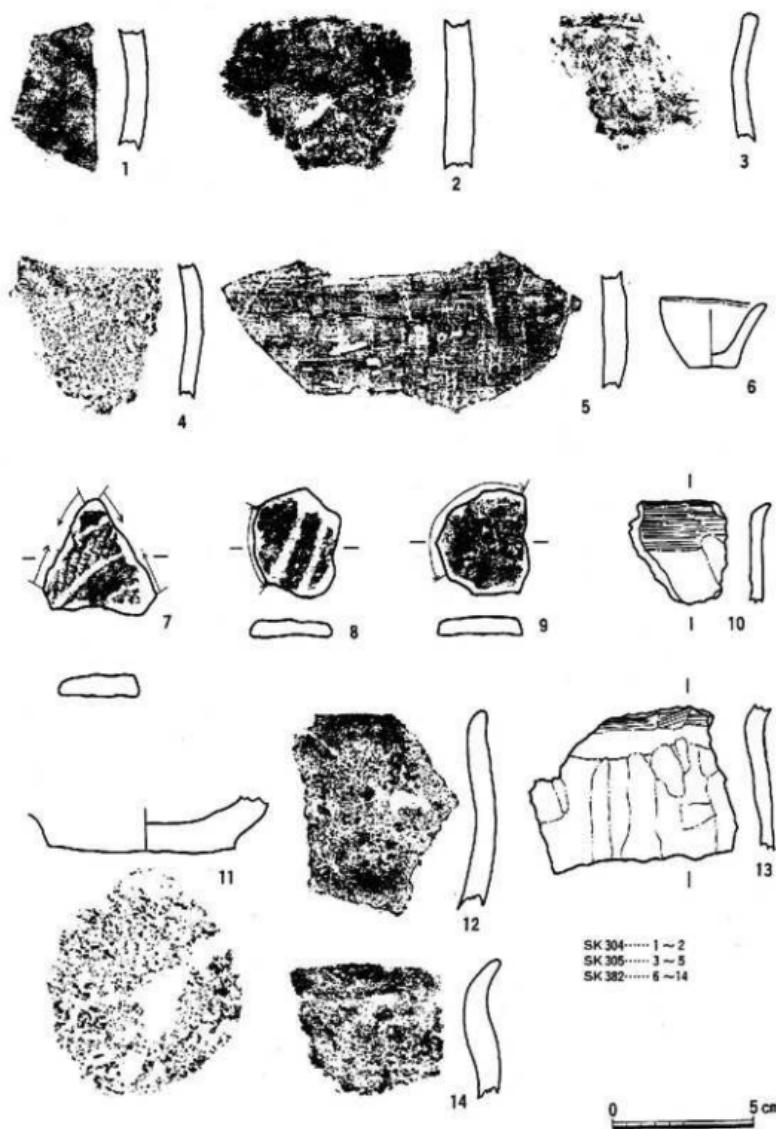
出土遺物から構築時期は、大湯浮石降下以降（安時代後半）と考えられる。

第383号土壙 (第104図)

調査区北西部 YI・YJ-89グリッド、SI303床面上で確認した。規模は、長軸0.94m、短軸0.9mの円形を呈する。確認面からの深さは36cmを測り、底面はゆるやかな鍋底状で、壁は



第104図 第304～305号土壤実測図



第105図 土壤出土遺物

やや外反して立ち上がる。

堆積土は2ブロックの人为堆積である。

縄文土器片2点のみの出土遺物であるが、構築時期は堆積土混入物状況から、大湯浮石降下以降（平安時代後半）と考えられる。

第384号土壙（第104図）

調査区北西部YI-89・90グリッド、SI 303床面上で確認した。SK388、SK382と重複し、本造構が新しい。規模は長軸1.12m、短軸0.84mの隅丸方形を呈している。推定される深さは86cmと思われ、底面は平坦でしまりはなかった。壁は底面よりやや外反して立ち上がる。

堆積土は4ブロックの人为堆積である。

造構内より縄文土器片4点が出土した。

構築時期は堆積土から、大湯浮石降下以降（平安時代後半）と考えられる。

第388号土壙（第104図）

調査区北西部YI-89・90グリッド、SI 303床面上で確認した。SK382、SK384と重複し、本造構が古い。規模は長軸1.48m、短軸1.2mの長楕円形を呈する。確認面からの深さは24cmを測り、底面は平坦で堅くしまっている。壁は底面よりやや外反して立ち上がる。

堆積土は2ブロックで、人为堆積である。

出土遺物は、縄文土器片7点のみの出土であったが、SI 303を切っていることから、構築時期は大湯浮石降下以降（平安時代後半）と考えられる。

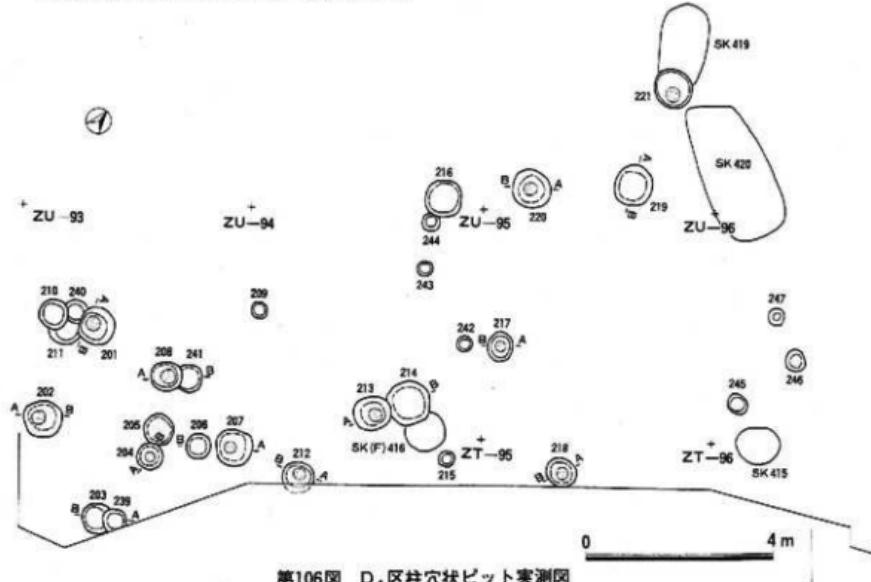
（花海義人）

第V章 D₄区の検出遺構と出土遺物

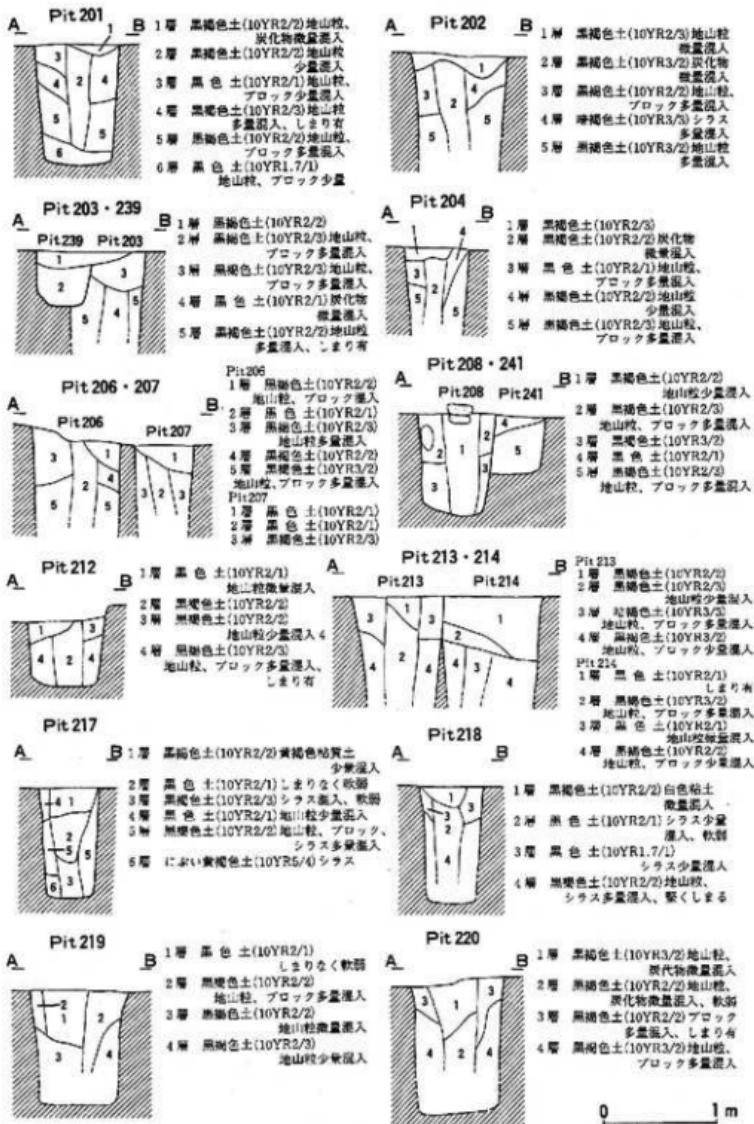
D₄区において、新たに確認された遺構は、縄文時代の柱穴状ビット130個、環状配石遺構1基、方形配石遺構1基、配石列2基、その他の配石遺構3基、石囲炉1基、焼土遺構2基、Tピット2基、フラスコ状土壙6基、土壙17基である。また、これまでの調査によってその一部が確認されていた遺構で今回の調査対象となった遺構は環状配石遺構3基、配石列1基、フラスコ状土壙1基、土壙1基である。

1. 建物跡と柱穴状ビット（第5、106～109図）

D₄区からは130個の柱穴状ビットが検出されたが、そのほとんどは中央部及び南東部のⅢd～Ⅳ層において確認されている。中央部の柱穴状ビットの規模が径19～60cm、深さは10～73cmであるのに対し、南東部の柱穴状ビットは径23～94cm、深さは21～118cmと大規模なものが多い。また、柱痕の確認されたビットも多く、これらのビットのほとんどは4、6本柱の掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。しかし、この周辺には方形配石遺構、配石列等が分布しており、それらの遺構の保存のため、柱穴状ビットの確認面まで掘り下げていない部分も多い。また、想定される建物跡のほとんどは調査区域外へ跨ぐものと考えられ、これらの建物跡のプランについては次年度の調査結果を得てから検討したい。



第106図 D₄区柱穴状ビット実測図



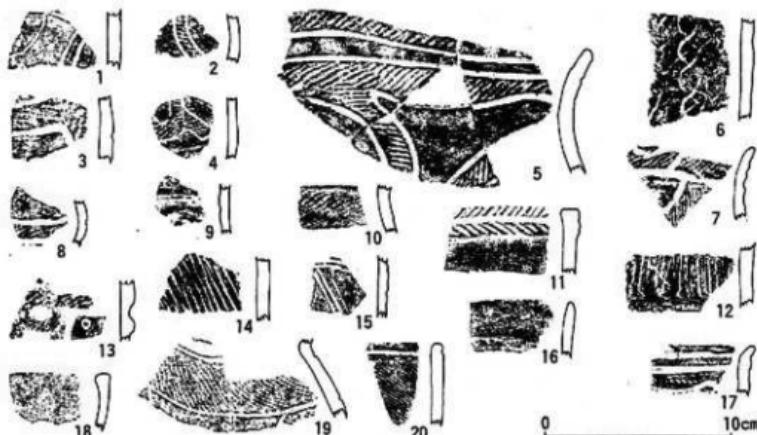
第107図 第201～220号柱穴状ピット断面図

第4表 D₄ 区柱穴状ピット一覧表

(新旧関係は旧→新で表す。記号のないものは新旧不明)

ピット No.	グリッド	長径×短径×深さ (mm)	重複開削	ゾット No.	グリッド	長径×短径×深さ (mm)	重複開削
201	ZU-93	80×30×100.0	Pz211→Pz240→Pz301	244	ZU-94	30×30×65.5	Pz216
202	ZU-ZT-93	36×79×70(上)		245	ZU-95	44×38	
203	ZT-93	65×60×70(上)	Pz208→Pz235	246	ZU-96	46×42	
204	ZT-93	58×58×55(上)		247	ZU-95	36×36	
205	ZU-ZT-93	66×66×55(上)		248	ZW-93	41×40×51.3	
206	ZU-ZT-93	54×54×55(上)		249	*	44×37×35	
207	ZU-ZT-94-94	78×78×60(上)		250	*	34×39×19.6	
208	ZU-93	58×62×93	Pz241→Pz208	251	*	24×21×38.2	
209	ZU-94	34×34×39.4		252	*	24×20×25.7	
210	ZU-93	62×62×10.6	Pz211→Pz240→Pz210	253	ZW-94	39×30×25.5	
211	ZU-93	(66)×(66)×102.5	Pz211→Pz240→Pz211; Pz211→Pz240→Pz210	254	*	38×34×51.2	
212	ZT-94	(70)×(70)×74		255	*	41×39×6.4	
213	ZU-94	82×79×70(上)	Pz214→Pz233	256	*	36×24×35.7	
214	ZU-94	94×94×30(上)	SK(F)408→Pz214→Pz213	257	*	27×27×23	
215	ZT-94	34×34×50.8		258	*	25×25×38.2	
216	ZV-94	82×78×51.7	Pz246	259	*	30×27×40.7	
217	ZU-95	66×54×(102.0)		260	*	33×35×39.9	
218	ZT-95	70×58×(104.0)		261	ZW-95	27×34×57.2	
219	ZV-95	90×80×(102.0)		262	ZX-93	41×36×49.6	
220	ZV-95	83×82×118.9		263	*	30×35×33.9	
221	ZV-95	90×82×(56.0)	SK409→Pz222	264	*	37×37	SK409
222	ZY-95	48×47×47.3		265	*	25×24×53	SK409
223	ZX-95	43×36×36.6		266	*	40×40×46	SK409
224	ZX-94	30×27×51.1		267	*	34×28×41	
225	ZY-94	28×28×40.3		268	*	24×15×32.1	
226	ZY-94	34×30×56.4		269	ZX-93	24×22×51.7	SK409
227	ZX-94	52×40×37.0		270	ZX-93-94	25×25×45.3	
228	ZX-94	34×31×56.2		271	*	24×24×56.5	SK409
229	ZW-94	30×25×40.2		272	*	22×19×48.5	SK409
230	ZW-94	25×22×38.8		273	ZX-94	30×27×55.5	SK409
231	ZW-94	41×32×51.0		274	*	43×28×57.4	
232	ZW-94	30×27×40.1		275	*	19×18×57.9	
233	ZW-94	38×36×54.4		276	*	20×30×52.3	
234	ZW-94	34×30×56.9		277	*	32×31×48.6	
235	ZX-94-95	36×34×37.7		278	*	27×24×46.7	
236	ZY-94	54×34×52.7		279	*	25×23×38.1	
237	ZY-94	37×32×22.1		280	*	27×24×35.5	
238	ZX-95	39×56×46.4		281	*	28×36×30.8	
239	ZT-93	50×50×47.0	Pz208→Pz235	282	*	30×28×41	
240	ZU-93	30×48	Pz211→Pz240→Pz235; Pz211→Pz240→Pz211	283	*	21×21×49.6	
241	ZU-93	60×56×52.5	Pz241→Pz208	284	*	24×23×42.3	
242	ZU-94	32×32		285	*	22×22×34.1	
243	ZU-94	32×39		286	*	25×34×51.2	

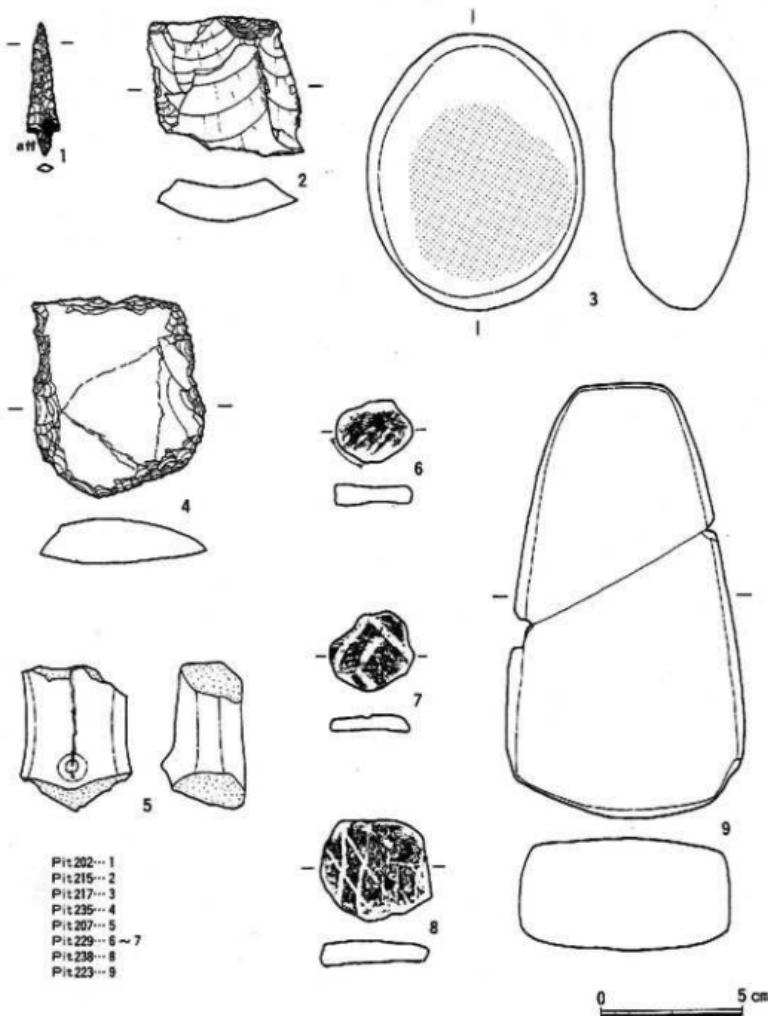
ピット No.	グリッド	長径×短径×深さ (cm)	重複関係	ピット No.	グリッド	長径×短径×深さ (cm)	重複関係
287	ZX-94	28×24×37.7		309	ZY-94	33×18×11.9	SK 468
288	*	35×34×32.6		310	*	27×26×58.1	
289	*	28×23×50		311	*	34×20×25.3	
290	ZX-94~95	32×32×55.5		312	*	29×25×27.5	
291	*	20×15×10.3		313	*	35×30×38.9	
292	ZX-95	29×25×34.9		314	*	25×25×43.6	
293	*	25×25×58.2		315	*	38×22×47.3	
294	*	35×25		316	*	38×38×44.9	
295	*	38×32×72.8		317	*	31×38×59.9	
296	*	24×21×30.7		318	*	33×22×31.9	
297	*	21×22×30.5		319	*	37×31×49.9	
298	ZY-95	57×57×73.0	SK 465→Pit 298	320	*	30×30×33.3	
299	*	47×44×63.8		321	ZY-ZX-95	35×25×63.8	
300	*	27×23×39.1		322	ZY-95	27×26×48.4	
301	*	32×27×53		323	*	31×28×5.5	
302	*	32×34		324	*	31×28×53.9	
303	*	40×40×72.1		325	*	34×27×61.2	
304	ZY-95	24×22×60.9		326	ZZ-95	43×32×35.0	
305	*	30×21×13.7		327	YA-ZZ-95	29×28×30.0	
306	*	24×23×10		328	YA-95	45×44×45.0	
307	*	25×23×47.8		329	*	60×45×35.0	
308	*	19×16×15.3	SK 468	330	*	30×33×48.0	



Pit 201.....1 Pit 205.....5~7 Pit 215.....11 Pit 223.....14 Pit 233.....18
 Pit 202.....2~3 Pit 212.....8 Pit 218.....12 Pit 226.....15~16 Pit 236.....19
 Pit 203.....4 Pit 215.....9~10 Pit 222.....13 Pit 232.....17 Pit 237.....20

第108図 D₄区柱穴状ピット出土遺物(1)

中央部のピット群のうち、ZY～ZX-93～95グリッドに径 7m の環状に分布するピット群については、建物跡の壁柱穴の可能性もあるが、この周辺が微高地でありV層まで擾乱が及んでいること、主柱穴を明確にし得なかったことから建物跡とすることを見送った。



第109図 D₄区桂穴状ピット出土遺物(2)

2. 配石遺構

(1) 環状配石遺構

第401号環状配石遺構（第110図、119図1～2、120図5）

D₄区北西部のYF-YC-93～95グリッドに位置し、Ⅲd層上面を構築面とする。本遺構は第4次調査でその南西部を確認、第207号環状配石遺構として報告している遺構である。環帶部は径8.8m、帯幅は76cmで、南南東側に4.8×2.4mの張り出し部を有する。配石に使用されている石は12～60cm大の大きさで、その石材は石英閃緑玢岩、石英安山岩、凝灰岩などである。石英閃緑玢岩が約6割を占め、石英安山岩がこれに次ぐ。

環帶部の内側3箇所より76×48cm、124×122cm、33×32cmの広がりの焼土が確認されている。本遺構内及び近傍から縄文土器破片5点、土器片利用土製品1点の出土があった。

第402号環状配石遺構（第111図、120図1）

D₄区北西部のYB-ZZ-97～99グリッドに位置し、Ⅲd層上面を構築面とする。本遺構は第9次調査でそのほとんどを確認、第909号環状配石遺構として報告している遺構である。今回の調査では張り出し部南東端の石1個と環帶部内側の焼土が検出されている。

環帶部は径8.8m、南側に2.6×1.8mの張り出し部を有する。配石に使用されている石は10～52cm大の大きさで、その石材は石英閃緑玢岩、石英安山岩、流紋岩、凝灰岩などである。石英閃緑玢岩が9割を占め、石英安山岩がこれに次ぐ。

環帶部の内側2箇所より156×140cm、56×40cmの広がりの焼土が確認されている。

本遺構内から搔器1点の出土があった。

第403号環状配石遺構（第112図、119図3～13、120図2、6～7）

D₄区北東部のZY-ZX-97～98グリッドに位置し、Ⅲd層上面を構築面とする。本遺構は第9次調査でその北東側を確認、第910号環状配石遺構として報告している遺構である。

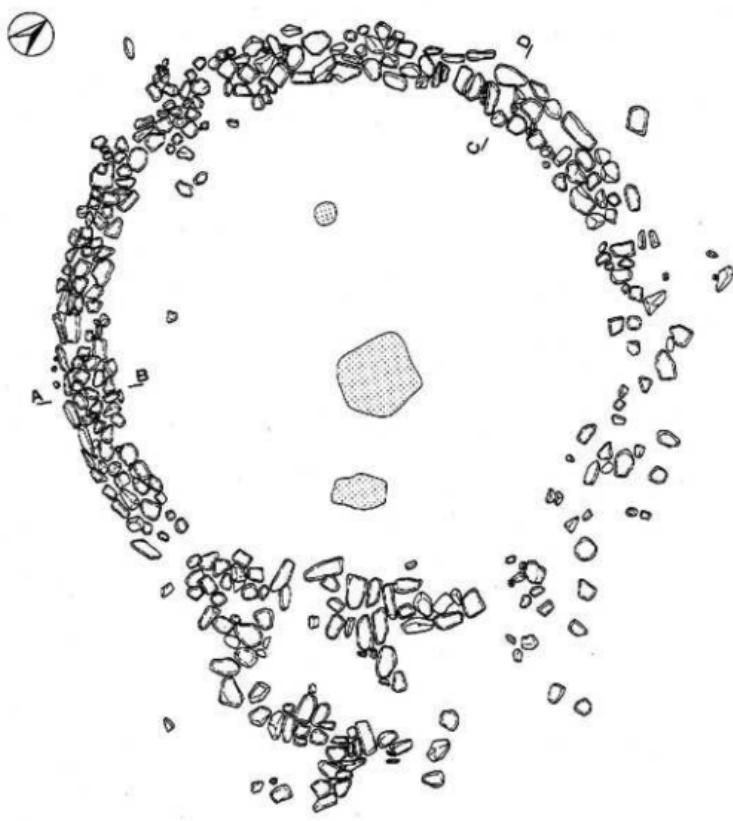
かなり破壊を受けているが、環帶部は径7.2×6.6m、南西側に位置する張り出し部2.4×1.3の規模と考えられる。配石に使用されている石は14～64cm大の大きさで、その石材は石英閃緑玢岩、石英安山岩、泥質凝灰岩、緑色凝灰岩などである。石英閃緑玢岩が約8割を占める。

環帶部の内側2箇所より84×76cm、104×100cmの広がりの焼土が確認されている。

本遺構内及び近傍から縄文土器破片190点、搔器1点、土器片利用土製品4点の出土があった。

第407号環状配石遺構（第113図）

D₄区北西部のYD-YC-96グリッドのⅢd層上面で16×64cm大の石が密集して確認された。これらの配石はその位置等から、環状配石遺構の張り出し部で、環帶部は北東側の調査区域外に延びるものと考えられる。張り出し部の規模は3.8×1.8m、配石に使用されている石は12～

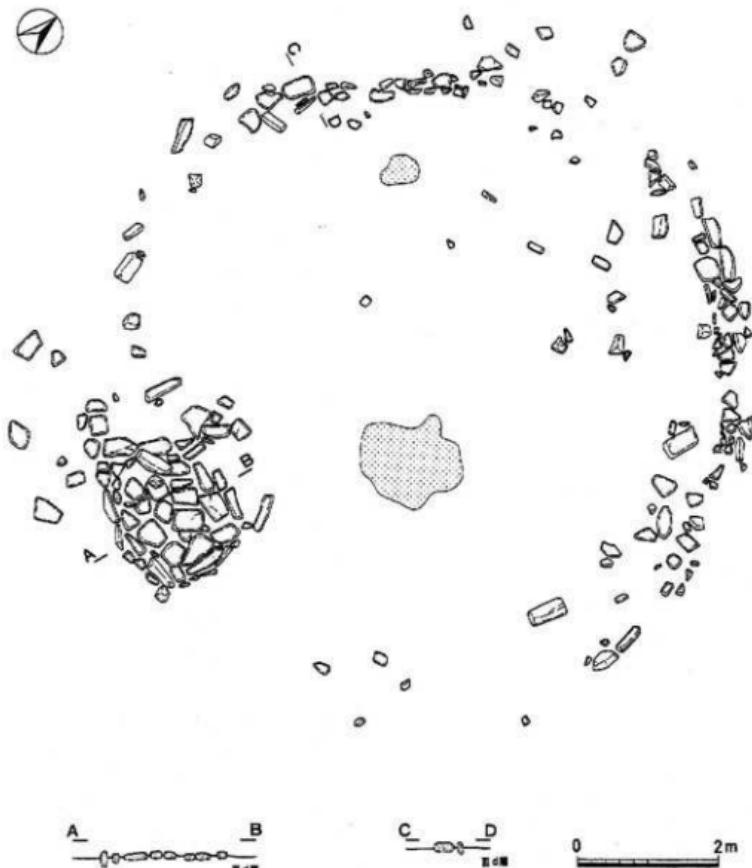


A ————— B
1 m

C ————— D
1 m

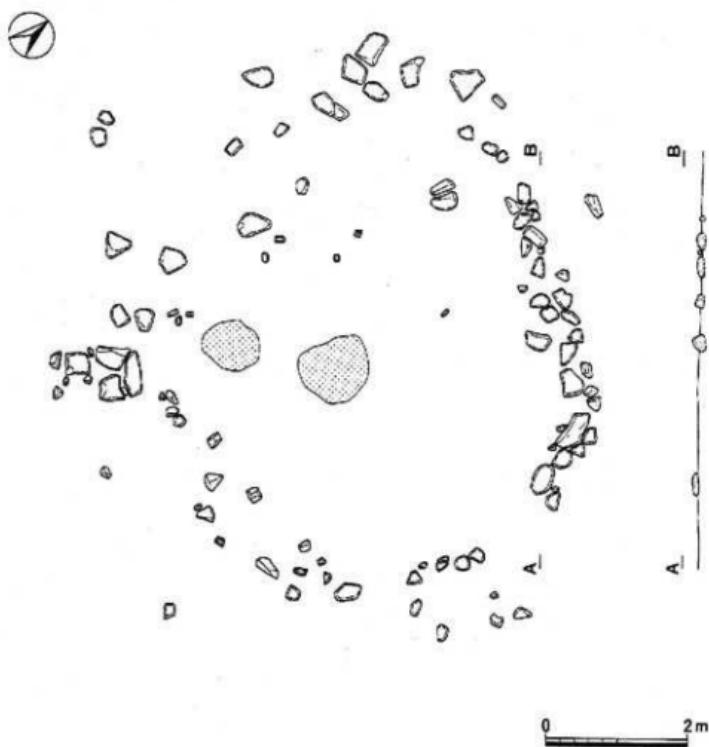
0 ————— 2m

第110図 第401号環状配石遺構実測図

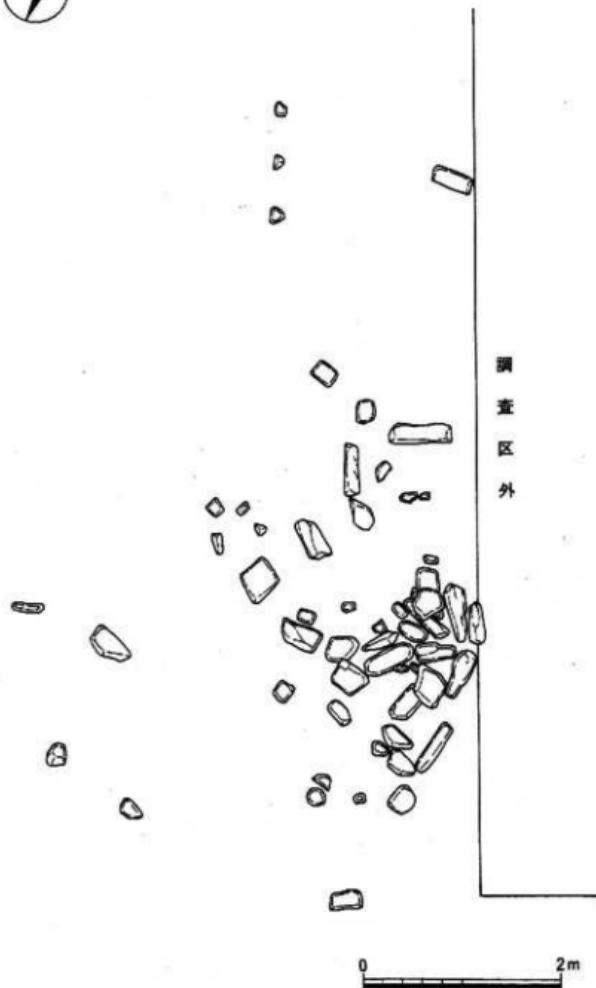


第111図 第402号環状配石造構実測図

64cm大の大きさで、その石材は石英閃綠玢岩、石英安山岩、安山岩、凝灰岩などである。石英
閃綠玢岩が約9割を占め、安山岩がこれに次ぐ。



第112図 第403号環状配石造構実測図



第113図 第407号環状配石遺構実測図

(2) 方形配石遺構

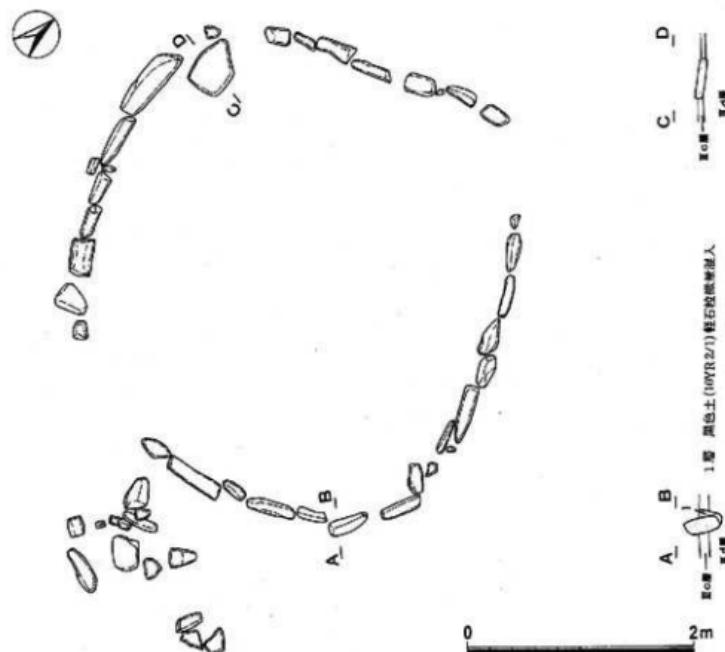
第406号方形配石遺構（第114図、119図15～18、120図4、10～13）

D₄区南東部のZV～ZU-93～94グリッドに位置し、Ⅲd層上面を構築面とする。第428号フランスコ状土壤と重複するが、新旧関係は確認できていない。

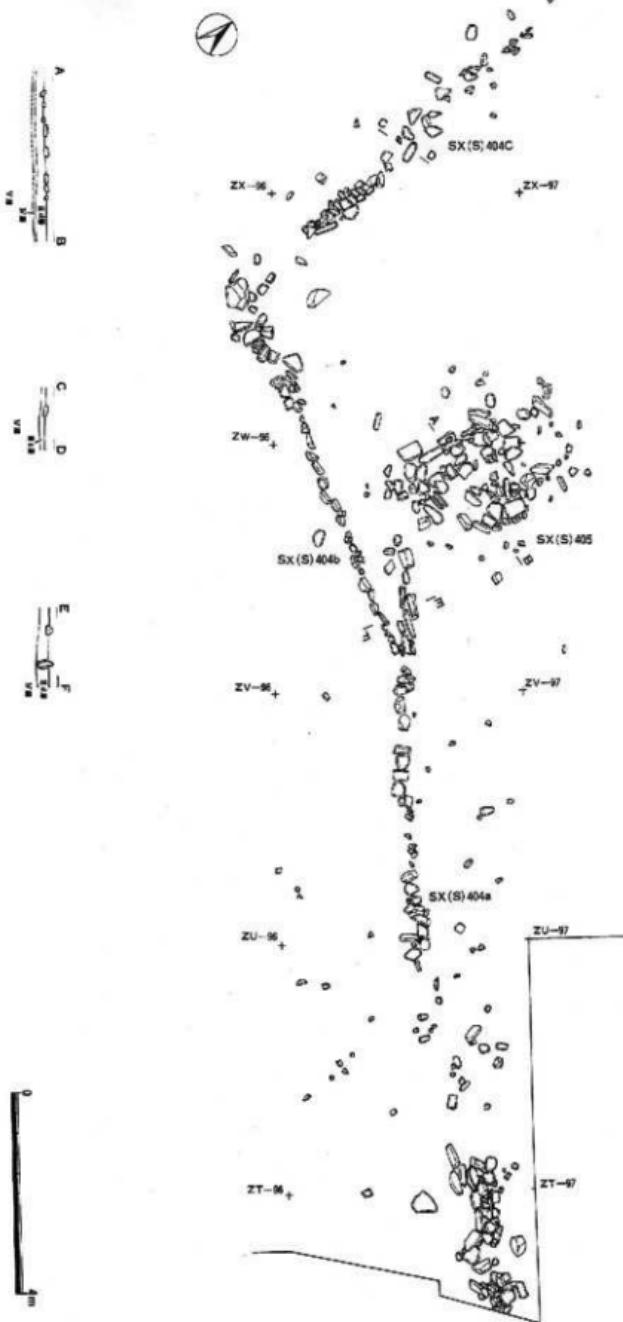
14～72cm大の偏平な石を4.2×3.9mの正方形に立て並べたので、その石材は石英閃綠玢岩、石英安山岩、安山岩、緑色凝灰岩である。石英閃綠玢岩が約9割を占め、石英安山岩がこれに次ぐ。なお、配石内より焼土は確認されていない。

本遺構南側から、8～32cm大の石14個が確認されているが、本遺構に伴うものか、別遺構かは確認できなかった。

本遺構内及び近傍から縄文土器破片32点、搔器1点、土器片利用土製品3点、石冠1点の出土があった。



第114図 第406号方形配石遺構実測図



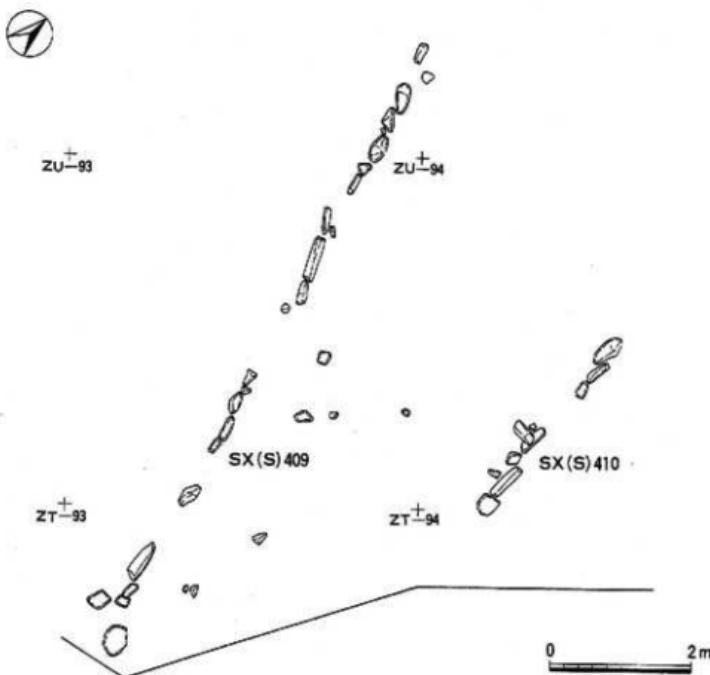
(3) 配石列

第404号配石列 (第115図、119図14)

D₄区中央部から北西部にかけてのZY-ZT-93-94グリッドに位置し、Ⅲd層上面を構築面とする。本遺構は昭和21年の調査でその南東部を確認、「大湯町環状列石」(昭和28年3月)で第一区石列として報告されている遺構である。第431号Tピットと重複し、本遺構が新しい。また、第405号配石遺構とは新旧関係にあるのか、一連の遺構であるのか確認できなかった。

配石列は3基の直線状の石列(a、b、c列)より成る。a列は発掘区南東端から405号配石遺構まで伸び、その長さは15.7m、方位はN-55°-Wである。b列はa列の終点の2.4m手前で分岐、N-70°-W方向へ伸びる。その長さは8.1m。c列はb列の終点からはば磁北へ向きを変え、その長さは9.0mである。これらの石列には20~60cmの細長あるいは偏平な石が使用され、それらの石が1~2列に立て並べられている。石材は石英閃緑玢岩がほとんどである。

本遺構周辺から縄文土器破片5点の出土があった。



第116図 第409、410号配石列実測図

第409号配石列（第116図）

D₄区南東部のZV～ZT-93～94グリッドに位置し、Ⅲd層上面を構築面とする。N-22°-W方向の直線状に延びる配石列で、確認された長さは9.8mである。本配石列はさらに南南東方向に延び、万座環状列石に接する可能性もある。使用されている石は12～64cm大、石材は石英閃綠玢岩がほとんどで、他に凝灰岩や砂質凝灰岩数点がみられる。

第410号配石列（第116図）

D₄区南東端のZU～ZT-93～94グリッドに位置し、Ⅲd層上面を構築面とする。N-12°-W方向の直線状に延びる配石列で、確認された長さは3.2mである。本配石列もさらに南南東方向に延びていた可能性がある。石の大きさ、石材とも409号配石列とほぼ同じである。

(4) 配石遺構

第405号配石遺構（第115図、119図19～21、120図3）

D₄区北東部のZX～ZW-96～97グリッドに位置し、Ⅲd層上面を構築面とする。環状配石遺構の張り出し部に類似する配石形態、規模の配石遺構である。第404号配石列との関連が問題となる。配石の規模は3.6×2.2m、配石に使用される石の大きさは10～56cm、石材はほとんど



第117図 第408号配石遺構、401号石圓炉、402号焼土状遺構実測図

石英閃綠玢岩である。

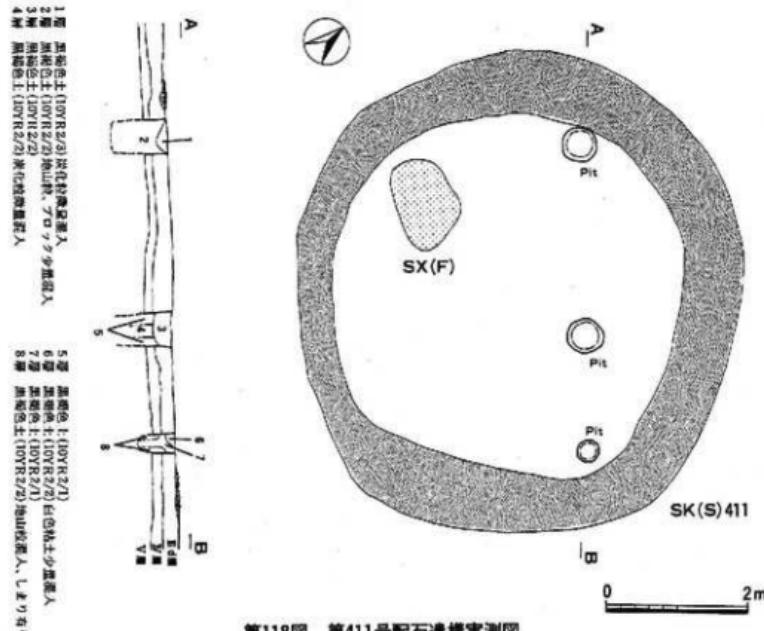
本遺構周辺から縄文土器破片7点、敲石1点の出土があった。

第408号配石遺構（第117図）

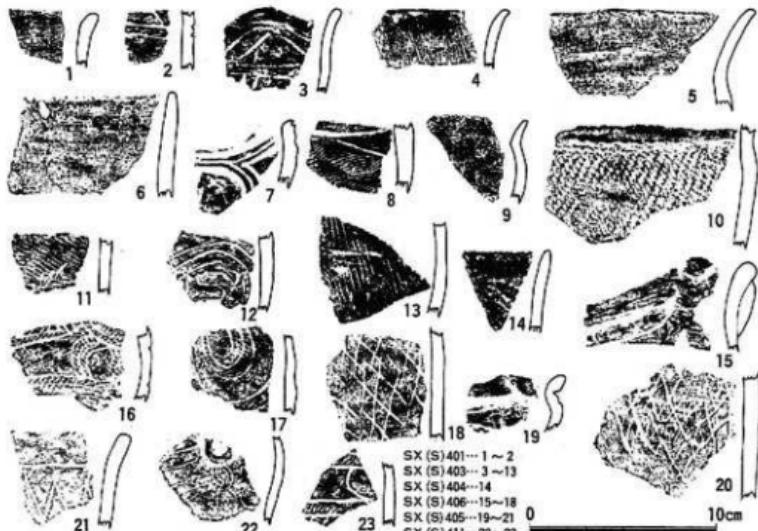
D₄区南東部のZW～ZV-94～95グリッドに位置し、Ⅲd層上面を構築面とする。環状配石遺構の張り出し部に類似する配石とそれに続く逆L字状の配石列より成る。配石列部分が方形に閉じるかどうか精査したが、石の抜き取り痕や攪乱された痕跡はみられなかった。張り出し部の規模は1.8×1.6m、配石列部分の長さは4.4mと4.0m、その幅は40cmである。配石に使用される石の大きさは10～55cm、石材はほとんど石英閃綠玢岩である。本配石内より石圓炉、焼土遺構各1基が検出されたが、その位置関係から本遺構と重複する別遺構と判断した。なお、その新旧関係は確認されていない。

第411号配石遺構（第118図、119図22～23）

D₄区南東部のZW～ZV-98～99グリッドに位置し、Ⅲd層上面を構築面とする。1～5cm大のたくさんの円礫が径3.4m、幅46cmの環状に分布しているもので、環状小礫群とでも呼ぶべき遺構である。第9次調査で確認された第909号土壇が本遺構のほぼ中央に位置するが、本造



第118図 第411号配石遺構実測図



第119図 D₄区配石遺構出土遺物(1)

構との関連はつかめていない。また、環内より焼土や3個のピットが確認されたが、本遺構に伴うかどうかは不明。

本遺構内及び近傍から縄文土器破片12点の出土があった。

3. 石圓炉

第401号石圓炉（第117図）

D₄区南東部のZV-94グリッド・Ⅲd層上面で確認した。第408号配石遺構と重複するが、新旧関係は不明。一部炉石を消失しているが、10~24cm大の石を76×60cmの楕円形に配置した石圓炉と考えられる。炉内より44×36cmの範囲で焼上が確認された。

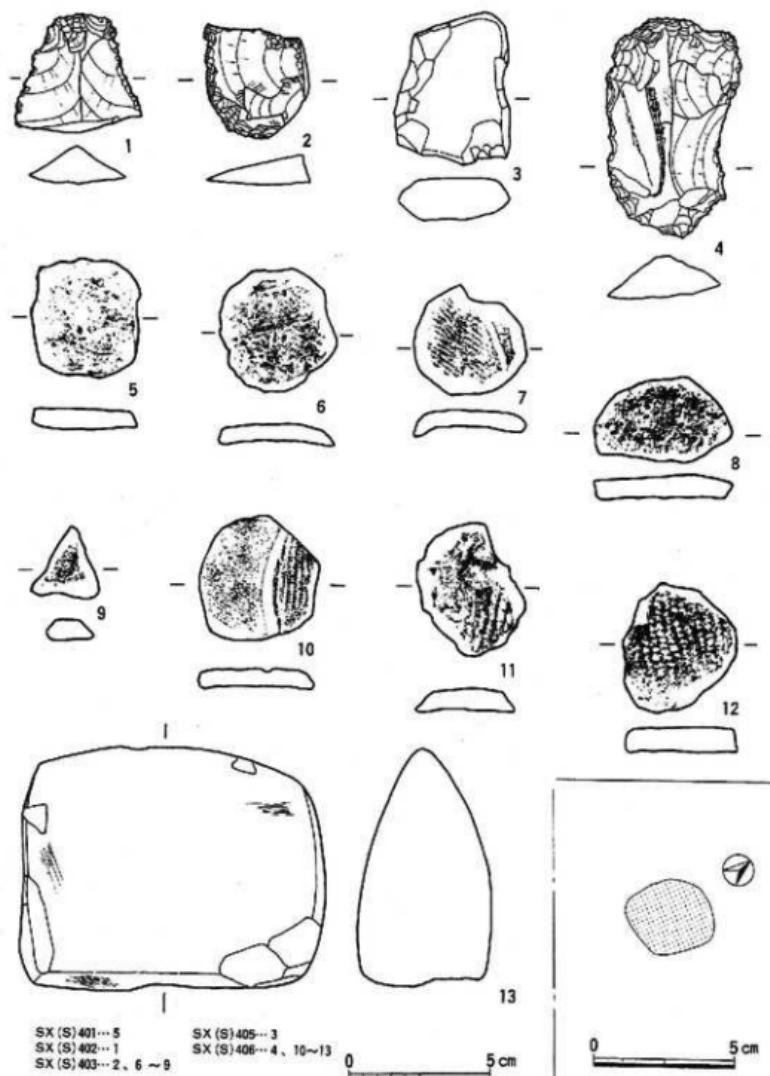
4. 焼土遺構

第401号焼土遺構（第121図）

D₄区南東部のZW-94グリッド・Ⅲd層上面で確認した。焼土範囲は64×54cmである。

第402号焼土遺構（第117図）

D₄区南東部のZV-95グリッド・Ⅲd層上面で確認した。第408号配石遺構と重複するが、新旧関係は不明。焼土範囲は64×59cmである。



第120図 D₄区配石遺構出土遺物(2)

第121図 第401号焼土状遺構実測図

5. 土壌

(1) Tピット

第431号Tピット（第122図）

D₄区中央部北東寄りのZZ～ZY-96グリッド・IIId層中位で確認した。第404号配石列と重複、本造構が古い。同配石列保護のため、南東側は造構確認面まで掘り下げていない。ピットの幅は70cm、長軸方向はN-60°-Wである。

プラン確認のみで掘り下げていないため、深さ、堆積状況等は不明。

第433号Tピット（第122図）

D₄区西北部のYF～YE-96グリッド・IV層上面で確認した。規模は400×48cm、長軸方向はN-52°-Wである。

プラン確認のみで掘り下げていないため、深さ、堆積状況等は不明。

(2) フラスコ状土壌

第404A号フラスコ状土壌（第123図）

D₄区南西端のZZ-93グリッドに位置する。本造構は第4次調査でその一部を確認、第232号フラスコ状土壌として報告している。第404B号土壌と重複、本造構が新しい。

口縁部は116×115cm、底部は187×167cm、深さは156cmを測る。堆積土は11ブロックに区分され、人為堆積である。

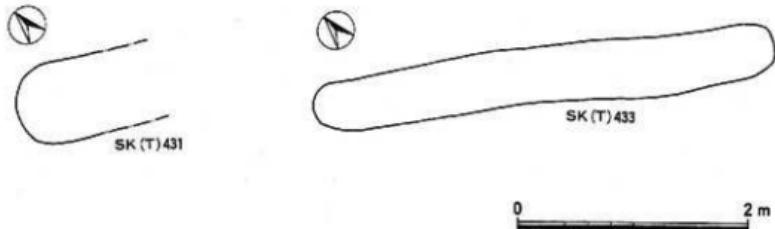
土壌内より縄文土器破片17点の出土があった。

第412号フラスコ状土壌（第123図、124図1～10、125図2～5）

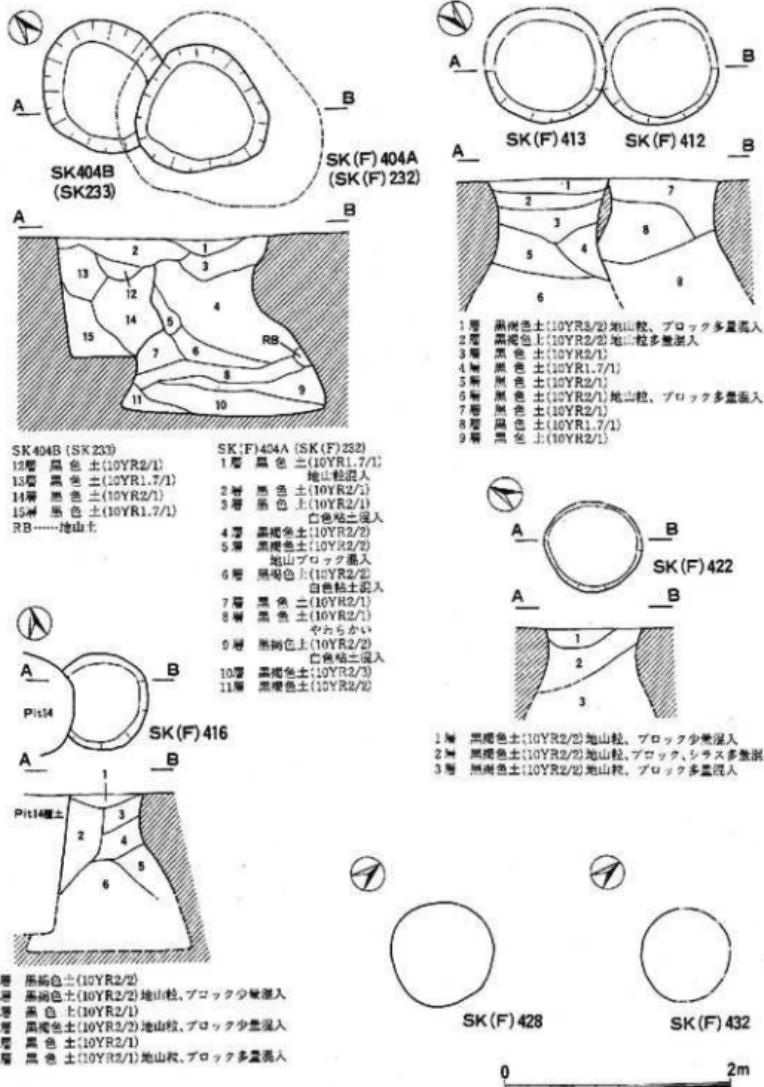
D₄区南西端のZY-93グリッド・IIId層中位で確認した。第413号フラスコ状土壌と重複、本造構が古い。

口縁部は105×101cmの円形である。造構の種類、新旧関係が判明した100cmまでしか掘り下げていないため深さ等は不明。堆積土は3ブロック以上に区分され、人為堆積である。

土壌内より縄文土器破片56点、土器片利用土製品4点の出土があった。



第122図 第431・433号Tピット実測図



第123図 第404A～432号 フラスコ状土壤実測図

第413号フラスコ状土壙（第123図、124図11～15、125図1）

D₄区南西端のZY-93グリッド・Ⅲd層中位で確認した。第412号フラスコ状土壙、第406号土壙と重複、本造構はいずれよりも新しい。

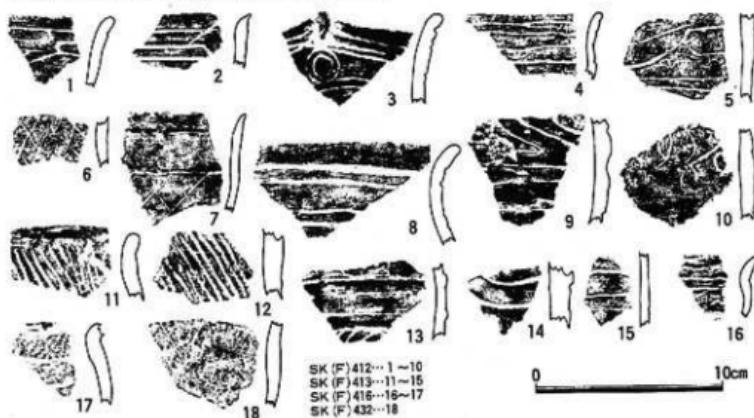
口縁部は径165cmの円形である。造構の種類、新旧関係が判明した100cmまでしか掘り下げていないため深さ等は不明。堆積土は6ブロック以上に区分され、人為堆積である。

土壙内より縄文土器破片23点、搔器1点の出土があった。

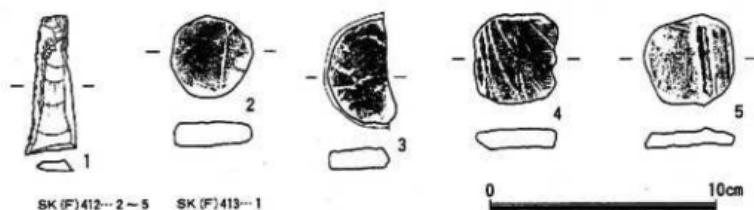
第416号フラスコ状土壙（第123図、124図16、17）

D₄区南東端のZT-94グリッド・Ⅲd層中位で確認した。ピット414と重複、本造構が古い。口縁部は86×80cmの円形である。造構の種類、新旧関係が判明した90cmまでしか掘り下げていない。ボーリング棒による調査では深さは140cm、堆積土は6ブロック以上に区分され、人為堆積である。

土壙内より縄文土器破片14点の出土があった。



第124図 D₄区 フラスコ状土壙出土遺物(1)



第125図 D₄区 フラスコ状土壙出土遺物(2)

第422号フ拉斯コ状土壙（第123図）

D₄区中央部のZX-95グリッド・Ⅳ層で確認した。

口縁部は85×82cmの円形、深さは遺構の種類が判明した46cmの深さまでしか掘り下げていないため不明。堆積土は3ブロック以上に区分され、人為堆積である。

第428号フ拉斯コ状土壙（第123図）

D₄区南東部のZV-93グリッド・Ⅲd層上面で確認した。第406号方形配石遺構と重複するが、新旧関係は不明。

口縁部は径90cmの円形、深さ等は掘り下げていないため不明。

第432号フ拉斯コ状土壙（第123図、124図18）

D₄区西北部のZZ-96～97グリッド・Ⅲd層中位で確認した。

口縁部は径83cmの円形、プラン確認のため10cm程掘り下げただけなので、深さは不明。

土壙内より縄文土器破片3点の出土があった。

(3) 土壙

第401号土壙（第126図、130図1～3、132図1）

D₄区南西部のYA-93グリッド・Ⅲd層中位で確認した。平面形は118×117cmの円形、深さは32cmを測る。堆積土は2層に区分され、自然堆積と考えられる。

土壙内より縄文土器破片21点、土器片利用土製品1点の出土があった。

第402号土壙（第126図、130図4～8）

D₄区南西部のYA-93グリッド・Ⅲd層中位で確認した。平面形は105×100cmの隅丸方形、深さは46cmを測る。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

土壙内より縄文土器破片38点の出土があった。

第403号土壙（第126図、130図9～11）

D₄区南西部のZZ-93グリッド・Ⅲd層中位で確認した。平面形は145×92cmの楕円形で、長軸方向はN-50°-W、深さは43cmである。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。

土壙内より縄文土器破片7点の出土があった。

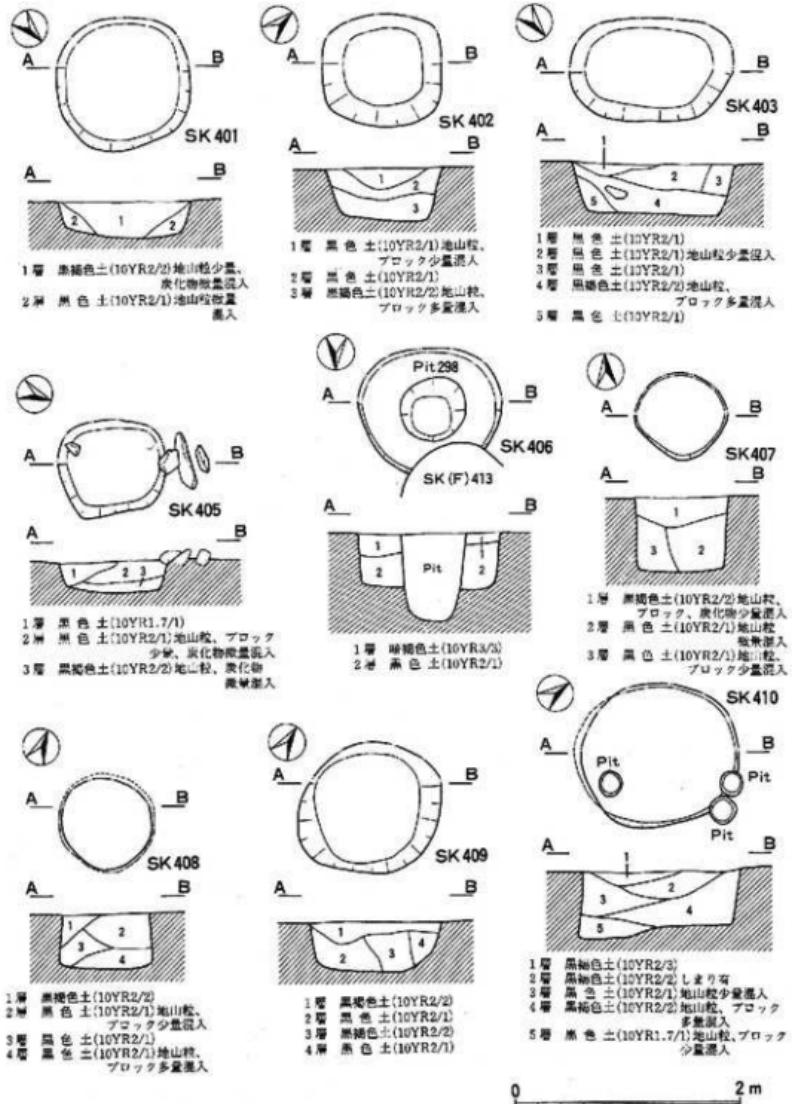
第404B号土壙（第126図、130図12～14）

D₄区南西端のZZ-93グリッドに位置する。本遺構は第4次調査でその一部を確認、第233号土壙として報告している。第404A号フ拉斯コ状土壙と重複、本遺構が古い。平面形は115×110cmの円形、深さは104cmである。堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

土壙内より縄文土器破片35点の出土があった。

第405号土壙（第126図、130図15～19）

D₄区中央部南西寄りのZZ-93～94グリッド・Ⅲd層中位で確認した。平面形は95×85cmの



第126図 第401~410号土壤実測図

隅丸方形、深さは38cmを測る。北側に22~50cm大の自然石3個が隣接しており、本遺構との関連が考えられる。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

第406号土壙 (第126図、130図20~29)

D₄区南西端のZY~ZX-93グリッド・Ⅲd層中位で確認した。第413号フ拉斯コ状土壙、ピット298と重複、本遺構はいずれよりも古い。平面形は133×110cmの円形、深さは47cmである。堆積土は2ブロックに区分され、人為堆積である。

土壙内より縄文土器破片84点の出土があった。

第407号土壙 (第126図、130図30~31)

D₄区中央部南西寄りのZY-93グリッド・Ⅲd層中位で確認した。平面形は76×74cmの円形、深さは65cmである。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

土壙内より縄文土器破片12点の出土があった。

第408号土壙 (第126図、130図32~33、132図2~5)

D₄区中央部のZY-29グリッド・IV層で確認した。平面形は82×78cmの円形、深さは48cmである。堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

土壙内より縄文土器破片19点、土器片利用土製品4点の出土があった。

第409号土壙 (第126図、129図、130図34~37、132図6)

D₄区南西部のZX-93グリッド・IV層で確認した。平面形は127×117cmの円形、深さは44cmである。堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

土壙内より縄文時代後期の鉢、壺それぞれ1個体他、縄文土器破片26点、凹石1点の出土があった。

第410号土壙 (第126図、131図38~42、132図7)

D₄区中央部南西寄りのZX-93~94グリッド・IV層で確認した。平面形は138×127cmの円形、深さは58cmである。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。

土壙内より縄文土器破片55点、凹石1点の出土があった。

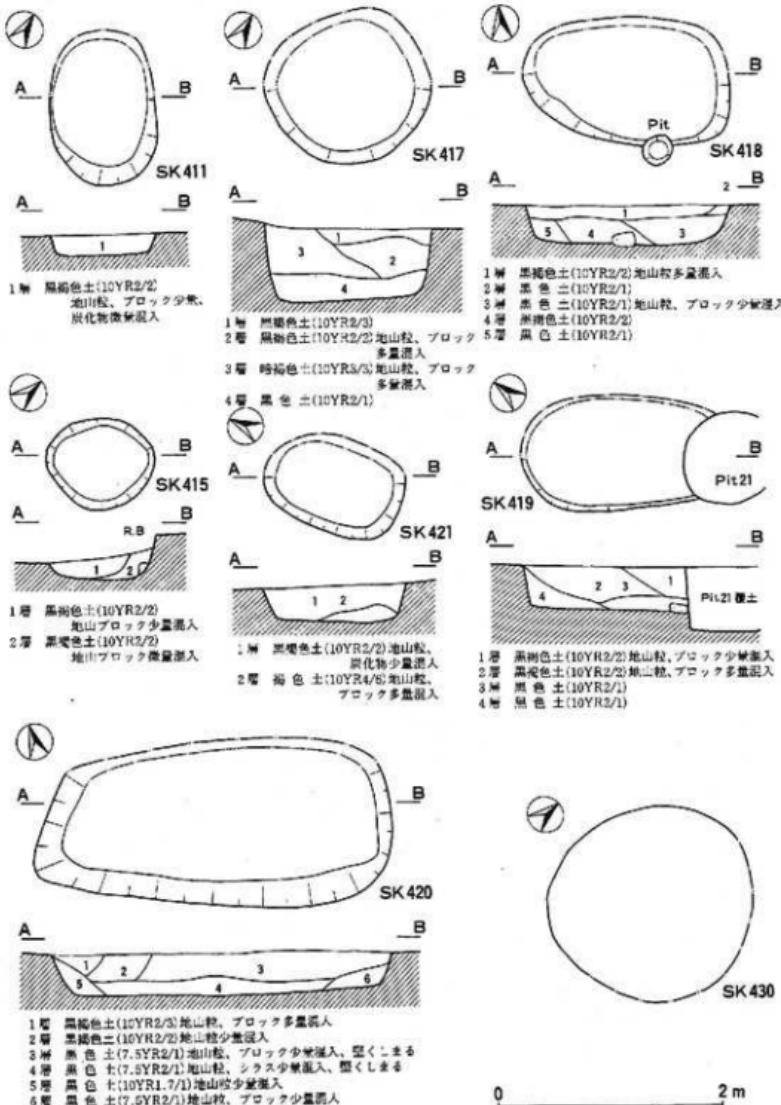
第411号土壙 (第127図、131図43~47)

D₄区南西部のZX-93グリッド・IV層で確認した。平面形は137×92cmの楕円形で長軸方向はN-30°-W、深さは19cmである。堆積土は黒褐色土の單一層で、人為堆積と考えられる。

土壙内より縄文土器破片5点の出土があった。

第415号土壙 (第127図、128図)

D₄区南東端のZU~ZT-96グリッド・Ⅲd層中位で確認した。平面形は88×86cmの円形、深さは39cmである。堆積土は2層に区分され、自然堆積と考えられる。



第127図 第411～430号土壤実測図

第417号土壙（第127図）

D₄区中央部のZX-95グリッド・IV層で確認した。平面形は140×133cmの円形、深さは63cmである。堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

土壙内より縄文土器破片54点の出土があった。

第418号土壙（第127図、131図）

D₄区南東部のZW～ZV-95グリッド・III d層上位で確認した。平面形は181×114cmで、長軸方向はN-85°-W、深さは34cmである。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。

第419号土壙（第127図）

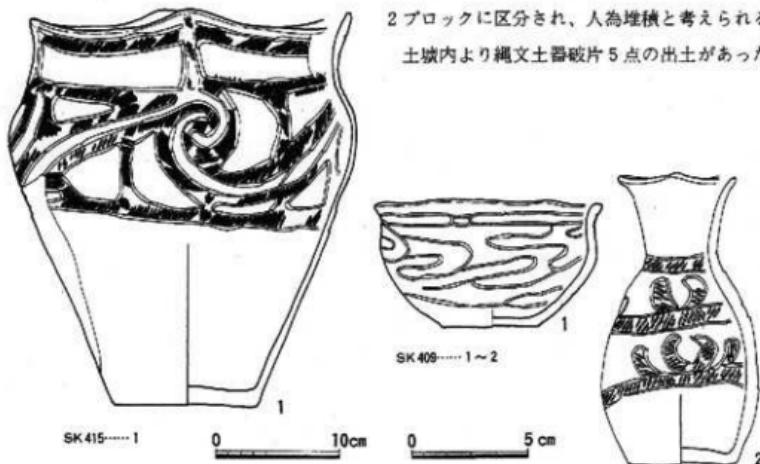
D₄区南東部のZV-95グリッド・III d層上位で確認した。ピット21と重複、本遺構が古い。平面形は182×104cmの楕円形、長軸方向はN-40°-W、深さは38cmである。堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

第420号土壙（第127図）

D₄区南東部のZV～ZU-95～96グリッド・III d層上位で確認した。平面形は311×150cmの隅丸方形で、長軸方向はN-76°-W、深さは37cmである。堆積土は6ブロックに区分され、人為堆積である。

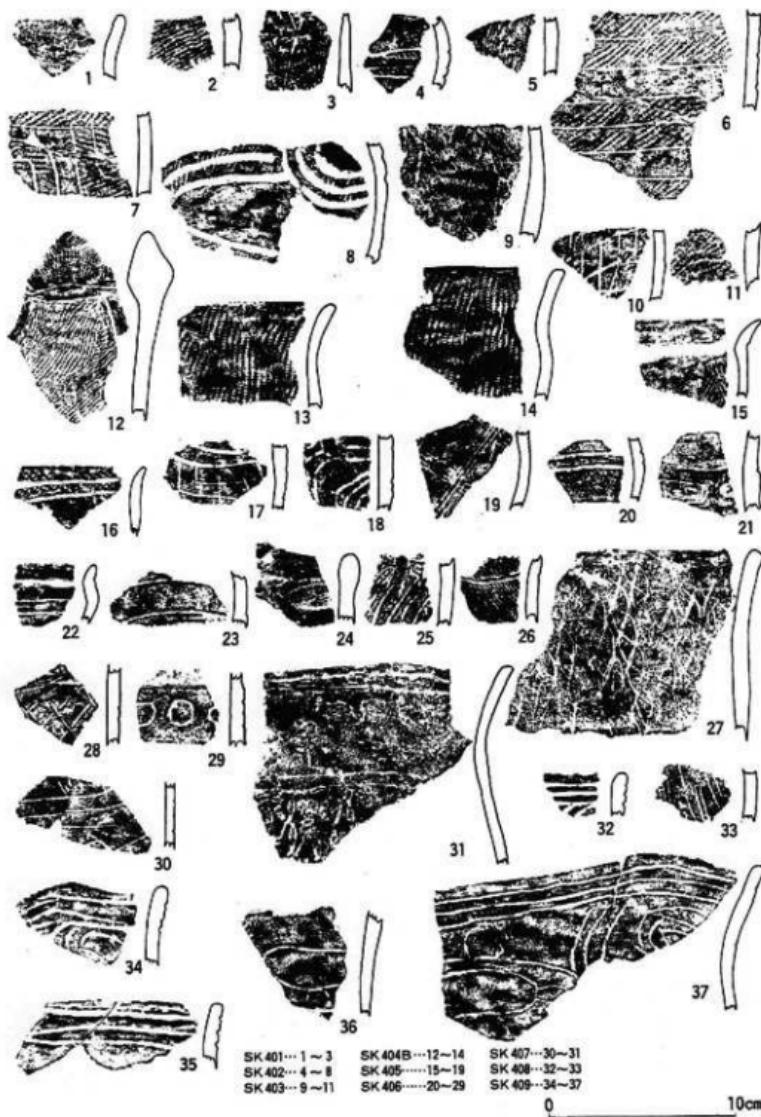
第421号土壙（第127図、131図51～53）

D₄区中央部のZX-95グリッド・IV層で確認した。平面形は104×84cmの楕円形で、長軸方向はN-7°-W、深さは32cmである。堆積土は2ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。土壙内より縄文土器破片5点の出土があった。



第128図 D₄区土壙出土遺物(1)

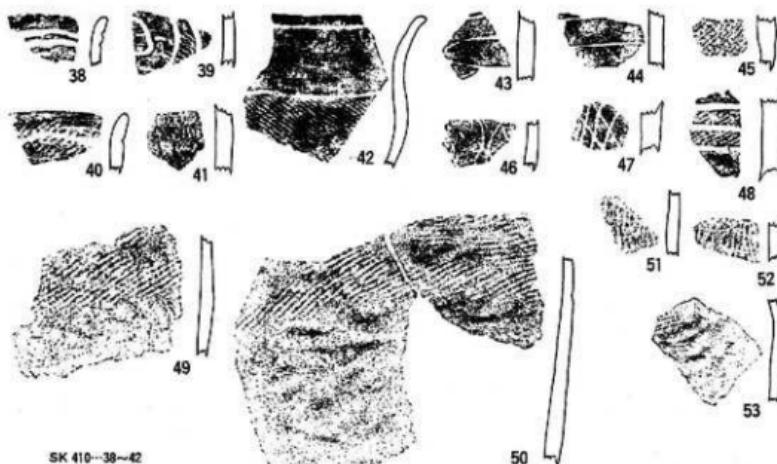
第129図 D₄区土壙出土遺物(2)



第130図 D₄区土壤出土遺物(3)

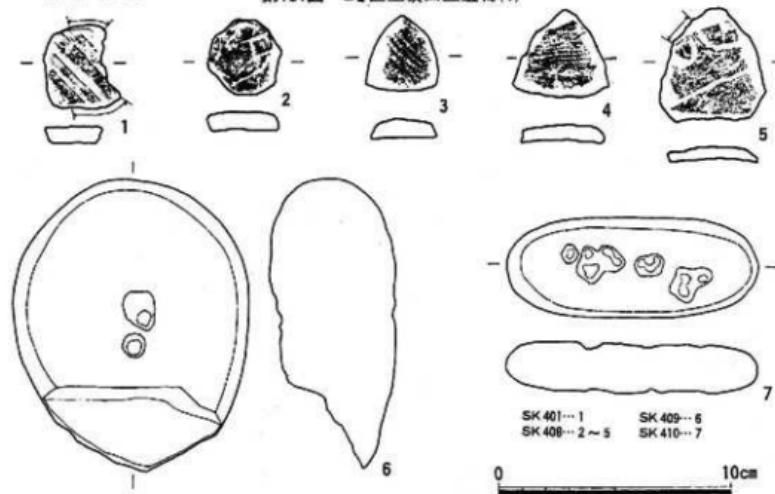
第430号土壤 (第127図)

D₄区中央部北西寄りのYA-95グリッド・Ⅲd層中位で確認した。平面形は182×170cmの円形、プラン確認のため10cm程掘り下げただけなので、深さ等は不明。
(秋元信夫)



SK 410-38-42
SK 411-43-47
SK 417-48-50
SK 421-51-53

第131図 D₄区土壤出土遺物(4)



第132図 D₄区土壤出土遺物(5)

6. 造構外出土遺物

(1) 土器 (第133図～135図)

D₄区造構外からは、2点の復元土器とダンボール箱5箱の土器破片が出土した。ただしD₃区と出土量を比較した場合、その量は極めて少ない。

これらの土器は、縄文時代前期、後期に位置付けられるもので、全体の約9割を後期初頭～前葉の土器が占めている。平面、垂直分布を観察するとD₃区のように特徴的な事項は看取できなかった。

土器の分類については、D₃区と同様の基準に基づいて、その概要を述べる。なお、該当する土器が観察されなかったものについては除いた。

第1群 前期の土器 (第134図1、2)

口縁部に撚糸、絡糸体压痕による平行文をもつものである。文様帶は3～4cmを測り、数条の撚糸文(1)や羽状に施された撚糸文(2)が施される。胴部との境界文として刺突文が施される。

口縁部が波状、平縁となる深鉢が主体となる。胴部には、羽状縄文、単節斜縄文のほか、木目状撚糸文が施されるものもある。胎土に小量の纖維を含むが、焼成は良好である。色調はにぶい黄橙色、にぶい橙色、暗赤褐色を呈する。

本群土器は、円筒下層d式に比定される。

第2群 後期初頭～前葉の土器 (第133図2、134図3～14)

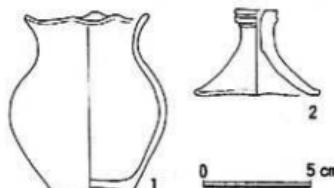
1類 隆線文、隆沈文の土器 (第134図3)

出土量は極めて少ない。3は深鉢土器の胴部破片で、隆線により花弁状文が描かれているもので、隆線上には斜縄文が施されている。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。

3類 沈線文の土器 (第134図4～8)

無文研磨された器面上に1～数条の沈線によって文様が描かれるものを一括した。深鉢、鉢壺、蓋がみられる。文様帶は深鉢では胴部上半に、鉢、壺では胴部全域に区画される。主文様として梢円形文(7)、斜行沈線文(4、5)、曲線文(8)が施文されるもののほか、連結文としてS字文等が付加されるものもある。2は、小型の蓋で、つまみ部に1条の沈線が巡らされている。焼成はやや良で、色調はにぶい黄褐色を呈する。

本類土器の焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色にぶい橙色を呈する。



第133図 D₄区造構外出土土器実測図

4類 帯縄文の土器（第134図9～14）

幅の狭い帯縄文によって文様が施文されるものを一括した。深鉢、鉢、壺がみられるが前2者が多い。文様帶はいずれも胴部上半に区画される。主文様として入組文(12、13)、階段状文(9)、幾何学的な文様(10)が施文される。花弁状の文様が付加されるものがある。沈線間には斜縄文が充填されるものの他、条痕を施文するものもある。焼成は良好で、色調はよい黄橙色、明黄褐色、暗赤褐色を呈する。

本群土器の1類は、東北地方北部の前十腰内Ⅰ式または螢沢式に、3類、4類は十腰内Ⅱ式に比定される。

第3群 後期中葉～後葉の土器（第134図15～22）

2類 磨消縄文により幾何学文等が施文されるもの（第134図21、22）

曲線的な沈線により幾何学的な文様が描きだされたものを一括した。深鉢が主体を占める。深鉢は比較的小な胴部から外反して立ち上がる口縁をもち、装飾的、立体的な突起をもつているものが多い。口唇部は肥大化し、内湾気味となる。

文様帶は、口縁部、胴部にもち、主文様として曲線的な幾何学文が施文されている。沈線間には、条の細かな斜縄文が充填されている。焼成は良で、色調は赤褐色、暗赤褐色を呈する。

3類 磨消縄文に刺突文が伴う土器（第134図19、20）

本群2類に類似が施文されるもので沈線内側に沿って、刺突が間隔を密にして施文されるものである。本類には深鉢がみられ、器形は装飾的、立体的な突起をもつている。沈線間には斜縄文が充填される。焼成は良好で、色調は赤褐色、暗赤褐色を呈する。

4類 平行沈線文が施文される土器（第134図15～18）

口縁部や胴部に平行沈線文が施文される土器を一括した。深鉢、鉢が主体を占めるが、壺も少量みられる。文様帶は深鉢では口縁部中程に、鉢では口縁部上半に区画され、4～8条の平行沈線が施文される。沈線を弧状沈線、刺突文で連結するものがある。沈線間には斜縄文が充填され、文様帶外は無文化される。焼成は極めて良好で、色調は楓褐色、暗赤褐色を呈する。土器内・外面は丁寧な磨きにより光沢を帯びるものが多い。

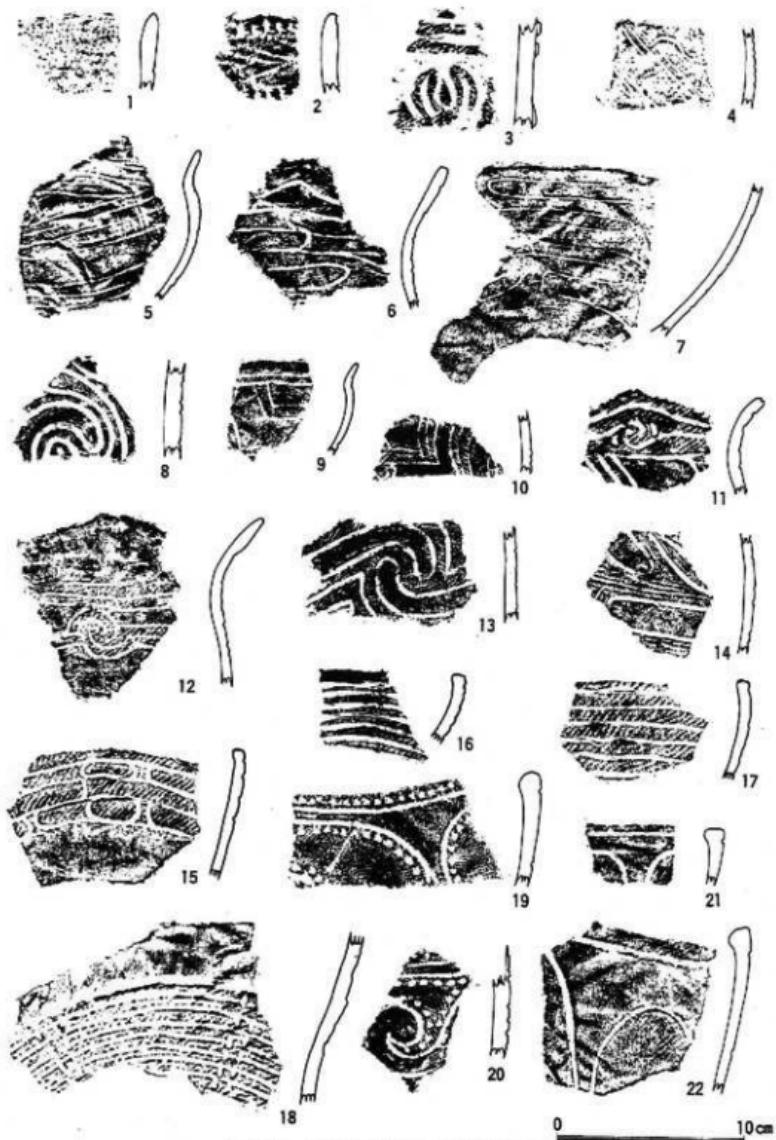
本群土器2類～4類は東北地方北部の十腰内Ⅱ～Ⅲ式に比定出来るものである。4類土器は東北南部の宮戸Ⅱ式・宝ヶ峰式、関東地方の加曾利B1式の特徴を持っている。

第4群 後期初頭～後葉の土器（第135図23～38）

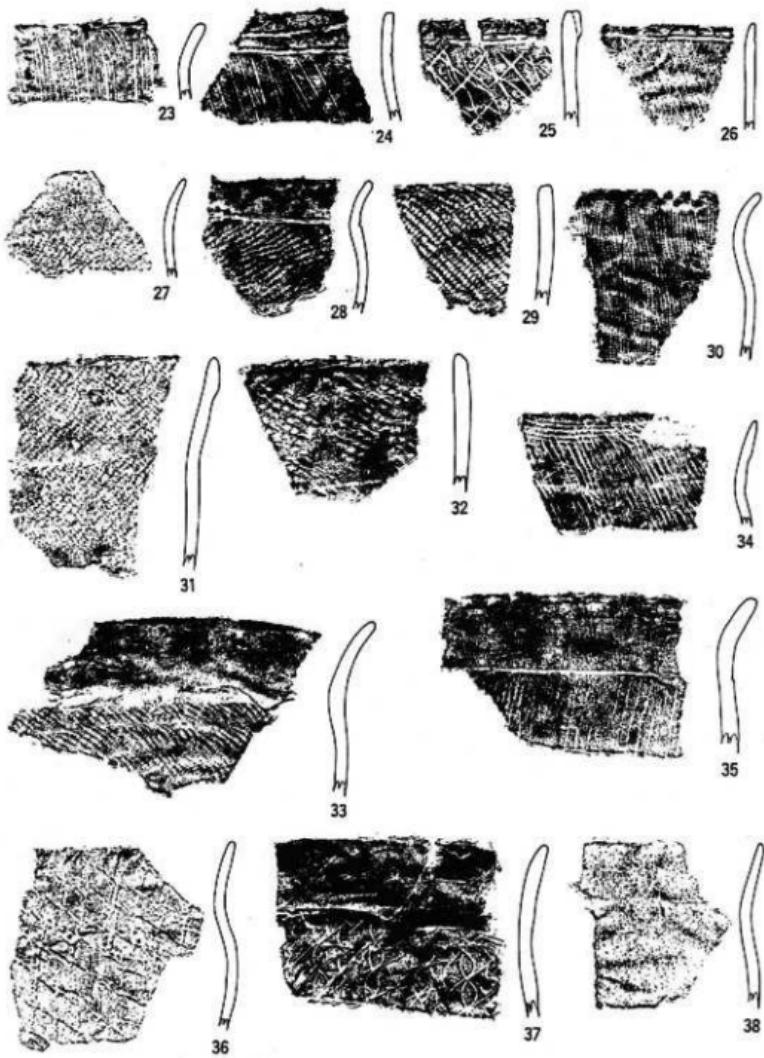
本群には、無文、縄文、燃糸文、条痕文の土器及びミニチュア土器を一括した。時期別の分類は難しい。数量的にはD₄区出土の土器のうち本群が多数を占める。

1類 無文の土器（第133図1、135図38）

深鉢、鉢、浅鉢、壺、ミニチュア土器が見られる。鉢、壺がその主体を占める。いずれも平



第134図 D_z区遺構外出土土器拓影図(1)



0 10cm

第135図 D₄区遺構外出土土器拓影図(2)

口縁を呈するが、壺では波状口縁部を呈するものもある。壺では橋状把手を持つものも見られる。焼成は良好なものが多く、色調は明褐色、にぶい黄褐色を呈する。

1は波状口縁を呈する小型の壺である。焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色を呈する。

2類 繩文の土器（第135図27～33）

無節、単節の繩文を施文したものを一括した。深鉢、鉢、壺が見られるが深鉢が主体となる平口縁を呈するものが極めて多く、口唇部に刻目を施すもの(30)もある。繩文が口唇部直下より施文されるものや、沈線や繩文圧痕を境界文としその直下から繩文を施文するものがある。施文される繩文は単節のLR、RL繩文が多い。

焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色、暗赤褐色、黄橙色を呈する。

3類 摒糸文の土器（第135図25、26、34～37）

撚糸文、網目状撚糸文、連鎖状撚糸文が施文されたものを一括した。深鉢、壺が見られるが深鉢が主体となる。沈線を境界文としてその直下に撚糸文を施文するものや口縁部を磨消するもの、口唇部より施文するものがある。焼成は大型のものほど良好である。色調はにぶい黄褐色、暗赤褐色、黄橙色を呈する。

(藤井安正)

(2) 石器

D₄区遺構外より出土した石器は、剝片石器93点、礫石器40点の計133点を数える。調査区中央部から南東部にかけて多く分布し、大半が遺物包含層から出土した。なお、分類にあたってはD₃区を基本とし、該当する石器が観察されなかったものについては除いた。石器出土分布密度図は第75図の通りである。

石鏃（第136図）

調査区中央部付近から多く出土した。それぞれ形態から1群6類に分類した。石材は硬質頁岩、珪質頁岩、赤色頁岩である。

1群…有茎石鏃で、基部形態から以下のように細別した。

a…平基有茎石鏃で9点出土した。剥離調整はていねいで、欠損品の多くは基部を破損している。(1～6、8、9)

b…凹基有茎石鏃で3点出土した。基部に抉れをもつものである。(10、11)

c…凸基有茎石鏃で3点出土した。a類、b類に比べ基部は突出し、剥離調整はやや粗めにされている。(7、12)

2群…無茎石鏃で、基部形態から以下のように細別した。

a…凹基石鏃で1点出土した。基部の抉れは深く、剥離調整はていねいである。(14)

b…円基石鏃で1点出土した。やや粗い剥離調整によって作り出され、橢円形状を呈している。(13)

c…尖基石鎌で2点出土した。全て破損品で、剝離調整はていねいで、柳葉形を呈している。基部中央部は膨らみをもち、断面形は菱形である。(15, 16)

石鎌 (第136図17~19)

調査区中央部付近から多く出土した。石材は硬質頁岩、珪質頁岩である。

2群…つまみ部と錐部の境が明確でないもので、6点出土した。全体的にていねいな加工調整がなされ、V字状を呈する。17、19は刃部が破損し、18は先端部に摩耗痕が観察される。

石匙 (第136図)

調査区中央部南西寄りから7点出土した。全て縦型石匙(2群)で、刃部の作り出される位置から以下のように分類した。石材は硬質頁岩、珪質頁岩、赤色頁岩である。

2群…

a…主要刃部が左、右、先端部一側縁に作り出されるもので、2点出土した。(20, 21)

b…主要刃部が二側縁に作り出されるもので、1点出土した。(22)

c…主要刃部が三側縁に作り出されるもので、4点出土した。(24, 25, 26, 23はつまみ部にアスファルトの付着がみられる。)

擾器 (PL19, 20)

調査区中央部から南東部にかけて多く出土した。打面を上にして主要刃部の作り出される位置から、6群に分類した。石材は珪質頁岩、硬質頁岩、泥質頁岩、黒色頁岩、赤色頁岩である。

1群…主要刃部が左、右いずれか一側縁に作り出されるもの。20点出土した。

2群…主要刃部が先端部に作り出されるもの。9点出土した。

3群…主要刃部が両縁・二側縁に作り出されるもの。3点出土した。

4群…主要刃部が三側縁に作り出されるもの。14点出土した。

5群…主要刃部が周縁全域に作り出されるもの。6点出土した。

6群…刃部の一部分、全域に抉りがあるもの。9点出土した。

磨製石斧 (第137図)

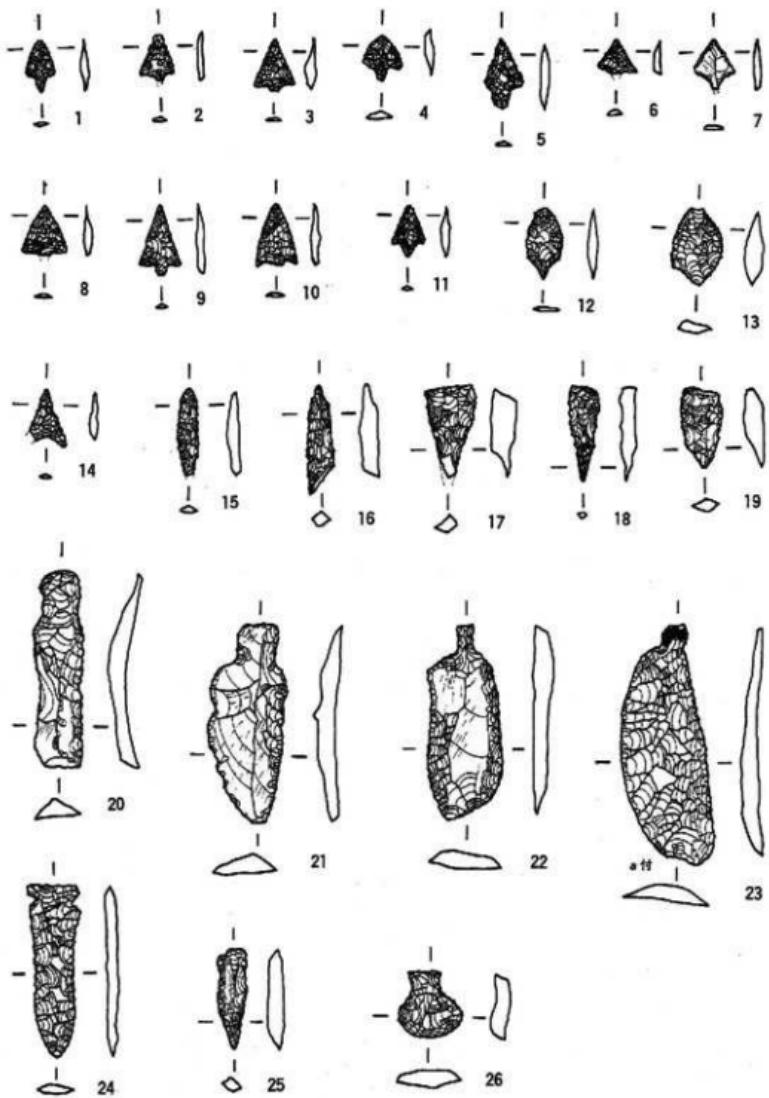
調査区南東部から中央部にかけて多い。10点出土し、大半が欠損品で、完形品も刃部の磨滅が著しい。石材は緑色片岩が多く、その他は砂質凝灰岩、片岩である。

石鎌 (第138図37~39)

調査区南東部、北東寄りに多く、8点出土した。石材は全て泥岩である。

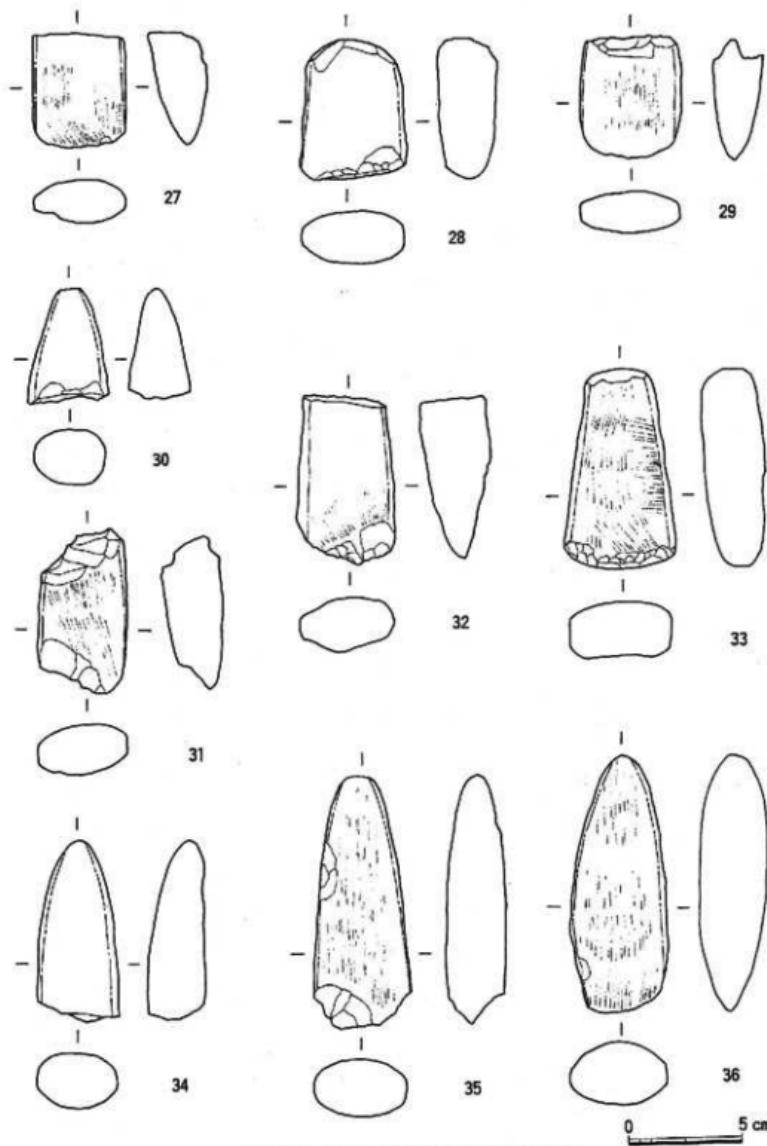
敲石 (第138図40~46)

調査区中央部から南東部にかけて出土した。扁平な川原石を利用しているものが4点、円礫のものが2点、角礫が1点となる。石材は石英閃綠玢岩、片岩である。

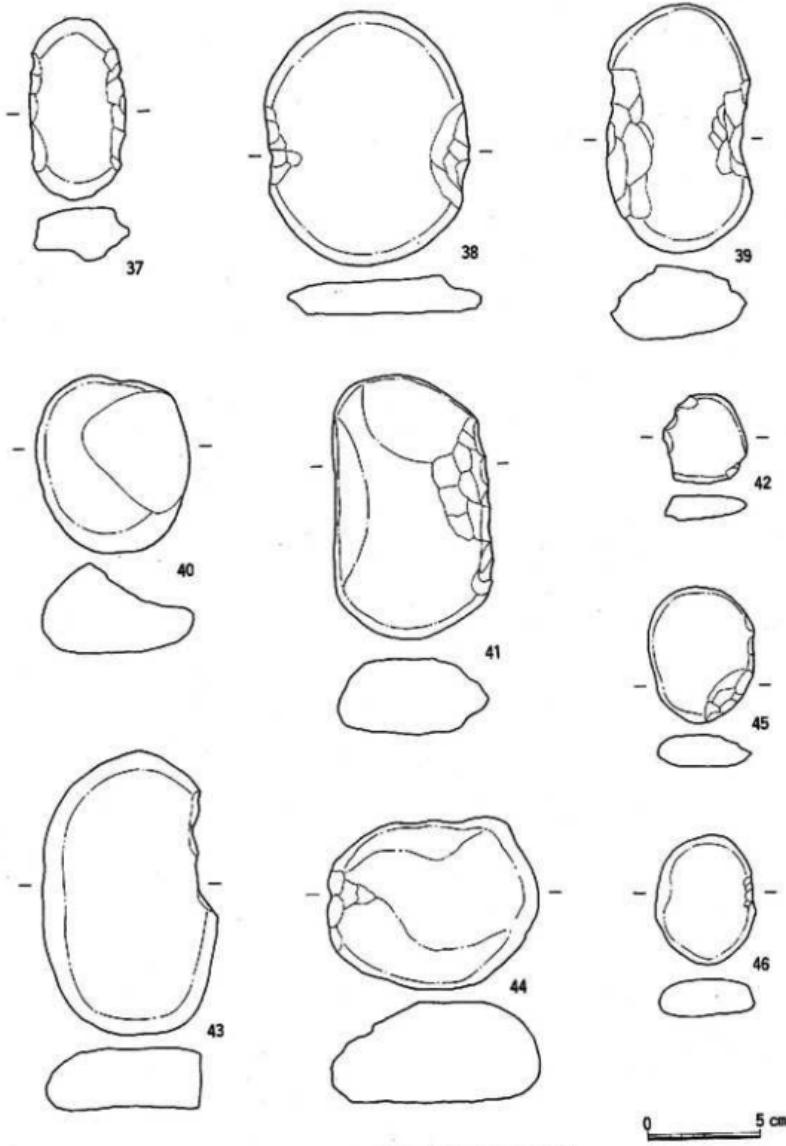


第136図 D₄区造構外出土石器実測図(1)

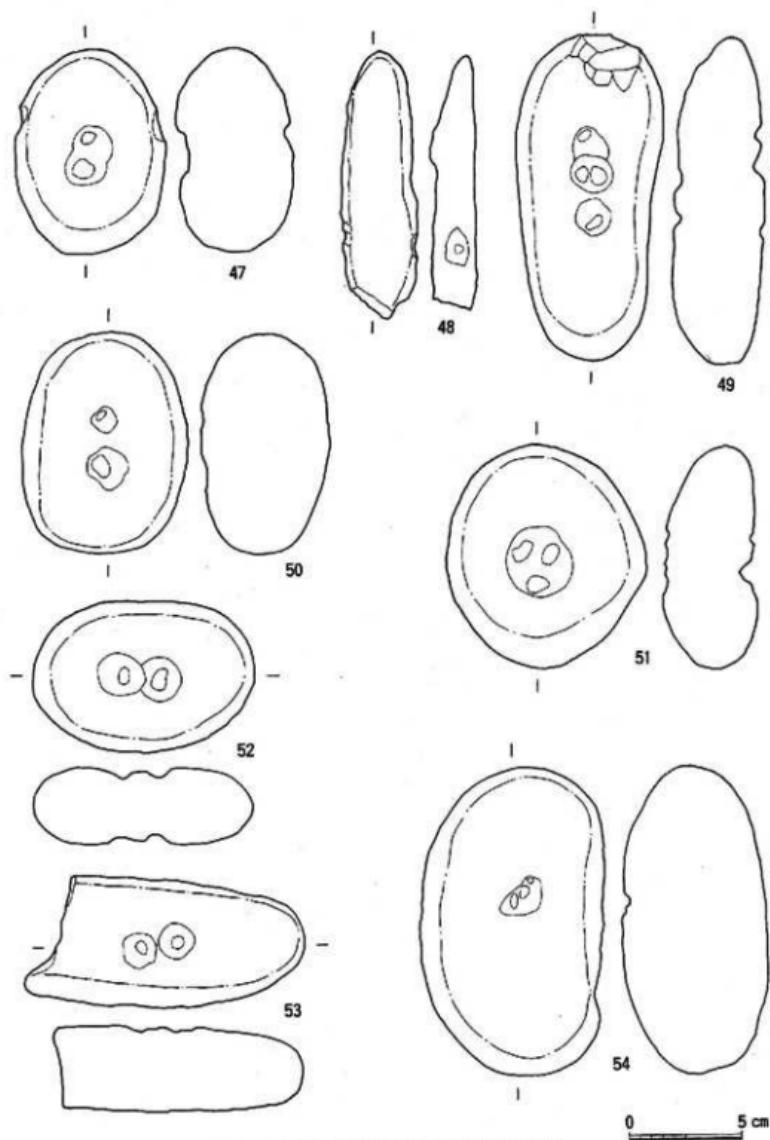
0 5m



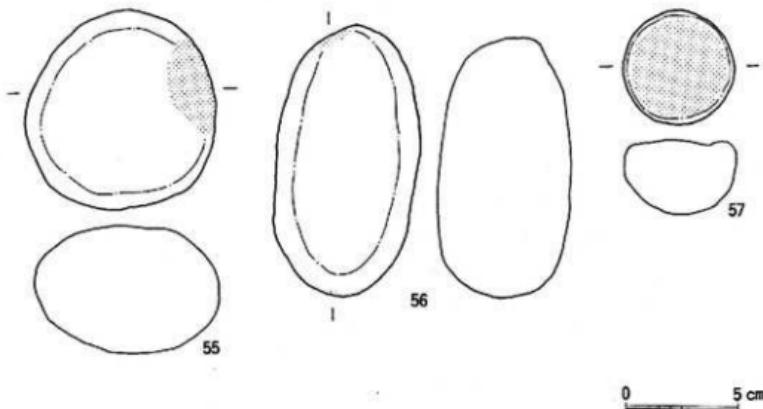
第137図 D₄区遺構出土石器実測図(2)



第138図 D₄区遺構外出土石器実測図(3)



第139図 D₄区遺構外出土石器実測図(4)



第140図 D₄区造構外出土石器実測図(5)

凹石 (第138図47~54)

調査区南西部に多く、7点出土した。扁平な川原石や円礫が利用されているものが多いが、48は棒状角礫の両側縁部を使用している。石材は石英閃綠玢岩、片岩、砂質凝灰岩である。

磨石 (第140図)

調査区ほぼ全域からまばらに分布し、8点出土した。石材は石英閃綠玢岩、片岩、砂質凝灰岩である。

(花海義人)

(3) 土製品

D₄区から出土した土製品は、土偶5点、鋸形土製品1点、甕状土製品1点、環状土製品1点、有孔土製品2点、土器片利用土製品57点の計67点である。

土偶 (第141図1~5)

1は土偶の体部上半で、豊かな乳房が作り出されている。YD-96グリッド・IIIa層からの出土である。2は体部～腰部。板状で乳房等の表現はない。ZW-93グリッド・IIId層から出土している。

3～5は土偶の足で、4は大型。5には刻みにより5本の指が表現されている。また、沈線により区面された膝より上には細繩文が施文されている。3はYC-94グリッド・IIIb～IIIc層、4、5はYA-97グリッド・IIIc～IIId層からの出土である。

鋸形土製品 (第141図9)

9はZX-98グリッド・IIIc層出土の鋸形土製品で、開口部断面は橢円形。鋸部には貫通孔を有する。鋸身には沈線と刺突により縦横に文様が施文されている。

葦状土製品（第141図10）

10は大型の葦形土製品で、かさの径は8.6cm。ZY-93グリッド・Ⅲc～Ⅲd層の出土である。

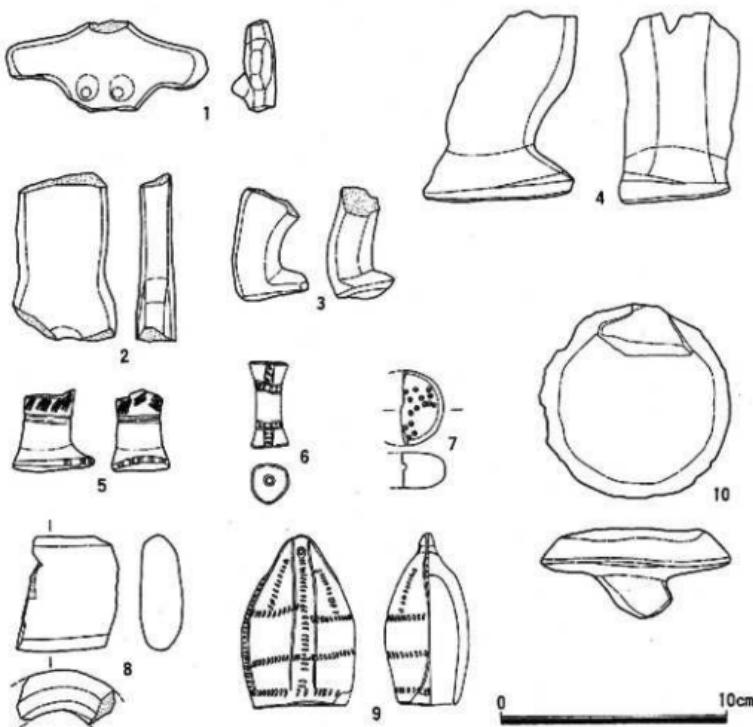
有孔土製品（第141図6～7）

6はYD-96グリッド・Ⅲa層出土の管状の土製品で、径1.8cm、長さ3.7cm。側面には沈線と刺突により文様が施されている。

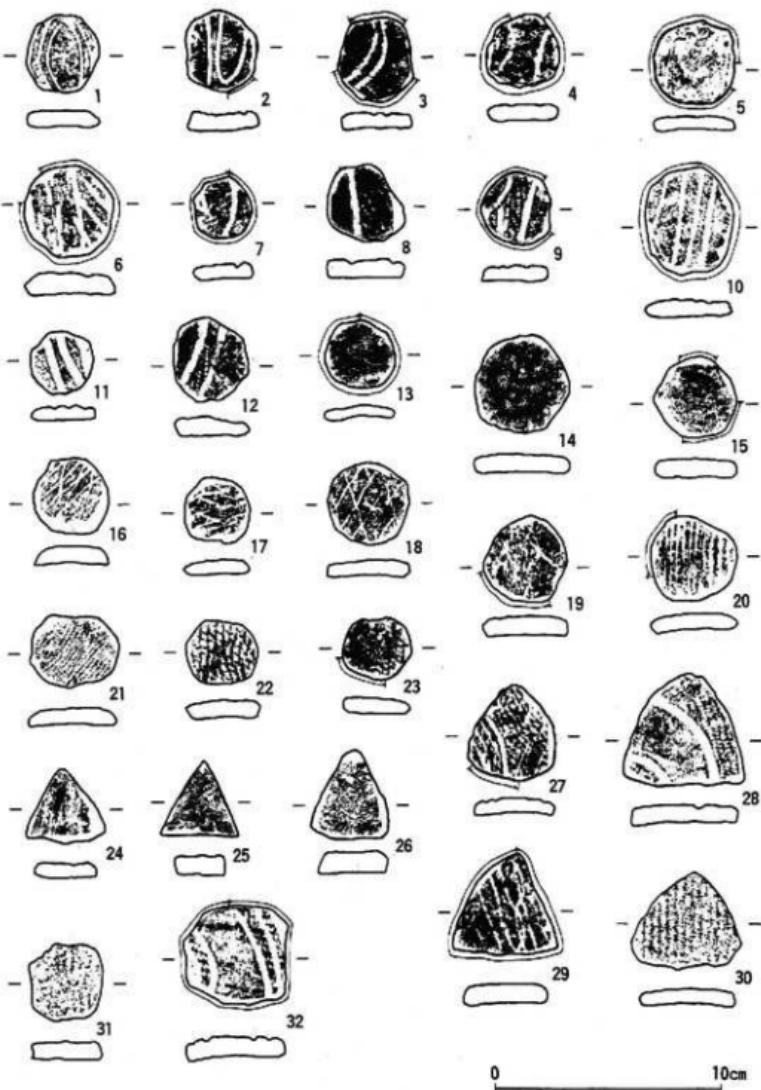
7はZX-95グリッド・Ⅲd層出土の円板状の土製品で、表面に平行に貫通孔が穿たれている。また、表裏両面には竹管刺突文が施されている。

環状土製品（第141図8）

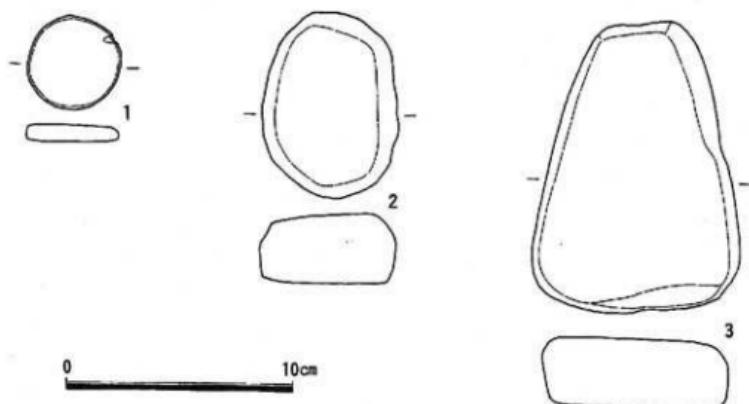
8は推定径8.0cmの環状土製品の一部と考えられる。ZZ-96グリッド・Ⅲd層から出土している。



第141図 D₄区遺構外出土土製品実測図



第142図 D₄区遺構外出土土製品拓影図



第143図 D₄区遺構外出土石製品実測図

土器片利用土製品（第142図）

D₄区の土器片利用土製品57点の内訳は、円形43点、三角形11点、方形3点で、やはり円形のものが圧倒的に多い。成形方法、土器利用部位、文様等もD₃区と大きな違いはみられない。

(4) 石製品

D₄区遺構外から出土した石製品は、円形石製品1点、軽石製石製品2点の計3点である。

円形石製品（第143図1）

1は径4.1cm、厚さ7.5mmの円形石製品である。石材は泥質凝灰岩、YB-97グリッド・IIIa～IIIb層からの出土である。

軽石製石製品（第143図2～3）

2は多孔質の軽石（凝灰岩質泥岩）を楕円形に、3は台形に成形したものである。2の長軸は8.3cm、厚さ3.1cm、3の長軸は12.8cm、厚さ3.0cmである。それぞれZX-95グリッド・IIId層、ZY-93グリッド・IIIc層からの出土である。

（秋元信夫）

第VI章 自然科学的調査

大湯環状列石第10次発掘調査出土遺物の自然科学的調査

岩手県立博物館 赤沼英男

大湯環状列石の第10次発掘調査によって出土した遺物の自然科学的調査結果について、以下に報告する。

1. 分析資料

分析した資料は土器片に付着した赤色顔料、ピット91より出土した黒色樹脂塊、および土器片内に付着している暗赤褐色樹脂塊の3点である。なお、いずれの資料も関係出土品等によつて縄文時代後期と推定されている。

2. 分析方法

土器片に付着した赤色顔料の分析は、ミクロスパークルを使って土器表面から採取することのできた微量な試料片を用いて行った。採取した試料片を真空デシケーター中で十分乾燥させた後、双眼実体顕微鏡下で混在する土砂を極力取り除き、メノー乳鉢により粉末化した。このようにして調製した試料をX線回折装置に供し、赤色顔料の化合物を同定した。

ピットより検出された黒色樹脂塊、および土器片に付着して出土した暗赤褐色樹脂塊については、それぞれの樹脂塊を切断した後、切断面の中心部分より約1mgの試料を採取した。採取した試料を真空デシケーター中で十分に乾燥させ、赤外分光分析法（日本電子製、JIR-5500型FT-IR使用）により分析した。なお、分析は臭化カリウム錠剤法によつた。

3. 分析結果

(1) 赤色顔料

第145図は赤色顔料のX線回折像である。2.70、2.52、2.29、1.84、1.69Åに回折線が認められる。これは赤鉄鉱(Haematite: α -Fe₂O₃)の標準粉末データとほぼ一致する。蛍光X線分析法による定性分析からも鉄が強く検出されたことを考え合わせると、土器表面に付着した赤色顔料は赤鉄鉱(Haematite: α -Fe₂O₃)と判定される。また、第145図には4.36、3.34、2.46、2.28、1.83、1.54Åにも一連の回折線が検出されているが、これは石英(α -Quartz: α -SiO₂)であり、土砂の混入によるものと判断される。

以上の分析の結果、土器表面の赤色顔料は赤鉄鉱(Haematite: α -Fe₂O₃)であることが明らかとなった。

(2) 土壌検出黒色樹脂塊

第145図は黒色樹脂塊の赤外吸収スペクトルであるが、3600～3200cm⁻¹にO-H伸縮振動に

より幅広い吸収帯、3000~2800cm⁻¹には比較的鋭いオレフィンのC—H伸縮振動、約1460cm⁻¹、約1380cm⁻¹にはメチルもしくはメチレン基によるC—H変角振動と推定される吸収帯が認められる。また、約1700cm⁻¹にはC=O伸縮振動、1200~100cm⁻¹には珪酸塩（資料中に含有される粘土鉱物）もしくはC—O—Cによると考えられる吸収帯3055cm⁻¹および900~700cm⁻¹には芳香族C—H伸縮、変角振動による吸収帯が観察される。黒色樹脂塊の主成分は脂肪族炭化水素化合物であり、石油系鉱物または石炭系鉱物に限定して考えれば、土壤より検出された黒色樹脂塊は石油系鉱物、すなわち天然アスファルトまたは重質油蒸留残さとみることができる。

第146図は赤坂A遺跡の発掘調査によって出土した黒色樹脂塊の赤外吸収スペクトルである。赤坂A遺跡より検出された黒褐色樹脂塊もやはり主成分は石油系鉱物と判定できるが、大湯環状列石出土のものに比べ芳香炭化水素、珪酸塩、および無機化合物の含有量が多いと判断される。¹³⁾

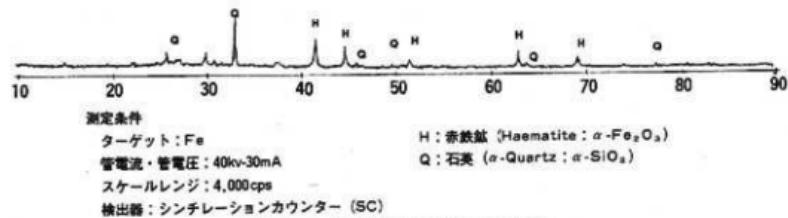
なお、いずれの資料についても今後主成分である脂肪族炭化水素系化合物を抽出し、GC-MS、NMR等の分析によって化合物の同定と含有比率を調べれば、その組成をより明確にすることができるであろう。

(3) 土器片内付着暗赤褐色樹脂塊

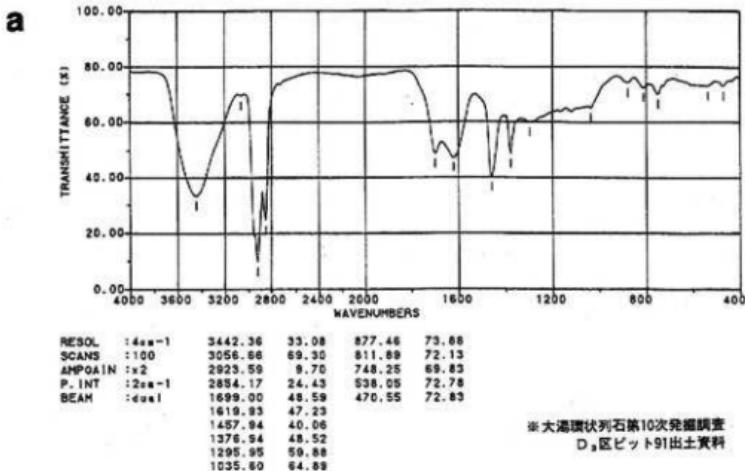
第147図は土器片内付着暗赤褐色樹脂塊の赤外吸収スペクトルである。3600~3200cm⁻¹にO—H伸縮振動による幅広い吸収帯、1700~1600cm⁻¹にC=O伸縮振動およびC=C環伸縮振動と推定される吸収帯が特徴的である。また、2930~2860cm⁻¹には比較的鋭いオレフィンのC—H伸縮振動による吸収帯が観察される。第146図で述べた黒褐色樹脂にくらべ脂肪族炭化水素の含有量は少ない反面、芳香族炭化水素が多量に含有されており、明らかに異なる材質の資料である。

この物質については、今後GC-MS等による分析によって慎重にその同定を行う必要がある。
註

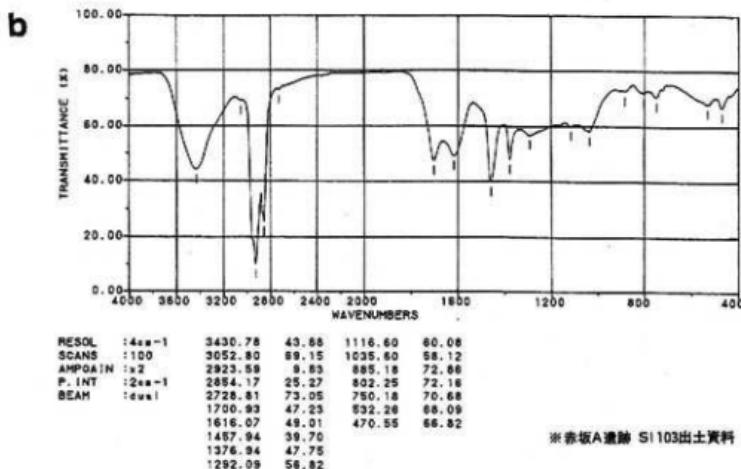
- 1) 赤沼英男「赤坂A遺跡出土遺物の自然科学的調査」鹿角市教育委員会 1994年 発掘報告書
印刷中



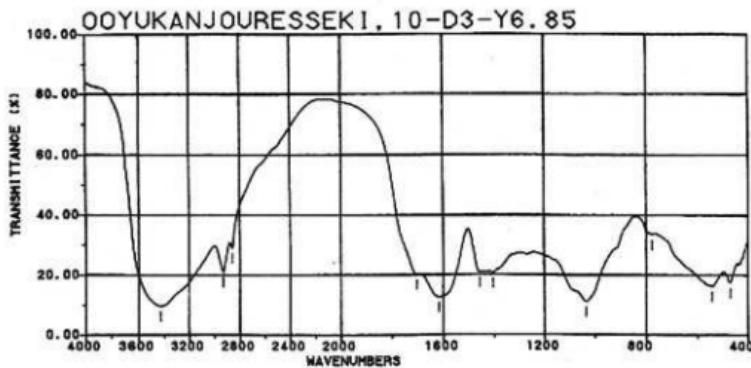
第144図 赤色顔料の粉末X線回折図



第145図 黒色樹脂塊の赤外線吸収スペクトル



第146図 黒色樹脂塊の赤外線吸収スペクトル



```

RESOL :4cm-1    3428.86    9.56    470.55    17.51
SCANS :100        2929.38    21.05
AMP/GAIN :x4      2858.02    28.91
P. INT  :2cm-1   1702.86    20.20
BEAM   :div1      1618.00    12.62
S. SPEED :TOS     1457.94    20.88
S. NUMBER:7       1405.87    20.66
M. DATE :2/23/94  1035.60    11.08
                777.18    33.38
                541.91    16.25

```

第147図 土器片付着暗赤褐色樹脂塊の赤外線吸収スペクトル

第Ⅷ章 調査のまとめ

特別史跡大湯環状列石は、米代川の一支流である大湯川の南東岸の台地上に位置する。大湯環状列石周辺の調査は、昭和59年から継続され、本年度で10年目となった。この間、平成2年3月には周辺遺跡のほとんどが特別史跡に追加指定され、3年度から追加指定地の公有化を開始、4年3月には「特別史跡大湯環状列石環境整備基本構想」をまとめている。このようなことから、平成4年度からは史跡の環境整備を進めるための直接的な資料の収集を目的に、整備の急がれる万座環状列石周辺の調査に着手している。

本年度の調査区の一つであるD₃区は、万座環状列石の北西側隣接地で、昭和62年調査地D₁区と63年調査地D₂区の間、もう一つの調査区D₄区は同環状列石北側隣接地で、平成4年調査地D₅区とD₁区との間である。

D₃区より新たに確認された遺構は、縄文時代後期の建物跡2棟、柱穴状ピット120個、環状配石遺構1基、方形配石遺構1基、その他の配石遺構2基、石圓炉4基、焼上遺構17基、埋設土器遺構2基、Tピット1基、フラスコ状土壙19基、土壙40基、平安時代の竪穴住居跡3棟、土壙7基である。また、これまでの調査によってその一部が確認されていた遺構で、今回追調査した遺構は、縄文時代の建物跡5棟、焼土遺構1基、土壙4基、平安時代の竪穴住居跡1棟である。遺構内・外からは、完形あるいは復元可能の縄文土器69個体、縄文土器破片50枚、石器1,820点、剝片2,5箱、土製品285点、石製品64点、土師器57点、須恵器、壺、鉢製品各1点の出土があった。

一方D₄区より新たに確認された遺構は、縄文時代後期の柱穴状ピット130個、環状配石遺構1基、方形配石遺構1基、配石列2基、フラスコ状土壙6基、土壙17基である。また、追調査された遺構は環状配石遺構3基、配石列1基、フラスコ状土壙1基、土壙1基である。遺構内・外からは、完形あるいは復元可能の縄文土器6個体、縄文土器破片5箱、石器143点、剝片0.5箱、土製品88点、石製品5点の出土があった。

万座環状列石の周囲に4、6本柱の建物跡が一巡することは第4～5次調査結果から推測していたが、D₃区南東端からの建物跡の検出はこの可能性を一層高いものとした。D₄区では配石遺構の保護のため充分な調査ができず、建物跡の柱配列を明確にし得なかったが、同区南東部の柱穴状ピットの規模、柱痕の確認等から同区にも同様の建物跡が分布するものと考えられる。第307号建物跡は、壁柱穴と周溝を有する建物跡で、第5次調査D₅区の221A号建物跡に似ている。これらの建物跡の構築時期は、建物跡の柱穴内からの出土遺物及び他遺構との新旧関係から、縄文時代時期前葉と考えられる。

環状配石遺構としたものは、環帶部と張り出し部からなる特異な形態の配石遺構で、本遺跡

以外では岩手県松尾村の釜石遺跡の類例が知られている程度である。本遺跡では第4次調査D₁区で3基、9次調査D₈区で2基が確認されており、今回の調査資料を合わせて計7基となる。これらの内、最大のものは第202号環状配石造構で、その環帶部径は14.0m、最小のものは220号環状配石造構で、環帶部径は5.4mである。これらの環状配石造構は全て万座環状列石の北西側に位置し、第202号環状配石造構以外はZZ-92グリッドを中心とする径36~62mの環帶内に分布している。また、それぞれの環状配石造構の張り出し部もZZ-92グリッド周辺を意識した位置に付設されている。なお、今回の調査により環帶内に焼土を確認、環状配石造構に伴うものと判断された。これらの環状配石造構の構築時期については、他造構との新旧関係及び周辺の出土遺物から縄文時代後期前葉～中葉と考えられる。その他の配石造構とした405、408号配石造構についても張り出し部の形態、規模の類似、構築位置等から環状配石造構との関連が考えられる。

方形配石造構としたものは、14~72cm大の石を一辺4.2~4.4mの正方形に配置した造構で、今回の調査で初めて確認された造構である。D₈区南東部とD₄区南東部より各1基が確認された。環状配石造構のような張り出し部は持たず、主軸方向も求心性を示さない。また、配石に伴う焼上等も確認されていない。確認面及び周辺の出土遺物より、方形配石造構の構築時期も縄文時代後期前葉～中葉と考えられる。

第404号配石列は、昭和21年の調査で万座環状列石の近傍から検出された「石列」に続くもので、その長さは、今回の調査区域内だけでも31mにも及ぶ。途中で枝分かれしたり、屈折したりしているが、この配石列を構成する3条の直線状列石が同時期のものかどうかは確認できていない。第409、410号配石列は、万座環状列石の外帯から放射状に延びる石列とも考えられるが、環状列石周囲に位置する建物跡との新旧関係の問題があり、今後の調査を待ちたい。

石圓炉及び焼土造構はD₃区北西部、同区中央～南東部、D₄区南東部に偏在する。これらの造構の構築時期はⅢc層で確認されている401号焼上造構は縄文時代後期前葉～中葉、その他の造構は後期前葉と考えられる。

フラスコ状土壙及び土壙はD₃区北西部、同区中央部～南東端、D₄区中央部～南東部の分布密度が高い。出土遺物から、321、375号フラスコ状土壙、312、314A、317、338、404B号土壙の構築時期は縄文時代後期前葉～中葉、その他の造構は後期前葉と考えられる。

平安時代の堅穴住居跡及び土壙はD₃区北西部に偏在している。これまでの調査結果を加味すると、この時期の造構は、万座環状列石の近傍には及ばない可能性が高い。

D₃区、D₄区からの出土遺物は膨大な量で、今までの調査で最も多い。

縄文土器は、前期末葉、後期前葉～後葉に位置づけられるもので、後期前葉の土器が全体の8割以上を占めている。前期末葉の土器は、D₃区の北西端～北西部Ⅲd層下位より多く出土し

ている。また、後期の土器はD₃区北西端～西部からの出土が多く、層序的には概ね、後期前葉の土器はⅢb層下位～Ⅲd層上位、後期中葉～後葉の土器はⅢa～Ⅲc層から出土している。

石器としては、石鎌、石錐、石匙、石箇、搔器、磨製石斧、凹石、敲石、磨石、石皿等の出土があった。これらの石器は、後期の土器と同様、D₃区北西端～西部からの出土が多い。

土製品としては、土偶、鐸形土製品、スタンプ状土製品、葺形土製品、耳飾り、有孔土製品、円形土製品、三角形土製品、土器片利用土製品等の出土があったが、その7割以上が土器片利用土製品である。

土器片利用土製品は、土器の破片を打ち欠きや研磨により、円形、三角形、方形に成形したもので、その大きさは4cm前後のものが多い。その用途を推察できる資料はないが、円形土製品、三角形土製品等との関連を含め、今後重要視すべき遺物の一つである。

土器片利用土製品以外では、鐸形土製品と土偶の多さが目についた。土偶は完形のものはなく、頭部、腕、足等の部位のみの出土が多い。D₃区では中央部西寄り～西部に偏在、D₄区では北西部、北東部北西寄り、南西部南東寄りに点在している。また、鐸形土製品はD₃区中央部に偏在している。

スタンプ状土製品は、本遺跡では今回初めて出土した遺物である。また、その他の土製品として一括したものの中には、他遺跡での出土例もなく、特異な形状で名称を付けかねたものもある。

石製品としては、石刀、石冠、石棒、円形石製品、三角形石製品、方形石製品、有孔石製品、軽石製石製品等の出土があった。量的には軽石製石製品が4割を占め、次いで円形石製品、石劍が多い。

軽石製石製品としたものは、多孔質の軽石（石英安山岩）を円形、橢円形、長方形、三角形等に成形したもので、長軸6.3～14.0cm、厚さ1.5～5.7cmの大きさのものである。D₃区の北西部～中央部及びD₄区の中央部より出土している。

石刀は内返り形で、いずれもD₃区北西部南東寄り～中央部北東寄りから出土している。

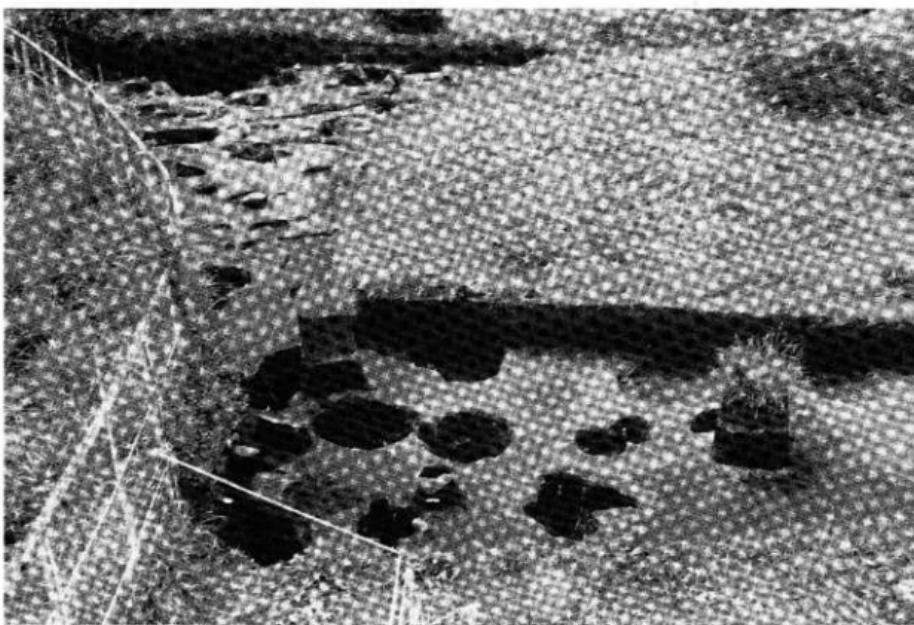
(秋元信夫)

参考文献

- 江坂輝編『石神遺跡』ニュー・サイエンス社 1970年
- 阿部義平「配石墓の成立」『考古学雑誌』第54巻1号 1968年
- 村越潔「円筒土器文化」雄山閣 考古学選書10 1974年
- 小林達雄「縄文時代の集落」『季刊 考古学 44』雄山閣 1993年
- 富樫泰時「縄文集落の変遷」『季刊 考古学 44』雄山閣 1993年
- 山本暉久「竪穴住居の形態」『季刊 考古学 44』雄山閣 1993年
- 林謙作「縄文集落 集落論の新しい出発をめざして」『季刊 考古学 7』雄山閣 1984年
- 村田文夫「縄文集落」考古学ライブライアリ-36 ニュー・サイエンス社 1985年
- 鈴木保彦「集落の構成」『季刊考古学』第7号 雄山閣 1984年
- 桜田隆「鹿角地方に於ける古代土器群の様相」『研究紀要 第2号』秋田県埋蔵文化財センター 1987年
- 小松正夫「秋田県の土師器について」『考古風土記 第2号』 1977年
- 庄内昭夫「鹿角地方の土器」『秋田考古学 38号』秋田考古学会 1984年
- 今井富士雄他「大森勝山遺跡」『岩木山』収録 1986年
- 成田滋彦「青森県の土器」『縄文文化の研究 4』雄山閣 1981年
- 鈴木道之助「石器の基礎知識 III」柏書房 1981年
- 岡田康博「十腰内第Ⅲ群・第Ⅳ群・第Ⅴ群上器の再検討」『弘前大学考古学研究 第3号』 1986年
- 秋元信夫「環状列石と建物跡」『よねしろ考古』第6号 1990年
- 文化財保護委員会「大湯町環状列石」 1953年
- 岩手県立博物館「岩手県の土器 県内出土資料の集成」 1982年
- 大迫町教育委員会「立石遺跡 昭和52年・53年度発掘調査報告書」 1979年
- 大槌町教育委員会「崎山弁天遺跡発掘調査報告書」
- 秋田県教育委員会「白長根館I遺跡」「東北縱貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ」 1984年
「中小坂遺跡発掘調査報告書」 1988年
「大湯環状列石周辺遺跡調査概報」 1975年
- 八戸市教育委員会「丹後谷地遺跡」「八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」 1986年
「風張(1)遺跡Ⅲ」 1991年
- 鹿角市教育委員会「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書1~6」 1985年~1990年
「大湯環状列石発掘調査報告書7~9」 1991年~1993年
「昭和50年大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報」 1976年
「昭和51年大湯環状列石周辺遺跡分布調査報告書」 1977年
「地羅野館跡発掘調査報告書」 1993年
「小枝指跡発掘調査報告書」 1992年

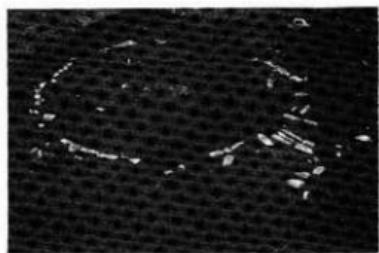


D₉区中央部全景 (E ▶ W)

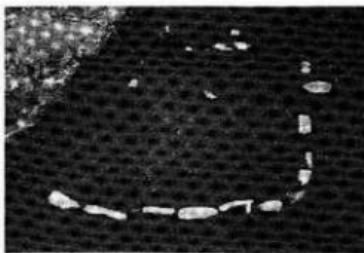


D₉区南東部全景 (E ▶ W)

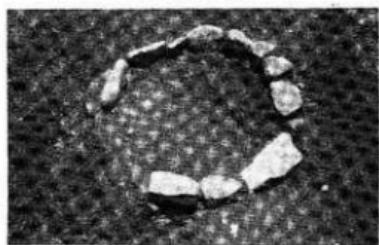
PL. 1 D₉区中央部、南東部全景



SX (S) 301



SX (S) 302



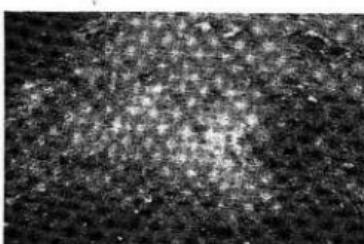
SX (O) 302



SX (O) 303



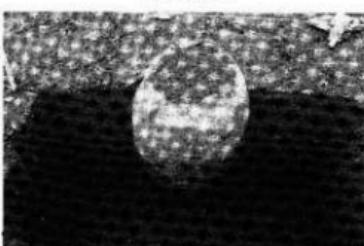
SX (O) 304



SX (F) 381



SX (U) 301

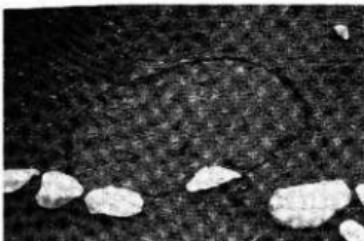


SX (U) 302

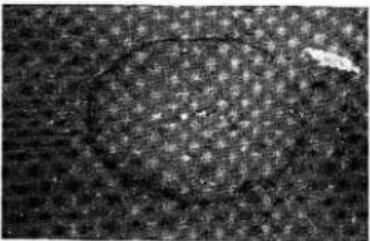
PL 2 D₉ 区環状、方形配石遺構、石圓炉、埋設土器



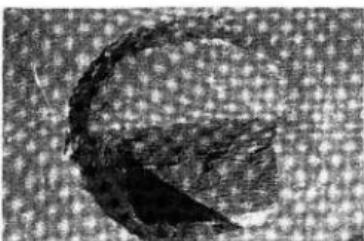
SK(F) 321



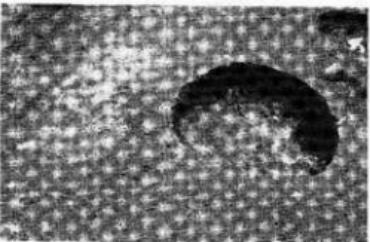
SK(F) 364



SK(F) 365



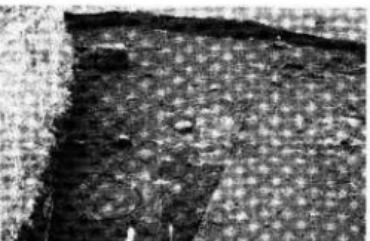
SK(F) 373



SK301



SK305

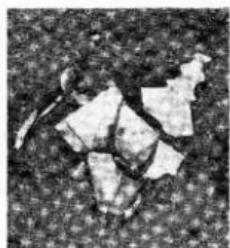


D₃区万座環状列石隔接部遺構確認状況

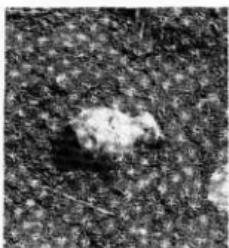


調査風景

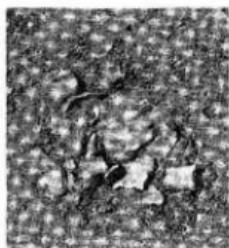
PL 3 D₃区 フラスコ状土壤、土壤



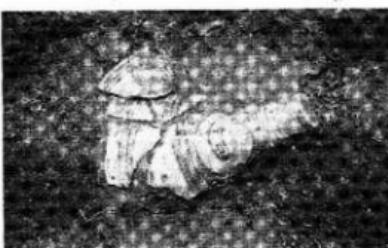
遺物出土状況



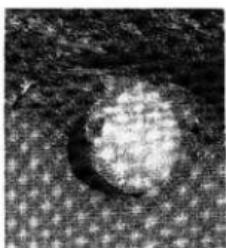
遺物出土状況



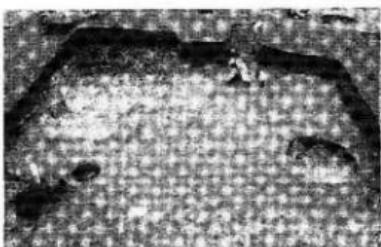
遺物出土状況



遺物出土状況



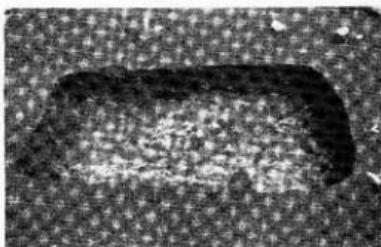
遺物出土状況



SI303 (N ▷ S)



SI303 カマド

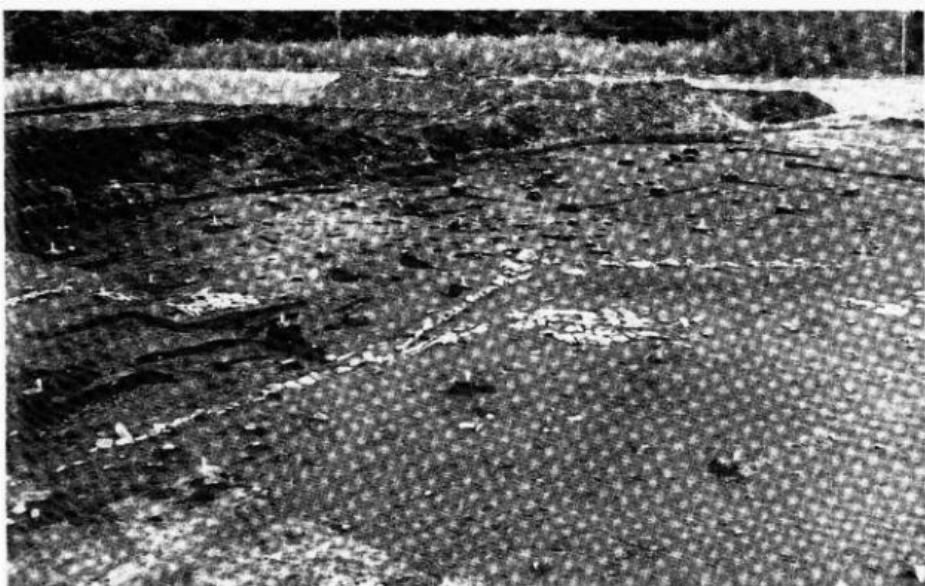


SK304 (S ▷ N)

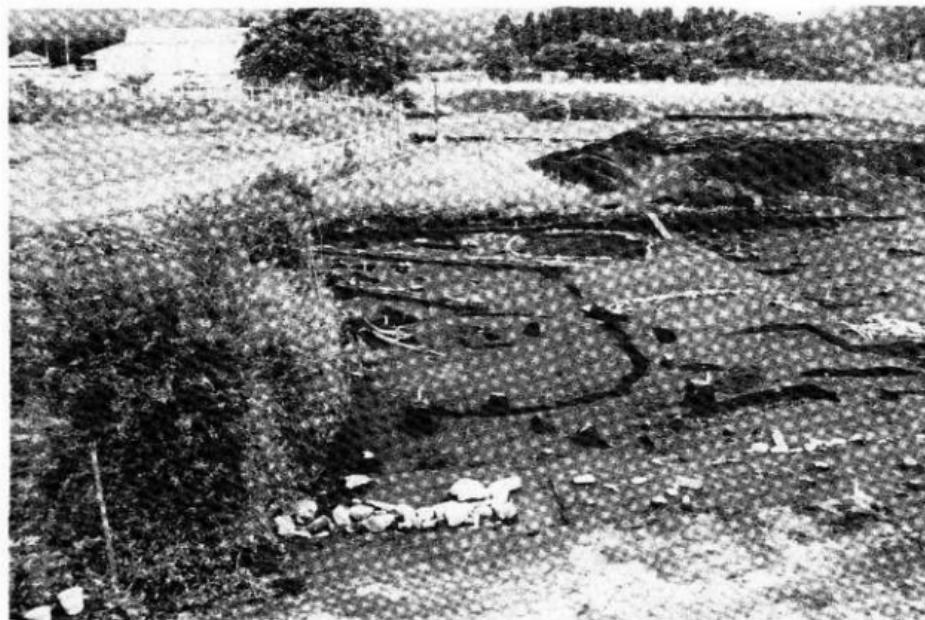


D₉ 区北西部 (E ▷ W)

PL. 4 遺物出土状況、竪穴住居跡

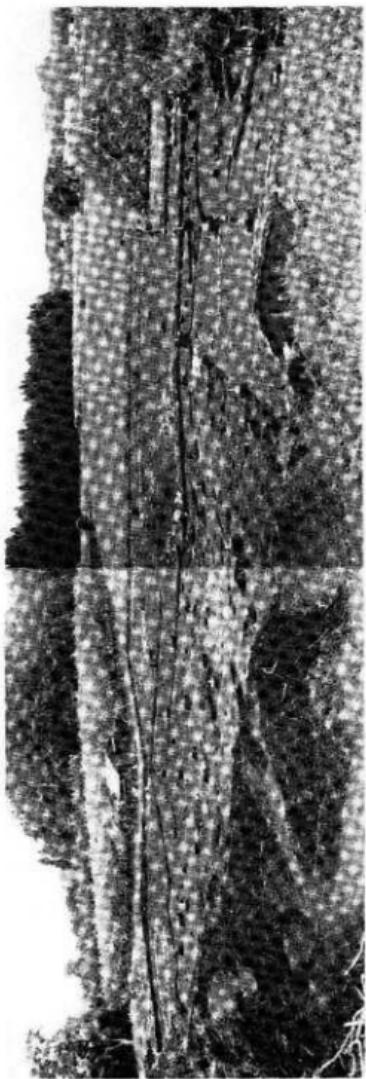


D4区中央部 (E ▷ W)



D4区南東部 (E ▷ W)

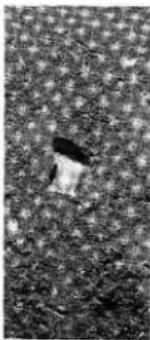
PL 5 D4区中央部、南東部



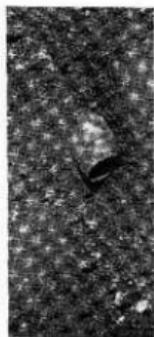
D区全景 (S→N)



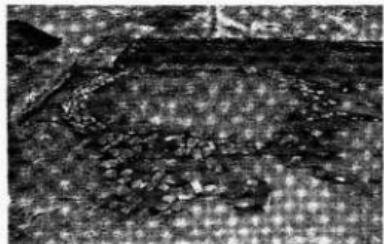
遺物出土状況



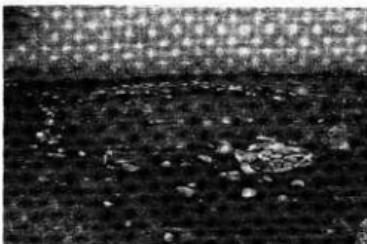
遺物出土状況



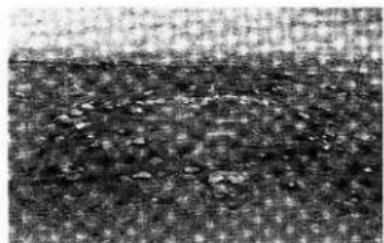
PL. 6 D区全景、遺物出土状況



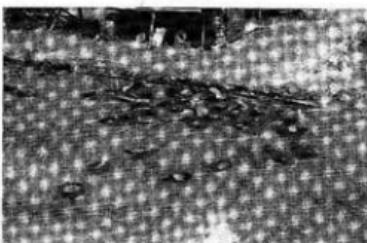
SX(S) 401 S > N



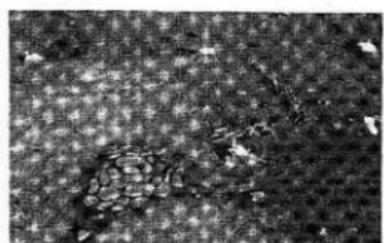
SX(S) 402



SX(S) 403



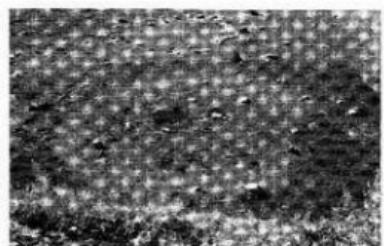
SX(S) 407



SX(S) 408



SX(S) 406、409、411



SX(S) 411



調査風景

PL 7 D₄ 区環状、方形配石遺構

鹿角市文化財調査資料 49

特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(10)

発行年月日 平成6年3月31日

発 行 者 鹿角市教育委員会

☎ 018-52

秋田県鹿角市花輪字荒田4番地1

☎ 0186-23-5111

印 刷 所 (有)大館乳版社

〒017

秋田県大館市谷地町後60